

八ヶ嶽の魔神

国枝史郎

青空文庫

邪宗縁起

一

十四の乙女おとめ久田姫は古い物語を読んでいる。

(……それは許婚いいなすけある若き女子おなごのいとも恐ろしき罪なりけり……)

「姫やどうぞ読まないでくれ。妾わたし聞きたくはないのだよ」

「いいえお姉様お聞き遊ばせよ。これからが面白いのでございますもの。——許婚のある佐久良姫さくらひめがその許婚を恐ろしいとも思わず恋しい恋しい情男おとこのもとへ忍んで行くところでございますもの」

「姫やどうぞ読まないでくれ。妾は聞きたくはないのだよ」

「お姉様それでは止めましょうね。……」

姫は静かに書ふみを伏せた。

「ああ、もう今日も日が暮れる。お部屋が大変暗くなつた……お姉様灯火あかりを点つけましよう

か

「妾はこのような夕暮れが一番気に入っているのだよ……もう少しこのままにしておいておくれ……お前はそうでもなかつたねえ」

「お姉様妾は嫌いなんです。妾の好きなのはお日様ですの」

「幼い時からそうだったよ。明るい華やかなの事ばかりをお前は好いておりましたよ。夏彦様のご気象のようにねえ」

「陰気な事は嫌いなんです。このお部屋も嫌いなんです。いつも陰気でございますもの。お姉様灯火を点けましょうか」

姉の柵は返辞をしない。で室の中は静かであつた。柵は三十を過ぎ去つていた。とはいへ艶治たる風貌は二十四、五にしか見えなかつた。大変寔れていたけれど美しい人の寔れたのは芙蓉に雨が懸かつたようなものでその美しさを二倍にする。几帳の蔭につつましく坐り開け放された窓を通して黄昏の微芒の射し込んで来る中に頸垂れているその姿は、「芙蓉毛及バズ美人ノ粧ヒ、水殿風来タツテ珠翠香シ」と王昌齡が詠つたところの西宮の嗜好を想わせる。

幼い妹の久田姫がこのお部屋も嫌いですのと姉に訴えたのはもつともであつた。館

造りの古城の一室、昔は華やかでもあったろう。今は凄じく荒れ果てて器具も調度も類然と古び御簾も襖も引きちぎれ部屋に不似合いの塗りごめの龕に二体立たせ給う基督とマリヤが呼吸く氣勢に折々光り、それと向かい合った床の間に武士を描いた二幅の画像が活けるがように掛けてあるのが装飾といえば装飾である。

久田姫は立ち上がった。静かに画像の前へ行き二人の武士を見比べたが、

「ねえお姉様、何故このお二人は、こうも恐ろしいお顔をして向かい合っているのですごいでしょう。お互いの眼から毒でも吹き出しお互いの眼を潰し合おうとして睨み合っているようではございませぬか。そうかと思うとお互いの口は古い城趾にたった二つだけ取り残された門のように固く鎖ざされておりますのねえ。……深い秘密を持っていなながらそれを誰にも明かすまいとして苦しんでいるように見えますこと」

しがらみきちよう
柵は几帳を押しやってふと立ち上がる氣勢を見せたが、

「ほんとお前の云う通りその画像のお二人は不思議なお顔をしているのねえ」

「お姉様」と云いながら久田姫はつと近寄り柵の膝へ手を置いたが、「この画像のお二人のうちどちらか一人妾のお父様に似ておいでになるのではございませぬか？」

「それこそ妄想というものですよ」柵はこうは云ったものの、その声は際立って顫えてい

る。

「お前はいつぞやも画像を見て同じような事を云つたのねえ。……ああお前のその妄想がどんなに妾を苦しめるでしょう……いいえお前のお父様はどちらにも似てはおいでなさないのですよ」妹の顔をつくづく見守り重い溜息ためいきをそつと吐いたが、「……お前がこの世に産まれた時——もう十四年の昔になる——お前のお父様とお母様とはこのお城からお出ましになり諏訪すわの湖水の波を分け行衛ゆくえ知れずにおなりなされたのだよ」

「いいえ妾には信じられませぬ」久田姫は遮さえぎった。「信じられないのでございますわ。何故なと申しますにそうおつしやる時いつもお姉様のお眼の中に涙が溜たまるではございませぬか。偽りの証拠でございますわ」

こう云うと久田姫は眼を抑えた。指と指との隙を洩れて涙が一筋流れ出た。彼女は泣いているのである。

窓を透して射し込んでいた幽かな夕暮れの光さえ今は全く消えてしまつて室内はようやく闇やみとなつた。その闇の中で聞こえるものは妹の泣き声ばかりである。

その時静かに襖が開いて尼あまが一人はいつて来た。黒い法衣に白い被衣かつぎ。キリスト様とマリア様に仕えるそれは年寄りの尼であつた。

「まあこのお部屋の暗いことは。灯火あかりを点つけないのでござりますね。……お祈りの時刻が参りました。灯火をお点けなさりませ」

二

「はい」

と久田姫は立ち上がった。そろそろと龕がんの前まで行きカチカチと切り火の音をさせ火皿へつつましく火を移した。黄金の十字架は燦さん然ぜんと輝きキリストの顔もマリヤの顔も光を受けて笑えましげに見える。

年寄りの尼を真ん中にして久田姫と柵しがらみとは龕の前にひざまずいた。

尼は恭うやうやしくお祈りを上げる——「悩み嘆く魂のために安らげき時を与え給え。犯せる罪を浄きよめるために浄罪の時を与え給え。——神の怒りは火となりて我らの五体を焼き給うとも我らは永劫えいこくに悔いざらん。アーメン」

「アーメン」

「アーメン」

と二人の姉妹もそれに続いてさも恭しくこう云った。

「お祈りはもう済みました。お休みなさりませ、お休みなさりませ」

尼は云い捨てて立ち去った。室内は再び静かになった。と、遠くから祈禱きとうの聲が讚歌うたのように響いて来る。尼達が合唱しているのである。

久田姫は立ち上がり何気なく窓へ近寄って行つたが、

「……おお湖は真つ暗だ。どうやら嵐が出たらしい。濤なみの音が高く聞こえる……ああ湖の上に灯が見える。あそこに船がいるのかも知れない。だんだんこつちへ動いて来る。路案内の灯でもあろう。……」

姉しの柵しがらみは龕なほの前に尚なほつつましくひざまずいていた。熱心にお祈りをしているのであった。すすりなきの聲がふと洩れる。

「お姉様」

と云いながら久田姫は窓を離れ姉の後ろへ寄り添った。

「何をお泣きなされます。妾わたしがくどくあのような事をお尋ねしたからでございますか？

……もう妾はお父様のことは何んにもお尋ね致しませぬ。どうぞお許しく下さいまし」

隣りの部屋へ歩きながら、

「妾はこれからはただ一人で考えることに致しましょう。お休みなさりませお姉様。夜はまだ早いのではございますが、妾は悲しくなりましたゆえ、いつものように夜の床の上でご本を読むことに致します。お休みなさりませお姉様」

彼女の立ち去ったその後は遠くから聞こえる祈祷の声ばかりが寂しい部屋をいよいよ寂しくいよいよ味気なく領している。

ふと柵は顔を上げたがその眼には涙が溢れている。

「可哀そうな久田姫や、お前は何一つこの妾に詫びることはないのだよ。妾こそお前に詫びねばならぬ。可哀そうなお前の身の上は妾の淫らな穢れた血で醜く彩られているのだからねえ」

彼女はよろよろと立ち上がり画像の前まで行ったかと思うと二幅の画像を交互に眺め、

「ほんとに姫が云ったように何んとマアこの二人の人は悲しそうな顔をしているのである。云えば恥となり云わねば怨みとなる。そう云ったような深い秘密をじつと噛みしめているようだ。けれど妾にはその秘密がどのようなものだか解っている。それが解っているために妾の声はお祈祷に顫え妾の眼は涙に濡れ……そうして妾の生涯は……」

その時一人の老人が影のように部屋の中へはいつて来た。乱れた白髪よじ襦ほいれた布衣、永い辛苦しんくを想わせるような深い皺しわと弱々しい眼、歩き方さえ力がない。

「お姫様ひいさま」と老人は声を掛けた。深みのある濁った声である。

「おお、お前は島太夫……何か妾にご用なの？」

「もうお休みでござりますか？」

「お祈祷いのりも済んだし懺悔ざんげもしたし今日のお勤行つとめはつとめてしまったからそろそろ妾は寝ようかと思うよ」

「それがよろしゅうござります。不吉の晩はなるだけ早くお休み遊ばすに限ります」

「え、不吉の晩というのは？」

老人は窓を指さしたが、

「ご覧あそばせ闇の湖に一つ点ともされた赤い灯を……」

云われて柵しがらみはスルスルと窓の方へ寄つて行つた。後から老人もつづきながら、

「十四年前のある晩のこと、ちょうどあのような赤い灯が湖水を越えて行きましたが、よもやお忘れではござりますまいな？ その時あなた様は今夜のようにやはりその窓でそのように湖水を眺めておられました。……お顔の色もお体も今夜のように蒼褪あおざめて顫ふるえ、そ

してお眼からも今夜のように涙が流れておられました。ただ今夜と違っておられます事は
 尼様達のお祈禱いのりの代りに猛たけりに猛たける武もの士のふのひしめきあらぶ声こえこえ々々が聞こえていたこと
 ござります」

柵しがらみは物にでも襲われたように両手で顔を抑えたが、「何も彼かも妾わたしは覚えている。あああ
 の晩の恐ろしかったことは……」

「……その夜お城から乗り出した軍いくさよそお装まいた二隻の船には互いに剣つるぎを抜きそばめ互い
 に相手を睨み合つた若い二人の武もの士のふが乗つておられた筈でござりますな。……それこそ
 他ならぬあのお二方。画像のお方達でござります」

「それも妾は覚えている。一人は橘たちばなむねすけ宗むね介すけ様！ おお妾の許いいなすけ婚け！」

「はい、そうしてそのお方様こそこの城の主あるじでござりました。そうしてもう一人のお方様
 は宗介様のおん弟夏彦様でござりました」

「夏彦様！ 夏彦様！」

「私の許婚の帰った証拠！」

「また二点鐘を打つ時は……」

「夏彦様が帰った合図！」

「その通りでござります。今夜のような不吉の晩にはその鐘が不意に湖上から鳴らないものでもござりませぬ。よくよくご用心遊ばしませ」

足音を消して老人は廻廊の方へ出て行つた。

後は寂然と静かである。

と、柵は身顫いをし物におびえたというように部屋の中を怖そうに見廻したが、ツト画像の前まで行き、夏彦の画像へ両手を投げ掛け譚言のように叫ぶのであつた。

「夏彦様夏彦様、果たし合いにお勝ちくださりませ！　そうしてどうぞ一刻も早くお城へお帰りくださりませ！　三点鐘の鳴らぬよう二点鐘の鳴りますように神様お加護くださりませ！」

とたんに湖上から鐘の音が窓を通して聞こえて来た。赤い灯火のついている軍船で鳴らす鐘に相違ない。

ボーンと、一つ鮮明りと最初の鐘が鳴らされた。続いて二つ目の鐘の音が殷々として

響いて来た。

「二点鐘！」と柵は聞き耳をたてながら呟いた。しかし間もなく三つ目の鐘が鮮かに尾を曳いて鳴り渡った。そしてそのまま絶えたのである。三点鐘が鳴ったのだ。恋しい夏彦は帰らずに、名ばかり許婚の宗介が果たし合いに勝って帰って来たのだ。

柵の顔は蒼白となり眼ばかりギラギラと輝いたが、その眼で夏彦の画像を見詰め物狂わしくこう叫んだ。

「夏彦様夏彦様！ あなたは永久にこのお城へはお帰りなさらないのでござりますね。十年の間、恋と嘆なげきに明かし暮らした妾わたしの胸へ二度とお帰りなさらないのだ」

彼女はにわかには冷ややかな眼で宗介の画像に見入ったが、

「あなたがこのお城へ帰ったとて何が待っておりましようぞ。お祈いのり禱のぞみをする尼様と、あなたにとっては敵の子と、そして冷たい許婚の屍むくろばかり……あなたの希望はこれこのように消えてしまったのでござりますぞ」——云いながら龕がんの前へ行き点ともされた灯火を吹き消した。

それから彼女はそろそろと歩いて姫の寝間の前まで来た。

「可哀そうな久田姫や、お前の恋しがっているお父様は、もうこの世にはおいでなさらぬ

のだよ。お前はこれからは一生をちょうど陽蔭ひかげの花のように寂さびしく咲かなければならないのだよ。おお可哀そうな久田姫や！そしてお前のお母様は……そしてお前のお母様は……

そこに立ててある几帳きちようの蔭へ彼女は静かにはいつて行った。と、一瞬間「あっ」という声が几帳の蔭から聞こえて来たが、ただ一声聞こえただけで後は寂然しんと静かになった。あわただしい足音を響かせて、島太夫が部屋へ飛び込んで来たのはそれから間もなくのことであつた。

「お姫様ひいさま！ 柵しがらみ様！」

と彼は四辺あたりを見廻したが、

「お、これは灯が消えている。それにお休みなされたらしい。……お姫様！ お姫様！ お起き遊ばさねばなりません！ 三点鐘が鳴りました！」

しかしどこからも返辞がない。几帳の蔭はひそやかである。

四

「寝息も聞こえぬとはどうしたことだ。よくよくご熟睡遊ばしたと見える。がどうしてもお起こし申さねばならぬ」彼は几帳へ手を掛けたが、「ごめんくださりませお姫様……あつ！　これは！　南無三寶なむさんぼう！」

思わず膝をついた一刹いつせつな那、タツタツタツと階段を登る逞たくましい足音が聞こえて来たが、闇にもそれと見分けのつく鎧よろい冑かぶとに身をよそつた一個長身の武士ものが颯さつと蝙蝠こうもりでも舞い込んだように老人の眼前へ現われた。

「誰だ！」と島太夫は声を掛ける。「何用あつて参つたぞ！　身分を明かし名をなのれ！」すると不思議な侵入者は葬式に鳴らす太鼓のような深い不気味な濁つた声で、

「命令するのだ！　灯火ひをつけろ！」ツト一足進んだが、「……年頃闇には慣れておれど久々で見るこの部屋がこう暗くては面白くない。さあすぐに灯火ひをつけろ！」

「そういうお声は？　……あなた様は？」

「俺はこの城の持ち主だ！　俺は橘宗介だ！」

「お殿様でござりましたか」

「何より先に灯ひをつけろ。——そちはたしかこの城で物見の役をつとめていた島太夫と云つた老人であろう。幽かすかに声に覚えがある。もしその島太夫であるならば忠義一箇の男の

筈だ。そちの主人が命ずるのだ、早く灯火を点けるがよい」

島太夫は恭しく一揖したが、そろそろと龕まで歩いて行き燭台に仄かに灯をともした。部屋の中が朦朧と明るんで来る。

宗介は部屋の中を見廻したが、

「……これが昔の俺の城か。あの華美だった部屋だというのか。熊の毛皮を打ち掛けた黒檀の牀几はどこへ行った。夜昼絶えず燃えていた銀の香炉もないではないか。……

や、ここに十字架がある！ 誰がここへ置いたのだ？ 何んのためにマリヤを飾ったのだ！ 俺は昔から天帝に対して何んの尊敬も払っていなかった。ましてマリヤや基督に対しては頭を下げたことさえない。天帝の教えを信じたのは俺ではなくて夏彦であつた。……

……島太夫お前は覚えていような。十四年前のある晩に俺と夏彦とは部下を従え三隻の軍船に打ち乗つて湖水を分け天竜川を下り一人の女の愛を得ようと阿修羅のように戦つたことを！ ああある時は二つの船は舷と舷とを触れ合わせて白刃と白刃で切り合つた。またある時は二つの船は互いに遠く乗り放し矢合わせをして戦つた。闇の夜には篝火を焼き、星明りには呼子を吹き、月の晩には白浪を揚げ、天竜の流れ遠州の灘を血にまみれながら漂つた。永い間の戦いに夏彦の部下も俺の部下も一人残らず死に絶えた。俺の弓矢は朽

ちて折れ夏彦の弓矢も朽ちて折れた。しかも二人の怨みばかりは綿々として尽きぬのだ」

「その間中このお城にもいろいろの出来事がござりました」

老いたる家来島太夫は眼をしばたたきながら云うのであった。

「お城に止どまった武士達が殿様方と夏彦様方と明瞭り二派に立ち別れ、切り合い攻め合い致しましたため次第次第に人は減り、やがて死に絶えてしまいました。その寂しさに堪えられず、お姫様の柵は天帝の恩寵にお縋りして安心を得ようとなされました。それをどうして知ったものか九州天草や南海の国々から天帝を信じる尼様達が忍び忍びにおいでなされ、お姫様と力を合わせ殺伐であったこのお城を祈祷十字架聖灯の光で隈々隅々まで輝いている教団と一変させました。つまりお城は十四年の間に亡びてしまったのでござります」

「城は亡びても武士は死んでも俺の許婚の柵は生きてここに住んでいような？」

「はい、ご無事でござります」

「俺はあの女を愛していた。あの女は俺の許婚だ。俺は死ぬほど愛していた。それなのに柵は俺のことを糸屑ほどにも愛していなかった。あの女の恋人は夏彦であった。俺の弟を愛していたのだ。世にも憎い奴輩め！ 虹のようなはかないそんな歓楽がいつまでつ

づくと思つていたのか！」小脇に抱えていた丸い包物を島太夫の前へ突き出したが、「島太夫、十字架クルスの前へ行け、この包物つつみを開けて見ろ！」

「……………」——老人は無言で包物を受け取り龕の前まで歩み寄つたが、そろそろと包物をほどいて見た。男の生首が現われた。既に予期したことである。島太夫は驚きもしなかつた。

「見たか。首を。夏彦の首級くびだ！ ……あの晩は天竜の河の面おもを燐の光が迷っていた。星さえ見えぬ大空を嵐ばかりが吹いていた。湧き立つ浪は蠶たてがみを乱した白馬のように崩れかかり船を左右にもてあそんだ。俺と夏彦とは二人きりで船の船首へさきに突立ちあがり、互いに白刃を抜き合わせ思うままに戦つた。天運我にあつたと見え、颯さっと突いた突きの一手に夏彦は胸の真ん中を刺され帆柱もとの下に倒れたが、そのまま呼吸いきは絶えてしまった。——十四年という永い年月互いに怨んだその怨みはこうしてとうとう晴らされたのだ。そうして俺は夏彦の首級を手に提ひっさげて歸つて来た。そして今ここに立っている。……ここにこうして立ちながら一人の女を待っているのだ。俺の許婚しがらみ柵の現われて来るのを待っているのだ。さて、島太夫お前に命ずる。早く柵を連れて来い」

「……………」

五

「何も恐れることはない。何も憚はばることはない。十四年ぶりで城の主あるじが腰に血染めの剣を佩はき、手に敵の首級を持ちその首級を女に見せようと思つて約束通り歸つて来たのだ。さあ柵を連れて来い！ 島太夫、柵にこう云つてくれ。……戦いに倦あきた宗介むねすけが生血なまちに倦あきたこの俺が美しい許婚に邂逅ゆきあつて恋の甘酒うまざけに酔いしれたくそれで歸つて来たのだとな。そしてまたこうも云つてくれ、そなたの恋人の夏彦を大事にかけて連れて来たとな、その夏彦は世にも穏おとなしく笑いもせず物も云わずただ悲しそうに無念気に黙っていると云つてくれ。早く行け島太夫！ そうして柵しがらみを連れて来い！ 俺は女を見たいのだ。殺された恋人の首級くびを見てどんなに女が悶もたえ苦しむか俺はそれが見たいのだ。その悲しみとその悶もたえとを俺に見せまいと押し隠し空々そらぞらしい笑みを顔に湛たえて俺の方へ手を延ばすその柵を見たものだ。早く柵を連れて来い！」

「お連れ致いたさずともお姫様ひいさまはすぐお殿様のお目の前においで遊ばすのでござります」島太夫は顫ふるえながら手を上げて几帳きちょうの蔭かげを指差した。「静かな睡眠ねむり永遠の睡眠ねむり……お姫様

は几帳の蔭で眠っておられるのでござります」

聞くと一緒に宗介はつかつかと几帳の前まで行った。

「柵、柵、眼を醒ませ。そなたの許婚宗介が今こそここへ戻つて来たのだ。さあ早くそこから出て俺の贈り物を見るがよい。ヤツ……」

とにわかには仰天し宗介は几帳を掻いやったがぐたりと膝を床に突いた。

と、灯火の仄かの光に淡くおぼろに照らし出されたのは血に染んだ柵の屍骸である。

思わず宗介は両手を延ばし彼女の軀を抱き起こしたとたん、襖がサラリと開いて走り

出た一人の乙女。

「お姉様！」

と叫びながら柵の屍骸へ取り纏る。

「誰だ！」

と宗介は眼を見張りその乙女を見詰めたが、何んに驚いたか抱えていた柵をはたと床へ取り落とした。

と、島太夫は沈痛にむしろ厳かに云うのであった。

「お姫様でござります。柵様が十四年前にお産み遊ばしたお姫様の久田姫でござります」

「十四年前に産んだというか？　ふうむ、確かに十四年前だな？　……これ娘顔を上げろ！　おおいかにも酷似りだ！　夏彦の容貌と酷似りだ！　因果な娘よ不義の塊よ、立って十字架の前へ行け！　そこにある首級がお前の親父だ。そうしてここに自害している柵こそはお前の母親だ」

宗介は腰の太刀を抜き、躍り上がり躍り上がり打ち振ったが、
「栄えに栄えた城は亡び仇も恋人も等しく死んだ！　俺は彼らに裏切られた。俺の怨恨は永劫に尽きまい。俺は一切を失った。俺には何一つ希望はない！　俺はいつたいどうし
たらいいのだ!!　ああ俺は恋を呪う！　俺はあらゆる幸福を呪う！　俺は人間を呪ってやる！　俺は生きながら悪魔になろう！　山へ山へ八ヶ嶽へ行こう！　水の上の生活には俺は飽きた。俺は山の上の魔神になり下界の人間を呪ってやろう！」
叫び狂い罵る声は窓を通し湖水を渡り、闇の空に聳えている八つの峰を持った八ヶ嶽の高い高い頂上まで響いて行くように思われた。

ここまで語って来た杉右衛門は岩の上に突っ立ったまま静かに四辺を見廻した。

文政元年秋の事でここ八ヶ嶽の中腹の笹の平と呼ばれている陽当りのよい大谿谷には

真昼の光が赭々あかあかと今一杯に射し込んでさいる。既に八つの峰々には薄白く初雪が見えてい
るが、ここまでそれが下りて来るには一月余りの余裕があるうか。見渡す限りの山々谷々
には黄に紅に色を染めた幾億万葉の紅葉もみじが錦を織つて燃え上がっている。眼の下遙かの
下界に当たつて、碧々あおあおと湛えられた大湖水、すなわち諏訪の湖水であつて、彼方の岸に
壁白く石垣高く聳そびえているのは三方石は諏訪因幡守の高島城の天主である。

天晴れ気澄み鳥啼てんきしきり長閑のじかの秋の日和ひよりである。

「さて」と杉右衛門は語りつづけた。「我がのご先祖宗介様むねすけが正親町天皇おおぎまち 天正年てんしょう
間に生きながら魔界の天狗となりこの八ヶ嶽へ上られてからは総あらゆる下界の人間に対して災
難をお下しなされたのだ。そしてご自分の生活くらし方も下界の人間とは差別を立てられ家に
は住まず窩あなに住まわれた。そのうち四方から宗介様を慕つて多くの人間が登山して参つた
が、それらはいずれも人界ひとのよにおいて妻を奪われ子を殺され財宝を盗まれた不幸の者ども
で、下界の人間総すべてに対して怨恨うらみを持つている人間どもであつた。こうして魔神宗介様は
多数の眷族けんぞくを従えられ、いよいよ益 《ますます》人間に向かつて惨害をお下しなされ
るうち、世はやや治おさまつて信長時代のぶながとなりさらに豊臣時代とよとみとなりとうとう徳川時代と
なつた。宗介様の肉体はとうにこの世を辞したけれど、魂尚なほ神となつてこの谿谷たにに残つて

おられる筈だ。そうして我々眷族の子孫は窩に住むため窩人と呼ばれ人界の者どもに恐れられ、今日までここに住んで来た。ところが……」

と窩人の長の、杉右衛門は屹と眼を瞋らせ、彼の前にずらりと並んでいる五百に余る窩人の群を隅から隅まで睨み廻したが、

「ところがこの頃どこから来たものか白法師と自分から名を宣る奇怪な法師がこの山へ来て、『敵を愛せよ』というようなことを熱心に説法し出した。そうだ、これとて不届き千方ではあるが、それにも増して許し難いのは窩人の身分でありながら、その白法師の説法を窃かに信じる者があり、宗介天狗を勸請した天狗の宮の境内で毎夜毎夜集会をなし、その白法師を呼び迎え説法を聞く者があるということじゃ。これは我々の宗教から見て許し難い罪悪じゃ！ 見出してこの山から追い出さねばならぬ。何んとそうではあるまいかな？」

「そうだそうだ！」

と叫ぶ声が集まった窩人の口々から雷のように轟いた。

「さて」と一段声を高め杉右衛門はさらに云い出そうとしたが、にわかに棒のように立ちすくみ山の峰の方を見詰め出した。群がった窩人達は怪しみながら彼の眼を追って峰の方

を見た。と同音に「わっ！」と叫び大事な評定も忘れたかのように四方に向かつて逃げ出した。

峰は今や山火事なのである。

溷れ乾いた木の葉に火が点いたのである。濛々たる黒煙のその中から焰の舌が閃いて見え嵐に煽られて次第次第に火勢は麓の方へ流れて来る。

窩人の部落は今やまさに焼き払われようとしているのである。

六

窩人の頭領杉右衛門の娘の今年十九の山吹は家の一間で泣いていた。

父は寄り合いに出かけて行き弟の牛丸もどこへ行ったものか家の内にはいなかった。

彼女は泣き喋舌っているのであった。

「あの人憤って行ってしまったわ。どうしよう、どうしよう、どうしよう！ よくまだ妾が云わないうちにあの人憤って行ってしまったんだもの。そりや妾だって悪かったけれどあの人だつてあんまりだわ。……でも妾ほんとにあんな事を何故あの人に云つたんだらう。

——妾が都会へ行つて見たいと云つたら、あの人にわかにかに妙な顔をして『何故行きたい』
つて訊くものだから、『妾もうこんな山の上の部落なんかには飽き飽きした』つて、ついで
うっかり云つてしまふと、あの人恐ろしい顔をして、『山吹、お前は、山の中に住むこの
俺の顔にも飽きたらうな。弁解したつて通らねえよ。聞けば高島の城下（今の上諏訪町）
から、多四郎とかいう生つ白い男が、お前を張りに来るそうだが、これ、気を付けねえと
いけねえぞ。かりにも窩人部落の女で、下界の人間と契つたが最後天狗の宮の岩の上から
深い谷底へ投げ下ろされ必ず生命を失うのだからな』と声の調子まで恐ろしく変えて、こ
うあの人が云つたかと思うと自分の頭の毛を掻きり、『ああ俺はお前に騙された。俺は
意地のねえ人間だ。俺はお前に見捨てられた！もう俺はこれつきりお前とは逢わねえ
！ その多四郎とかいう下界の奴と手に手を取つて部落を出るがいい。そうして下界の真
人間となつてうんと出世をするがいいや！ だがな、山吹、よく覚えていろよ。お前が下
界で出世している時俺はやっぱり窩人部落の八ヶ嶽の中腹の笹の平で、お前の事を恋い焦
れながら猪熊猿を相手にして憐れに暮らしているつてことをな！』……こういふと妾を振
り切つてズンズン行つてしまつたんだよ。誰があの人を騙したつて云うの。妾騙しなんか
しやしないわ」

彼女の前に誰かいて、その人に訴えてでもいるかのように彼女はいつまでも泣き喋舌つしゃべている。

秋の真昼のことであつて黄味の勝つた陽の光が家の内まで射し込んでいる。家造作やづくりは窩人の風俗通り大岩を掘り抜き柱を立てたいわゆる古代穴居族の普通の家造作と同じであつたが、杉右衛門は一族の頭領だつたので、したがつてその住居は特別に広く半分なかば以上は岩窟から外へ喰はみ出して造られているのであつた。

山吹は窩人族の乙女としてはほとんど類なく美しかった。やはり頭領の一人娘だけに衣裳などでも他の娘などより立派な物を着ているので自然引つ立ちもするのであろうが、下界高島の城下における立派な武士の令嬢と云つても充分通る容姿ようすであつた。

その美しい山吹が秋陽に半顔を照らしながらシクシク泣いているのであるから、ちよつと形容出来がたいほど可愛かわいらしく見えるのであつた。

その時、手近かの林の中から雉笛きじふえの音が聞こえて来たが、のっそり草を分けて出て来たのは彼女の弟の牛丸であつたが年はおおかた十四ぐらいでもあろうか、ひよいと家の前まで来ると、姉の様子を覗のぞき込んだ。

「うわア、姉さん泣いてらあ。こいつアほんとに面白いや」

林の中で捕つたのでもあろう雉を一羽提^さげていたが、それを土間の方へ抛^{ほう}り出すと縁側へどんと腰を掛け、

「今ね、姉さん、多四郎さんがね、姉さんを訪ねてここへ来るよ」

「え、まあ本当！ 多四郎さんが？」

「林の中から坂路の方を見たら素晴らしく洒落^{しゃれ}込んだ多四郎さんがね、こっちへ上つて来るじゃないか。で俺^{おい}ら急いで走つて行つて色々あの人と話したがね……」

「まあそれじゃ本当なんだね」

山吹は思わず手を上げて髪^{かみ}の乱れを掻き上げた。

牛丸はそれを見るとニヤニヤして、

「ふうんこいつア妙だなあ、多四郎さんのこととなると姉さん変にソワソワするんだもの」

「そんな事云うもんじゃありませんよ。お前さんはまだ子供じゃないの。……それで多四

郎さんは何んと云つて？」

「ああ尋^{たず}ねたよ姉さんの事を。『あなたの姉さんお幾^{いくつ}歳？』てね。厭^{いや}に気取つた云い方だね」

「そうしてお前さんは何んて答えて？」心配そうに訊くのであった。

牛丸はまたもニヤニヤしながら、「二十二だって云ってやったよ。つまり三つ懸け値をしてね」

「まあ」と呆あきれて山吹は思わず両手を打ち合わせたが、

「どうしようどうしよう悪戯いたずらっ子こ！ 妾めかけあの方に自分の年を十八だって云って置いたのよー！」

二人の姉きょうだい弟いは腹を抱え面白そうに笑ったが、その心地よい笑い声は森や林へ反響し二人の耳へ返つて来た。

七

牛丸は部屋の中を見廻したが盆に高く積まれてある秋栗の山を見付けると、

「姉さん誰かお客さんがあつたの？」

「ああ、あつたよ岩太郎さんがね……」

「ああそう、あの人はいい人だねえ。俺おいらあの人大好き。多四郎さんのようにお洒落しやれでなく、それに部落の人だからね。……何故なぜ早く岩さん帰つたんだろう？」

「憤おこつて帰つて行つたんだよ」

二人はちよつと眼を見合わせたがそのまましばらく黙っていた。

林から林へ移つて行く小鳥の群が幾度となく二人の前を過ぎて行つた。風もないのにホロホロホロホロと紅葉もみじが庭へ降つて来る。草叢くさむらからピヨンと飛び出して峰の方へ颯さつと走つて行つたのは栗色をした兎うさぎである。ケーンケーンと森の奥から雉の啼き声が聞こえて来る。時々雹ひょうでも降るかのように林の中から聞こえて来るのははげた大栗が転がり落ちるのである。

事のない時の部落の光景はまことに平和なものである。

「や、来たらしい。足の音がするよ。多四郎さんが来たんだよ」

牛丸はこう云つて坂の方を首をのぼして見やつたが、

「下界の奴なんか意気地なしさね、あんな坂を上るのに大息を吐いているんだからな。――俺らはそれでは林へ行つて今度は山鳥でも捕つてやろう」

牛丸はそのまま走り出したが、やがて林に隠れてしまった。同時にひよつこり坂の登り口へ形のよい姿を現わしたのは問題の主の多四郎であった。

彼は年の頃二十四、五、都みやこ風ふうに髪を結ゆい当世風みなりの扮装みなりをし色白面長の顔をした女好

きのする男であつたが、眼に何んとなく劍があり、唇が余りに紅いのは油断の出来ない淫蕩者らしい。肩に振り分けにして掛けているのは麓の城下から持つて来るところの色々の珍らしい器具や食物で、つまり彼は山と城下とを往来している行商人なのであつた。

「お、これは山吹様、あなたお一人でございますかな？ お父様はどこへ参られましたかな？ え、寄り合いにおいでなされたと？」

多四郎は愛想よく笑いながら山吹の側へやつて来たが上がり框へ腰を下ろした。

山吹は何んとなく狼狽して思わず顔を赤らめたりしたが、

「はい、お父様は寄り合いで天狗の宮まで参りました。白法師様を縛め取るための相談なのでございましょうよ」

「あつちへ行つても白法師こつちへ来ても白法師。どうやらお山は白法師のために荒らされてるようでございませぬなあ」

諂うように微笑したが、

「私のためには結句幸い。何んとそうではございませぬかな」彼はそろそろと手を延ばして山吹の方へ近寄つて行く。

「それはまた何故でございませぬの」

「だってそうではございませんか。こうしてたった二人きりで差し向かっていることの出来ますのもその白法師様のお蔭ですからな」

云いながら素早く山吹の手をギュツと握ったが、そこは初心うぶの娘である。「あれ！」と仰ぎよ山やまな金切り声を上げ握られた手を振り解ほどいた。

「エへへへへ」

と笑ったものの多四郎は少なからずテレたものか、テレ隠しに盆の上の栗を摘つまんだ。「ほほう大きな栗ですなあ」わざとらしく眼を見張る。

「よかつたらお食あがりなさりませ」笑止らしく山吹はこう云った。「余り物ではございますけれど」

「へ、余り物とおっしゃると?」

「あの、お客がありましたのよ」

「あなた一人の所へね?」もう嫉妬しつとからの詮索せんさくをする。

「ええ心やすい人ですもの。岩さんという方ですわ」

彼女は無邪気むじゃきに云うのであった。

「妾わたしの従姉兄いとこに当たりますの」

「それじゃ部落の人ですな」さも嘲あざけた様子をして、

「へ、熊猪くまじしのお仲間か！　ところで先日の話の続きを今日はお話ししましょうかな」

「どうぞ」

と山吹は乗り出して来たがもうその眼は恍惚ううつととなり胸をワクワクさせているらしい。

「それジワジワとおいでなすつたぞ。この大江戸の話ばかりが資金もとでいらすの資金というものさ。田舎いなかの女を誑たたらすにはこれに上越うえこすものはないて」

——多四郎はこんなことを思いながら上唇をペロリとなめ、

「……何が美しいと云つたところで江戸の祭礼まつりに敵かたうものはまず他にはありませんな。揃揃いの衣裳。山車屋台だし。芸妓げいしやの手古舞てこまい。笛太鼓。ワイシヨワイシヨワイシヨと樽天神たるを担かつぎ廻ります。それはたいした景気けいきでさあね。……大名行列もふんだんに見られ、河開かわびらきにはポンポンと幾千の花火が揚がるんですよ。それより何より面白いのは歌舞伎かぶき狂言物真似ものまねでしてね。女役おやま、実悪じつあく、半道はんどうなんて、各自役所めいめいやくどこが決まっておりますな、泣かせたり笑わせたり致しやす。——春の花見！　これがまた大変だ！」

「え、大変とおっしゃると？」

山吹は顔を上気させ眼をうるませて聞き惚れていたが吃驚したようにこう云った。

「何、大変と申したところで悪い意味じゃありませんよ。つまり素晴らしいと云ったまで。

——そりゃ素晴らしゅうござんすよ。この辺に咲く山桜、あんなものじゃありませんね。桃色大輪の吉野桜、それが千本となく万本となく、隅田の堤、上野の丘に白雲のように咲き満ちています。花見衣に赤手拭い、幾千という江戸の男女が毎日花見に明かし暮らします。酒を飲む者。踊りを踊る人。伽羅を焚いて嗅ぐものもある。……」

「まあ——と山吹は感嘆の声を思わず口から洩らしたが、「そういう江戸には美しいお方が沢山おいででございませうねえ」

「それは沢山おりますとも。それに扮装が贅沢ですよ。衣裳はお召し。帯は西陣。長襦袢は京の友禅縮緬。ご婦人方はお化粧をします。白粉に紅に匂いのある油……」

「まあ」

とまたも感嘆して山吹は溜息を洩らしたが、

「ああ妾行つて見たい。ああ妾行つて見たい！」と夢見るような声で云った。若い娘の好

奇心と若い娘の虚栄心とから迸り出た声である。

「しめた！」と多四郎は思ったがそういう様子は嘸にも出さず至極真面目の顔付きで、

「江戸へ行きたいとおつしやるので？ おいでなさりませご案内しましょう。ですから私はお逢いするたびに申しておるではありませんか。あなたのような美しい方が何んでこのような山の中の、しかも窩人の部落などにいつまでもおいでなさるかとね」

「でも……」と山吹は云いよんだ。「何んにも知らない田舎者がそのような繁華の土地へ出てあちこちで恥を搔くよりもいつそやつぱりここにおいて兎や猿と暮らした方が身のためになりはしますまいか」

「その心配はご無用です。この多四郎が付いておりやす」彼はボンと胸を叩いたがこういう気障なやり口も浮世を知らぬ山の娘にはかえって頼もしく思われるらしい。で、彼女は莞爾りした。

「あの、そうしてあなたのお家も、お江戸にあるのでございましょうねえ？」

「お江戸？ そうそう江戸にあります」

こう多四郎は云つたものの心中ギクリとしたのであった。彼は城下の人間で江戸などに邸はないからである。

「広いお家でございましょうねえ？」

山吹はまたも恍惚うつとりと訊く。

「え、私の家ですか？ ……ええまあ随分広うござなあ——その実多四郎は家ときたら一間ひとましかない裏店うらだななのである。」

「ご家内も随分多いんでしようねえ？」

「家内ええと、二、二十人——彼は思わず額ひたいを拭いた。汗が滲にじんで来たからである。その筈である。彼の家族は彼と母親との二人きりなのだから。」

「ああ、駄目だわ！ 妾なんか！」

突然絶望の声を上げ、山吹が両眼を抑おさえたので多四郎はギョツとして腰を浮かせたが、何が駄目なのか解らない。

「ああ、妾なんか及ばないわ！」

再び彼女は叫んだものである。

「及ばない？ 何が？ どうしてですか？」

云いながら好機逸いっつすべからずと彼は山吹の手をとった。それからそつと腰をかける。

山吹も今度はとられた手を振り放そうとはしなかった。じつとそのままとらせている。

「でもやつぱり行きたいわ。……」

「うわごと 嚙語のようにこう云つて彼女は多四郎の顔を見たが、

「あなたはとうとうご身分のお方？ お侍さんではありませんわねえ」

「違いますとも。そうではありませんとも」

「では、お百姓？ ああ商人ね！ 大きな大きな商人ね！ でもどうしてそんなお方が行商などをなさいますの？」

「さあ、そこです。……」

と、多四郎は、また額を磨こすつたが、

「つまり、見習いをしているので。……」

「ああそう、それで解りました」

山吹はそこで押し黙つて何か空想にふけり出した。と、多四郎は彼女の手を自分の口まで持つて来てつと唇を着けようとする。その手を山吹はちよつと引いたがそれは無心でしたことであつた。そんな事より今や彼女は自分が江戸へ出て行って立身出世をした時の事を空想に浮かべていたのであつた。

で、多四郎は懲こりずにまた山吹の手をとつたがやはり彼女はそのままでした。

と、山吹は囁語のようにまたもこんなことを叫んだのであった。

「ああ妾厭だ！ 山の中は！」

「では参ろうじやありませんか。花の大江戸の真ん中へね」

多四郎は山吹の手を引いた。彼女は彼に引かるるままに彼の胸の上に顔を埋ずめた。

「連れて行ってください！ 連れて行ってください！ 妾どうしたって江戸へ行きます！」

九

すさま

しい微笑が一刹那多四郎の頬に浮かんだが、山吹の顔をジリジリと上の方へ向けよ

うとする。二人の顔が合った時多四郎は突然自分の顔を山吹の顔へ落としかけた。

とたんに笑い声が聞こえて来た。ハツとして二人が顔を上げると牛丸が門口に立っている。

「ヤーイ、何をベチャクチャしてるのだい！ 岩さんに云い付けるぞ！」憎悪の光を眼に
湛え、「オイ岩さんがやって来るぞ！ 妙な人と一緒にな！」

「馬鹿！ 悪戯っ児！ 厭な餓鬼！」

そこは部落の女である。猛烈の感情を一時に出して山吹は弟を罵つた。

「岩さんが何んだ！ 岩太郎が何んだよ！ 来たら追い出してやるばかりさ！」

「ふん」と牛丸も喧嘩腰になり、「多四郎の奴が来ないうちは岩さんで大騒ぎをしたくせに！」グルリと森の方へ向きを変えたが、「やあもうそこまでやって来た。……妙な人が従いて来るよ……」

山吹も多四郎もそれを聞くと首を差し出して森の方を見た。

「あら、ほんとに岩さんが来る」山吹は周章あわてて叫んだが、「来たら返してやるばかりだね」

「ははあ、不格好なああの男がそれじゃ岩という男ですな」多四郎は鼻を鳴らしながら、

「私の家の庭男にも当たらぬ」

牛丸はさもさも嬉しそうに、「俺おいら岩さんを迎いに出去やろう」彼はそとまで走って行った。

「おや」

とにわかにな多四郎は不安の様子を現わした。

「何んて恐ろしい顔付きだろう。あの妙な人の顔付きは！」

彼は両掛けを取り上げた。そうして横手の潜り戸から坂の方へパタパタと逃げ出した。

「あら、多四郎さんどうなすったの!」

山吹は驚いて叫んだが、「妾も、妾も、妾も一緒に!」

——周章あわてて潜り戸から飛び出した。

後には、部屋の中には誰もいない。黄色い秋陽がしらしらと敷物の上を照らしている。

小鳥が一羽戸惑あたりいしてツト部屋の中へ飛び込んで来たが、すぐ驚いたように飛び出して行った。しんと四辺あたりは静かである。

と、戸外いへのそとで話し声がある。

「牛丸さん、今日は」

「ああ、岩さん、今日は」

「姉さん家においでかね?」

「ええいますよ家の中に」

「どなたかお客さんでもありますか?」

「……………」

「とにかくはいつて見ましようかね」

すぐと土間へはいって来たのは、牛丸と岩太郎と白衣びやくえを着たすなわち「妙な人」とであつた。

岩太郎は多四郎と同年輩であつた。人柄はまるで反対であつた。真面目で熱烈で堅実でいかにも部落の若者らしい。縞しまの筒袖つつそでに山袴やまばかまを穿はき獣皮の帯を締めている。

白衣の人物はそれとは異なり真に神のように神々こうこうしい。抜けるほど白い皮膚の色。髪を肩まで切り下げているのがかえつて一種の尊厳を添える。白衣を長く裳すそまで垂れ足の先を隠しているが、その足には何んにも穿はいていない。秀ひいでた額、高い鼻。形のよい口には微笑が湛たたえられ一見赤児あかごさえ懐なつきそうである。彼の眼は全く不思議なものである。つまり威嚴の象徴であつて、ある時は玲瓏れいろう珠の如くに見え、ある時は猛獸をも尻しりごみさせるほどの恐ろしい眼にも見えるのであつた。しかもそれが一瞬の休みもなく自由自在に変化するのであつた。

岩太郎は四辺を見廻したが、

「おや誰も家にはいないじゃないか」

「やあ姉さんはどこへ行つたんだらう」牛丸は部屋部屋を探し歩いたが、

「いないいないどこにもいない。ああそれじゃ逃げたんだな。岩さんと逢うのが恥はづかずかし

くて。ようし俺ら探して来よう」

飛び出そうとするのを抑えたのは白衣の妙な人であった。

「探さずともそのうち帰つて来よう。巢のある鳥は巢へ帰るものじゃ。……で、お前さんが牛丸さんかね？」

親しそくに妙な人は尋ねたが、その声はちようど岩を走る清水のように清らかであった。
いたずらもの 悪戯者の牛丸もにわかにな態度を改めたが、

「悪戯者の牛丸とは私のことでございます」

と、さも丁寧ていねいに云つたものである。

「ハツハツハツ。悪戯者とは面白いね。自分から云うのは正直でよい。——ところでたつた今ここから出て坂の方へ逃げた者がある。あれはどういう人間だね？」

「若い男じゃございませんか？ もしそうなら多四郎の奴です」

一〇

「なに多四郎？」

と、それを聞くと岩太郎は颯と顔色を変えたが、妙な人のために制せられた。

「私もそうだと思います」妙な人は威厳をこめ、「あの男はよくない人間ですぞ。あの人間はある目的をもって天狗の宮の絶壁の下に木小屋を造って住んでいます。そうして城下へ下りて行つては色々の物を買つて来ます。それを持って行商に来るのです。城下から山へ来るのではなく自分は木小屋に住んでいて絶えず部落の動静をうかがい乗ずべき隙を狙つているのです。……」

「へえ、さようでございますか。悪い奴でございますなあ」岩太郎はひどく驚いたが、「それにしてもどうしてあなた様はそれをご存知なのでございましょう？」

「ああそれは何んでもない。私は寸刻の隙さえ惜しんでこの山中を見廻っている者じゃ。で、私はある日の事、その木小屋を見付けたのじゃ。……おや、誰か戸口にいるな。私の話を盗み聞きしている」

なるほど、そう云つた瞬間に山吹が戸口からはいつて来た。さすがに頬を赤く染め呼吸を上げしく吐いているのは恋人多四郎を追っかけて行つて追いつくことが出来なかつたからであらう。

「ああ姉さん」

「おお山吹！」

二つの声が同時に呼んだ。山吹と呼んだのは岩太郎である。

岩太郎はツト進み出たが、

「山吹、俺は何んにも云わぬ。俺は偉い人をお連れした。どうぞこのお方に礼を云つておくれ」

云われて山吹は眼をあげてその妙な人を眺めたが、にわかにはその眼は光を増した。敬
虔の情が起こったのである。で、彼女は無言ながら恭しく頭を下げたのである。

妙な人は神々しい顔に穏かな微笑を湛えたが、

「あああなたが山吹さんで？ お目にかかれたのを喜んでおります」

「妾も嬉しく存じます」

「山吹！」と岩太郎は情熱をこめ、「山吹、俺は安心してゐる。ここにおられるこのお方がきつと俺達二人の者を和睦させてくださるに相違ない。——さつき俺達は喧嘩したねえ。そしてもう俺は逢わぬと云つてお前の所から飛び出して行つた。……しかし俺はまた来たよ。それは他の理由でもない。このお方をお前に紹介させたためだ。山吹！ このお方はお偉い方だ！」

頸垂うなだれていた顔を上げ山吹はまたその人を見た。とその人はまた微笑し、さも謙遜けんそんに堪たえないように、

「いやいや私は偉わしい人でも勝すぐれた人間でもありませんよ。俺わしは平凡な人間です。しかし俺は真実ほんとを語りそして真実ほんとを行っています。あるいはこの点が普通の人物ひとと違っていている点かもしれません。……それはとにかく今日先刻いましがた俺はこの方と逢あいました。そうです向こうの林の中で岩太郎さんと逢あったのです。そうして俺はこの方と暫時しばらく無駄話をしましたつけ」

「そうです」

と岩太郎は感謝の眼まなこを上げ、

「……恋を失うった口惜くわししさに俺わたしは頭の毛を搔かきむしりながら林の中を走はっていました。その時ヒョッコリあなた様にお目にかかることが出来ました。俺わたしは一眼あなた様を見た時すぐに懐なつかしく存ぞんじました。それで俺は何も彼も——山吹との恋のことや、その恋が今日破やぶれたことまでお話お話はしたのでございます」

「そうそうあの時のあなたというものはまるで狂人のようでしたね」

妙な人は打ち案うちあんじながら、

「けれど暫時しばらくわし俺を相手に無駄話をしておられるうちに次第に心が和なほみましたな。……さて、話は変わりますが、ひとつ俺は山吹わしさんに物語を聞かせてあげようと思う。それは決してあなたにとつて損の話ではありません。いかがです、お聞きなさいますか？」

「どうぞおきかせくださいますよう」

柔順すなおに山吹は云ったものである。

「……第一番に云つて置きたいことは俺が旅行家だということです。——俺は肥前の長崎にもおりまた大坂にもおりました。また京師けいしにも名古屋にもあらゆる所におりました。もちろん江戸にもおりました。——さて、そこで山吹さん、どこの話をしましょうかな？」

「はい」と山吹は活気づき、

「それではどうぞ江戸の話をお聞かせなされてくださいまし」

「よろしゅうござる、江戸の話をそれではお聞かせ致すとしましょう」
妙な人は瞑めいもく目し何かじつと考えていたが、

「江戸は悪魔の巣でござるよ！」

一句鋭く喝破かつぱした。

「いえ違います違います！」

と嘲けるように叫び出したのは充分多四郎の甘言によって江戸の華美さを植え付けられた彼女山吹に他ならなかった。

「いいえ江戸は美しい人達の華美に遊びくらしている極楽だということでござります！」
 「聞け！」と再び鋭い声が妙な人の口から迸ったが、一座その声に威圧され一度にしんと静かになった。

さて、そもそも妙な人は何を語ろうとするのであろう？ しかし少なくとも妙な人は、虚栄虚飾に憧憬されている山の乙女山吹の心をその本来の質朴の心へ返そうとしているのは確からしいが、はたして山吹は彼の言を聞き元の乙女に立ち返るか、それとも多四郎に誘惑されるか？ これこそ作者が次において語らんとする眼目である。

一一

岩太郎と山吹とを前に据えて白衣長髪の妙な人は江戸の話話を話し出した。

「……江戸は將軍家おわす所、それはそれはこの上もなく派手な賑やかな所です。上は大名家から下は職人商人まで身分不相応に綺羅を張り、春は花見秋は観楓、昼は音曲夜

は酒宴……競つて遊樂に耽つております。山海の珍味、錦繡の衣裳、望むがままに買うことも出来、黄金の簪、瑠璃の櫛、小判さえ積めば自分の物となる。そうです。実に小判さえ出せば万事万端己が自由——これが江戸の習俗です。したがってそこには『静肅』もなければ『謙遜』というような美德もなく、あるものは『虚偽』と『偽善』ばかりです。……實際そこには小鳥も啼かず緑の美しい林もなく穀物の匂いも流れて来ず、嫉妬、猜疑、朋党異伐、金錢に対する狂人のような執着、そのために起こる殺人兇行——あるものと云えばこんなものばかりです。しかも、そのくせ表面はと云えば、いかにも美しくいかにも華麗に、質朴で正直な田舎の人を誘惑するように出来ております。……それに反してこの笹の平は何んという結構な所でしよう」

云いながら静かに身を廻らし戸外の景色を指差したが、

「畑を耕す男、車を押す女。楽しそうに叫んでいる子供や犬。……何んと長閑ではありませんか。……真昼の光に照らされて紅葉の林が燃え立っております。雑草に雑つた野菊花。風に揺れなびく葛の花。花から花へ蜜をあさる白い蝶や黄色い蝶、峰から丘、丘から谷、谷から麓へ群を作して渡つて行く渡り鳥。……何んと平和ではありませんか。——谷川の音は自然の鼓、松吹く風は天籁の琴、この美妙の天地のなかに胚胎まれた恋の蕾に

虫を附かせてはなりません。——幸福というものは破れ易くまた二度とは来ないものです」
 こう云いながら妙な人は二人の方へ手を延ばした。と、山吹も岩太郎も思わずその手へ
 縋り付く。その二人の手を繋ぎ合わせ、妙な人は云うのであった。

「美しい衣服は裁縫師が製し位や爵は式部寮が造る。要するにみんなつまらない物です。
 尊いものは人の愛だ！ いつまでもいつまでも愛し愛さなければなりません。二人のうち
 の誰か一人がもしこの愛を破ったならその人は恐らく底の知れない不幸の淵へ沈むでしよ
 う」

「はい」

と岩太郎は涙を流し、つつましく丁寧ていねいに頭を下げたが、

「たとえ殺すと云われましても今日のお教えに背くようなことは必ず私は致しませぬ。：

…山吹！ お前はどのような気だな？」

「岩さん、妾わたしが悪かった。もうどこへも行かぬ気がないから悪く思わずに堪忍かんにんしておくれ」

「おおそうか、有難てえなア。何んの許すも許さぬもねえ。俺わしの方から礼を云うよ」

二人はひしと抱き合つた、すすりなきの聲が聞こえて来る、岩太郎の胸へ顔を埋めたそ
 れは山吹の泣き声である。すなわち甘い誘惑のために危うく足を踏みはずそうとして、わ

ずかに助けられた悲喜の情が泣き声となつてほとばしつたのである。

誰もじつと黙つてゐる。

秋の真昼は静かである。

さつきから門口に佇たたずんで様子を見ていた牛丸は、この時つかつかとはいつて来たがさも感嘆したように妙な人へ話しかけた。

「あなたは偉い方ですねえ、あなたはどういう方なんです？」

すると白衣の妙な人は穏かな微笑を頬たに湛たえながら牛丸の方へ進み寄り軽く頭さすを撫つた。
「私わしかね、私は坊さんだよ。……総すべての人よ愛し合えよ！　こういう宗旨を拈ひめようところの部落へ来た坊さんだよ」

「坊さん？　ううん、坊さんじゃないよ。だつて頭に髪があるじゃないか」

「だから私は有うはつ髪の僧そうじゃ。したがつて私の説教は普通の坊さんとは少し違う」

「あなたの名は何んで云うの？」

「私には本来名はないのじゃ。……私は白衣を纏まとつてゐる。だから部落の人達は、白法師と呼んでゐる」

「えっ」

と牛丸は驚いたが、驚いたのは牛丸ばかりではなく山吹も岩太郎も仰天して、妙な人をつくづくと見た。

「何も驚くことはない」

白法師は悠然と説き出した。

「部落の人達が憎み嫌う白法師とは私のことじゃ。しかし私は悪魔ではない。私はかえって天使の筈じゃ……この部落はよい部落じゃ。ここの人達はよい人達じゃが、一つだけ悪いことがある。窩人以外の下界の人達を忌み嫌うということはどう考えてもよいことではない。私はそういう思想を打ち破るために来た者じゃ」

白法師の眼はこう云った時焰のように輝いた。法師はやがて一揖すると敷居を跨いで戸外へ出た。林の中へはいつて行く。間もなく姿は木に隠れたが、その神々しい白衣姿は、三人の眼に残っていた。そうして「愛の宗教」を説いた慈愛の言葉も三人の耳に、尚明瞭りと残っていた。

二人の恋人は抱き合つたまま白法師の後を見送っている。

こういうことがあってから一月ほどの日が経った。万山を飾って燃えていた紅葉の錦は凋落し笹の平は雪に埋ずもれた。冬籠りの季節が来たのである。

冬という季節は窩人達にとつては狩猟と享樂との季節であった。彼らは弓矢を携えては熊や猪を狩りに行く。捕えて来た獲物を下物としては男女打ち雑つての酒宴を開く。恋の季節肉欲の季節また平和の季節でもあった。そしてまた怠惰の季節でもあった。

雪は毎日降りに降る。

火を焚いて暖を取りみんな集まって無駄話をする。それ以外には用はない。

彼らの話の題材と云えば「宗介天狗」の事ばかりで、彼らにとつて「宗介天狗」は誰よりも尊い守り本尊であった。

もちろん白法師の噂も出た。

「部落の平和を破る者だ」

こう云つて人々は憎むのであった。——しかし概して冬の間は彼らの部落は平和であった。

深山の夜は更けていた。

空に幽かに月がある。

見渡す限り雪に蔽われ森も林も真つ白である。

と、一点黒い影が雪の上へ浮かび出た。熊か？ いやいや人間らしい。しかもどうやら重い物を背中に背負っているらしい。ノロノロ蠢きながら近寄って来る。

ここは八ヶ嶽の中腹である。窩人の部落からは真下に当たる「鼓ヶ洞」という谷間である。正面に絶壁が聳えている。

その絶壁の下まで来ると黒い人影は立ち止まった。

「おい」

と、不意に呼びかけた。

「俺だ俺だ早く戸を開けてくれ」——囁くような声である。

誰をいつたい呼んでいるのであろう。誰もその辺にはいないではないか。それに戸を開けると云ったところでもどこにも家などないではないか。

森然と四辺は静かである。

と、不思議にもどこからともなく答える声が聞こえて来た。

「おい、誰だ？ 権九郎か？」

すると黒い人影は寒そうに声を顫ふるわせながら、

「声こゝね音でおおかた解りそうなものだ。こんな所へこんな夜中に俺の他に誰が来るものか」

「誂あつらえ物は持つて来たろうな？」

「へ、ご念にや及ばねえ。数々の売ばい品ひん持つて参まゐつて候さうろうだ、寒くていけねえ早く開けてくんな」

「お前一人で来たんだろうな？」

「こいついよいよ関所あたかだわえ。安宅あたくの関せきなら富とがし樫かしだが鼓つづみヶ洞どうだから多た四し郎らうか。いや睨にらみの

利きかねえ事は。……あいあい某それがし一人ひとりにて候さうろう」

「よし。それじゃ戸を開けるぜ」

声と一緒にガチンという錠かぎを外す音が聞こえて来たがすぐその後からギーという戸きしの軋きしる音が幽ゆかにして、雪で蔽おほわれた雑ざつ木ぼく林りんにポーと一ひと所ところ火ひ影かげが射さした。

木々で隠かくされ雪で蔽おほわれ外見ぐわいけんからはほとんど見えなけれど絶壁たつたけの裾すその灌かん木ぼくの繁さかみに
どうやら木小屋きこやでも出来できているらしい。火ひ影かげもそこから来きるらしい。

再び戸の軋きしる音がして火ひ影かげが一時ひとときに消きえたのは、その小屋の戸が閉とざされたからで、権

九郎の姿の見えなくなつたのは、その小屋の中へはいつたからであろう。

後は寂しく静かである。白無垢しろむくのような雪の色と蒼澄んだ月光とが映じ合い冬の深山の夜でなければ容易に見ることの出来ないような神秘の光景を展開している。

バサツと大きな音がした。群竹むらたけが雪を落としたのである。その後は一層静かである。

その時、突然峰の方から関とぎの聲こゑが聞こえて来た。犬の吠え声、女の笑い声。——窩人の部落から来るらしい。

灌木かこに囲まれた木小屋の中では焚火たきびが赤々と燃え上がっている。

焚火を中にして二人の男が茶碗で酒を呑んでいる。

五味多四郎と権九郎とである。

色魔らしい美しい多四郎の顔は、酒と火気とで紅色を呈し、馬鹿に機嫌がよいと見えてのべつ幕なしに喋舌しゃべっている。

権九郎の方は四十過ぎらしく、肥えた髭ひげだらけの丸顔はやはり赤く色付いているが、これも負けずに喋舌するのであった。

小屋の中は陽気である。

一三

「おや、いつたいたいどうしたんだろう？ やけに部落では騒いでるじゃねえか」

権九郎はちよいと耳を傾げた。

「そうさ。馬鹿に賑やかだの。宴会でも開いているのだろうよ」ニヤニヤ笑いながら多四郎は云う。「計画いよいよ図に当たりかね」

「え、何んだって？ 計画だって？ 定期文句を云ってるぜ、お前の計画も久しいもんだからの」

「まあサ権九、そうは云わねえものだ。大きな仕事をしようとするには長い用意がいるからの」

「そいつア俺にも解っているが、さてその計画というやつがな、どうも俺には呑み込めねえ。たかが城下の味噌や米をこの俺らに中継ぎさせて、部落の奴らへ売り込んで高い分錢を儲けるにしてもあぶく儲けというほどでもねえ」

「ごうごう権九、拝むぜ拝むぜ。蚊の涙にも足りねえようなそれっぱかりの儲けを目当に

こんな小屋まで造ると思うか。俺ののぞみはもつと大きい」

「豪勢強気に出やがったな。こいつア大きに話せるわえ。それじゃ頼む聞かせてくんない。お前の計画っていうやつをな」

「うふ、とうとう降参か、智恵のねえ奴は気の毒なものさね。……よしか、話すから聞きねえよ。俺の目差す御敵おんてきは第一が黄金第二が女よ」

「何んだ詰つまらねえそんなことか。何がその他にいい物がある？ とかく浮世は色と金、ちやアんと昔から云つていいるじやねえか」

「だからどうだつて云うのだえ？」

「珍らしくもねえとこう云うのさ」

「お前は玉を見ねえからだ」

「たとえどんなに上玉でももの千両とは売れもしめえ」

「何んだ金が欲しいのか。金なら別口が控えていらあ……女の話はお預けか？」

「いやさ順序で聞きやしよう」権九郎はニタリと苦笑する。

「ほほう滅めつ法ほう穩わんしいの。ところで女は部落者さ」

「そいつア聞くにも当たるめえ」

「しかも杉右衛門の一人娘よ」

「部落の頭の杉右衛門のな？」

「うん」と多四郎は大きく頷く、「年は十九、縹きりよう織よしだ」

「へ、そいつもご同様改めて聞くにも当たりますめえ」

「そこは順序だ。黙って聞きねえよ。よしか。素晴らしい別嬪べっぴんよ。で、私わしに惚れておりやす」

「厭いやな野郎だな。変な声を出して。……ふうん、それからどうしたんだえ」

「江戸へ駈け落ちと評定一決。……」

「へえ、そいつア強気だのう」

「ところがどうも後が悪い」

「……と、来るだろうと思っていた。本文通り邪魔じゃまがはいったな」

「偉えらい！ お手の筋！ ついでに人相を。……」

「見たくもねえ人相だの。まず女難は云うまでもなしか」

「うわア、辻占つじうらが悪いのう。ところでどこまで話したつけ？」

「ええ物覚えの悪い野郎だ。邪魔がはいったところまでよ」

「うん。違えねえ、その邪魔だが、相手もあろうに坊主とけつかる」

「ウワツハハハ、ウワツハハハ」

「おい笑うのは酷ひどかろうぜ、何んとか挨拶あいさつがありそうなものだ」

「でもお前坊主丸儲けよ。お前に勝ち目はねえじゃねえか」

「だから俺おいら悄気しよげてるのさ」

「え、悄気しよげてるって？ その面つらで？」

「引き戻す工夫くふうはあるめえかな？」

「智恵を貸さねえものでもねえが、女の様子はどうなんだえ」

「俺らに逃げを張はっているのだ」

「ふうん、そいつア困こつたのう」

「何んだ！ それで智恵面があるか！ 人に貸そうも凄こじい。……ちやアんと目算めざしは出来てるのよ。そうよここだ、胸三寸」

「それじゃ早く云えばいいに」

「お前をちよつと験ためしたところよ。おい、風呂敷ふろしきを解といてくんな、誂あつらえ物ものを見てえからの」

「合あ点てん」

と云いながら権九郎は城下からここまで背負つて来た包み物を解き出した。

美しい塗り下駄、博多の帯、縮緬の衣裳、綸子の長襦袢、銀の平打ち、珊瑚の前飾り、高価の品物が数々出る。

「男が見てさえ悪かあねえ。若い女に見せようものなら、それこそ飛びついて来るだろう」
「ははあ、それじゃその獲物で、ワナへ落とそうと云うのだな」——権九郎は唇を嘗める。
「坊さんの説教と俺の術とどつちが娘つ子によく利くか、験して見るのも悪かあねえ、何んと権九そうじやねえか」

一四

焚火はどんどん景気よく燃える、小屋の中は暖かい。

畳なら十枚は敷けるであろう、一間しかない小屋の中には、味噌桶、米俵、酒の瓶、塩鮭の切肉、醤油桶、帚、埃取り、油壺、綿だの布だの糸や針やで室一杯に取り乱れてあり、弓だの鉄砲だのヒ首だの、こうした物まで隠されてあるが、すべてこれらは売品であつて、すなわち山上の窩人部落へ高価に売り込む品物であつた。

「さて」

と権九郎は舌なめずりをし、茶碗の酒をグツと干したが、

「女の話はそれで打ち止めか、金の話はどうなんだい？」

「こいつあちよつと話せねえの。計画な半ばと云うところさ」

「へ、云つてるぜ、ちやらつぽこを、その計画が怪しいものさ」

「おやおや変へん艇ていに疑ぐるね。まあ精せい々ぜいかんぐるがいい。今にアツと云わせてやらあ」

「まあそう云わずと聞かせてくん、一人占めは阿漕あこぎでやす」

「へ、またお決まりの芝居もどきか。うん一人占めと云われちや俺も何んだか気持ちが悪い。よしてきたそれじゃ明かしてやろう、まず金高から聞かせようかの」

「千両かな？ 二千両かな？」

「千や二千の端はした金で何んの大騒ぎするものか」

「うわあ、大きく出やがったぞ」

「俺の睨みがはずれなけりや小判で数えて一万両か」

「何、一万？ 正気の沙汰かな？」

「なんと吃驚びっくり仰天かな？」

「そうしてそりやあどこにあるのだ？」

「鼓ヶ洞の絶壁の上に」

「ふうん、それじゃ窩人部落か？」

「天狗の宮の内陣にな。……そこに大きな木像がある。身の長二丈で鎗やりを持っている。：

…宗介天狗の木像よ。……つまり彼奴きやつらの守り本尊だ」

「それがいつたいたいどうしたんだい？」

「木像は甲か冑ちゆうを着ているのよ」

「それは大きに勇ましいことで」

「その甲冑が一万両だ！」

「どうも俺にや解らねえ」

「甲かぶとも冑よろいも黄金細工よ、小判に鑄直いなおせばまず一万だ」

「……が、どうして盗む気だな？ まさか部落も通れめえ」

すると多四郎はひよいと立ったが、そこに置いてある松明たいまつを取ると焚火へくべて火を

移した。

「おお権九、ちよつと来ねえ、胆きもの潰つぶれるものを見せてやろう」

先に立つて小屋を出た。

で、権九郎も続いて出る。

戸外の雪は松明に照らされボツとそこだけ桃色に明るみ凄愴せいそうとして美しい。

多四郎は雪を踏み砕き絶壁の方へ歩いて行ったが、急に立ち止まって振り返った。

「おお権九、ここを見るがいい」

云いながら松明を差し付けた。

冰雪に蔽おほわれた絶壁の面に明瞭はつきりそれとは解らないけれど、どうやら鑿のみでも掘ったらしい一筋の道が付いている。絶壁を斜めに上の方へ向け階段型に付いている。

「ううむ」

と権九郎は唸り出した。この根気強い丹念仕事にすっかり感心したのであった。

「どうだ」と多四郎は氣負った声で、「これでも俺を馬鹿にするか。……これは俺が拵こしらえた道だ。おおかた半年もかかったろう。天狗の宮の真後ろまうしろまでこの崖道がけみちは続いている。

いや随分苦勞したよ。もうここまでやりとげれば後は的物てきものを盗むだけだ」

「一言もねえ、感心した。そうだここまで扱はかが行けば後は的物を盗むだけだ」

「名に負うそいつが重いと来ている」

「一万両の金目だからの」

「ところで俺は蒲柳ほりゆうの質たちだ」

「いや飛んだ銀流しよ」

「そこでお前を見立てたのよ」

「これじゃまるで据え膳だ、出来上がったところできあ一口か」

「厭か」

「何んの」

「では承知か」

「是非片棒かつぎやしよう」

ドツとまたもや山上から賑やかな笑い声が聞こえて来た。

「あれだ、あれだよ、あの笑い声だよ、俺達にとっての福音ふくいんはね」

「はてね、俺には解らねえ」

「何さ、雪のある間だけは部落はいつもお祭りだつてことよ。その隙に仕事をしようつて事よ」

一五

こういうことがあつてからまた幾月かの日が経つた。

一月となり二月となり、暖かい江戸では梅が散り桜の花が咲こうというのに、窩人部落の笹の平は深い雪に包まれていた。

そうして大變平和であつた。

いつも唄声と笑い声とが点々と散らばつて立っている家々の中から聞こえて来た。

彼らは歡樂に耽つているのだ。

しかしそういう平和な部落にも時あつて禍わざわいが起こるものである。

ある日、大声で喚わめきながら雪の部落を駈け廻るものがあつた。それは他でもない岩太郎である。

人々は驚いて彼を引き止めて、どうしたのかと訊わけを聞いた。

「杉右衛門の娘の俺の許いいなすけ婚、あの美しい山吹が、部落を捨て俺を見限り下界の虚栄に憧憬あこがれて多四郎めと駈け落ちした」

これが岩太郎の返辞であつた。

「罰当りめ！」

と、人々は、それを聞くとまず云った。

「この結構な住居を捨て、先祖代々怨み重なる下界の人間と一緒にになるとは神罰を恐れぬ馬鹿な女だ。恐らく将来よい事はあるまい、後悔するに相違ない」

こう云つて彼らは部落を去つた女を、あるいは憎みあるいは憐れんだ。

しかし今は早春であり部落は雪に包まれている。彼らにとつての享樂時代である。で、彼らは平素であつたならもつともつと大騒ぎでもつともつと非難攻撃すべきこの重大の裏切り事件をも案外暢気に見過ごした。そういう他人の事件に関係り大事な時間を費やすより、自分自身快樂に耽り、いわゆる年中での遊び月を充分に遊んで暮らした方が幸福であると思つたからであらう。

とは云え、許婚の岩太郎と山吹の父の杉右衛門とは他人のようにそう簡単に見過ごすことは出来なかつた。

まず岩太郎の心持ちから云えば、嫉妬、憤怒、そして悲哀。——この三つの感情が胸の中で取つ組み合い一時の平和さえ得られないのであつた。

で、せめて身体を疲労らせ、それによつて心の苦痛悲哀を麻痺させようと思ひ付いて、

白皚々たる八ヶ嶽を上へ上へと登って行き、猪を見付けければ猪と闘い熊を見付けければ熊と争い、狐を殺し猿を生け捕りあらゆる冒険をやるのであった。

杉右衛門の心持ちも悲惨であった。彼は部落の長だけに深く責任を感じていた。そうして長となるだけあつて宗介天狗を尊ぶ情と部落を愛する心持ちとは人一倍強かつた。

「部落の長たる自分の娘が宗介天狗のお心持ちに背き下界の若者と契るさえ言語道断の曲事だのに、部落を捨ててどことも知れず姿を隠してしまふとは何んという不心得の女であらう」

しかし、そう思う心の端から、

「身分違いの部落の女が、下界の男と契つたところでやがて捨てられるは知れたことだ、一旦山を下りたからは二度と再び帰つて来ることは出来ぬ。人里にも住めず山にも帰れず、その時いつたいどうするぞ？ 首を縊るかのたれ死にをするか？ どっちにしても可哀そうなものだ」

側隠の情が起こるのであった。

爾来杉右衛門は憂鬱になつた。自分の家の囲炉裡の側からめつたに離れようとはしなかつた。薪を燃やし焰を見詰めじつと思案にふけるばかりで、楽しい酒宴の座へも出ず好

きな狩獵かりさえ止めてしまった。

十年前に妻を死なせ、女氣といえは娘ばかり、その娘に逃げられた今は家には杉右衛門ただ一人。時々同じ愁うれいを抱いた岩太郎が訪ねて来るばかりである。

今日も烈はげしい吹雪ふぶきであった。

どうやら熊でも捕れたらしい。いわゆる恐ろしい「熊吹雪」である。

杉右衛門はじつと考えている。自在じざいかぎ鉤には薬缶やかんが掛かり薬缶の下では火が燃えている。もう夕暮れに近かった。部屋の中はほとんど暗い。しかし行灯あんどんは灯してない。が杉右衛門の姿だけは焚火の光で明瞭はつきり見える。

その時表の戸が開いて若者がノツソリはいつて来た。

「おお岩か」

とそれと見ると、物憂ものうそうに杉右衛門が声をかけた。

「ああそうだよ。俺おいらだよ」

こう云いながら岩太郎は囲炉裡の側へ近寄って来たが杉右衛門に向かい合つて胡座あくらを搔いた。見ると手に白鳥はくちょうを下げている。

「爺とつつあんと一いっぺえや杯飲ろうと思つてな、酒を二升ばかりさげて来たよ」
白鳥をドサリと囲炉裡ばた傍へ置く。

「なに酒か済まねえなア」

それから焚火でかんをして二人はグイグイやり出した。
しばらく二人とも黙っている。

それが二人には胸苦しいのである。

一六

「岩」

と不意に杉右衛門は云つた。

「お前ちつとも酔わねえじゃねえか」

「そういう爺つあんだつて酔つてねえようだな」

「どうしたのか俺はちつとも酔えねえ」

「俺もそうだ、ちつとも酔えねえ」

そこで二人は沈黙した。その沈黙は長かった。そうして息苦しい沈黙である。

戸の隙間から吹き込むと見えて雪が二人の肩へ掛かった。嵐の名残りが迷い込んだものかパツと焚火が横になぐれたが、またすぐスツと立ち直った。

まだ二人は黙っている。

と、突然岩太郎が云った。

「どうも俺には解らねえ！ どう考えても解らねえ！」

「何が！」

と杉右衛門が突つ込んで行く。

「何がっってお前女の心がよ！」

「女と云わずに山吹と云え！」

「おお云うとも！ おお云うとも！ 俺にはどうしても解らねえ。あの山吹の心持ちがよ

！」

「あいつは悪魔に憑つかれたのだ。その他に何かがある！」

「そう云ってしまえばそれまでだが、俺はもつと知りてえのだ、何が山吹を誑たぶらかしたか？」

「そんな事を聞いて何んになる」

「なんにもならねえが聞いてみてえのよ」

「ふん、つまらねえ詮索だ」

そこでまた二人は黙り込んだ。二升の酒が尽きかかった。

「そうだ。あいつがよくなかった」

今度は杉右衛門が呻くように云った。「あの時うんと叱って置いたらこんな騒動にはなるめえものを」

「え？」と岩太郎は聞き咎める。「爺つあん何かあったのかな？」

「あいつがいなくなる少し前よ、珍らしくあの男がやって来た」

「あの男？ 多四郎かな？」

「そうだ行商のあいつがな、そうしてその縁先で色々の物を扱げたつけ。俺が見てさえ眼が眩みそうな綺麗な帯や駒下駄をな。……するとその時まで座敷の奥で素気ない様子で坐っていたあの山吹めが立ち上がって縁先へ行つたというものさ。——俺はその時何かの用で確か家を出た筈だ。帰って来て見ると山吹めが嬉しそうな顔で笑っている。見ると下駄を持つている。多四郎に貰ったということだ。ちよつと小言は云ったものの大して叱りもしなかつたが、今から思えば縮尻だった……と、翌る日は帯を貰う。その翌る日は簪

を貰う。……」

「もう解った。ふうむ、そうか。……それでやっと胸に落ちた。爺つあん！——と岩太郎は声を逸はずませた。

「おいよ」と杉右衛門は眼を見張る。

「俺アいよいよ思い切るよ」

「うん。その方がよさそうだ」

「思い思われた男を捨てて帯や簪へ眼を移すようなそんな女には用はねえ」

「うん。いかにももつともだ。……俺もとうから心の中では親子の縁を切っているのだ」

「白法師様も呆あきれるだろうよ。……こんな始末になろうとは夢にも思っていないさるめえかならな」

「え、何んだって？ 白法師だって？」

「なあにこつちの話だよ」

そこでまたもや黙り込んだ。酒はおつもりになつたらしい、二人は何んとなく手持ち無沙汰にじつと火ばかり見詰めている。

「爺つあん、それじゃ俺は帰るよ」

岩太郎は立ち上がった。

「そうか。それじゃまた来るがいい」

岩太郎は表の戸を開けて吹雪の中へ出て行った。

杉右衛門は炉側ろばたに坐つたまま、いつまで経つても動こうともしない。やがて薪たきぎが尽きたと見えて焚火だんだんが漸次消えて来た。

杉右衛門はそれでも身動きさえしない。

間もなく夜がやって来た。嵐の勢いが強まったと見えてヒューツヒューツと鞭むちを振るような物凄い唸り声が聞こえて来る。

杉右衛門はにわかに立ち上がり、表の方へよろめき行くとガラリと戸を開けて飛び出した。

轟ごうツと、凄じい風音と共に吹雪が眼口をひつ叩く。山の姿も林の影も一物も見えない闇の空間を、小鬼のような亡霊のような雪片ばかりが躍っている。

杉右衛門はグルリともんどりを打つと、雪の上へ転がった。ぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐる彼はあたかも狂きちがい人のように丘と云わず谷と云わず雪の中を転げ廻る。

いかにも窩人かじんの長らしい、こういう惨酷ざんこくの方法をもって、彼は自分の肉体を苦しめ、

娘に対する思慕の情と同じ者に対する憎悪ぞうおの念とを痲痺まひさせようとするのであった。

一七

「ヨイシヨ」「ドッコイ」「ヨイシヨ」「ドッコイ」

こういう掛け声が聞こえて来た。それは二人の声であつて、重い物でも持っているらしい。しかし姿は見えなかつた。と云うのは夜だからで、しかも所は八ヶ嶽の天狗の宮の真後ろの崖で、早春のことであつたから氷雪が厚く積もっている。雪は今し方止んだばかりで、雲間を洩れた月光が斜めに崖を照らしている。

その崖には斜めに高く人工の道が出来ている。半年の月日を費つやして根気よく多四郎が造つたもので、今、その道を上の方から二人の男が下りて来る。

「ヨイシヨ」「ドッコイ」と忍び音に互いに声を掛け合いながらソロリソロリと下りて来る。

それは多四郎と権九郎とで、菰こもに包んだ太短い物をさも重そうに担かついでいる。すつかり崖を下りきつた所で二人はホツと吐息をして、

「もう一息だ、やってしまおうぜ」

「合点」と権九郎が合槌あいつちを打つ。

で、また二人は荷物を担いで、そばに立っている木小屋の前を足音を立てずに通り過ぎ、雪を冠かぶつて聳そびえている森の方へ歩いて行った。

間もなく森へはいったが、大きな杉の根方から犬の啼き声が聞こえて来た。

「これ！ 畜生！」と叱りながら二人はそつちへ近寄つて行く。そこに一台の犬いぬぞり櫃こがあつて人の乗るのを待つていた。

「どっこいしょ」と云いながら、二人は荷物を重そうに櫃の上へズシリと置いたが續いて自分達も飛び乗つた。権九郎が手綱を取り多四郎が荷物の側へ寄る。ピシツと一鞭くれながら権九郎は振り返つた。

「おい多四郎どうしたものだ。せめてお別れの挨拶でもしねえ、振り返つて小屋ぐらい見たがよかろう。……ヒューツ」

と口笛で犬をあやす。すると巨大な三頭の犬はグイと頭を下へ垂れ後脚へ力をウンと入れた。とたんにスルリと前へ出る。パツと立つ雪煙り、静かに櫃すべは沁り出た。

「へ」

と多四郎は鼻で笑つたが、「俺おいらアそんな甘いんじやねえよ。……部落あまの女あまがどうしたつて云うんだい」

「おおお偉そうに云つてるぜ。へ、どうしたが呆れ返らあ。お前一時はあの女で血眼ちまなこになつていたじやねえか」

「うん、そうよ、一時はな。……窩人窩人で城下の奴らが鬼のように恐れているその窩人の娘とあつては、ちよつと好奇心ものずきも起ころうというものだ。それに容貌そつぽだつて相当踏める。変わった味だつてあるだろう。当座なぐさの弄なぐさみにや持つて来いだ。お前だつてそう思うだろう」

「ところで味はよかつたかな」

「俺にとつちや初物だつた。第一体がよかつたよ。色の白さと柔かさとに羽はぶたえ二重はぶたえというより真綿はげだね。それに情愛はげの劇はげしさと来たら、ヒヒヒヒ、何んと云おうかな」

「畜生！」

と権九郎は叫びながらヒューと鞭むちを空に振り一匹の犬を撲なぐりつけたが、「へ、うまくやりやがつたな。人里離れた山奥の木小屋の中で二人つきりだよ、何をしたか知れたものじやねえ、飽きるほどふざけたに違えねえ」

「当たらずといえども遠からずさ」

「それだけの女を振りすてて何んでまたお前は逃げるんだい。こいつが俺にや解らねえ」

「そいつあ今も云った筈だ。たかが窩人の娘じゃねえか。まさか一生添そうことも出来めえ」

「ふん、それじゃ飽きたんだな」

「正直のところまずそこだね」

「それにしては智恵がねえな」権九郎は嘲笑あざわらった。

「智恵がねえ？ この俺がな？」

多四郎はにわかに眼を丸くする。
「捨ててしまうとは勿もつたい体ねえ話だ。瞞だまして城下へ連れて来てよ、女衞ぜげんへ掛けて売ったら

どうだ」

「へん、なんだ、そんな事か、孔明の智恵も凄すさまじいや。そんなことなら迅とくより承知よ」

「ナニ承知？ ……何故しねえ」

「つまり玉なりが異ちがうからさ」

「聞きてえものだ、どう異うね？」

「里の女ならそれもよかろう。思い込んだが最後之助、どんな事でもやり通そうという窩人の娘にや向かねえね」

「ふん、どうして向かねえんだい？」

「そんな気振りでも見せようものなら、こつちが寝首を搔かれるくらいよ」

「へえ、そんなに凄いかい」

「何しろ向こうは夢中だからな」

「こら、畜生！ 道草を食うな」

権九郎は自棄やけに怒鳴りながら横へ逸それる犬を引き締めた。「雪の降ってる冬の夜中だ。

道草食うにも草はあるめえ、トットトットツ。走れ走れ！」

権九郎はむやみと鞭を振る。

一八

雪で蔽おほわれた森や林が蒼い月光に照らされて幽霊のように立っている。橇こまが走るに従ってだんだんそれが近寄つて来る。やがて橇こまが行き過ぎるとそれもだんだん後あとの方へ小さく小さく消えて行く。白無垢しろむくを着た険しい山や巨大おおきな獣の口のようにワングリと開いた谿たに谷になども橇こまが進むに従って次第次第に近寄つて来、橇こまが行き過ぎるに従って後へ後へと飛び去

つて行く。そうして空の朧おぼろづき月は、櫓が進もうが走ろうがそんなことには頓着せず、高い所から茫々ぼうぼうと櫓と人とを照らしている。

櫓の上の人間は——五味多四郎と権九郎とは、少しの間黙っていた。権九郎は手綱を弛ゆるめられるだけ弛め、犬を自由に走らせながら、早く城下へ帰って行き暖かい居酒屋で酒をありながら素晴らしい獲物の分け前を取れるだけ沢山取ってやろうと、こんな事を腹の中で考えていた。それに反して多四郎は、この素的すてきもない黄金を自分一人でせしめたいものだ。魂胆こんたんを巡らしているのであった。多四郎は四方を見廻したがグイと懐中ふところへ手を入れた。

「しかし待てよ」と呟くとそつとその手を抜き出した。「急せいては事を仕損ずる。あぶねえあぶねえ」

と腕を拱くみ、権九郎の様子をじつと窺う。

権九郎は多四郎へ背を向けたまま無心に手綱を操っていた。隙だらけの姿勢である。多四郎は四方を見廻した。戦いには地の利が肝心だ。……こう思ったからでもあろう。この時櫓は山と谿との狭い岨道そばみちを走っている。

いつの間にか空が曇り、一旦止んでいた牡丹雪が風に連れて降って来た。見る見る月影

は薄れて行きやがて全く消えてしまった。

雪明りで仄々ほのほのとわずかに明るい。

この時、多四郎は右の手をまた懐中へ差し込んだが何か確りと握ったらしい。と、じつと眼を据えて権九郎の背中を睨んだものである。

峯道そばみちを曲がると眼の前へ広漠たる氷原が現われた。吹雪は次第に勢いを加え吠えるようにぶつかつて来る。犬が苦しそうに喘ぎ出した。そうして度々逃げようとして繋ぎの紐へ喰い付いた。とそのつど権九郎の鞭がしたたか背中を打つのであつた。

「さあ今だ！ さあ今だ！」

多四郎は自分で自分の胸へこう口の中で云い聞かせながらジリジリと前へ寄つて行つた。その時、岩にでも乗り上げたものか不意に櫓が傾いた。とたんに多四郎は懐中からヌツと腕を引き抜いたが、その手が空へ上がったかと思ふとキラリと何か閃めいた。と権九郎は「あツ」と叫びバラリ手綱を放したが次の瞬間にはゴロリとばかり雪の中へ転げ落ちた。

「多四郎！ わりや、俺を斬つたな」

血に塗れた肩先を片手で確り抑えながら、権九郎は体をもがいたものである。

多四郎は短刀を逆手に握り悠然と櫓から下り立つたが、冷ややかに権九郎を睨み付け、

「どうだ権九、苦しいか」

「仲間を斬つてどうする気だ！ さては手前血迷つたな。あ、苦しい。息が詰まる」

「何んで俺が血迷うものか。ずんとずんと正気の沙汰だ」

「なに正気？ むうそうか。それじゃ汝われアあの獲物を……」

「今やつと気が付いたか。……一人占めにする気だわえ」

「そうはいかねえ！」

と云いながら権九郎はヒヨロヒヨロ立ち上がったが、肩の傷手いたでに堪えかねたものか、そのままドシンと尻餅しりもちをついた。

「そつちがその気ならこつちもこうだ、さあ小僧覚悟しろ！」

これも呑んでいたヒ首あいくちを抜くと、逆手に握つて構えながら、立て膝をして詰め寄つた。

馭者ぎよしゃを失つた犬どもがこの時烈しく吠え出した。三頭ながら空を仰ぎ降りしきる雪に身を顛ひるわせさも悲しそうに吠えるのである。

最初の傷手で権九郎は次第次第に弱つて来た。肩からタラタラしたた滴る血は雪を紅くれないに染めるのであったが夜のこととて黒く見える。立とう立とうと焦心あせつては見たがどうしても足が云うことを聞かない。膝でキリキリ廻りながらわずかに多四郎を防ぐのであった。

「それ行くぞ」

と多四郎は嘲けりながら飛び廻った。彼は余裕綽々たるもので、右から襲い左から飛びかかりグルリと廻つて背後から襲う。鼠ねずみを捕えた猫のように最初に致命的の一撃を加え、弱つて次第に死ぬのを待ち最後に止めとどめを差そうとするのだ。

多四郎は莫迦ばかにお喋舌しゃべりになった。

「おい権九、いやさ権九郎、何んと俺様は智者であろうがな。産まれながら蒲柳ほりゆうの質たちで力業には向き兼ねる。そこでお前を利用してよ、途方もねえ獲物を盗み出したところで、相棒のお前を殺してしまえば濡れ手で粟の掴み取り、一粒だって他へはやらねえ。……そのまた獲物が予想にも増し小判に直して四万両いや五万両は確かにあろう。へ、こう見えても多四郎様は、今日から大したお金持よ、贅ぜい沢たくのし放題。綺麗な女うまに旨い酒うまに不自由はねえというものさ」

一九

「……おお苦しいか苦しいか。さぞ痛かろう痛かろう。肩からドクドク血が出ているなア。

その苦しみもほんの一時、後は往生觀念仏、楽になろうというものだ」

「む、むううう」

と権九郎は口を利くことさえ出来なくなつた。それでもいわゆる最後の一念、全身の力を足にこめ俄然がぜんスツクと立ち上がった。間髪を入れず斬り下ろしたヒ首。油断していた多四郎の腕へ切つ先鋭くはいつたが冬の事で着物が厚く裏搔うらかくことはなかつたものの、多四郎の周章あわてたことは云うまでもない。「あつ」と叫んで後ろ様にパタパタと五、六歩逃げたほどである。

手のヒ首をまず落とす、それから枯木が倒れるように権九郎は雪の上へ仰向けあおもむに仆たおれた。そしてそのまま長くなりもう動こうとはしなかつた。彼は全く息絶えたのである。雪はさんさんと降っている。憐れな権九郎の死骸しがいの上へも雪は用捨なく積もるのである。黒く見えていたその死骸は見ているうちに白くなつた。やがてすっかり見えなくなつた。雪の墓場へ埋められたのだ。

多四郎はヒラリと櫓へ乗つた。

一言も云わず見返りもせず彼は櫓を走らせた。間もなく彼と櫓の影とは吹雪まぎに紛れて見えなくなつた。森然しんと後は静かである。

ウオーとその時森の方から狼おわかみの声が聞こえて来た。それに答えてどこからともなくウオーウオーと狼の声が二声三声聞こえて来た。と、純白の雪の高原へ一点二点、三、四点、黒い形が浮かび出たがだんだんこつちへ近寄つて来る。すなわち数匹の狼である。

四方に散つていた狼がさつと集まつて一団となるや、その一団の狼は鼻面を低く地へ垂れて人間の血を恋うようにこつちへノシノシと走つて来たが、死骸の埋まっている場所まで来るとグルグルグルグル廻り出した。廻りながらパツパツと雪を搔く。搔かれた雪は嵐あらしあおに煽もつられ濛々もうもうと空へ立ち昇る。その下から現われたのは無慙むざんな権九郎の死骸である。颯さつと狼は飛びかかった。

死骸は狼に喰い裂かれ、後へ残つたのは檻ぼろ褌ばかりであった。しかしそれさえ雪に蔽われ瞬またたくま間に消えて行つた。

小屋の中は暖かった。焚火たきびが元氣よく燃えている。

山吹はじつと坐っていた。

その眼は焚火を見詰めていたが心は別のことを考えていた。良人おっとの帰りを待っているのだ。多四郎の帰るのを待っているのだ。

多四郎は容易に帰つて来ない。——帰らないのが当然あたりまえである。彼は彼女を振りすて城下へ帰つて行つたのだから。

しかし彼女はそんなこととは夢にも考えはしなかつた。で、熱心に待つていた。

戸外そとでは吹雪が荒れていると見えて、枝の折れる荒々しい音が風音まじに雑まじつて聞こえて来た。

不意に彼女は顔を上げ窓の方へ眼をやつた。

コトンコトンと音がする。

彼女は物憂ものうそうに立ち上がり窓の戸を引き開けた。口の尖つた、眼の優しい熊の顔が現われた。窓から覗いているのである。

山吹は寂しそうに笑つたが、

「おおお今日も大雪で山には食物くいものがないと見える」

こう云いながら鍋を取り上げ食べ残りの雑炊ぞうすいを投げてやつた。と、熊の顔はすぐ引つ込みやがて雑炊を食べるらしい舌打ちの音が聞こえて来た。それが止むと同じ顔がまた窓へ現われた。

「もうないよ。あつちへお行き」

こう云いながら手を振ると、熊は二、三度領うなずいたが、スツと窓から消えてしまった。そこで山吹は窓を閉じ元の場所へ帰って来た。じつと焚火を見詰めながら、また物思いにふけるのである。

夜は次第に更けて行つた。

彼女はいつまでも待つていた。身動きさえしないのである。

その時足音が聞こえて来た。しかし人の足音ではない。シトシトシトシトと小屋の周囲まわりをその足音は廻り出した。しかも多勢の足音である。それはどうやら犬らしい。甘えるような泣き声がクーン、クーンと聞こえて来た。

「おや来たんだよ、お爺さん達が」

呟きながら山吹はまただるそうに立ち上がると入口の戸を開けてやった。その戸口からはいって来たのは五匹の凄じい狼であった。全身、雪で白かったが鼻面ばかりは赤かった。生血なまぢに塗まみれているのである。

権九郎の死骸を食い荒らしたその五匹の狼達であった。

しかも一匹の狼は肉の着いた骨をくわえていた。それは権九郎の骨なのである。しかしもちろん山吹はそんなことは夢にも知らない。で、彼女はこう云つた。

「おおお、お前達も寒かろう。さあさあ遠慮なく火にあたるがいいよ」

二〇

五匹の狼は尾を振りながら彼女の体へじやれついた。すぐに突き飛ばされ意気地なくよろめいたが、一緒に小屋の片隅へ集まりそこへ穏しくおとな跪座つくばした。そうしてそこから焚火越しに山吹の顔を見守った。一人の女と五匹の狼。——それが一つの部屋にいる。……何んと恐ろしいことではないか。ところがちつとも恐ろしくない。それは山吹が窩人かじんだからで、窩人と獣とは親類なのである。

熊も狼も狐狸も山吹にとつては友達であった。窩人部落にいた頃から彼女と獣達とは仲がよかつたが、この木小屋へ来てからは一層両者は仲良くなり、多四郎の留守を窺うかがつては彼らは遊びに来るのであつた。

その夜一晩待つたけれど多四郎は帰つて来なかつた。

翌る朝、彼女は小屋を出てそれとなくあつちこつち探してみたが恋しい良人おっとの姿は見えない。声を上げて呼んでも見たが答えるものは嵐ばかりだ。やがて夜がやって来た。夜中

彼女は待つてみたがやはり帰つて来なかつた。また味気ない夜が明ける。朝の日光が射して来た。で、彼女は小屋を出て雪の高原を彷徨いながら狂人のように探してみたが結果は昨日と同じであつた。で、また寂しい夜となる。……

夜が日に次ぎ日が夜につづき、恐怖、不安、疑惑、憤怒、嫉妬の月日が経つて行つた。

春がおとずれ初夏が来た。山の雪はおおかた消え鬱々たる緑が峰に谷に陽に輝きながら萌えるようになった。辛夷、卯の花が木の間に見え山桜の花が咲くようになった。鶯の声、駒鳥の声が藪の中から聞こえて来る。

山吹はこの頃懐妊つていた。多四郎の種を宿していたのだ。

彼女はようやくこの頃になつて、自分が多四郎に捨てられたことをはつきり心に悟るようになった。

「復讐！」——と彼女は心に誓つた。あたかも執着そのもののような窩人の娘の復讐がいかにか物凄いかということ薄情な男に思い知らせてやろう！　こう決心したのであつた。

「でも子供には罪はない、何も彼も子供が産まれてからだ」
で、彼女は小屋の中で産み落とす日を待つていた。

やがて真夏がおとずれて来た。

笹の平の窩人達は祭りの用意に忙しかった。

宗介むねすけてんぐ天狗まつりの祭礼なのである。

これは毎年の慣例しきたりで七月十五日の早朝あさまだきにご神体の幕屋まくやがひらかれるのである。そうして黄金の甲かっちゆう青せいで体を鎧よろつた宗介様を一同謹んで拝するのであった。

窩人達は元気よく各自めいめいの仕事にいそしんでいた。旗を作る者、幟のぼりを修繕なほす者、提ちようち灯どんを張る者、幕こしらを捲まえる者——笑い声、話し声、唄う声が部落中から聞こえていた。

やがて祭りの当日が来た。

天狗の宮の境内は旗や幟で飾られた。盛装を凝らした窩人達は夜のうちから詰めかけて来て、暁あけの明星の消えた頃には境内は人で埋ずもれた。その時一群の行列しゆくしゆくが肅々々と境内へ練り込んで来た。神事を執とり行おこなう人達で、先頭には杉右衛門が立っている。跣足はだし、乱髪、白の行衣ぎようえ、手に三方さんぼうを捧げている。後につづいたは副頭領で岩太郎の父の桐五郎であった。手に松明たいまつを持っている。

騒がしかつた境内が一時に森然しんと静かになった。群集は左右に身を開いてその行列を迎

え入れた。行列は肅々と歩いて行く。神殿の前で立ち止まる。ギーと神殿の戸が開く。と、杉右衛門と桐五郎とがシズシズと階段きざはしを上って行く。

桐五郎の持つている松明が、内陣の奥でチラチラと火花を散らして燃えているのが神秘めいて厳かである。

ギーとまたも軋きしり音ねがした。

群集はにわかに緊張した。神聖の幕屋がひらかれたからだ。群集の眼は一斉に内陣の奥へ注がれた。突いきなり然叫び声が響いて来た。内陣の奥から響いたのである。ザワザワと群集はざわめき出した。

その群集の眼前へ杉右衛門と桐五郎とが飛び出して来た。

「恐ろしい事じゃ！ 勿もったい体ない事じゃ！」

杉右衛門が、嗟しやがれこえ声こえで叫んだものである。

「宗介天狗は裸身はだかみでござる！」

桐五郎が続いて叫んだ。二人ながらガタガタ顫ふるえている。そしてその顔は蒼白まっさおである。群集は一刹いっせつ那静なかであった。思いもよらない出来事のために物を云うことさえ出来なかつたのだ。

が、次の瞬間には恐ろしい混乱が勃発した。彼らは口々に叫び出した。

一一一

ある者はこれを神罰だと云った。

「我らの不忠実を怒らせられ神が奇蹟を下されたのだ」

またある者はこうも叫んだ。「泥棒が盗んだに相違ない。黄金で作られた鎧冑には莫大な値打ちがあるからな。——城下の泥棒が盗んだのだ」

またある者は次のように云った。

「白法師の所業に相違ない。我々の部落、我々の信仰を日頃から彼奴は譏っていた。我々の神聖な神を穢し、我々の霊場を踏み躪つた者は彼奴以外にある筈がない！」

「そうだそうだ」

と群集は挙つてこの言葉に雷同した。

「白法師をひとつとらえろ！」——「草を分けても探し出せ！」——「白法師を狩れ白法師を狩れ！」

群集は興奮して境内を出た。祭りは一変して白法師狩りとなった。

この日の真昼頃白法師は大岩の上に坐っていた。白衣、長髪、裸の足——昔に変わらぬ優しい微笑。

彼の前には岩太郎がいた。彼は仲間の隙を窺い、危急を白法師へ告げに来たのだ。

「悪いことは申しませぬ。早くお逃げ遊ばすよう。白法師狩りの子どもが間もなくやって参りましょう。どうぞどうぞ、一時も早く山をお立ち去り遊ばすよう」

云っているうちも氣遣わしそうに岩太郎は四辺を見廻した。

「いや」

と白法師は静かに云った。「私^{わし}は何者をも恐れぬ。私は決して逃げはしない」

「危険でございます白法師様！」

「いや」とまたもしずかに云った。「いや私には危険はない。私には深い自信がある。：

…これまでも彼らは幾度となくこの私を捉えようとした。しかしいつも失敗であった」

「はいさようでございます。仰^{おほ}せの通りでございます。しかし今度は、今度ばかりは安閑

としてはおられませぬ」

「それも私には解つておる。彼らは彼らの守り本尊を私に穢されたと思つてゐるらしい。がそれは間違つてゐる。……黄金の甲冑かっちゆうを盗んだものは私ではなくて他にある」

「おつしやるまでもござりませぬ」

岩太郎は頭を下げた。「尊い尊いあなた様がなんでさようなことをなされましょう。とは云え部落の者達は甲冑を盗んだはあなた様だと思ひ詰めておるのでござります。草を分け枝を切つても今度こそは逃がしはせぬと、部落の男女子供まで一人残らず馳せ集まり、人数おおよそ五百人余り山を囲んでさつきから探しておるのでござります」

「なるほど」

と法師は眼をとじてしばらくじつと考えていたが、「断じて私わしは逃げはせぬ。——しかし山は去ることにしよう」

「それが安全でござります。何より安全でござります」

「いや、私には危険はない。このままこの山におるとしても、私には神の恩おんちよう 寵ちゆうがある。窩人達にも捕われもしまい。一度私ひとたびが手を上げたなら忽こつぜん然と山火事が起こるのであろう。もしまた足を上げたなら雪崩なだれが落ちて来よう。……以前まえかた私は山火事を起こし彼らの集あ会つまりを妨げたことがある。もつとも真実まことの山火事ではない。ただそう思わせたばかりであ

つていわば幻覚まぼろしに過ぎなかつたが彼らは恐れて逃げてしまった。……私は彼らを恐れてはいない。私の恐れるのは自分自身だ。……私はこの山へ一年前に来た。最初は数十人の信者があつた。しかし今はただ一人——ただ一人お前が残つたばかりだ。なんとはかない私の力であろう！ 人を説くにはまだ早い、人を教えるのは僭越せんえつである。それで山を去ろうというのだ。去つてそうして尚一層自分自身を磨みがこうというのだ」

この時ドツと鬨とぎの聲が眼の下の林から湧き起こつた。得物を引つさげた窩人の群が雪を蹴立てて駈かけ上つて来る。

しまった！ と岩太郎は心で叫び、

「もう遅いかも知れませぬが、いそいでお隠れなさいまし！ 一刻も早く、白法師様！」
しかし岩太郎がこう云つた時にはもうそこにはいなかった。と見ると遙かの山の峰に何やら動くものがある。そうしてそこから風に伝わつてこういう声が聞こえて来た。

「おさらばじゃ岩太郎！ またお前達とも逢うだろう。それまではおさらばじゃ」

「ああ、あれが白法師様だ」

岩太郎は眩つふやいて岩の上から幾度も頭を下げたものである。

宗介天狗のご神体が無慙むざんに傷つけられ穢けがされたことは、笹の平の窩人達にとつては正に青天の霹靂へきれきであり形容も出来ない恐怖であつた。白法師さえ取り逃がしたので、彼らはすっかり絶望した。絶望に次いで混乱が来た。平和であつた窩人部落は一朝にして土崩瓦壊どほうがした。

十人二十人組を組んで笹の平を去る者が出来た。「黄金の甲冑を取り戻すまでは俺達はここへは帰つて来まい」——「黄金の甲冑を探しに行こう。日本の国の隅々すみずみくまぐま隈々を、幾年かかろうと関かまわない。探して探して探して廻ろう」

こう云つて彼らは出て行くのであつた。

一月二月と経つうちに笹の平の窩人の数はわずか二百人となつてしまつた。こうして秋が去り冬が来た頃には、笹の平は無入境となつた。最後に残つた二百人を杉右衛門自ら引ひきつて放浪の旅へ登つたからである。

天狗の宮には祀まつる者がなく窩人の住家すみかには住む者がなく、従いままで来賑やかであつただけにこうなつた今はかえつて寂しく蕭殺しょうさつの気さえ漂うのであつた。

ある日、一匹の野狐が恐らく獵師にでも追われたのであろう、天狗の宮の拜殿へ一目散に駈け込んで来たが、幾日経つても出て行かなかつた。そこを住家としたのである。次第に眷属が集まつて来て、莊嚴を極めた天狗の宮は、獸の糞や足跡で見る蔭もなく汚されてしまい、窩人達の家々には狸や貉が群をなして住み子を産んだり育てたりした。

こうして再び春となった。

野生えの梅が花を点じ小鳥が楽しそうに鳴くようになった。

この時、崖下の小屋の中で逞しい赤児の泣き声が出た。山吹が子供を産み落としたのである。産まれた子供は男であつた。で、猪太郎と名付けられた。産婦の山吹は小屋の中で藁に埋まつて横になつていた。介抱する者は誰もいない。ただ一匹の小さい猿がキョトンとしたような顔をして寝かせてある赤児の枕もとに行儀よくチョココンと坐つて居るのがせめてもの山吹の心やりであつた。

宇宙のあらゆる動物のうち人間と名付くる生物が一番順応性を持つて居る。

こんなに苦しい境遇にあつても山吹は不思議に肥立つて行つた。わずかに残つて居る米と味噌、大事にかけて貯えておいた去年の秋のいろいろの果実、食物と云えばこれだけであつたが乳も出れば立つて歩くことも出来た。赤児も元氣よく育つて行つた。

こうして幾月か月が経ちまた幾年か年が経った。

五年の歳月が飛び去ったのである。

五年に渡る辛^{しんろう}勞^{らう}が山吹の体を蝕^{むしば}んだと見えとうとう山吹は病氣になった。五歳になつた猪太郎が必死となつて看病はしたが、定^{じょう}命^{みやう}と見えて日一日と彼女の体は衰えて行き死が目前に迫るように見えた。

ある日彼女は猪太郎を枕もとへ呼び寄せた。そうして彼女は云つたのである。

「……妾^{わたし}の云うことをよくお聞き。お前のお父様は城下の人で五味多四郎というのだよ。……妾はその人に欺^{だま}されたのだよ。——じきに妾は死ぬだろう。ああこの怨^{うら}みこの呪^{のろ}詛^いを返すことも出来ずに死ぬのだよ。妾は死んでも死にきれない！ 猪太郎や妾にはお願いがある。お母さんに代つて憎い多四郎へ、お前から怨^{うら}みを返しておくれ！ それは何よりの孝行だよ！ ……おいでおいで猪太郎や妾の側^{そば}へ来るがいいよ。腕をお出し右の腕をね。口の側へ持つておいで。さあお母さんの口の側へね」

山吹は猪太郎の右の腕へ確^{しっか}り喰^くい付いて齒形を付けた。「その齒形は永久消えまい。お母さんの形見だよ。その齒形を見る度にお母さんの怨^{うら}みを思い出しておくれ。そうして憎い多四郎へお母さんの怨^{うら}みを返しておくれ」

こう云つてしまふと山吹はいかにも安心したようにさも平和やすらひに眼をとじた。そうしてそれから二日ばかり活きたが三日目の朝には息絶えていた。

五歳の猪太郎はその日以来全く孤みなしご児の身の上となつた。しかし彼は寂しくはなかつた。猿や狼や鹿や熊が彼を慰めてくれるからである。

こうして彼の生活は文字通り野生的のものとなり、食物くいものと云えば小鳥や果実このみ、飲料のみものと云えば谷川の水、そうして冬季餌のない時は寂しい村の人家を襲い、鶏や穀物や野菜などを巧みに盗んで来たりした。

こうしてまたも五年の月日が倏しゅつこつ忽として飛び去つた。そうして猪太郎は十歳とおとなつたがその体の大きさは十八、九歳の少年よりもっと大きくもあり逞たくましくもあり、その行動の敏活とその腕力の強さとは真に眼覚めざましいものであつた。且つ彼の頭脳あたまのよさ！これも正しく驚くべきもので、まことに彼は窩人の血と城下の人間の血とを継ぎ、荒々しい自然界に育てられたところの不思議な生物いきものと云うべきであつたが、この猪太郎こそこの物語すなわち「八ヶ嶽の魔神」というこの物語の主人公なのである。

いでや作者わたしは次回においては、この猪太郎の身の上について描写の筆を進めると共に、全然別種の方面に当たつて別様の事件を湧き起こさせ、波瀾はらん重畳じやうじやう幾變いくへん變てん、わが親愛

なる読者をして手に汗を握らしめようと思う。

これまで書き綴った物語はほんの全体の序曲に過ぎぬ。次回から本題へ入るのである。

高遠城下の巻

一

「先生、いかがでございましょう？ すこしはよろしいのでございましょうか？」

「さよう、よいかも知れませんな」

「よろしくないのをごいませうか？」

「さよう、よくないかも知れませんな」

「では、どちらなのでございませうか？」

「さよう」

と云ったまま返辞をしない。

奥方お石殿は不安そうにじつとその様子を見守っている。それからまたも聞くのであつ

た。

「先生、いかがでございましょう？ すこしはよろしいのでございましょうか？」

「さよう、よろしいかもしれません」

「よろしくないのをございましょうか」

「奥！」

と良人おっと弓之進は見兼ねて横から口を出した。

「先生には先生のお考えがある。そういつまでもお尋ねするはかえって失礼にあたるではないか」

「はい。失礼致しました」お石はそつと涙を拭きつつましく後あとへ膝のを退けた。

部屋の中がひとしきり寂然しんとなる。

「ちよつとお耳を……」

と云いながら蘭医らんい北山ほくざんが立つたので続いて弓之進も立ち上がった。二人は隣室へはいって行く。

「あまり奥方がご愁しゆうたん嘆たんゆえ申し上げ兼ねておりましたが、とても病人は癒なおりませんな」

「ははあ、さようでございますかな。定じようみよう命めいなれば止むを得ぬこと」

「蘭学の方ではこの病気を急性肺炎と申します。今夜があぶのうございませすぞ」

「今夜？」とさすがに弓之進も胆きもを冷やさざるを得なかった。

「いずれ後刻、再度来診」

こう云つて北山の帰つた後は火の消えたように寂しくなった。

二人の中の一粒種、十一歳の可愛い盛り、葉之助は大熱に浮かされながら昏々こんこんとして眠っている。

「もし、ほんとに死にましようか？」お石はほとんど半狂乱である。

「天野北山は蘭医の大家、診察みため投葉神のような人物、死ぬと云つたら死ぬであろう」弓之進も愁然と云う。

二人は愛児の枕もとからちよつとの間も離れようとはしない。

「それでもあなた、この葉之助は、授り児ではございませぬか」お石は咽むせびながらまた云い出す。「ご一緒になつてから二十年、一人も子供が出来ないとところから、荒神様あらがみさまではあるけれど、諏訪八ヶ嶽の宗介天狗様へ、申し児をせいと人に勧められ、祈願をかけたその月から不思議に妊娠みこもつて産み落としたのが、この葉之助ではございませぬか。授り児でございませぬ。その授り児が十や十一でどうして死ぬのでございませぬか。いえいえ死に

は致しませぬ、いえいえ死には致しませぬ」

お石は畳へ突つ伏した。

すると不意に葉之助がムツクリ床の上へ起き上がった。

「代りが来るのだ、代りが来るのだ！ 次に来る者はさらに偉い！」

叫んだかと思うとバツタリたお仆れそのまま呼吸いきを引き取ってしまった。

こうしてが六月むつきが過ぎて行つた。

「あなた、元気をお出し遊ばせ」

「奥、お前こそ元気をお出し」

などと夫婦で慰め合うようになった。

「江戸から大歌舞伎が来たそうだ。どうだなお前み観に行つては」

「はい、有難う存じます。それより秋になりましたゆえお好きの山遊びにおいで遊ばせ」

「うん、山遊びか、行つてもよいな」

「明日にもお出掛け遊ばすよう」

「北山殿もお好きであった。ひとつ誘つて見ようかな」

「それがよろしゅうございます」

そこで使いを立ててみると喜んで同行ゆくという返辞であった。

その翌日は秋日和あきびより、天高く柿赤く、枯草に虫飛ぶ上天気であった。

まだ日の出ないそのうちから三人の弟子を引き連れて天野北山はやって来た。

「鏡氏、お早うござる」

「北山先生、お早いことで」

双方機嫌よく挨拶する。

若党使僕こもの五人を連れ他に犬を一頭曳き、瓢ひぎには酒、割籠わりごには食物、そして水筒には清水を入れ、弓之進は出で立った。

奥様は玄関へ手をつかえ、

「ごゆつくり」と云つて頭つむりを下げる。

「奥、それでは行つてくるぞ」

で、一行は門を出た。

間もなく野良路へ差しかかる。ザクザクと立った霜柱、それを踏んで進んで行く。

二

的場、野笹、長藤村、それから目差す鉢伏山だ。

鉢伏山の中腹で一同割籠をひらくことになった。見渡す限りの満山の錦、嵐が一度ひとたびさつ颯と渡るや、それが一度に起き上がり億万の小判でも振るうかのように閃々せんせんさんさんと揺れ立つ様はなんとも云われない風情ふせいである。

「よろしゅうござるな」

「いや絶景」

と、弓之進も北山も満足しながら瓢の酒を汲み合った。

その時突然供の者どもが一度にワツと立ち上がった。

「熊！ 熊！」と騒ぎ立つ。

「何、熊？」と弓之進は、若党の指差す方角を見ると横手の谷の底に当たって真つ黒の物が蠢うごめいている。いかさま熊に相違ない。あつと見るまに大熊はこつちを目掛けて駈け上がつて来る。

「金吾、弓を！」と弓之進は若党を呼んで弓を取った。名に負う鏡弓之進は、高遠たかとおの城

主三万三千石内藤駿河守するがのかみの家老の一人、弓は雪河流せつかりゅうの印可いんかであるが、小中黒こなかくろの矢をガツチリとつがえキリキリキリと引き絞つたとたん、

「待つた待つた射つちやいけねえ！」

鋭い声が聞こえて来た。

何者とばかり放す手を止め声のした方をきつと見ると、ひと群茂むらつた林の中から裸体はだかの壮漢が飛び出して来た。信濃しなのの秋は寒いというに腰に毛皮を纏まとつたばかり、陽焼けて赤い筋肉を秋天の下に露出させ自然に延ばしたおどろの髪を房々と長く肩に垂れ、右手めでに握つたは山刀、年はおよそ十七、八、足には革草鞋かわわらじを穿いている。

「射やつちやアいけねえ射つちやいけねえ！　ここで射やられてたまるものか。せつかく俺おいらが骨を折つて八ヶ嶽から追い出して来た熊だ。他人ひとに取られてたまるものか……さあ野郎観念しろ！　いいかげん手数をかけやがって！　猪太郎様の眼を眩くらませうまうま他領へ逃げようとしたつてそうは問屋でおろさねえ！」

のし
「罵り罵り熊を追い、追すがい絶すつたと思つたとたんパツと背中へ飛び乗つた。

「オーツ」と熊も一生懸命、後脚で立つて振り落とそうとする。

「どっこいどっこいそうはいかねえ！　これでも喰らつて斃くたばりやあがれ！」

キラリ山刀が閃いたかと思うと月の輪の辺から真つ赤な血が滝のように迸った。

「オーツ」と熊はまた吠えたがこれぞ断末魔の叫びであったかドタリと横へ転がった。

「どうだ熊公驚いたか。一度俺に睨まれたが最後トドの詰まりはこうならなけりやならねえ。アツハハハ、いい気持ちだ。どれ皮でも剥ごうかい」

熊の死骸を仰向けに蹴り返しその前へむずと膝を突くとブツツリ月の輪へ山刀を刺した。と、その時、どうしたものか俄然空を仰いだが、

「お母様！」

と一声叫ぶとそのままグツタリ仆れてしまった。

余り見事な格闘振りに弓之進や北山を初めとし弟子若党使僕までただ茫然と眺めていたがこの時バラバラと駈け寄った。

「北山殿、脈を早く！」

「心得たり」と北山は若者の手首をぐいと握ったが、

「大丈夫、脈はござる」

「それで安心。よい塩梅じゃ」

「あまりに精神を感動させその結果気絶をしたのでござるよ」

「手当の必要はござらぬかな？」

「このままでよろしい大丈夫でござる。や！ なんだ！ この痣は！」

云いながら北山は若者の手をグイと前へ引き寄せた。いかさま右の二の腕に上下判然り二十枚の歯形が惨酷しく付いている。

「人間の歯ではござらぬかな？」

「さよう、人間の歯でござる」

この時、気絶から甦つたと見え、若者はにわかに関き出した。まず真つ先に眼をあけて四方を不思議そうに見廻したが、

「ああ恐ろしい夢を見た」

こう云うとムツクリ起き上がった。それから弓之進をじっと見た。その逞しい顔の面へ歡喜の情があらわれたと思うと突然若者は両手を延ばし、

「お父様！」

と呼んだものである。それからまたも氣を失い、熊の死骸へ倚りかかった。

この時、忽然弓之進は、以前死んだ葉之助が、「代りが来るのだ！ 代りが来るのだ！ 次に来る者はさらに偉い！」と末期に臨んで叫んだことを偶然も思い出した。

「うむ、そうか！ こいつだな！」

……ポンと膝を叩いたものである。

翌年の秋、鏡家へ飯田の城下から養子が来た。

堀石いわみのかみ見守

の剣道指南南条右近の三男で

同どうみょう苗

右三郎うさぶろうというのであつたが、

入ると家憲に従い葉之助と名を改めた。

三

「鏡家の養子葉之助殿は十二歳だということであるが一見十八、九に見えますな」

家中の若侍達寄るとさわると葉之助の噂をするのであつた。

「ノツソリとしてズングリとしてまるで独活うどの大木だ」

などと悪口する者もある。

「ノツソリの方は当たっているがズングリの方はちと相応そぐわぬ。どうしてなかなか美少年だ」

なあんて中には褒めるものもある。

「ところでどうだろう剣道の方は？」

「無論駄目駄目。大手下とも」

「いやいやまんざらそうでもあるまい。飯田の南条右近というのは小野派一刀流では使い手だそうだ。その方の三男とあつて見れば見下すことは出来ないではないか」

「論より証拠立ち合つたら解る」

「いやいや相手はご家老のご養子、無下に道場へ引つ張つて行つて打ち据えることもなりがたい」

「武芸には身分の高下はない」

「しかし相手はまだ子供だ、十二歳だというではないか。我々は立派な壮年でござる」

「と云つてあの仁とて十八、九には、充分見えるではござらぬか」 「たとえ幾歳に見えようとはやはり年でござる」 「よろしいそれでは注意して柔かくあしらつてやりましょう」

「さようさ、それならよろしかろう」

ある日、これらの若侍どもが、立川町に立っている中、ちゆうじょうりゆう 条流の道場でポンポンけいこ 稽古をやっていた。主人の松崎清左衛門はきわめて温厚の人物であつたがちようど所用で留守

のところから、代稽古の石渡三蔵が上段の間に控えていた。

通りかかったのが葉之助で、若党の倉平を供に連れ、ふと武者窓の前まで来ると小気味のよい竹刀しなひの音がする。

「ちよつと待て倉平」

と声をかけて置いてひよいと窓から覗いていた。

早くも見付けた若侍ども、「おや」と一人が囁ささやくと、「うん」と一人がすぐに応じる。バラバラと二、三人飛び出して来た。

「これはこれは葉之助殿、ここでは充分に見えませんが、内なかにはいつてご覧ください」

「さあさあ内へ、さあさあ内へ」

まるで車掌が電車の中へ客を追い込もうとするかのようにむやみに内へを連発する。

「これはどうもとんだ失礼、覗きましたは私の誤りあやま、なにとぞご勘弁くださいますよう」
葉之助はテレテ謝った。

「いやいやそんな事は何んでもござらぬ。ポンポン竹刀の音がすればつい覗きたくもなりますからな。外からでは充分見えません。内へはいつてゆっくりと」

「それにこれまで駈け違いしみじみ御意ごいを得ませんでした。今日はめつたに逃がすことで

はない」

「おい近藤何を云うんだ」白井というのが注意する。

「何はともあれおはいりくだされ」

「倉平、どうしたものだろうな？」

「若旦那、お帰りなさいませ」事態けんのん剣呑けんと思ったので主人を連れて帰ろうとする。

そこへまたもや二、三人若侍どもが現われた。

「葉之助殿ではござらぬか。これはこれは珍客珍客！ 近藤、白井、何をしている。早く

葉之助殿をご案内せい」

「何んとでござる葉之助殿、おはいりくだされおはいりくだされ」

「せつかくのお勧め拝見しましょう」

「しめた！」「おい！」「ハハハ」

そこで葉之助はノツソリと道場の内へはいつて行く。

「おい、はいつて行くぜはいつて行くぜ」

「可哀そうに殴られるともしらず」「知らぬが仏という奴だな」「それにしても大きいな

あ」「十二とは思われない」「十九、二十、二十一、二には見える」「随分力もありそう

だぞ」「あの力でみっちり殴られたら」「そりや随分に痛かろうさ」

そろそろ怖氣おそげを揮ふるう奴もある。

葉之助の姿がノツソリと道場の中へ現われると、集まっていた門弟どもまたひとしきり噂をした。よせばよいのに気の毒な——こう思う者も多かったが大勢たいせいいかんともしがたいので苦い顔をして控えている。

「こちらへこちらへ」と云いながら、白井というのが案内した席は皮肉千万にも正座しょうざであつた。すなわち稽古台の横手である。

「これはご師範でござりますか」葉之助は初々ういういしく恭うやうやしく石渡三蔵へ一礼し、「私、鏡葉之助、お見知り置かれくだされますよう。また本日はお稽古中お邪魔じやまにあがりましたでござります」

「おお鏡のご養子でござるか」

煙草たばこの煙りを口からフワリ……これが三蔵の挨拶あいさつである。さすが代稽古をするだけに腕前すくは勝れてはいたものの、その腕前を鼻にかけ、且かつ旋毛つむじの曲がつた男、こんな挨拶もするのであつた。

あちこちでクスクス笑う声がする。

四

しかし葉之助は気にも掛けず端然と坐つて膝に手を置いた。それからジロリと構内を見る。どうして沈着おちついたものである。

葉之助が現われるとほとんど同時にバタバタと稽古は止めになつたので、構内には竹刀の音もない。変に間の抜けた様子であつたが、つと進み出たのは近藤司氣太しきた、

「鏡氏、一本お稽古を」

「いや」と葉之助は言下に云つた。「二、三本どうぞお見せくだされ」

「へへえ、さようで」

と近藤司氣太妙な顔をして引つ込んだが、これは正に当然である。ご覧なされと引つ張り込んで置いて誰も一本も使わないうちにさあ立ち合えと云うのであるからポンと蹴るのは理の当然だ。

「偉いぞさすがは鏡家の養子」葉之助鬣びいきの連中はさもこそとばかり溜りゆう飲いんを下げた。「ふん、チヨビスケの近藤め、出鼻から赤恥をかかされおつて」

しかし一方若侍どもは悠々^{せま}逼らざる葉之助の態度を面憎^{つらく}いものに思い出した。

「誰か出て二、三本使つたらどうだ」

「しからば拙者」 「しからば某^{それがし}」

五組あまりバラバラと出た。

「お面」 「お胴」 「参つた」 「まだまだ」

ポンポンポン打ち合つたが颯^{さつ}とばかりに引き退いた。

「おい近藤、行つてみるがいい」

「あいよあいよ」と厭^{いや}な奴またノコノコ出かけて行き、「鏡氏、一本お稽古を」

「アツハハハハ」と大きな声で突然葉之助は笑い出した。

近藤司氣太驚くまいことか！ 眼ばかりパチクリ剥^むいたものである。

「剣術のお稽古とは見えませぬな。まるで十二月^{ごくげつ}の煤^{すす}掃^{はら}いのように、アツハハハ」とまた笑つたが、

「真剣のお稽古拝見したいもので」

「へへえ、さようで」と器量の悪い話、近藤司氣太引き退つたが、「いけねえいけねえ拙者は止めだ。どうも俺には苦手と見える」

「生意氣なまいきしく至極、その儀なれば」と、若侍ども本気で怒り十組ばかりズカズカと進み出たが、
 烈はげしい稽古が行われた。それが済むと白井誠三郎ツカツカ葉之助の前へ行き、

「あいや鏡氏、葉之助殿、ご迷惑でござりましようが、承うけたまわりますれば貴殿には小野派一
 刀流、ご鍛錬とか。一同の希望のぞみにもござりますれば一手ご教授にあずかりたく、いかがの
 ものにてござりましようや」

「本来私はこの場にはお稽古拝見に上がりましたもの、仕合の儀は幾重にも辞退致さねば
 なりませぬが剣道は私も好むところ、且つは再三のお勧めもあり……」

「それではお立ち合いくださるか？」

「未熟の腕ではござりまするが……」

「それは千万かたじ忝けない」

してやったりとニタリと笑い、「して打ち物は？」

「短い竹刀を……」

「しからばご随意にお選びくだされ」

ワツと一同これを聞くと思わず声を上げたほどである。

つと立ち上がった葉之助はわずか一尺二寸ばかりの短い竹刀を手に握ると仕度したくもせず進

み出た。

「あいや鏡氏、お仕度なされ」

見兼ねたものかこの時初めて石渡三蔵が声を掛けた。

「私、これにて充分にござります」

「面も胴も必要がない？」

「一家中ではござりまするが流儀の相違がござります。他流試合真剣勝負、この意気をもつて致します覚悟……」

「ははあさようかな。いやお立派じゃ……ええとしからば白井氏も、面胴取って立ち合いなされ」

「これはどうもめんどうなこと」

白井誠三郎不承不承に面や胴を脱いだものの、ここで三分の恐れを抱いた。

居流れていた門弟衆も、これを聞くと眼を見合わせた。

「何んと思われるな佐伯氏？ この試合どう見られるな？」 「ひよつとするとアテが外れますぞ。相手の勢いがあまりに強い」 「藪やぶをつついて蛇を出したかな」

葉之助鬮貞の連中はこれに反して大喜びだ。

「見ておいでなされ白井誠三郎、一ひとたま堪りもなくやられますぜ」「全体あいつら生意気でござるよ。こつびどい目に合わされるがよい」

「静かに静かに、構えましたよ」

「どれどれ、なるほど、青眼ですな……おや白井め振り冠りましたな」

「葉之助殿の位取り、なかなか立派ではござらぬか。あれがヒラリと変化すると白井誠三郎は勿ね飛ばされます」

五

今や葉之助は中段に付けて、相手の様子を窺うかがったが問題にも何んにもなりはしない。で、葉之助は考えた。

「かまうものか、ひつぱたいてやれ」

トンと竹刀を八相に開く。誘いの隙でも何んでもない。まして本当の隙ではない。それにもかかわらず誠三郎は、「ヤツ」と一声打ち込んで来た。右へ開いて、入身いりみになり右の肩を袈裟けさが掛けに軽く。そうして置いてグルリと廻り、

「小野派一刀流五点の序、脇構えより敵の肩先ケサに払って妙剣と申す！」

ちやあんと手口を説明したものだ。鮮かとも何んとも云いようがない。ひっぱたいて置いてひっぱたいた順序をひっぱたいた人間が説明する。もうこれ以上はない筈である。

「参った」

と誠三郎は声を掛けたが、声を掛けるにも及ばない話。溜りへこそと退いた。

「わっ！」とどよめきが起こったが、拍子抜けのしたどよめきである。

「山田左膳。お相手仕る！」

「心得ました。お手柔かに」

ピタリと二人は睨み合った。左膳は目録の腕前である。しかし葉之助には弱敵だ。

「かまうものか。やつつける。ええと今度は絶妙剣、そうだこいつで片付けてやれ」

形が変わると下段に構えた。誘いの隙を左肩へ見せる。

「ははあこの隙は誘いだな」切紙の白井とは少し違う。見破ったから動かない。はたし

て隙は消えてしまった。と、今度は右の肩へチラリと破れが現われた。

「エイ！」と一声。それより早く、一足飛びこんだ葉之助、ガツチリ受けて鏢二元競り合

い、ハツと驚くその呼吸を逆に刎ねて体当り！ ヨロヨロするところを腰車、颯と払って

横へ抜け、

「小野派一刀流五品の二位、下段より仕掛け隙を見て肩へ来るを鏢元競り合い、体当りで崩くだき後は自由、絶妙剣と申し候そうろう！」

またもちやあんと説明されたものだ。

「参った！」これも紋切り型。

今度は誰も笑わなかった。人々はちよつと凄くなつた。二太刀を合わせたものはない。実に葉之助の強さ加減は人々の度胆を抜くに足りる。

「天晴れの腕前感心致してござる。未熟ながら拙者がお相手」

こう云つたのは石渡三蔵で、上段の間からヒラリと下りると壁にかけてあつた赤あかがし櫛かみの木剣、手練てだれが使えば真剣にも劣らず人の命を取るといふ蛤はまぐり刃の太長いのをグイと握つ

て前へ出た。

「拙者木剣が得意でござればこれをもつてお相手致す。貴殿もご随意にお取りくだされい」

「いえ、私は、これにて結構」

「ほほう、短いその竹刀でな？」

「はい」と云つてニツと笑う。

「さようッ」と云つたが憎々しく、「拙者の仕合振り、荒うござるぞ！」

「はい、充分においでください」

「ふん」と三蔵は鼻で笑い、「いざー！」

と云つて木剣を下ろした。

「いざ」と葉之助も竹刀を下ろす。一座森然しんぜんと声もない。

とまれ三蔵は免許の腕前、血氣盛んの三十八歳、代稽古をする身分である。いかに葉之助が巧いと云つても年齢ようやく十二歳、年の相違だけでも甚はなはだしい。それを木剣であしらうとは？

「大人氣おとなげござらぬ石渡氏、おやめなされおやめなされ！」

と、二、三人の者が声を掛けたが、既すでにその時は立ち上がっていた。「もういけない！」と呼吸いきを呑む。

双方ピツタリ合青眼あいせいがん、相手の眼ばかり睨み付ける。

「うん、どうやら少しは出来る」葉之助は呟いた、「が俺には小敵だ」

「エイ！」

と珍らしく声をかけつと一足前へ出た。

「ヤツ！」

と三蔵も声をかけたがつと一足後へ引いた。

双方無言で睨み合う。

「さて、どうしたものだろ。思い切つて打ち込むかとかく相手は代稽古、俺に負けては氣不味かろう。と云つてこつちも負けられない。ええ構うものかひっぱたいてやれ。

エイ！」

と云つて一足進む。「ヤツ」と云つて一足下がる。「エイ！」「ヤツ」「エイ！」「ヤツ」

押され押されて三蔵はピツタリ羽目板へへばりついてしまった。額からはタラタラ汗が流れる。ぼーツと眼の前が霞んで来た。ハツハツハツと呼吸も荒い。

当たつて砕ける！ と三蔵は、うんと諸手で突いて出た、そこを小野派の払捨刀、ピシツと横から払い上げ、体の崩れへ付け込んで、真の真劍で顎へ発止！

「カーツ」

ととたんにどこからともなく物凄い気合が掛かつて来た。

六

アツと驚いた葉之助、一足後へ引き退がる。そこを狙って石渡三藏左の肩を真つ向から

……

「遅い！」

とまた同じ声がどこからともなく響いて来た。

「勝負なし！」

と声は続く。

その時正面の切り戸から悠然と立ち出でた小兵の人物、年格好は五十五、六、木綿の紋付に黄平きひらの袴はかま、左手ゆんでに一刀を引っさげてスツスツと刻み足きざに進んで来る。

「石渡氏、何事でござる！ 子供を相手に木剣の立ち合い、不都合千万、控えさつしやい！ あいや鏡葉之助殿、拙者は松崎清左衛門、当道場の主人あるじでござる。お幼年にもかかわらず驚き入ったるお手のうち、いざこれよりは拙者お相手、お下がりあるな下がってはならぬ」

大小を置くと鉄扇てっせんを握り、場じょうの真ん中へ突つ立った。

場内シーンと静まり返り咳一つするものはない。武者窓から射し込む陽の光。それさえ
妙に澄み返っている。

葉之助もさすがに顔色を変えた。

名に負う松崎清左衛門といえは当時日本でも一流の劍客、彼の將軍家お手直し役浅利又
七郎と立ち合つて互角無勝負の成績を上げ、男谷下総守と戦つては三本のうち二本取
り、さらに老後に至つては、北辰一刀流を編み出した千葉周作を向こうへ廻し、羽目板へ
まで押し付けてしまった。名利に恬淡出世を望まず、そのため田舎へ引つ込んではい
るが劍客中での臥竜である。

今その人が鉄扇を構え、さあ来い来たれと云うのである。いかに葉之助が小天狗でもこ
れには圧倒されざるを得ない。

しかし今さら逃げも出来ぬ。

「先生ご免」

と竹刀を握り、小野派における万全の構え、両捨一用卍に付けた。

「ははあ感心、守勢に出たな」

清左衛門は頷きながら東軍流無反の構え、鉄扇を立てずに真つ直ぐに突き出しじつと様

子を窺^{うかが}った。

「エイ！」

と一つ誘つて見る。葉之助は動かない。

「ははあ、益 堅くなつたな……うむ、それにしても偉い覇気だ。構えを内から突き崩そうとしている。待てよ。ふうむ、これは驚いた。産まれながらの殺気がある。どうもこいつは劍^{けん}呑^{のん}だ。エイ！」

とまたも誘つてみたがやはり凝然^{じつ}と動かない。

清左衛門は一步進んだ。と葉之助は一步下がる。間。じつとして動かない。と葉之助は一步進んだ。と清左衛門が一步退く。

「偉い。俺を押し返しおる。どうも恐ろしい向こう意気だ、しかも守勢を持ち耐^{こた}えている。まごまごすると打ち込まれるぞ……これが十二の少年か？ いや全く恐ろしい話だ。産まれながらの武刃者。まずこうとでも云わずばなるまい……とは云え余りに野性が多い。いわゆる磨かぬ宝玉じゃ……南条右近の三男と云うがこれは少々眉唾^{まゆつば}物だ。都育ちの室咲^{むろぎ}き剣術、なかなかもつてそんなものではない……山から切り出した石材そっくり恐ろしく荒い剣法じゃ……そろそろ呼吸^{いき}が荒くなつて来たぞ、あまりに神気を凝^こらし過ぎどうやら

これは悶絶もんぜつしそうだ。参った！」と云つて鉄扇を引いた。

「はっ」と驚いた葉之助、トントンと二足前へ出たが、「参りましてござります！」

「前途有望、前途有望、将来益 お励みなされ！」

「はい、有難う存じます」葉之助は汗を拭く。

「誰に従ついて学ばれたな？」

「はい、父右近に従きました」

「ははあ、そうしてそれ以外には？」

「師は父だけにござります」

「それは不思議、しかとさようかな？」

「何いっわしに偽いつわりを申しましょう」

「それにしても解げせぬことがある」

清左衛門は首を捻ひねった。

「未熟者ではござりますが、今日よりご門弟にお加えくだされませ」

「いや」と、不思議にも清左衛門は、それを聞くと冷淡に云った。「少しく存むねずる旨むねもあれば、門に加えることなり兼ねまする」

「……存ずる旨？ 存ずる旨とは？」葉之助は氣色けしきばんだ。

「存ずる旨とは、読んで字の如しじや」

七

「葉之助、ちよつと参れ……聞けばお前は立川町の松崎道場で大勢を相手に腕立てしたと云うことであるが、よもや本当ではあるまいな？」

「は……本当でございます」

「なぜそのようなことをしたか」

「止むを得ない仕儀に立ち至りまして……」

「止むを得ない仕儀？ どういう訳かな？」

「あらかじめ企たくらんだものと見え、道場の前へ差しかかりますと、ご門弟衆たくらバラバラと立ち出で、無理無態むたいに私を連れ込み、是非にと試合を望みましたれば……」

「おおさようか、是非に及ばぬの……噂によれば近藤、白井、山田等という門弟衆を、苦もなく打ち込んだということだが？」

「はい、相手が余り弱く……」

「うん、それで勝ったというか」

「つい勝ちましてございます」

「松崎殿とも立ち合ったそうなの」

「一手ご指南にあずかりました」

「松崎殿はお強いであろうな」

「まるで鬼神きしんでござります」

「そうであろうとも、あのお方などは古いにしえの剣聖にも勝るとも劣らぬ、立派な腕前を持って
おられる」

「ほとほと驚嘆致しました」

「お前の技倆うでも立派なものだな」

「いえ、お恥ずかしゆう存じます」

「さすがはご親父南条殿は小野派一刀流では天下の名人、松崎殿にも劣るまいが、その三
男に産まれただけあって十二歳の小腕には過ぎた技倆うでまえ、私も嬉しく頼もしく思う」

「お褒めにあずかり、有難う存じます」

「しかし天下には名人も多い」

「は、さようでございます」

「決して慢心致してはならぬ」

「慢心は愚か、^{わろ}今後は益、勉強致す^{つも}意りにござります」

「他人との立ち合いも無用に致せ」

「心得ましてござります」

「負ければ恥、勝てば怨まれる、腕立てせぬが安全じゃ

「^{おお}仰せの通りにござります」

「松崎道場でのお前の振る舞い、家中もつばら評判じゃ」

「恐縮の至りに存じます」

「今のところお前の方が評判もよければ同情者も多い」

「ははあさようでございますか」

「評判がよいとて油断は出来ぬ」

「いかにも油断は出来ませぬ」

「よい評判は悪くなりたがる」

「お言葉通りにござります」

「落ちた評判は取り返し悪いにく」

「落とさぬよう致したいもので」

「そこだ」

と弓之進は膝を打った。

「よく気が付いた。そうなくてはならぬ。ついでには今後は白痴ばかになれ」

「は？」

と云って葉之助は思わずその眼を見張ったものである。

「今後は白痴になりますよう」

弓之進は再びこう云うとじつと葉之助を見守った。

「どうだ葉之助、まだ解らぬかな？」

「お言葉は解っておりますが……」

「うむ、その意味が解らぬそうな。それでは一つ例を引こう。武士の亀鑑きかん大石良雄は昼ひるあ行灯いんどんであったそうな」

「お父上！ ようやく解りました！」

「おお解つたか。それは重^{ちようじよう}畳」

「私昼行灯になりましょう」

「ハツハハハ、昼行灯になれよ」

「きつとなつてお目にかけます」

「昼の行灯は馬鹿気たもの、人は笑つても憎みはしない」

「御意^{ぎよい}の通りにござります」

「我が家は内藤家の二番家老、門地高ければ憎^{やす}まれ易い。お前の性質は鋭ど過ぎ、これまた敵を作り易い。それを避けるには昼行灯に限る」

「昼行灯に限ります」

「お、白痴^{ばか}になれよ白痴になれよ」

その時襖が静かに開いて、茶を捧げたお石殿が部屋の中へはいつて来た。

「徒^{つれづれ}然^{ぜん}と存じお茶を淹^いれました」

「お母様」

と葉之助は、甘えた声で呼んだかと思うと、足を投げ出し横になった。「お菓子ください
れお菓子くださいれ！」

腕を延ばすと菓子鉢の菓子をやにわに摘んで頬張った。

「まあこの子は」

とお石は驚き、「平素いっそもに似ない行儀の悪さ、お前白痴ばかにおなりだね」

「アツハハハ、その呼吸いきいき呼吸！」

弓之進は手を拍うった。

「これで我が家も葉之助もまずは安全というものじゃ。めでたいめでたい！ アツハハハ」

八

内藤駿河守正勝は初老を過ごすこと五つであったが、性潤かつたつ達豪放で、しかも仁慈じんじというのだから名君の部に属すべきお方、しかし、欠点は豪酒にあった。今日も酒々、明日も酒……こう云ったような有様である。

ある日弓之進が伺候しこうすると、

「そちの養子葉之助、今年十二の弱年ながら珍らしい武道の達人の由、部屋住みのまま百石を取らせる、早々殿中へ差し出すよう、近習きんじゆうとして召し使い遣つかわす」

「これはこれは分に過ぎたる有難きご誼じょうではござりますが、葉之助儀は脳弱じやくく性来いささか白痴にござりますれば……」

「これこれ弓之進、痴たわけたことを申すな！」

潤達の性質まろだを露出しにして駿河守は怒鳴るように云った。

「性来白痴の葉之助が、近藤司氣太、白井誠三郎、山田左膳というような武道自慢の若者どもを打ち込むほどの技倆うでまへになれるか！」

「恐らく怪我勝ちにござりましょう」

「石渡頼母の三男などは代稽古の技倆ということだが、葉之助とは段違いだそうだ。そんな白痴なら白痴結構。是非明日より出仕をさせろ」

こう云われてはしかたがない。それに有難いご誼である。弓之進はお受けをした。で、翌日から葉之助はご前勤めをすることになった。

艶々した前髪立ち、年は十二というけれど一見すれば十八、九、鼻高く眼涼しく、美少年であつて且かつ凛々りりしい眼の配り方足の運び方、武道の精髓に食い入ったものである。

「何んのこれが白痴なものか」

駿河守は一眼見るとひどく葉之助が気に入った。

しかし葉之助は往々にして度外れた事をするのであった。例えばご前で足を延ばしたり、歩きながら居睡りをしたり、突然大きな欠伸あくびをしたり、そうしていつも用のない時にはうつらうつらと眼をとじて、よく云えば無念無想、悪く云えば茫然ぼんやりしていた。

「武道の麒麟きりんじ児と思つたに葉之助殿はお人好しだそうだ」「食わせ物だ食わせ物だ」

「ぼんやりとしてノツソリとして、ヌツと立っている塩梅あんばいは独活うどの大木というところだ」「何をやつても一向冴えない。ボーツとしたところは昼の行灯あんどんかな」

「昼行灯昼行灯、よい、これはよい譬喩たとえじゃ」

「昼行灯様！ 昼行灯様！」

朋輩どもは葉之助の事を間もなく昼行灯と綽名あだなした。

「はてな？」

と駿河守は首を傾げた。「あれほど利口な葉之助が、時々心を取り失うとはちよつとどうも受け取れないことだ。事実脳が弱いのかそれとも明哲保全めいてつほぜんの策か？ ……これは一つ試して見よう」

ある日にわか殿の仰せで、弓射の試合を始めることになった。

駿河守は馬に乗り近習若侍を後に従え、矢場を指して走らせて行く。

矢場には既に弓道師範日置流へきに掛けては、相当名のある佐々木源兵衛が詰めかけていたが、殿のお出いでと立ちいでて恭うやうやしく式礼した。

「おお源兵衛か今日はご苦労」駿河守は頷いたが、「すぐに射い手に取りかかるよう」

「かしこまりましたござります」

源兵衛がご前を退くと、忽たちまち法螺貝ほらが鳴り渡った。

射手が十人ズラリと並ぶ。

ヒューツ、ヒューツと弦つる音高おとく的を目標けて切つて放す。弦返りの音も冴えかえり、

当たった時には赤旗が揚がる。

鉦かねの音で引き退き法螺の音で新あら手が出る。

番数次第に取り進んだ。

最後に現われた三人の射手は、印可いんかを受けた高弟で、綿貫紋兵衛、馬谷庄二、そうして石渡三蔵であつたが、金的かね的てきできわめて小さい。一人で五本の矢を飛ばすのであつた。

甲乙なしに引き退いた。

後には誰も出る者が無い。今日の射法は終わったのである。

「これ葉之助」と駿河守は傍かたわらの葉之助へ声を掛けた。

「そちは剣道では一家中並ぶ者のない達人と聞くが、弓と馬とは弓馬と申して表芸の中の表芸、武士たる者の心得なくてはならぬ。そちにも心得あることと思う。立ち出でて一矢ひとや仕つかまつれ」

「は」

と云ったが葉之助、こう云われては断わることには出来ない。未熟と申して尻込みすれば家門の恥辱、身の不面目となる。白痴を気取つてはいられなくなった。

「不束ふつつかながらご誼じようなれば一矢仕るでござりましょう」

謹んでお受けすると列を離れ、ツツと設けの座に進んだ。屹きつと金的を睨んだものである。

「葉之助殿おやりなさるかな。貴殿何流をお習いかな」

佐々木源兵衛は莞爾にこやかに訊いた。

「はい、竹林派をほんの少々」

云いながら無造作に弓を握る。

これを見ると若侍達は互いにヒソヒソ囁き出した。

「行灯殿が弓を射るそうな。はてどこへぶちこむやら」 「土壇を飛び越し馬場の方へでも、ぶつ飛ばすことでござりましょう」

「それはよけれど弾ね返って座席へでも落ちたら難儀でござるな」

「いやいやそうばかりも云われませぬよ」

中には鬚眉をする者もある。「松崎道場では石渡殿を、手こずらせたという事です」

「いやそれも怪我勝ちだそうで」

「では今度もしかすると怪我勝ちするかもしれないな」

「そう再々怪我勝ちされてはちとどうも側が迷惑します」

「黙って黙って！ 矢をつがえました」

「あれが竹林派の固めかな」

「いやいやあれは昼行灯流で」

「ナール、これはよう云われました」

この時葉之助は矢を取るとパツチリつがえてキリキリキリ、弦一杯に引き絞ると、狙い

も付けず切つて放した。

「どうだ？」

と侍達は眼を睜みはつた。外はずれたと見えて旗が出ない。

「おやおや最初から仕損じましたな」

「二本目は与一も困る扇おうちかな……さあどうだ昼行灯殿！」

急せかず周章あわせず葉之助はすかさず二の矢を飛ばせたが、これも外れたか旗が出ない。

「ウワーツ、いよいよ昼行灯だ！ 一の矢二の矢を仕損じながら、沈おちつき着つきようはマアどうだ」

「恥なければ心安し。一向平氣と見えますな」

「殿も小首を傾げておられる」「いったい殿がお悪いのだ。あんなものを召使うばかりか
鼻はな根ねにさえもしておられる」「あれは殿の酔狂よけがらさ」

「それまた射ますぞ。静かに静かに」

しかし葉之助は益たいぜん然ぜんと構かまえ、姿勢しせいに揺るぎもなく、三の矢四の矢五の矢まで、呼い
吸きも吐けない素早すみさで弦音げんおん高く射放やしたが、旗はついに出なかつた。

ガツチリ弓を棚たなに掛かけ、袴はかま両りょう袖そでをポンポンと払はうと、静かに葉之助は射場やじやうを離はなれ、
端然たんぜんと殿の前まへへ手を支つかえた。

「未熟の弓勢お目にかけてお恥ずかしゆう存じます」

「うむ」

と云つたが駿河守は牀几しょうぎに掛けたまま動こうともしない。何やら考えているらしい。

「源兵衛、源兵衛」

と急に呼んだ。弓道師範の佐々木源兵衛小腰こがしを屈めて走つて来た。

「的をここへ持つて来い」

「はっ」と云うと源兵衛は、扇を上げて差し招いた。旗の役の小侍は、それと見ると的を捧げ、矢場を縦に走つて来たが、謹つつしんで的を源兵衛へ渡す。源兵衛から殿たてまつへ奉る。

的を眺めた駿河守は、

「おお」と思わず声を洩らした。「どうだ源兵衛これを見い！」

「はっ」と云つて差し覗くと、思わずこれも「うむ」と唸つた。矢は五本ながら中あたつてはいないが、しかしその矢は五本ながら同じ間隔と深さをもつて的の縁へりを擦こすっている。

「なんと源兵衛、どう思うな！」

「恐れ入つてござります」

「中あてようと思えば中あたる矢だ」

「申すまでもございません」

「どうだ、印可いんかは確かであろうな」

「いやもう印可は抜いております」

「三蔵とはどつちが上手だ？」

「これは段が違います」

「そうであろう」と頷いたが、葉之助の方へ眼をやると、「さて、お前に聞くことがある。中あてずに縁こすを擦つたは、竹林派に故実あつてかな？」

「いえ、一向存じませぬ」

葉之助は空とほ呆ぼけた。

「知らぬとあつてはしかたもないが、そちの学んだ竹林派について、詳しく来歴を語るよう」

「はっ」

と云つたが葉之助、これはどうも知らぬとは云えない。そこで形を改めると、「竹林派の来歴申し上げます。そもそも、始祖は江州ごうしゅうの産、叡山えいざんに登つて剃髪ていはつし、石堂寺竹林房如成じよせいと云う。佐々木入道承禎しやうていと宜よく、久しく客となつております

うち、百家の流派を研精し、一派を編み出し竹林派と申す。嫡男ちやくなん 新三郎水没し、次男弥蔵出藍しゆつらんの誉れあり、江州佐和山石田三成に仕え、乱後身を避け高野山に登り、後吉野の傍そばに住す。清洲少将忠吉公、その名を聞いてこれを召す。後、尾張源敬公げんけいこうに仕え、門弟多く取り立てしうち、長屋六兵衛、杉山三右衛門、もつとも業に秀ひいでました由よし——大坂両度の合戦にも、尾張公に従つて出陣し、一旦致仕ちししさらに出で、晩年ひそ窃かに思うところあり、長沼守明ながぬまもりあき一人を取り立て、伝書工夫ことごと悉く譲る。子孫相継ぎ弟子相受け今日に及びましてござりますが、三家三勇士の随一人、和佐大八郎は竹林派における高名の一人にんにござります」

弁舌さわやかに言上した。

一〇

「昼行灯どころの騒ぎではない。これは素晴らしい麒麟児きりんじだ。まるで鬼神でも憑ついていて言語行動させるようだ……ははあ、それで弓之進め、この少年の行末ゆくすえを案じ、朋輩先輩の嫉視しっしを恐れ、俄か白痴ばかを気取らせたのであろう。弓之進め用心深いからな……そういう

訳ならそれもよからう。せつかくの目論見だ、とげさせてやろう」

駿河守は頷いた。

「今日の競技はこれで終わる。者ども続け！」

と云い捨てると駿河守は馬に乗った。タツタツタツと帰館になる。近習若侍に立ち雑り葉之助も後を追う。

松崎清左衛門は何が不足で葉之助の入門を拒絶したのであろう？ それは誰にも解らない。しかし当の葉之助にとつては無念千万の限りであった。

「そういう訳なら師を取らずに己一人工夫を凝らし、東軍流にて秘すところの微塵の構えを打ち破り清左衛門めを打ち据えてくれよう」

間もなく葉之助は心の中でこういう大望を抱くようになった。彼はご殿から下がって来るや郊外の森へ出かけて行き、八幡宮の社前に坐つて無念無想に入ることがあり、またある時は木刀を揮つて立ち木の股を裂いたりした。

「一にも押し、二にも押し、これが相撲の秘伝だそうだ。一にも突き二にも突き、これが剣道の極意である。しかし極意であるだけに誰も学んで珍らしくない……さてそれでは突

き以外に必勝の術はあるまいか」

来る夜も来る夜も葉之助はこの点ばかりを考えた。しかし容易には考え付かない。

「突きを止めれば斬る一方だが、さてどこが一番斬り易いかな？」

こう押し詰めて来て葉之助は、「肩だ！」と叫ばざるを得なかった。

「肩ほど斬りよいものはない。相手の右の肩先から左の肋へ斜に斬る。すなわち綾袈裟掛けだ！ 右へ逸れても腕を斬る。左へ逸れれば頸を斬る、どっちにしても急所の痛手だ。うんこれがいい」

と思いついてからは、彼は何んの躡躡もせず袈裟掛けばかりを研究した。腕は既に出ていて、加うるに珍らしい天才である、それに一念が籠もっているのですの上達の速かさ、半年余り経った頃にはかなり太い生の立ち木を股から斜めに幹をかけてサクリ木刀で割ることが出来た。

「宮本武蔵の十字の構えを、有馬喜兵衛は打ち破ろうと、木の股ばかりを裂いたというが、よも木の幹は割れなかつたであろう——いかに松崎が偉いと云つても武蔵に比べては劣るであろう。もう一年、もう二年、練磨に練磨を積んだ上、松崎に試合を申し込み、清左衛門めを打ち据えてくれよう」

仮想の敵があるために、彼の技倆は一日一日と上達をするばかりであった。

こうして六年は経過した。葉之助は十八歳となり、一人前の男となった。

「おお葉之助か近う参れ」

ある日、それは夕方であったが、駿河守はこう云つて鏡葉之助を膝近く呼んだ。

「は」と云つて迂り寄る。「何かご用でござりますか？」

「そちに吩咐けることがある」

駿河守は真面目に云う。

「は、何ご用でござりましょう？」

「今宵妖怪を退治て参れ」

「して、妖怪と仰せられますは？」さすがの葉之助も不安そうに訊き返さざるを得なかつた。

「そちも噂は聞いていよう。永く当家の金ご用を勤めるあの大鳥井紋兵衛の邸へ、最近繁々妖怪出で紋兵衛を悩ますということであるが、当家にとっては功労ある男、ただし少しく強慾に過ぎ不人情の仕打ちもあるとかで、諸人の評判はよくないが、打ち棄てて置くも気の毒なもの、そち参つて力になるよう」

「は」

とは云つたが葉之助は、躊躇ためらわざるを得なかつた。

いかにも彼はその噂を世間の評判で知つていた。久しい前から紋兵衛の邸へ異形いぎようの怪物が集まつて来て、泣いたり嚇おどしたり懇願こんがんしたり、果ては呪詛のろいの言葉を吐いたり、最後にはきつと声を揃え、「返してください！ 返してください！」と、喚わめき立てるといふのである。世間の人の評判では、その異形な怪物こそは、紋兵衛のために苦しめられたいわゆる可哀そうな債務者の霊で、家や屋敷を取り上げられたのを死んだ後までも怨恨うらみに思い、それで夜な夜な現われては、「返してください！ 返してください！」と、喚わめき立てるのだというのであつた。

一一

相手が兇悪な盗賊とかまたは殺ひところし人の罪人とか、そういうものを退治するなら一も二もなくお受けしようが、亡魂ぼうこんとあつては有難くない——これが葉之助の心持ちであつた。

「主命こほを拒こぼむではござりませぬが、私如き若年者より、他にどなたか屈くつきよう強ようなお方が：

…

「いや」と駿河守は遮さへぎった。「お前が一番適當なのだ。拒むことはならぬ、是非参るよう……新刀なれども堀川国広、これをそちに貸し与える。退治致した暁あかつきにはそちの差料さしりょうとして遣わそう」

「そうまで仰せられる殿のお言葉をお受け致いたさずばかえつて不忠、参ることに致します」「おお参るか。それは頼もしい」

「ご免ください」

と座をすべこる。

「大事をとつて行くがいいぞ」

「お心添かたじえ忝かたじけのう存じます」

国広の刀をひっさげて葉之助はご前を退出した。

富豪大鳥井紋兵衛の邸やしきは、二本榎えのきと俗に呼ばれた、お城を離れる半里の地点、小原村に近い耕地の中に、一軒ポツツリ立っていたが、四方に林を取り巡らし、濠ほりに似せて溝を掘り、周囲を廻れば五町もあろうか、主屋おもや、離室はなれ、客殿、亭ちん、厩舎うまや、納屋なやから小作小屋まで

一切を入れれば十棟余り、実に堂々たる構造であつたが、その主屋の一室に主人紋兵衛は臥せつていた。

「灯火が暗い。もつと点せ」

夜具からヒヨイと顔を出すと、譚語のように紋兵衛は云つた。年は幾歳か不明であつたが、頭髮白く顔には皺があり、六十以上とも見られたが、どうやらそうまでは行つていないらしい。大きい眼に高い鼻、昔は美男であつたらしい。

「灯火は十も点つております」

付き添つている十人の中には、劍客もあれば力士もあり柔術に達した浪人もあり、手代、番頭、小作頭もある。それらさまさまの人物がギッシリ一部屋に集まつた。四方に眼を配つていたが、番頭の佐介はこう云うと紋兵衛の顔を覗き込んだ。

「ご覧なさいませ部屋の中行灯が十もござります。なんの暗いことがございませう」

「いいや暗い、真つ暗だ。早く灯心を掻き立ててくれ」

「それじゃ卯平さん掻き立ててくんない」

「へい」と云うと手代の卯平は、静かに立つて一つ一つ行灯の火を掻き立てた。いくらか

部屋が明るくなる。

「時に今は何時なんどきだな？」

気遣きづかわしそうに紋兵衛は訊く。

「はい」と佐介はちよつと考え、「初夜しよやには一刻とぎ(二時間)もございませうか」

「まだそんなに早いのか」

「宵よいの口でございます」

「ああ夜が早く明ければよい……俺は夜が大嫌いだ。……俺には夜が恐ろしいのだ」

ザワザワと吹く春風が雨戸を通して聞こえて来た。と、コトンと音がした。

「あれは何んだ？ あの声は？」

「さあ何んでござろうの」剣術使いの佐伯ふんた聞太は、大刀を膝の辺へ引き付けながら、「鉢は

伏山ちぶせやまから狐きつねめが春の月夜に浮かされてやって来たのもござろうか」

「ナニ狐？」と紋兵衛は、恐怖の瞳を踊おどらせたが、「追つてくたされ！ 俺は狐が大嫌い

だ！」

「よろしゅうござる」

と大儀そうに、聞太はスツクリ立ち上がったが襖ふすまを開けると隣室へ行つた。障子しょうじを開

ける音がする。雨戸をひらく音もする。

「アツハハハハ」

と笑い声があると、雨戸や障子が閉てられた。

聞太は部屋へはいつて来たが、

「狐ではなくて犬でござった。黒めが尾を振っていましたわい」

「犬でござったのかな。それで安心」紋兵衛はホツと溜息をした。

暫時部屋は静かである。

と、紋兵衛は悲しそうな声で、

「ああ私は眠りたい。眠って苦痛を忘れない……北山先生、薬くだされ！」

天野北山は黙っていた。

長崎仕込みの立派な蘭医、駿河守の侍医ではあったが、客分の扱いを受けている。江戸へ出しても一流の先生、名聞狂いを嫌うところからこのような山間にくすぶってはい

るがどうして勝れた人物であり、いかに相手が金持ちであろうと人格の卑しい紋兵衛などの付き人などに成る人物ではない。しかし礼を厚うしてほとんど十回も招かれて見れば放

抛って置くことも出来なかつたので時々見舞ってやっていた。しかしもちろん急抱えの

劍術使いや浪人とは違ふ。否だと思えばサツサと帰り、いけないと思えば投薬もしない。

「北山先生薬くだされ！」

「ならぬ！」

と北山は抑おさえ付けた。

一一

「あなたの病氣は薬でも癒なおらぬ。懺悔ざんげなされ懺悔なされ。そうしたらすぐにも癒るであろう」

「懺悔？」と紋兵衛は恐ろしそうに、「何もございませぬ、何もございませぬ！　懺悔することなどはございませぬ！」

「嘘うそを云わつしやい！」

と北山は嘲あざけるようにたしなめた。「懺悔することのないものが何んでそのように神経を起こし、何んでそのように恐れるか。……そなた、無分別の若い頃に悪いことでもしはしないかな？」

膝ひざに突ついていた黒塗くろぬりりの扇あふぎをパチリパチリとやりながら、北山はグングン突つ込んで訊きく。

「いいえ、そんな事はございません。正直な人間でございませぬ。人に恨うらみまれる覚えもなく、人に憎にくまれる覚えもない正直な人間でございませぬ」

「どうも私わしには受け取れない。どうでもあなたの中の心の中には不安なものがあるらしい。ひどく神経を痛めておる……で、私は改めて訊きくが、貴公あなたどこの産うまれだな？」

「はい、江戸でございませぬ」

「江戸はどこだな？ どの辺へだな？」北山は遠慮なく押し詰める。

「はい」と紋兵衛は狼狽ろうたいしながら、「江戸は芝でございませぬ」

「おおさようか、芝はどこだ？」

「はい、芝は錦糸堀にしんじょで……」

「何を痴たわけめ！」と北山はカラカラとばかり哄こう笑しょうした。

「芝にはそんな所ところはない、錦糸堀にしんじょは本所ほんじょだわえ！」

「おお、そうそうその本所ほんじょで、私は産うまれたのでございませぬ」

「うん、そうか、では聞きくが、錦糸堀にしんじょは本所ほんじょのどの辺へにあるな？」

「はい、本所のとつつきに」

「アツハハハハ、まるで反対だ。錦糸堀は本所の外れはずにある……貴公江戸は不案内であろう？ ……云いたくなければ云わないでもよい。産まれ故郷の云えないような、そういう胡散うさんな人物には今後薬は盛らぬまでだ……とこでもう一つ訊きたいのは、十万に余る貴公の財産、いったい何をして儲もつけたのか？」

北山はじつと眼を据えて紋兵衛の顔を見守った。しかし紋兵衛はものを云わない。

「どうやらこれも云えないと見える……後ろ暗いことでもあるのであろう」

「黙れ！」

と突然狂気染じみた声で、大鳥井紋兵衛は怒鳴どなったものである。彼はムツクリと起き上がった。

「黙れ！ 藪やぶ医者いしやめ！ 何を吐ぬかす！」

「何？」

と北山も眼を瞋いからせた。

「俺は正直の人間だ！」紋兵衛は大声で怒鳴りつづける。「後ろ暗えこととは何事だ！俺は正直に働いて正当に金を儲けたのだ！それが何んで悪いのか！」

「うんそうか、それが本当なら、貴公はなかなか働き者だ。この北山褒めてやる……さほど正直に儲けた金なら何も隠すには及ぶまい。何をして儲けたか云うがいい」

「いいや云わねえ、云う必要はねえ！ 何んで貴様に云う必要がある！ それから云え、それから云え！」

「云つてやろう、俺は医者だ！」

「医者だからどうしたと云うのだい！」

「病いの基を調べるのよ」

「病いの基を調べるって？ いいやそんな必要はねえ」

「貴公、可哀そうに血迷っているな」

「血迷うものか！ 俺は正気だ！」

「病気の基を極めずにどうして病いを癒すことが出来る」

「癒すにやア及ばねえうちやつて置いてくれ！」

「おお、そうか、それならよい」

ズイと北山は立ち上がった。「今後招いても来てはやらぬぞ」

「……………」

「貴公、死相が現われておる。取り殺されるも長くはあるまい」

「わッ」と突然紋兵衛は畳の上へ突つ伏したが、

「お助けください北山様！ お願いでござります天野先生！ 殺されるのは嫌でございませぬ！ 申します申します、何んでも申します！」

「おお云うか。云うならよい。天野北山聞いて遣わす。そうして病気も癒してやる……何をやって金を儲けた？」

「はいそれは……」

と云いかけた時奥の襖がスーと開いて若い女が現われた。紋兵衛の娘のお露である。

「お父様」と手を支え、つか「只今お城のお殿様からお使者が参りましてござります」

「お使者？」

と紋兵衛は不思議そうに、「ハテなんのお使者であろう？」

「ご病氣見舞いだとおつしやられました」

「どんなようすご容子のお方かな？」

「はい」とお露は面羞おもはゆそうに、「お若いお美しいお侍様で」

「さようか、そうしてお名前は？」

「鏡葉之助様と仰せられました」

一三

妖怪^{あやかし}退治の命を受け、城を退出した葉之助は、小原村二本榎、大鳥井紋兵衛の宏大な邸を、供も連れず訪れた。取次ぎに出た若い女——それは娘のお露であったが、そのお露の姿を見ると、彼の心は波立った。

「美しいな」と思ったからである。しかしそれとて軽い意味なので、一眼惚れと云うようなそんなところまでは行っていない。

一旦引つ込んだその娘が再びしとやかに現われた時、また「美しいな」と思ったものがある。

お露は夜眼にも知れるほど顔を赧^{あか}らめもじもじしたが、

「むさくるしい処^{ところ}ではございますが、なにとぞお通りくださいますよう」

「ご免」と云うと葉之助は、刀を提げて玄関を上がる。

間^まごと間^まごとを打ち通り、奥まった部屋の前へ出たが、飾り立てた部屋部屋の様子、部

屋を繋いだ廻廊の態、まことに善美を尽くしたもので、士大夫の邸と云ったところでこれまでであろうと思われた。それにも拘らず邸内が陰森として物寂しく、間ごとに点された燭台の灯も薄茫然と輪を描き、光の届かぬ隅々には眼も鼻もない妖怪が声を立てずに笑つていそうであり、人は沢山にいるらしいが暖かい人気を感じない。

「妖怪邸と云われるだけあつて、不思議に寂しい邸ではある」

こう心で呟いた時、お露がスーと襖を開けた。

「父の病室にござります」

「さようでござるか」とツトはいる。

北山はじめ附き人達は遠慮して隣室へ退つたので部屋には紋兵衛一人しかいない。病人というので褥は離れず、彼は恭しく端座まつていたが、それと見て畳へ手を支えた。

殿の使いとは云うものの表立つた使者ではなく、きわめて略式の訪問なのだ。

「いやそのまま」と云いながら葉之助は座を構え、「邸に妖怪憑いたる由、殿にも気の毒に覺し召さるる。拙者今日参つたはすなわち妖怪見現わしのため。殿のご厚意疎略に思つてはならぬ」

「何しに疎略に思いましたよ。ハイハイまことに有難いことで……あなた様にもご苦労

千万、まずお休息遊ばしますよう」

紋兵衛は静かに顔を上げた。名は互いに知ってはいたが顔を合わせるのは今日が初めて、二人の顔がピッタリ合った。

と、俄然紋兵衛の顔へ恐怖が颯と浮かんだが、

「わッ、幽霊！」と喚いたものである。

「これこれどうした？ 幽霊とは何んだ？」

驚いたのは葉之助で、紋兵衛の様子をじつと眺める。

「堪忍してくれ！ 堪忍してくれ！ 俺が悪かった！ 俺が悪かった！ ……山吹！

山吹！ 堪忍してくれ」

蛇に魅入られた蛙とでも云おうか、葉之助の顔から眼を放さず、紋兵衛は益々喚くのであった、が額からタラタラ汗を流し、全身を劇しく顫わせているのは、恐怖の度合のいかに大きいかを無言のうちに説明している。

「これこれ紋兵衛殿どうしたものだ。拙者は鏡葉之助でござる。山吹などとは何事でござる。心を確りお持ちなさるがよい」

こう云いながら葉之助は、気の毒そうに苦笑したが、「ははあこれも妖怪の業だな。

さてどこから手を付けたものか？」

「何、鏡葉之助殿とな？」

逆立つた眼で葉之助を見据え、紋兵衛は瞬ぎもしなかつたが、ようやくホツと溜息を吐くと、「人違いであつた。山吹ではなかつた。そうだあなたは葉之助様だ……が、それにしてもあなたのお顔があのお顔に酷似とは？ おお酷似じゃ酷似じゃ！ やつぱりお前は山吹だ！ 汝どこからやつて来たぞ！」

また狂わしくなるのであつた。

「殿の命で、城中から」

「いいや違う。そうではあるまい。八ヶ嶽から来たのであろう？」

「殿の命で、城中から」

「嘘だ嘘だ！ 嘘に相違ない！ 八ヶ嶽の窩人部落！ 汝そこから来たのであろう！ 怨まば怨め！ 崇らば崇れ！ 捨てられたが口惜しいか！ ……睨むわ睨むわ！ おお睨むがいい。俺も睨んでやる俺も睨んでやる！」

血走つて眼をカツと開け、紋兵衛は葉之助を睨んだものである。

その時、遙か戸外に当たつて咽ぶがよくな泣くがよくな哀々たる声が聞こえて来た。

それは大勢の声であり、あたかも合唱でもするかのようには声を合わせて叫んでいるらしい。しかし叫びと云うよりも、むしろそれは嘆願なので、細い細い糸のような声から高い高い叫びになり、それが悲しい笛の音のように尾を引いて綿々と絶えぬのであった。

「お返しくだされ。お返しくだされ。宗介むねすけ天狗てんぐの鎧よろい胃い、どうぞどうぞお返しくだされ」

こう叫んでいるのであった。

一四

ムツクリは刎はね起きた紋兵衛は、血走った眼をおどおどさせ、痙攣ひきつった唇を思うさま曲げ、手を胸の辺で掻き捲まくり、肩に大波を打たせたかと思うと、

「あ、あ、あ、あ」とまず喘ぎ、「来たア！」と叫ぶとヒヨロヒヨロ立ち、「来てくれ！来てくれ！誰か来てくれ！人殺しだア！誰か来てくれ！……おお鏡様葉之助様！あいつらが来たのでござります！お助けなされてくださりませ！人助けでござります、お助けなされてくださりませ！……返せと云って何を返すのだ！鎧胃？そん

なものは知らぬ！ おおそんなものを何んで知ろう！ よしんば知っていようとも、みんな過ぎ去った昔の事だ！ ならぬ、ならぬ、返すことはならぬ！ いやいや俺は知らぬのだ！」

「五味多四郎様！ 五味多四郎様！ どうぞお返しくださいませ、宗介天狗の黄金こがねの甲かっち胃ゆう、どうぞお返しくださいませ！」戸外おもての声は尚なほ叫おぶ。

「知らぬ知らぬ俺は知らぬ！ 俺は何んにも知らぬのだ！ ……葉之助様！ 鏡様！ どうぞお助けくださいませ！ や、貴様は山吹だな！ おお山吹だ山吹だ！ おのれ貴様まで怨みに来たか！ おお恐ろしい恐ろしい、睨んでくれるな睨んでくれるな！ 堪忍してくれ俺が悪かった！ あ、あ、あ、胸苦しや！ 冷たい腕が胸を掴つかむわ！」

急に紋兵衛は虚空こくうを掴つかむと枯木のようにバツタリ仆たおれた。そのまま気絶したのである。その時忽こっぜん然部屋の隅から女の笑い声が聞こえて来た。ヒ、ヒ、ヒ、ヒ、というような一種異様な笑い声である。

鏡葉之助はそれを聞くと何がなしにゾツとした。聞き覚えのある笑い声だからだ。

「遠い昔に、幼年時代ちいさいときに、確かにどこかで聞いたことがある。誰の声だかそれは知らない。どこで聞いたかそれも知らない……いったいどこで笑っているのだろうか？」

左右に瘰癧けいれんさせ、憤怒ふんぬの形相ぎようそうを現わしている様子が、奇病人面疽にんめんそさながらである。ヒ、ヒ、ヒという笑い声はその口から来るのであった。

そうして何より気味の悪いことは、人面疽の眼が気絶している紋兵衛の顔に注がれていることで、その眼には憎悪にくしみが満ち充ちている。

余りのことに葉之助は自分の視覚を疑った。

「こんな筈はずはない、こんな筈はない！」

叫ぶと一緒に眼を閉じたのは、恐ろしいものを見まいとする本能的の動作でもあろうか。しかしその時断ち切ったように気味の悪い笑い声が消えたので、彼はハツと眼を開けた。

人面疽にんめんそは消えている。後には歯形があるばかりだ。

「さてはやはり幻覚であったか」ホツと溜息をした葉之助は、額の汗を拭ったものの、その恐ろしさ気味悪さは容易の事では忘れられそうもない。

その時またも戸の外から嘆願するような大勢の声が咽むせぶがように聞こえて来た。

「お返しくだされお返しくだされ。宗介天狗の黄金の甲冑、どうぞお返しくださいませ」

「これはいったいどうしたことだ」葉之助は呟いた。「あれは妖怪の声だというに、俺なつかには懐なつかしく思われてならぬ。懐しいといえば人面疽の顔さえ妙に懐なつかしく思われる。……妖怪

の声を聞いていると故郷ふるさとの人の話し声でも聞いていたような気持ちがある。そうして、人面疽の女の顔は、母親の顔でもあるかのように、慕したわしく恋しく思われる」
葉之助は茫然ぼうぜんと坐つたまままで動こうともしない。

一五

ここで物語は一変する。

大正十三年の今日でも、甲信の人達は信じ切っているが、武田信玄の死骸なきがらは、楯無たてなしの鎧よろいに日の丸の旗、諏訪すわ法性ほうしょうの冑かぶとをもつて、いとも嚴重に装われ、厚い石の柩ひつぎに入れられ、諏訪湖の底に埋められてあり、諏訪明神がその柩を加護しているということである。

これはどうやら歴史上から見ても、真実ほんとのこのように思われる。その証拠には近古史談に次のような史詩が掲載されている。

驚き倒ようとうす暗中銃丸跳るを、野田城上笛てきせい声寒し、誰か知らん七十二の疑塚ぎちよう、若しか
一棺湖底の安きに

最後の二句を解釈すると、昔支那シナに悪王があつて、死後塚あはの発あはかれんことを恐れ、七十

二個の贖塚にせつつかを作ったが、それでもとうとう発あはかれてしまった。武田信玄はそんなことはせずに、死骸を湖底に埋めさせた。この方がどんなに安心だか知れない——つまりこういう意味なのである。

いかにもこれは七十二の疑塚より確かに安心には相違ないが、しかし絶対に安心とは云えない。諏訪湖の水の乾く時が来たら、死骸は石棺のまま現われなければならない。そうでなくとも好奇ものずきの者が、金に糸目を付けることなく、もし潜水夫を潜らせたなら、信玄の死骸のある場所が知れたなら、それから後はどんなことでも出来る。だから絶対に安心とは云えない。

果然かぜん、文政年間に好奇ものずきの人間が現われて、信玄の石棺を引き上げようとした。成功したか失敗したか？ その人間とは何者か？ それは物語の進むにつれて自おのずと了解されようと思う。

そうして実にこの事件は、この「八ヶ嶽の魔神」という、きわめて伝奇的の物語にとつてもかなり重大な関係がある。したがって物語の主人公、鏡葉之助その人にとつても重大な関係がなくてはならない。

鏡葉之助の消息を一時途中で中絶させ、事件を他方面へ移したのもこういう関係がある

からである。

信州諏訪の郡高島の城下は、祭礼のように賑わっていた。

びようびよう 森々 と湛えられた湖の岸には町の人達、老若男女が湖水を遥かに見渡しながら窃々話に余念がない。

「船が沢山出ましたな」

「二十隻あまりも出ましたかな」

「漁船と異つて立派ですな」

「諏訪家の幔幕が張り廻してある」

「乗つておられるのはお武家様ばかりだ」

「お武家様と漁師とは遠目に見ても異なりますな」

「しかし今度のお企てはちとご無理ではないでしょうか」

「さあそれは考えものだ」

「いや全く考えものだ」

「噂によると神宮寺の巫女が大変怒っているそうですよ」

「あいつらが怒るとちよつと恐い」

「名に負う水狐族すいこぞくの手合ですからな」

「今度は若殿も失敗かな」

「立派なお方には相違ないが、どうも血気に急はやらせられてな」

「それもこれもお若いからよ」

「ちと好奇心ものずきが過ぎるようだ」

「今度の企ても好奇心からよ」

「巫女達はきつと崇たろうぞ」

「これまで水狐族に崇られたもので、難を免れたものはない」

「恐ろしいほど執念深いからな」

「先祖代々執念深いのさ」

「それにあいつらは妖術を使う」

「切支丹キリシタンの秘法だそうな」

「切支丹ではない陰陽術おんようじゆつだ」

「日本固有の陰陽術かな」

「そうだ中御門ななかみかどの陰陽術だ」

「おや」と一人が指差した。「いよいよ若殿のご座船が出るぞ」

「どれどれ？ なるほど、ご座船らしいな」

「若殿自らお指図さしずと来た」

「もしも水狐族が崇たるなら、きつと若殿へ崇たるであろうぞ」

「無論水狐族も恐ろしいが、それより私には明神のお罰が一層恐ろしく思われるよ」

「日本第一大軍神、健御名方たけみなかたのご神罰かな」

「これは昔からの云い伝えだが、諏訪法性の冑かぶとには、諏訪明神のご神霊が付き添いおられ

るといふことだ」

「ちやあんと浄瑠璃じよらりにも書いてある奴さ」

「二十四孝のご殿かね」

「……こんな殿ごと添い臥ふしの身は姫御前ひめみづせの果報ぞとツンツンテンと、つまりここだ」

「冗談じゃねえ、助からねえな。口三味線とは念入りだ」

「それからお前奥庭になってよ、白狐しろぎつねめが業わざをするわさ。明神様の使つかい姫ひめは白狐と

いうことになっているんだからね」

「だんだんご座船が近寄つて来る。だんだんご座船が近寄つて来る」こう云つて一人が指差した。

「船首へんぎに立たれたのが若殿らしい」

「皆みな紅あかの扇あふぎをば、手に翳かざしてぞ立ち給うかね」

「ほんとに扇あふぎを持つておられる」

「オーイオーイと差し招まねげば……」

「どつちだどつちだ、熊くま谷がかえ？ それとも巖いづくし島まの清盛かえ」

「どうも不真面目まじまじでいけないね。静かに静かに」と一人が云つた。

で、人達は口を噤つぶみ、湖上うみを颯さつ々と進んで来る若殿のご座船を見守つた。

今、ご座船は停止した。

諏訪い因幡なほ守のかみ忠頼の嫡子ちやくし、頼正君は二十一歳、冒險敢為かんいの氣象きしやうを持った前途有望きの公き達んだちであつたが、皆紅の扇あふぎを持ち、今船首へんぎに突つ立っている。

そのご座船をいによう囀繞して二十隻の小船が漂っていたが、この日てん天晴れ気澄み渡り、鏡のような湖面にはただ一点の曇りさえなく、人を恐れず低く飛ぶ小鳥の、矢のように早い影をさえ、鮮かに映うつして静まり返り、昇つて間もない朝の陽が、赤味を加えた黄金色に水に映じて輝く様など、絵よりも美しい景色である。

東の空には八ヶ嶽が連々として聳そびえ連なり、北には岡谷の小部落が白壁の影を水に落とし、さらに南を振り返つて見れば、高島城の石垣が灰色なして水際みぎわに峙そばだち、諏訪明神の森の姿や、水狐族と呼ばれる巫女の一団が、他人ひとを雑えず住んでいる神宮寺村の丘や林などあるいは遠くあるいは近く、山に添つたり水に傾いたり、朝霧の中に隠いんげん見して、南から西へ延びている。

しかし頼正は景色などには見とれようとはしなかつた。じつと水面を見詰めている、いやそれは水面ではなく、水を透して水の底を、見究みきわめようとしていたのであつたが、幾いく十丈じようとも知れないほど深く湛えた蒼黒い水は、頼正の眼を遮さえぎつて水底を奥の方へ隠している。と、頼正は眼を上げて、二十隻の供船ともぶねを見廻したが、扇を高く頭上へ上げると、横へ一つ颯さつと振つた。

すると、ご座船に一番近い一隻の船の船首から、裸体はだかの男が身を躍らせ湖水の中へ飛び

込んだ。パツと立つ水煙り！ キラキラと虹が射したのは日がまだ高く昇らないからである。
ろう。

若殿頼正を初めとし、船中の武士は云うまでもなく、岸に群がっている町人百姓まで、
固唾を呑んで熱心に水の面を眺めている。

飛び込んだ男は灘兵衛と云つて、わざわざ安房から呼び寄せたところの水練名誉の海男
であつたが、飛び込んでしばらく時が経つのに水の面へ現われようともしない。しかし間
もなく湖水の水が最初モクモクと泡立つと見る間に、忽ちグイと左右に割れ、その割目か
ら灘兵衛が逞しい顔を現わした。プツと深い呼吸をすると、水が一筋銀蛇のようにその
口から迸る。片手で確り船縁を掴み。しばらく体を休めたものだ。

血気の頼正は物に拘らず、じかに灘兵衛へ言葉をかけた。

「どうだ灘兵衛、石棺はあつたか？」

「なかなかもつて」

と灘兵衛は、潮焼けした顔へ笑を浮かべ、

「泥は厚し、水草はあり、湖水の底を究めますこと、容易な業ではござんせん」

「いかさまそれは理もである……しかし、どうだな、ありそうかな？」

「二日、三日ないしは五日、どのように水を潜ったところで、びようびよう森々々と広い湖のこと、そんな小さな石の棺、あるともないとも解りませぬ。が、わつち私のかん感覚から云えば、まずこの辺にはござんせんな」

「うん、この辺にはなさそうか。ではどの辺に埋もれていような？」

「それが解れば占めたもの、心配する事アござんせん」

「ではそれも解らぬかな」頼正の顔はひそ顰んで来た。

「確かなところは解りませんな。……とにかくもう少し西南寄り、神宮寺の方で潜って見やしよう」

「そうか。よし、船を廻せ！」

頼正は漕ぎ手に命を下す。

ギーとろ艀のきし軋る音がして、船隊は船首を西南に向けた。若殿のご座船を先頭にして神宮寺の方へ進んで行く。

見ていた湖岸の連中は、ここでまたひそひそと噂し出す。

「神宮寺の方へ行くようだね」

「これはどうも物ぶつ騒そう千万、死地へ乗り入ると同じようなものだ」

「死地に乗り入るは大袈裟だが、どうも少々心なしだな」

「水狐部落の巫女どもに悪い悪戯いたずらでもされなければよいが」

「あいつらと来たら無鉄砲だからな。ご領主であろうと將軍様であろうと、そんな物には驚きはしない」

「何か事件が起こらなければよいが」

「そうだ、何か悪い事件がな」

「あの潤かつたつ達な若殿様が、そのためご苦勞するようではお気の毒というものだ」

船隊はその間に岬を廻り、すっかり視野から消えてしまった。

一七

若殿のご座船を先頭に、二十隻の船は駈しんしん々と、湖水の波を左右に分け、神宮寺の方へ進んで行ったが、やがて目的の地点まで来ると、頼正は扇で合図をした。二十隻の船はピタリと止まる。

ここ辺りは入江であつて、蘆あしすすきや芒が水際に生おい、陸は一面の耕地であり、所々に森があ

つたが、諏訪明神の神の森が、ひとり抽^{ぬき}んで、聳^{そび}えているのは、まことに神々^{こうげう}しい眺めである。

その神の森を遠く圍繞し、茅^{かやぶき}葺小屋や掘立小屋や朽葉^{くちばいろ}色の天幕^{テント}が、幾何学的の陣形を作り、所在に点々と立っているのは、これぞ水狐族と呼ばれるところの、巫女どもの住んでいる部落であった。炊^{かし}ぎの煙りが幾筋か上がり、鶏犬の啼き声が長閑^{のどか}に聞こえ、さも平和に見渡されたが、しかし人影が全く見え、いつもは聞こえる人の声が、今日に限って聞こえないのは、決して平和の証拠ではない。

船の上から頼正は水狐族の部落を眺めていたが、たちまちその眼を湖上へ返すと、颯^{さつ}と扇を頭上に上げた。とたんにドボンという水の音。灘兵衛が水中へ飛び込んだのである。見る見る湖面へ波紋が起りそれが次第に拡がって行く。

「さて今度はどうであろう？ 石棺^{ありか}の在所は解らずとも、手懸りでもあってくればよいが」

頼正は船首^{へんせき}に突つ立つたままじつと水面を窺^{うかが}った。

突然彼は「あつ」と叫んだ。彼の視線の落ちた所、蒼々^{あおあお}と澄んでいた水の面がモクモクモクモクと泡立つと見る間に牡丹の花^{はなびら}弁さながらの、血汐がポツカリと浮かんで来た。

と、次々に深紅の血汐が、ポカリポカリと水面へ浮かび、その辺一面見ている間に緋毛ひもうせ氈さんでも敷いたように、唐紅からくれなゐと一変した。

侶船ともぶねの武士達はこれを見ると、いずれも蒼褪あおぞめて騒ぎ立て、

「ご帰館ご帰館！」と叫ぶ者もある。

「灘兵衛が殺されたに相違ない」「悪魚の餌食となったのであろう」「いや巫女どもの復讐むじやじゃ！」「水狐族めの復讐むじやじゃ！」

「ご帰館ご帰館！」「船を廻せ！」互いに口々に詈ののり合う。

「待て！」とこの時頼正は、凜然りんぜんとして抑え付けた。「帰館する事まか罷り成らぬ！ 誰か

ある、湖中へ飛び入り灘兵衛の生死を見届けるよう！」

「……………」

これを聞くと船中の武士ども一度にハツと吐胸とむねを突いた。誰も返事をする者がない。互いに顔を見合わせるばかりだ。

「誰かある誰かある、灘兵衛の生死確かめよ！」

船首へんぎに立った頼正は地団駄踏じだんだんで叫ぶのであったが、しかし進み出る者はない。

「臆病者め！ 卑怯ひきょう者め！ それほど悪魚が恐ろしいか！ それほど湖水が恐ろしいか

！ 三万石諏訪家の家中には、真の武士は一人もいないな！ 止むを得ぬ俺が行く！ 俺が湖中へ飛び込んで灘兵衛の生死確かめて遣わす！」

云うと一緒に頼正は羽織を背後へかなぐり捨てた。仰ぎょうてん 天したのは侍臣である。バラバラと左右に取り付いたが、

「こは何事にござります！ 千金の御身おんみにござりまする！ こは何事にござります！」

「放せ放せ！ 放せと云うに！」

「殿！」とこの時進み出たのは諏訪家剣道指南番宮川武右衛門という老人であつた。「殿、私が参りましょう」

「おお武右衛門、そち参るか」頼正は初めて機嫌を直したが、

「しかしそちは既に老年、この難役しとげられるかな？」

「は」と云うと武右衛門は膝の上へ手を置いて慎ましやかに一礼したが、「勝つも負けるも時の運。とは云え相手は妖怪か悪魚。それに安房の海男あまとは云え勇力勝れた灘兵衛さえ不覚を取りました恐ろしい相手、十に九つこの老人も不覚を取るでござりましょう」

「不覚を取ると知りながら、尚その方参ると云うか」審いぶかしそうに頼正は訊く。

「はい、行かねばなりません」 「行かねばならぬ？ それは何故か？」 「他に行く者ごござ

りませぬ」

「いかさま……」と云うと頼正は憤らしいきとお氣に四方を見た。

「いえ、たとえ他にござりましても、この老人遮さへぎつてでもお役を勤めねばなりません」

「はて、それはまた何故であろうな？」

「私、指南番にござります。剣道指南番にござります。しかるにこの頃私は老朽、役に立ちませぬ。それにも拘かからず大殿様はじめ若殿様におかれましても、昔通りご重ちよう用ようくだされ、家中の者もこの老人を疎わろかに扱あおうとは致いたしませぬ。これ皆君家のご恩であること申し上げるまでもござりませぬ。かかる場合にこそこの老人、ご恩をお返し致いたさねばいつむく酬むくうこと出来ましようや……さて」

と武右衛門はこう云つて来てにわかに一膝いざり出たが、「お願いの筋がござります」

一八

「願いの筋とな？ 申して見るがよいぞ」——頼正は優しく云つたものである。

「もしも私不幸にして、悪魚の餌食となりました際には、なにとぞ今回のお企て、すぐに

お取り止めくださいますよう。これがお願いにござります」

「それは成らぬ」と頼正は気の毒そうに頭を振った。

「そちは今回の企てを何んのためと思つておるな？」

「お好奇心の結果と存じまする」 「それが第一の考え違いだ。決して好奇心の結果ではない。誹訪家の恥辱を雪ぎたいためよ」 「これはこれは不思議なご説、私胸に落ちませぬ」

「胸に落ちずば云つて聞かせる、武田の家宝と称されおる誹訪法性の冑なるもの元は誹訪家の宝であつたが、信玄無道にしてそれを奪い、死後尚自分の死骸に着け、所もあろうに誹訪湖の底へ、石棺に封じて葬るとは、あくまで誹訪家を恥ずかしめた振る舞い、これは怒るが当然だ！ 我石棺を引き上げると云うも、法性の冑を奪い返し、家宝にしたいに他ならぬ。何んとこれでもこの企て、好奇心の結果と考えるかな」

「いや」と武右衛門は顔を上げた。

「さようなご深慮とも弁えず、賢しらだつて諫言仕り今さら恥ずかしく存じまする」

「解つてくれたか。それで安心」

「ご免」と云うと武右衛門はスツクとばかり立ち上がった。クルクルと帯を解く。

「いよいよ武右衛門湖水へ入る気か」

「殿、二言はござりませぬ」

「勇ましく思うぞ。きつと仕れ」

「は」

と云うと衣裳を脱ぎ、下帯へ短刀を手挟むと、屹と水面を睨み詰めた。両手を頭上へ上げると見る間に、すべに飛び込んだ。水の音、水煙り、姿は底へ沈んで行く。

頼正を始め家臣一同、齒を喰いしぼりまなじりを裂き、じつと水面に見入ったがしばらくは何んの変つたこともない。

と、忽然こっぜんと浮き上がって来たのは、南無三宝！ 血汐であつた。

「あつ、武右衛門もやられたわ！」

頼正、躍り上がつて叫んだ時、水、ゴボゴボと湧き上がり、その割れ目から顔を出したのは、血にまみれた武右衛門である。

「それ、者ども、武右衛門を助けい！」

「あつ」と云うと二、三人、衣裳のまま飛び込んだが忽ち武右衛門を担かつぎ上げる。

「腕！ 腕！」と誰かが叫んだ。無残！ 武右衛門の右の腕が肩の付け根から喰い取られている。

「負傷と見ゆるぞ、介抱致せ！ ……武右衛門！ 武右衛門！ 傷は浅い！ しっかり致せ！ しっかり致せ！」

「殿、湖底は地獄でござるぞ！」 武右衛門は喘ぎ喘ぎ云うのであった。「巫女姿の一人の老婆……」

「巫女姿の一人の老婆？」 頼正は思わず鸚鵡返す。

「苔蒸した石棺に腰をかけ」

「苔蒸した石棺に腰をかけ？」

「口に灘兵衛の生首をくわえ……」

「ううむ、灘兵衛の生首をくわえ？」

「私を見ると笑いましてござる。あ、あ、あ、笑いましてござる。……あ、あ、あ」

と云ったかと思うとそのままグツタリ首を垂れた。武右衛門は気絶をしたのである。

船中一時に寂然となる。声を出そうとする者もない。湖底！ 湖底！ 湖水の底！ 生首をくわえた水狐族の巫女が、苔蒸した石棺に腰かけている！ ああこの恐ろしい光景が、自分達の乗っている船の真下に、まざまざ存在していようとは。

息苦しい瞬間の沈黙を、頼正の声がぶち破った。

「帰館帰館！ 船を返せ！」

ギー、ギー、ギー、ギー、二十隻の船から艫ろの音が物狂わしく軋きしり出す。

今はほとんど順序もない、若殿のご座船を中に包み、後の船が先になり、先の船が後になり、高島城の水門を差し右往、左往に漕いで行く。

石棺引き上げの第一日目はこうして失敗に終わったのである。

爾来じらい若殿頼正の心は怏々わうわうとして楽しまなかつた。第二回目を試みようとしても応ずる者がなからである。

ある夜、一人城を出て、湖水の方へ彷徨さまよつて行つた。それは美しい明月の夜で湖水は銀のように輝いている。ふと、その時、頼正は、女の泣き声を耳にした。

湖水の岸に柳があり、その根方ねかたに一人の女が、咽むせぶがように泣いている。

頼正は静かに近寄つて行つた。

「見ればうら若い娘だのに、何が悲しくて泣いておるぞ？」こう優しく云つたものである。女はハツと驚いたように、急に根方から立ち上がったが、その女の顔を見ると、今度は頼正が吃驚びっくりした。

月の光に化粧された、その女の容貌きりようが、余りにも美しく余りにも気高けだかく、あまりにも臍へら

たけていたからである。

一九

照りもせず曇りもはてぬ春の夜の朧おぼろづきよ月夜にしくものはなし。

敢あえて春の月ばかりではない、四季を通じて月の光は万ばんしょう象の姿を美しく見せる。

湖水を背にしてスラリと立ち、顔を両袖に埋めながらすすりなきする乙女の姿は、今、月光に化粧されていよいよ益々美しく見える。諏訪家の若殿頼正にはそれがあたかも天上から来た靈的の物のように見えるのであった。

「このような深夜にこのような処で若い女子おんながただ一人何が悲しくて泣いておるぞ」

こう云いながら頼正は乙女の側へ寄つて行つた。

「私わしは怪しい者ではない。相等そうとうの官位のある者だ。心配するには及ばない。私に事情を話すがよい。そなたはどこから参つたな？」

すると乙女は泣く音をね止め、わずかに袖から顔を上げたが、
「京都みやこの産まれでございます」

「ナニ京都みやこ？ おおさようか。京都は帝ていきよう京、天子いまま在す処、この信濃からは遠く離れておる。しかししもやただ一人で京都から参つたのではあるまいな」

「京都から参つたのでございます」

「うむ、そうしてただ一人でか？」

「誘拐かどわかされたのでございます」

「誘拐された？ それは氣の毒。で、何者に誘拐されたな？」

「ハイ、今から二十日ほど前、乳母を連れて清水寺に参詣に参つた帰路、人形使いに身をやつした恐ろしい恐ろしい人買ひとかいに誘拐されたのでございます」

「おおさようか、益 氣の毒、さぞ両親ふたおやが案じていよう、計らず逢つたも何かの縁、人を付けて帰して遣わす」

「はい有難うはございますが、母わたくしと妾ままとは継しい仲、たとえ実家へ帰りましても辛いことばかりでございます」乙女はまたも臆おそれた顔を袖へ埋めて泣くのであつた。

「かえすがえすも不幸な身の上、はてこれは困つたことだ」頼正はその眼をひそ顰めたが、「ところで誘拐かどわかの人買ひとかいは今どこに何をしておるぞ？」

「どこにどうしておりますやら、和田峠とやら申す山で、ようやく人買ひとかの眼をくら眩ませ、

夢中でここまで逃げては来ましたが、知人はなし蓄えもなし、うろろう徘徊っておりま
すうちには乞食非人に墮ちようとも知れず、また恐ろしい人買いなどに捕えられないもの
でもなし、それより綺麗なこの湖水へいつそ身を投げ死んだなら、黄泉の實の母様にお目
にかかることも出来ようかと……」

「それでここで泣いていたのか？」

「はい」と云つて身を顫わせる。

月は益 冴え返つて乙女の全身は透通るかとはばかり、蒼白い光に煙っている。その肩
の辺に纏れかかった崩れた髪もつの乱らがましき、顔を隠した袖を抜けてクツキリと白い富
士額、腰細く丈高く、艶と凄とを備えた風情には、人を悩ますものがある。二十一歳の
今日まで無数の美女に侍かれながら、人を恋したことのない武道好みの頼正も、この時は
じめて胸苦しい血の湧く思いをしたのである。

「そうしてそちの名は何んと云うぞ？」

「はい、水藻と申します」

「水藻、水藻、しおらしい名だ。これからそちはどうする気だな？」

「はい、どうしたらよろしいやら、いつそやっぱり湖水の底へ……どうぞ死なしてください

りませ！ どうぞ死なしてくださいませ！」物狂わしく身をもがく。

「この頼正がある限りは決してそちは死なしはせぬ。何故そのように死にたいぞ？」

「憐れな身の上でございますゆえ……」

「この頼正がある限りはお前は不幸に沈ませては置かぬ。それともそちは私わしが嫌いか？」

云い云い肩へ手を置いた。水藻はそれを避けようともしない。堅く身を縮めるばかりである。

「返辞のないは厭いやと見える」

水藻みずもは無言で首を振る。

「それともそちは恥はずかしいか？」

乙女は黙つて頷いた。

「まだそちは死にたいか？」

「死ぬのが厭いやになりました」

「楽しく二人で生きようではないか」

水藻は袖から顔を上げたが涙に濡れた星のような眼が、この時かすかに微笑ほほえんだ。

「おお笑つたな。そうなくてはならぬ。私わしも寂しい身の上だ。不足のない身分ながら、い

つも寂しく日を送つて来た。だがこれからは慰められよう。私は事業を恋と換えた。恋の美酒うまさけに酔い痴れよう。ほんとに男と云うものは、身も魂も何物かに打ち込まなければ生き甲斐がいがない。私はこれまで荒々しい武道と事業とで生きて来た。それがいよいよ行き詰まったところで計らずも女の恋を得た。これで楽しく生きることが出来る。お前は私の恩人だ。そうして私の恋人だ。私はお前を放しはせぬ」彼の顔からは憂鬱ゆううつが消え、新しく希望が現われたのである。

二〇

こういう事があつてから十日余りの日が経った。その時諏訪の家中一般に一つの噂が拡まつた。

——若殿が毎夜城を出てどこかへ行かれるというのである。——

——それから間もなく若殿に關してもう一つの噂が拡まつた。若殿にはこの頃隠し女が出来てそこへ通われるというのである。——
で、人達は取り沙汰した。

「武道好みの若殿に女が出来たとは面白いな」

「さて、どんな女であろうぞ？」 「いったい何者の娘であろうな？」 「家中の者の娘であろうか？」 「それとも他国の遊女売女かな？」 「湖水の石棺を引き上げようというあの乱暴な計画もくろみがどうやらお蔭で止めになったらしい。これだけでも有難い」 「女大明神と崇あがめようぞ」 「それにしてもその女はどこに囲われているのであろう？」 「どうぞ一眼見たいものだ」 「いずれ美人に相違あるまい」 「石部金吉の若殿をころりと蕩たらした女だから、それは美人に相違ないとも」 「いやいや案外そうではあるまい。奇抜好みの若殿だ、人三にん化七ばけの海千物うみせんものを可愛がつておられるに違いない」 「ははあこれももつともだな」 「轆轤ろくろツ首ではあるまいかな」 「夜な夜な行灯あんどんの油を嘗なめます」 「一つ目の禿かむろではあるまいかな」 「信州名物の雪女とはどうだ」 「ところが今は冬ではない」 「ううん、それじゃ夏女か」 「そんな化物聞いたこともない」 「河童かっぱの化けたんじやあるまいかな」 「永明寺山えいめいじやまの狸もみぢかも知れぬ」 「唐沢山からさわやまの狐きつねであろう」 「いや貉むじなだ」 「いや河獺かわうそよ」 「いやいや鼯む鼠さきびに相違ない」 —— 噂は噂を産むのであった。

そのうち、家中の人達の眼に、当の若殿頼正が、日に日に凄すこいように衰弱するのが、不思議な事実として映るようになった。

——そこでまた噂が拡まつた。

「これは魅入られたに違いない。いよいよ相手は怪性けしやうの物だ」「貉かな河童かな。きつと岡谷の河童であろう」「いや違う。そうではあるまい、これは水狐族に相違ない」

「あツ、なるほど！」

と人々は、この意見に胆きもを潰つぶした。

「いかさまこれは水狐族であろう。水狐族なら崇たる筈だ」

「そうだこれは崇る筈きやつだ。彼奴きやつらが永い間守り本尊として守護をして来た湖水の石棺を引き上げようとしたのだからな」「彼奴らの仲間には眼の覚めるような美しい女がいるという事だ」「しかもあいつらは魔法使いだ」「その上恐ろしく執念深い」「偉い物に魅入られたぞ」「若殿のお命もあぶなかるう」「お助けせねば義理が立たぬ」「臣下として不忠でもあろう」「しかしいったいどうしたらいいのだ？」「何より先に行やることは女の在ありか
を突き止めることだ」

「しかしどうして突き止めたものか？」

「誰が一番適任かな？」

「拙者突き止めてお眼にかける！」

こう豪然と云つた者がある。佐分利流の槍術指南右田運八みぎたうんぱち無念齋であつた。

「お、右田殿か、これは適任」

「さよう、これは適任でござる」

人々は同音に煽りあお立てた。「是非ともご苦勞願いたいもので」

「よろしゅうござる、引き受け申した。たかが相手は水狐族の娘、拙者必ず槍先をもつて悪魔退散致させましょう」

——で、運八はその日の夜、手慣れた槍を小脇に抱え、城の奥殿若殿のお部屋の、庭園の中へ忍び込み、様子いかにと窺つた。

深夜の風が植え込みに当たり、ザワザワザワと音を立て、曇つた空には星影もなく、城内の人々寝静まつたと見え森閑として物凄。その時雨戸が音もなく開き人影がひらりと下り立つた。他ならぬ若殿頼正である。

眼に見えぬ糸に曳かれるように、傍目わきめもふらず頼正は、スーツ、スーツと歩いて行く。

すると裏門の潜り戸くぐりが、これも人あつて開けるかのように、音も立てずスーツと開いた。それを抜けて城外へ出る。犬を吠えず鶏も啼かぬ寥々りょうりょうせきせき寂々じやくじやくたる屋敷町を流星のように走り過ぎる。向かう行手は神宮寺であらう。その方角へ走って行く。

「さてこそ」と運八は思いながら、二間あまりの間隔を取りこれも負けずに直走ひたはしる。

町を抜けると野良のらである。野良の細道を二個の人影が、足音も立てずに走って行く。間もなくこんもりとした森へ出た。頼正は森の中へ走り込む。で、運八も走り込み、やがてその森を抜けた時には、頼正の姿は見えなかった。

「これはしまった」と呟いた時、一人の老婆が向こうから来た。何やら思案をしていると見えて、首を深く垂れている。

「ご老婆ちよつと物を尋ねる」

運八は切急せつきゆうに声を掛けた。「立派な若いお侍がたった今この道を行つた筈。そなた見掛けはしなかつたかな？」

二一

老婆は返辞をしなかつた。何やら音を立てて食っている。そうしてクスクス笑っているらしい。

「年寄りの分際ぶんざいで無礼な奴！ これ返辞を何故しない」

右田運八は怒鳴りながら老婆の肩をムズと掴んだ。しかし老婆は返辞をしない。やはり俯向うつむいて笑っている。そうして何か食っている。クツクツと云うのは笑い声であり、ビチャビチャと云うのは物を食う音だ。

運八はいよいよ激げつこ昂し肩へ掛けた手へ力を入れた。と、その手がにわかしびに癱痺れ不意に老婆が顔を上げた。白金のような白髪を冠った朱盆のような赭あかい顔が暗夜の中に浮いて見えたが、口にも鼻にも頬顎にもベツタリ生血が附いている。両手でしっかりと抱えているのは半分食いかけた生首である。切り口から血汐したたが滴っている。それは灘兵衛の首であった。

はつと思つたその瞬間運八はグラグラと眼が眩まわつた。それから彼はバツタリ倒れ、そのまま氣絶をしたのである。

数人の百姓に介かいほう抱され、彼が氣絶から甦よみがえ生なまつた時には、その翌日の朝の陽が高く空に昇っていた。

この運八の失策は忽たちまち城下の評判となり武士と云わず町人と云わずすっかり怖おそけを揮ふるつてしまい、日の暮れるのを合図にして人々は戸外へ出ようともしない。頓とみに城下は寂さびれ返り諏訪家の武威さえ疑われるようになった。

しかるに若殿頼正は依然として城を抜け出してどこへともなく通って行く。そうして日に夜に衰弱する。崇りた！ 崇り！ 水狐族の崇り！ いったいどうしたらよいのであろう！

この奇怪な諏訪家の噂は、伊那の内藤家へも聞こえて来た。

ある日、駿河守正勝は鏡葉之助をお側へ召したが、

「気の毒ながら諏訪家へ参り、妖怪あやかし見現わしてはくれまいかな」さも余儀なげに頼んだものである。

「は」と云ったが葉之助は迷惑そうな顔をした。

「諏訪家と当家とは縁辺である。聞き捨て見捨てにもなるまいではないか」

「他に人はござりますまいか？」

「そちに限る。そちに限る。何故と申すに他でもない大鳥井紋兵衛を苦しめた得体の知れなかつた妖怪も、一度そちが見舞つて以来姿を潜めたというではないか。そちに威徳があればこそだ。私わしから頼む、参つてくれ」

「いかなる名義で参りましょうや？」

「当家からの使者としてな。若殿頼正の病氣見舞いとしてな」

「やむを得ませぬ、ご諛かしこみ、ともかくも参ることに致しましょう」

「首尾よくやれば当家の名譽。諏訪家においても恩に着よう。さていつ頃出立するな？」

「事は急ぐに限りません。明早朝お暇を賜わり、諏訪へ参るでござりましょう」

「供揃い美々しく致すよう」

——で、その翌朝、大供を従え、鏡葉之助は発足した。玲瓏たる好風貌、馬上手綱を

掻い繰って、草木森々たる峠路を伊那から諏訪へ歩ませて行く。進物台、挿箱、大鳥

毛、供奴、まことに立派な使者振りである。

中一日を旅で暮らし、その翌日諏訪へ着いたが既に飛脚はやってある。使者の行くこ

とはわかつている、諏訪家では態々人を出し、国境まで迎えさせたが、まず休息という

ところから城内新築の別館へ丁寧に葉之助を招待した。

翌日が正式の会見日である。

その夜諏訪から重役が幾人となく挨拶に来たが、千野兵庫が来た時であった、葉之助

は卒然と訊いた。

「お家は代々文学のお家柄、蔵書など沢山ござりませうな？」

「さよう、相等ござります」

「文庫拝見致したいもので」

「いと易いこと、ご案内致しましょう」

兵庫は葉之助を導いて書籍蔵へ案内した。実に立派な文庫である。万卷に余る古今の書が整々然として並べられてある。

葉之助は心中感に耐えながら「ス」の部を根気よく調査したが、その結果ようやく探し当てたのは「水狐族縁起」という写本であつて、部屋に戻ると葉之助は熱心にそれを読み出した。

水狐族なるものの発生とその宗教の輪廓りんかくとが臚おぼろげ気ながらも解つて来た。

——平安朝時代のことであるが、この諏訪の国の湖水の岸に一個の城が聳そびえていた。城の主人あるじを宗介むねすけと云いその許婚いいなずけを柵しがらみと云つたが柵は宗介を愛さずに宗介の弟の夏彦を命を掛けて恋した果て、その夏彦の種を宿し産み落とした娘を久田姫と云つた。これぞ悲劇の始まりで、宗介と夏彦とは兄弟ながら恋敵こいがたきとして闘つた。

諏訪湖にまたは天竜川に、二人の兄弟は十四年間血にまみれながら闘ったが、その間柵と久田姫とは荒廢た古城で天主教を信じ佗しい月日を送っていた。十四年目に宗介は弟夏彦の首級を持ち己が城へ帰っては来たがもうその時には柵は喉を突いて死んでいた。

「俺はあらゆる人間を呪う。俺は浮世を呪つてやる！」こう叫んだ宗介が八ヶ嶽へ走つて眷属を集めあらゆる悪行を働いた後、活きながら魔界の天狗となりその眷属は窩人と称し、人界の者と交わらず一部落を造つたといふことは、この物語の冒頭において詳しく記したところであるが、一人残つた久田姫こそ、いわゆる水狐族の祖先なのであつて、父夏彦の首級を介えた憐れな孤児の久田姫は、その後一人城を離れ神宮寺村に住居して、聖母マリヤと神の子イエスを、守り本尊として生活したが、次第に同志の者も出来、窩人部落と対抗しここに一部落が出来上がり、宗教方面では天主教以外に日本古来の神道の一派中御門派の陰陽術を加味し、西洋東洋一味合体した不思議な宗教を樹立したのである。そうして彼らの長たる者は必ず久田の名を宣り、若い時には久田姫、老年となつて久田の姥と、こう呼ぶことに決つていた。そうして彼らの長となる者は必ず女と決つていた。

彼ら部落民全体を通じて最も特色とするところは、男女を問わず巫女をもつて商売とす

るといふことと、部落以外の人間とは交際まじわらないといふことと、窩人を終世の仇とすることと、妖術を使うといふことなどで、わけても彼らの長おきとなるものは、今日の言葉で説明すると、千里眼、千里耳、催眠術、精神分離、夢遊行むゆうこう、人心觀破術といふようなものに、恐ろしく達しているのであった。……

「ふうむ、そうか」

と葉之助は、写本を一通り読んでしまうと、驚いたように呟いた。

「容易ならない敵ではある。それに人数が多すぎる。一部落の人間を相手としては、いかほど武道に達した者でも、討ち果たすことは困難むずかしかろう。これは充分考えずばなるまい。……いや待てよ、それでもない。彼らの長さえ討ち取ったなら、諏訪家に纏まつわる禍わざわいだけは断ち切ることが出来ようも知れぬ。うむ、そうだ、この一点へ、ひとつ心を集めて見よう」

森閑と更けた城内の夜、別館客座敷の真ん中に坐り葉之助はじっと考え込んだが、

「考えていても仕方がない。味方を知り敵を知るは必勝の法と兵学にもある。これから窺くっそり出かけて行き、水狐部落の様子を見よう」

スツと立って廻廊へ出、雨戸を開けると庭へ出た。城の裏門までやって来ると一人の番

人が立っていた。

「どなたでござるな？　どこへおいでなさる？」

「拙者は内藤家より使者の者、所用あつて城下へ出ます。早々小門をお開けくださるよう」「はっ」と云つて式しき体たいしたが、「たとえいかなるご仁じんに致せ、刻限過ぎにござりますれば開門いたすことなりませぬ」

「ほほう、いかなる人といえども刻限過ぎにはこの小門を通行致すことなりませぬとな」

「諏訪家の掟おきてにござります」

「しかるに毎夜その掟を破り他出する者がござるとのこと、何んと不都合ではござらぬかな」

「いやいや決してさような者、諏訪家家中にはおりませぬ」

「いやいや家中の侍さむらい衆しゅうではない。ご一門中の立派なお方だ」

「はて、どなたでございましょうや？」

「すなわち若殿頼正公」

「あッ、なるほど！」と思わず云つて門番はキョトンと眼を丸くした。

「何んとでござるな。一言もござるまい」

葉之助は笑つたものである。

「いや一言もござりませぬ」

「しからば開門なさるよう」

「やむを得ぬ儀、いざお通り」

ギーと門番は門を開けた。ポンと潜つた葉之助は、昼間あらかじめ調べて置いた、野良の細道をサツサツと神宮寺村の方へ歩いて行く。遅い月が出たばかりで野面は蒼茫と光つている。微風に鬢の毛を吹かせながら急かす焦心らず歩いて行くものの心の中ではどうしたものかと、策略を巡らしているのであつた。

間もなく遙かの行手に当たつて水狐族の部落が見渡された。家数にして百軒余り、人数にして三百人もあろうか、今はもちろん寢静まつていて人影一つ見えようもしない。夜眼にハツキリとは解らないが、家の造り方も尋常と異い、きわめて原始的のものらしく、ひときわ眼立つ一軒の大厦は、部落の長の邸であろう。あたかも古城のそのように、千木や勝男木が立ててある。そうして屋根は妻入式であり、邸の四方に廻縁のある様子は、神明造りを想わせる。

と、忽然その辺から音楽の音が聞こえて来た。

「はてな？」と呟いて葉之助は思わず足を止めたものである。

二三

音楽の音は幽かではあるが美妙な律呂を持つている。楽器は羯鼓と笛らしい。鉦の音も時々聞こえる。

葉之助はしばらく聞いていたがやがて忍びやかに寄って行った。木蔭に隠れて向こうを見ると、神明造りの館の庭に数人の女が坐っていたが、いずれも若い水狐族の女で、一人は笛、一人は羯鼓、一人は鉦を叩いている。そうして一人の老年の女が、その中央に坐っていたが何やら熱心に祈っているらしい。チン、チン、チンと鉦の音、カン、カン、カンと羯鼓の音、それを縫って笛の音がヒュー、ヒュー、ヒューと鳴り渡る。それが睡気な調和をなし、月夜を通して響き渡る。

静かに老婆は立ち上がった。それから両手を差し出した。それを上下へ上げ下げする。何かを招いているらしい。

と、城下の方角から、一つの黒点があらわれたが、それが風のように走って来る。魔法

使いの老婆の手が遙かに犠牲いけにえを呼んだのもあろう。チン、チン、チン、カン、カン、カン、ヒュー、ヒューと音楽の音は次第次第に調子を早め、上げ下げをする老婆の手がそれに連れて速くなる。黒点は次第に近寄って来る。点が棒になり棒が人形となり、月の光を全身に浴びた一人の若い侍の姿が、やがて眼前へ現われた。諏訪家の若殿頼正である。三人の女と老婆とは、にわかにスーツと立ち上がった。そうして音楽を奏しながら階段を悠々と昇り出した。やはり老婆は左右の手を上へ下へと上げ下げする。やがて屋内へ姿を消した。

頼正の眼は見開かれている。凝然じつと前方へ注がれている。しかし眠っているらしい。ただ足ばかりが機械的に動く。階段の前へ来たかと思うともう階段を昇っている。あたかも物に引かれるように、軀からだを斜めに傾かげたかと思うとスーツと屋内へ入り込すべんだ。

後は森然しんと静かである。音楽の音も聞こえない。

木蔭で見えていた葉之助は何がなしにゾツとした。

「……水狐族の妖術だな。あの老婆が長おきなのであろう。人を音楽で引き寄せる。不思議なことがあるものだ。……家の中で何をしているのだろうか？」

強い好奇心に誘われて静かに葉之助は木蔭を立ち出で、階段へ足をそつと掛け一階二階

と昇つて見た。とたんにヒューと空を切つて一本の投げ棒が飛んで来たが、葉之助の足を払おうとする。ハツと驚いた葉之助は、身を躍らせて階段からヒラリと地上へ飛び下りた。しかしどこにも人影はない。月の光が蒼茫と前庭一杯に射し込んでいた。木立や家影いえかげを黒々と地に印しるしているばかりである。

葉之助はまたもゾツとした。「帰つた方がよさそうだ」こう思わざるを得なかった。そこで彼は身を忍ばせ水狐部落を抜け出し、野良の細道をスタスタと湖水の岸まで引き返して来た。

一人の女が湖水の岸の柳の蔭に立っている。どうやら泣いているらしい。

「これ女中どうなされたな？」

葉之助は怪しんで近寄つて行つた。見れば美しい娘である。

「このような深夜よふけにこのような所で、何を泣いておられるな？」

「はい」と云つたがその娘は顔から袖を放そうとはしない。白い頸、崩れた髪、なよなよとした腰の辺りあた、男の心を恋に誘い、乱らがましい心を起こさせようとする。

「どこのお方で何んと云われるな？」

葉之助は優しくまた訊いた。

「産まれは京都、名は水藻、恐ろしい人買いにさらわれまして……」

「いやいやそうではござるまい」鏡葉之助は静かに云った。

「生れは神宮寺、名は久田……」

「え？」と娘は顔を上げる。

「馬鹿！」と一喝、葉之助は、抜き打ちに颯と切り付けた。と、娘は狼狽しながらも、ピヨンと背後へ飛び退くと、袖を手に巻きキリキリと頭上高く差し上げたが、それをグルグルグルグルと、渦巻きのように廻したものである。

心に隙はなかったが、相手の不思議の振る舞いを怪しく思った葉之助は、じつとその手へ眼を付けた。次第に精神が恍惚となる。すなわち今日の催眠術だ。葉之助はそれへ掛かったのである。「あ、やられた」と思った時には、身動きすることさえ出来なかった。月も湖水も柳の木も、娘の姿ももう見えない。グルグルグルグルと渦巻き渦巻く奇怪な物象が眼の前で、空へ空へ空へ空へ、高く高く高く高く、ただ立ち昇るばかりである。

彼は刀を握ったまま湖水の岸へ転がった。彼は昏々と眠ったのである。そうして翌朝百姓によって呼び覚まされたその時には、腰の大小から衣裳まで悉く剥ぎ取られていたものである。

二四

これは武士たる葉之助にとつては云いようもない恥辱であつた。

彼は城内の別館で、爾來客を避けて閉じ籠もつた。そうして病氣を口実に、正式の使者の会見をさえ延期しなければならなかつた。

しかし忽ちこの噂は城の内外へ拡まつた。

「内藤家より参られた病氣見舞いの使者殿が不思議なご病氣になられたそうな」

「さよう不思議なご病氣にな。一名仮病とも云われるそうな」「不面目病とも申されるそうな」「恥晒らし病とも申されるそうな」——などと悪口を云う者もある。どう云われども葉之助にはそれに反抗する言葉がない。

「噂によれば葉之助という仁は、内藤殿のご家中でも昼行灯と異名を取つた迂濶者だということであるが、それが正しく事実ならさような人間を使者によこされた内藤家こそ不屈き千万」こう云う者さえ出て来るようになった。

「いやいやそれは中傷で、葉之助殿は非常な武芸者、高遠城下で妖怪を退治し、武功を現

わしたということでござる」稀まれにはこう云つて葉之助を、弁護しようとする者もあつた。

「何さ、高遠の妖怪は諏訪の妖怪と事異かわり意気地いくじがないのでござろうよ」などと皮肉を云う者もある。一方若殿頼正は、誰がどのようにに警護しても、時刻が来れば忽然こつぜんと抜け出し、城から姿を隠すのであつた。そうして日夜衰弱し、死は時間の問題となつた。

しかも、葉之助は寂然せきぜんと、別館に深く籠もつていて、他出しようともしないのである。

ある日葉之助はいつも通り別館の座敷に端座してじつと思案に耽ふけつていた。彼の前には、「水狐族縁起」が、開いたままで置いてある。彼は今日までに幾度となくこの写本を読み返した。そうしてこの中から何らかの光明何らかの活路を発みつけ見みそうとした。しかし不幸にも今日までは見出すことが出来なかつた。

彼はカツと眼を開けた。それから改めて読み出した。と、にわかには彼の眼は一行の文字に喰い入つた。

「八ヶ嶽山上窩人しんしゆうに対しては、深しん讐しゆう綿々つ尽ときく期無なけん、これ水狐族の遺訓こつぜんたり」

こうそこには記されてある。

「うん、これだ！」

と葉之助はボンとばかりに膝を叩いた。

「なんとという俺は迂濶者だ。これほど立派な活路があるのに、それに今まで気が付かなかったとは……八ヶ嶽山上の窩人に対し水狐族が深讐とみなすからには、窩人の方でも水狐族を深讐と見ているに相違ない。したがって窩人の連中は、水狐族に対して敵対の手段を考えているに相違ない。ではその窩人と邂逅いざあつて水狐族に対する敵対の手段を尋ねたとしたらどうだろう！ 恐らく彼らは喜んで教えてくれるに違いない。八ヶ嶽に行つて窩人と逢おう！」

日没ひぐれを待つて葉之助は窺り城を抜け出した。

途中で充分足拵ぜしちうえをし、まず茅野宿ちのじゆくまで歩いて行き、そこから山路へ差しかかった。

葉くすりさわ 沢、神之原、柳沢。この柳沢で夜を明かし翌朝は未明に出発した。八手まで来て北に曲がったが、もうこの辺は高原で、これより奥には人家はない。阿弥陀ヶ嶽の山骨を上へ上へと登つて行く。途中一夜野宿をした。

三日目の昼頃たど辿り着いたのは「鼓ヶ洞」の谿谷たにあいで、見ると小屋が建っていた。幾年風雨に晒さらされたものか屋根も板囲いも大半崩れ見る影もなく荒れていたが、この小屋こそは十数年前に窩人の娘山吹と城下の商あきゆうど人多四郎とがしばらく住んでいた小屋なのである。二人の間に儲けられた猪太郎と呼ぶ自然児もかつてはここに住んでいた筈だ。それらの人

達はどこへ行つたろう？ 山吹は既に死んだ筈である。しかし多四郎や猪太郎は今尚活きている筈だ。

鏡葉之助は小屋の前にやや暫時しばらく立っていた。不思議にも彼の心の中へ、何んとも云われない懐かしの情が、油然ゆうぜんとして湧いて来た。遠い昔に度々聞きそうして中頃忘れ去られた笛の音色が卒然と再び耳の底へ響いて来たような、得えも云われない懐かしの情！ 思慕の情が湧いて来た。しかしそれは何故だろう？ そうだそれは何故だろう？ 葉之助にとつて「鼓ヶ洞」は何んの関係もないではないか、今度が最初はじめての訪問ではないか。鏡葉之助は鏡葉之助だ。他の何者でもないではないか。

それとも葉之助と「鼓ヶ洞」とは何か関係があるのであろうか？

「これは不思議だ」と葉之助は声に出して呟いた。「遠い遠い遠い昔に、私わしは何んだかこの小屋に住んでいたような気持ちがある。……しかしそんなことのありようはない！」忽然、この時絶壁の上から、人の呼び声が聞こえて来た。

「おいでなさい！ おいでなさい！ おいでなさい！」慈愛に充ちた声である。

「おいでなさい、おいでなさい、おいでなさい！」

慈愛に溢れた呼び声がまた山の上から聞こえて来た。

鏡葉之助はそれを聞くと何んとも云われない懐かしの情が油然と心へ湧き起こった。

「誰かが俺を呼んでいる。行つて見よう、行つて見よう」

忙しく四辺を見廻した。正面に当たつて崖がある。崖には道が付いている。その道は山上へ通っている。

で葉之助はその道から山の上へ行くことにした。苔に蔽われ木の葉に埋もれ、歩き悪い道ではあつたけれど、葉之助にとつては苦にならなかつた。で、ズンズン登つて行く。

こうしてようやく辿りついた所は、いわゆる昔の笹の平、すなわち窩人の部落であつて、諸所に彼らの住家があつたが、人影は一つも見られなかつた。

見られないのが当然である。十数年前に窩人達は漂泊の旅へ上つたのだから。

しかしもちろん葉之助にはそんな消息は解っていない。で、窩人の廃墟ばかりあつて、窩人その者のいないということが、少なからず彼を失望させた。

「だがさつきの呼び声は決して自分の空耳ではない。確かに人間の呼び声であつた。そ

の人間はどこにいるのであろう？」

そこで彼は何より先にその人間を探すことにした。

一軒一軒根気よくかつては窩人の住家であり、今は狐狸の巣となっている、窟作りの小屋小屋を丁寧いわざに彼は探したが、人間の姿は見られなかった。

「さては空耳あだみみであつたのかしら？」

ようやく疑わしくなつた時、またもや同じ呼び声がどこからともなく聞こえて来た。

「いらつしやい、いらつしやい、いらつしやい！」と。

声は山の方からやって来る。

で葉之助は元氣付き声のする方へ走つて行つた。荒野を上の方へ越した時、丘の上に森があり、森の中に神殿があり、内陣の奥に檜を持ったさも厳めしい木像いかが突つ立っているのを見つけたが、これぞ天狗の宮であり、厳めしい武人の木像こそ宗介天狗のご神体なのであつた。しかしこれとて葉之助には何が何んであるか解つてはいない。

とは云え何んとなくその木像が尊く懐かしく思われたので、葉之助は手を合わせて恭しく拝した。と、その時人声うやうやがした。

「おお猪太郎、よく戻つたな」

ギョツと驚いた葉之助が思わずその眼を見張った時、木像の蔭からスルスルと、白衣長髪の人影が、彼の眼の前へ現われた。まことに神々しい姿である。慈愛に溢れた容貌である。人と云うより神に近い。

その神人はまた云った。

「おお猪太郎、よく戻ったな」

意外の人物の出現に、胆を潰した葉之助はしばらく無言で佇たたずんでいたが、この時にわかに一礼し、

「これはどなたか存じませぬが、お人違いではございませぬかな。私事は高遠の家中、鏡葉之助と申す者、猪太郎ではございませぬ」

「さようさよう只今の名は葉之助殿でござったな。しかしやっぱり猪太郎じゃ。さよう少くも幼名はな」神々しい姿のその人はこう云うと莞爾にこやかに微笑んだが、「何んとそうではござらぬかな」

「いえいえそれも違います。私の幼名は右三郎、このように申しましてございます」

「さようさようそんな時代もあった。しかしそれはわずかな間じゃ。しかもそれは仮りの名じゃ。方便に付けた名であつたがしかしその事はやがて自然に解るであろう。そうして

それが解つた時から、お前は悲惨な人間となろう。恐ろしい恐ろしい『業』の姿がまざまざお前に見えて来よう。世にも不幸な人間とは、他でもないお前の事じゃ。お前は産みの母親の呪詛の犠牲になつて居るのじゃ。そうしてお前は実の父親をどうしても殺さなければならぬのじゃ。しかしそれは不可能のことじゃ。子として実の父親を殺す！これは絶対に出来ないことじゃ。出来ないからこそ苦しむのじゃ。そこにお前の『業』がある……お前は不幸な人間じゃ。母の怨みを晴らそうとすればどうでも父親を殺さねばならぬ。子としての道を歩もうとすれば、母親の臨終の妄執を未来永劫解くことが出来ず、浮かばれぬ母親の亡魂をいつまでも地獄へ落として置かねばならぬ」

すると葉之助は笑い出したが、

「これは何をおつしやることやらとんと私には解りませぬ。私の実の父も母も飯田の城下に健康に現在も生活しておりますものを、臨終の妄執だの亡魂だのと、埒もないことを仰せられる。お戯れも事によれ、程度を過ぎせば無礼ともなる。もはやお黙りくださるよう。私、聞く耳持ちませぬ！」

果ては少しく怒りさえした。

すると神々しいその人は、さも気の毒と云うように、慈愛の眼差しで葉之助を見たが、
「お前の父母は何んと云うな？」

「父は南条右近と申し、信州飯田堀石見守の剣道指南役にござります。母は同藩の重役に
て前川頼母の第三女お品と申すものにござります」

「さようさようそうであつたな。それは私も知^{わし}つておる。しかしそれは仮り親じゃ」

「ナニ、仮り親でございますと？ 奇怪な仰せ、その仔細は？」 葉之助は気色ばむ。

「いやいやそれは明かされぬ。しかしそのうち自然自然明瞭^{あきららか}になる時節があろう。その時
節を待たねばならぬ」

「先刻より様々の仰せ、不思議なことばかりでござりますが、そもそもあなたにはいかな
るご身分、いかなるお方でございましょう？」

「私はお前の産まれない前に、この山中にいた者じゃ」

「ははあ、さようでございますか」

「そうしてお前の実の親とは深い関係のあるものじゃ。殊^{こと}に死なれた母親とはな」

「……？」

「善、平等、慈悲、平和、私はこれらの鼓吹者こすいしやじゃ」

「ははあさようでございませうか」

「お前の産まれる少し前に私はこの山を立ち去った。徳の不足を感じたからじゃ。しかし私にはこの山の事がいつも心にかかっていた。で私は四六時中お前の傍そばに付いていた。いやいや敢てお前ばかりではなくあらゆる不幸な人間にはいつも私は付いているのだ。ある人のためには涙であり、ある人のためには光である、これが私の本態だ。……で私にはお前の事なら何から何までわかっている」

「そうしてあなたのお名前は？」

「この山では私の事を白法師と呼んでいた」

「白法師様でございませうか」

「困った事にはこの浮世には、私と反対な立場にいて私に反対する悪い奴がいる。悪、不平等、呪詛じゆそ、無慈悲、こういう物の持ち主で、やはり私と同じように総あらゆる人間に付きまとうている」

「それは何者でございませうか？」

「黒法師とでも云つて置こう。また悪玉と云つてもよい。したがって私は善玉で。……三世を貫く因果なるものはこの善玉と悪玉との勝負闘争に他ほかならない。……しかしこれは事新しく私が説くには当たるまい。とは云えお前の身の上に降りかかっている悪因縁はその黒法師の為なす業じや。そうして少くも現在いまのところでは私の力ではどうにもならぬ。時節を待つより仕方がない。……しかもお前は産みの母の呪のろい詛の犠牲になっているばかりか、今や新しく種族の犠牲にその身を抛擲なげうとうと心掛けている」

「種族？ 種族？ 種族とは？」

「お前の属する種族の事じや」

「私は士族でございます」

「さよう、今はな、今は武士じや」

「元から武士でございます」

「そうではない、そうではない」

「では何者でございますよう？」

「それは云えぬ。今は云えぬ。それをお前へ教える者は他でもない黒法師じや」

「その黒法師はどこにおられますよう？」

「あらゆる人間に付きまどっている。だからお前にも付きまどっている」

「私の眼には見えませぬ」

「間もなくお前にも見えて来よう」

「種族の犠牲？ 黒法師？ ああ私には解らない！」

「水狐族！ 水狐族！」 白法師は卒然と云った。「これをお前は滅ぼそうとしてこの山中へ来たのであろうな？」

「仰せの通りでございます」

「窩人にとっては水狐族こそは祖先以来の仇なのじゃ」

「そのように聞いておりました」

「だからお前の仇でもある」

「それはなぜでございますか？」

「やがて解る、やがて解る。……とまれお前はお前の属するある一つの種族のため、他の種族と戦わねばならぬ。水狐族ともと戦わねばならぬ。そうしてお前は久田の姥うばをお前の手によって殺さねばならぬ。これはお前の宿命だ」

「しかしどうしたら憎い妖婆を討ち取ることが出来ましようか？」 こう葉之助は不安そう

に訊いた。

「あれを見るがいい。あれを見る」

こう云いながら白法師は内陣の木像の持つている平安朝型の長槍を、手を上げて指差した。

「あの木像こそ他ならぬ窩人族の守護神まもりがみじゃ。彼らの祖先宗介じゃ。窩人どもの族長じゃ。族長の持つている得物えものをもつて、他の族長を討つ以外には、妖婆を討ち取る手段はない」

云われて葉之助は躍り上がったが、神殿へ颯さっと飛び込んで行くと、木像の手から長槍をグイとばかりに挽もぎ放した。

二七

……「久田の姥を殺した刹那せつな、お前はまたも呪詛のろいを受けよう。恐ろしい呪詛！ 恐ろしい呪詛！ 不幸なお前！ 不幸なお前！」

背後の方から白法師がこう云って呼びかけるのを聞き流し、鏡葉之助が勇躍して山を里

の方へ馳せ下ったのはそれから間もなくの事であった。

彼はただただ嬉しかった。

「憎い妖婆を討つ事が出来る。堕ちた名誉を取り返すことが出来る。呪詛が何んだ、呪詛が何んだ！」

これが葉之助の心持ちであった。

「有難いのはこの槍だ。槍よどうぞ俺のために靈妙な力を現わしてくれ。魔法使いの久田の姥めをただ一突きに突き殺させてくれ！」

これが葉之助の願いであった。

足を早めてドンドン下る。

途中で一夜野宿をし、その翌日の真昼頃、高島の城下に帰り着いたが、故意と城中へは戻らずに、城下外れの旅籠屋で夜の来るのを待ち設けた。

やがて日が暮れ夜となり、その夜が更けて深夜となった。審かる家人を尻目に掛け、葉之助は宿を出た。

湖水に添って田圃路を神宮寺村の方へ歩いて行く。

間もなく水狐族の部落へ来たが、以前来た時と変わりなく家々は森然と寝静まり、犬の

声さえ聞こえない。

「よし」

と呟くと葉之助は、木蔭家蔭を伝いながら、久田の姥の住居の方へ、足音を忍んで寄って行つた。

広い前庭までやって来た時彼はハツとして立ち止まつた。

幽かな空の星の光にぼんやり姿を照らしながら四、五人の人影が蠢うごめいている。コンコンという釘くぎを打つ音、シュツシュツという板けずを削る音、いろいろの音が聞こえて来る。何やら造つているようである。

「はてな？」

と葉之助は怪しんだ。で、一層足音を忍ばせ、暗い物蔭を伝い伝い、彼らの話し声を聞き取ろうと、そつちの方へ寄つて行つた。

何やら彼らは話し合っている。

「どうしたどうした、まだ出来ないか」

「節があるので削り悪いにく」

「いいかげんでいい、いいかげんでいい」

シュツシュツという板を削る音。

「釘をよこせ、釘をよこせ」

「おつとよしきた、それ釘だ」

コンコンという釘を打つ音が、夜の静寂しじまを貫いて変に陰気に鳴り渡る。何を造っているのだろうか。

とまた彼らは話し出した。

「莫迦ぼかにゆつくりしているじゃないか」

「それは、最後のお別れだからな」

「齧かじり付いているんだな」

「うん、そうとも、几帳きちょうの中で」

「百歳過ぎたお婆とな」

「どう致しまして、十七、八、水の出花のお娘ごとよ」

「アツハハハ、違えねえ」

彼らは小声で笑い合い、ひとしきりコンコンと仕事をした。

「思えばちよつとばかり可哀そうだな」また一人が云い出した。

「若い身空を水葬礼か」

「それも皆んな心がらだ」

「俺らに逆らつた天罰だ」

「湖水を濺つた天罰だ」

「諏訪家の若殿頼正なら、若殿らしく穏おとなしくただ上品に構えてさえいれば、こんな目にも逢うまいものを」

「いい気味だよ、いい気味だよ」

そこで彼らはまた笑つた。

「……さて、あらかた棺も出来た」

「早く死骸なきがらが来ればいい」

そこで彼らは沈黙した。

これを聞いた葉之助はゾツとせざるを得なかつた。

彼らは頼正の死骸を納める棺を造つていたのであつた。そうして若殿頼正は、今夜もこの家へ引き寄せられ、美しい娘の水藻みずもに化けた百歳の姥久田おきなのために誑たぶらかされているらしい。しかも若殿頼正の生命いのちは寸刻せまに逼っているらしい。棺！ 棺！ 水葬礼！ 彼らは頼

正の死骸を棺の中へぶち込んでそれを湖水へ沈めるのらしい。それが目前に逼っている！
「これはこうしてはいられない」

葉之助は足擦りした。とたんにガチャンと音がした。彼は何物かに躓つまずいたのである。ハツと思つたが遅かつた。棺造りの水狐族が四人同時に立ち上がり、ムラムラとこつちへ走つて来る。

「もうこうなれば仕方がない。一人残らず討ち取つてやろう」

突嗟に思案した葉之助は、そこに立っていた杉の古木の驚くばかり太い幹へピッタリ体をくっ付けた。

それとも知らず水狐族は四人塊かたまつて走つて来る。

二八

眼前三尺に逼つた時、葉之助の手はツト延びた。真つ先に進んだ水狐族の胸の真ん中を裏搔うしろかくばかり、平安朝型の長槍が、電光のように貫いた。ムーと云うとぶつ倒れると、もう槍は手もとへ引かれ、引かれたと思う隙もなく、颯さっと翻かえつた石突きが二番目の水狐族の

咽喉のどを刺す。ムーと云つてこれも倒れる。敵ありと知つた後の二人が、踵を返して逃げようとするのを追い絶すがつて横撲り、一人の両足を払つて置いて、倒れるのを飛び越すと、最後の一人を背中から田楽刺しに貫いた。

眼にも止まらぬ早業である。声一つ敵に立てさせない。

ブルツと血顫ちぢふるいした葉之助、そのまま前庭を突つ切ると、正面に立っている古代造り、久田の姥の住む館へ、飛燕ひえんのように飛び込んで行つた。

階段を上がると廻廊で、突き当たりは杉の大戸、手を掛けて引き開けると灯火のない闇の部屋、そこを通つて奥へ行く。と、一つの部屋を隔てて仄ほのかに灯影が射して来た。

窺たい寄つた葉之助、立ててある几帳の垂れ布たきぬの隙から、内の様子を覗いて見たが、思わずズツと総毛立つた。

艶あでやかな色の大振り袖、燃え立つばかりの緋の扱帯しこぎ、刺繍ぬいをちりばめた錦の帯、姿は妖嬌たる娘ではあるが頭を見れば銀の白髪、顔を見れば縦横の皺しわ、百歳過ぎた古老婆が、一人の武士を抱き介かかえている。他ならぬ若殿頼正で、死に瀕した寡やっれた顔、額の色は藍あゐのように蒼あおく唇の色は土気を含み、昏々として眠っている。

老婆は口をカツと開けたがホーツ、ホーツ、ホーツ、ホーツと、頼正公の顔の辺へ息を

しきりに吹きかける。そのつど頼正は身悶えする。

じつと見定めた葉之助は、几帳をパツと蹴退けるや、ヒラリと内へ躍り込んだ。ピタリと槍を構えたものである。

さすがに老婆も驚いたが、抱いていた頼正を投げ出すと、スツクとばかり立ち上がった。身の長天井へ届くと見えたが、これはもちろん錯覚である。

二人は眼と眼を見合わせた。

「小僧推参！」

と忍び音に、久田の姥は呷つたが、右手に振り袖をクルクルと巻くと高く頭上へ差し上げた。すなわち彼女の慣用手段、眠りを誘う催眠秘術、キリキリキリと廻し出す。

あわやまたもや葉之助は、恐ろしい係蹄へ落ちようとすると、

と、奇蹟が現われた。

平安朝型の長槍が、すなわち窩人の守護本尊宗介天狗の木像から借り受けて来た長槍が、葉之助の意志に關係なく自ずとグルグル廻り出した事で、頭上に翳した妖婆の手が左へ左へと廻るに反し、右へ右へ右へと廻る。すなわち彼女の催眠秘術を突き崩そうとするのである。

葉之助は驚いたが、それにも増して驚いたのは実に久田の姥うばであった。

彼女はじつと槍を見た。見る見る顔に苦悶ききんが萌もし、眼に恐怖が現われたが、突然口から呻き声が洩れた。

「宗介の槍！ 宗介の槍！ ……おおその槍を持っているからは、汝おのれは窩人わにんの一味だな！」
しかし葉之助は返辞さえしない。ジリジリジリと突き進む。それに押されて久田の姥は一足一足後へ退がる。

やはり二人は睨み合っている。

頭上に高く翳かざしていた久田の姥の右の手が、この時にわかにか脇へ垂れた。一髪の間突き出した槍！ したたか鳩尾みぞおちを貫いた。

しかし久田は倒れなかった。

両手を掛けて槍の柄をムズとばかり握ったものである。

「……呪詛のろわれておれ窩人わにんの一味！ お前には安穩あんのんはあるまいぞよ！ お前は永久死ぬことは出来ぬ！ お前は永久年を取らぬ！ 水狐族の呪詛のろい妾めかけの呪詛！ 味わえよ味わえよ味わえよ！」

こう妖婆は叫んだが、それと一緒に息絶えた。

初めてホツとした葉之助は、昏倒している頼正を片手を廻して背中に負い、片手で血まみれの槍を突き、階段を下りて庭へ出た。

部落は幸いにも寝静まっている。これほどの騒動も知らないと見える。

で、葉之助は静々と水狐族の部落を引き上げて行く。

部落を抜け田圃へ出で湖水に添って引き上げて行く。

妖婆の呪詛のろいの言葉など、彼にとつては何んでもなかった。若殿頼正を救ったこと、禍わざわいの根を断つたこと、墮ちた名誉を恢かい復ふくしたこと、これらが彼には嬉しかった。

こうして彼はその夜の暁あけがた方、高島城の大手の門へ、血まみれの姿を現わした。

怨念復讐の巻

一

鏡葉之助の槍先に久田の姥が退治られて以来、諏訪家の若殿頼正は、メキメキと元気を恢復した。

使命を果たした葉之助は、非常な面目を施した。彼の武勇は諏訪一円、武士も町人も賞讃した。彼に賜わった諏訪家の進物は、馬五頭でも運び切れなかった。

いよいよ諏訪家に暇いとまを告げ、彼は高遠へ帰ることになった。諏訪家では一流の人物をして、彼を高遠まで送らせた。

さて高遠へ着いて見ると、彼の功名は注進によつて既すでに一般に知れ渡っていた。だから大変な歓迎であつた。

いかに阿呆あほうを装つても、もう誰一人葉之助を愚おろか者とは思わなかつた。彼は高遠一藩の者から、偶像とされ亀鑑きかんとされた。

「葉之助様がお帰りなされたそうで」

「おお、お帰りなされたそうで」

「大変にご功名をなされましたそうで」

「そういうお噂だ。結構なことだ」

「お偉いお方でございますのね」

「まず高遠第一であろうな」

「あの、それに私達には、ご恩人でございますわ」

「そうともそうとも、恩人だとも」

「あのお方がおいでくだされて以来、妖怪あやかしが出なくなりましたのね」

「おおそうだ、有難いことにな」

「お礼申さねばなりませんわ」

「私もとうからそう思っているのさ」

「どうしたらご恩が返されましょう」

「さあ、そいつが考えものだて」

「まさかお金も差し上げられず……」

「相手はご家老のご子息様だ、そんな事は断じて出来ない」

「では、品物も差し上げられませんのね」

「とてもお納めくださるまいよ」

「ではお父様おとうさまいっそのこと、お招待まねきしたら、いかがでしょう？」

「うん、そうしてご馳走ちそうするか」

「それがよろしいかと存じます」

「なるほどこれはよいかもしれない」

大鳥井紋兵衛と娘お露とは、ここでようやく相談を極めた。

翌日紋兵衛は袴羽織はかまはおりで、自身鏡家へ出掛けて行った。

帰国以来葉之助は、いろいろの人から招待されて、もう馳走には飽き飽きしていた。で、紋兵衛に招かれても心中大して嬉しくもなかった。と云って断れば角が立つ。そこでともかくも応ずることにした。もつとも娘のお露に対しては淡々あわあわしい恋を感じていた。

「あの娘は美しい。そうして大変初々ういういしい。父親とは似も似つかぬ。会って話したら楽しいだろう」こういう気持ちも働いていた。

中一日日を置いて彼は大鳥井家へ出掛けて行った。

心をこめた種々の馳走はやはり彼には嬉しかった。誠まごころ心のこもった主人の態度や愛あいぎ嬌よう溢れる娘の歓待もてなしは、彼の心を楽しいものにした。殊にお露が機会おりあるごとに彼へ示す恋の眼使いは、彼の心を陶然とうぜんとさせた。さすがは豪家のことであって書画や骨董こつどうや刀剣類には、素晴らしいような逸品いっぴんがあつたが、惜し気なく取り出して見せてくれた。これも彼には嬉しかった。

お露とたった二人だけで、数奇を凝らした茶室の中で、彼女の手前で茶をよばれたのは、分けても彼には好もしかった。

石州流の作法によつて造り上げられた庭園を、お露の案内で彷徨つた時、夕月が梢に差し上つた。

「綺麗なお月様……」

「おお名月……」

二人は亭に腰掛けた。

葉籠りをした小鳥の群が、にわか騒がしく啼き出した。あまりに明るい月光に、朝が来たと思つたのであろう。

いつか二人は寄り添っていた。互いの体の温りが、互いの体へ通つて行く。二人の心は恍惚となつた。

ふとお露は溜息をした。

と、葉之助も溜息をした。

ピチツと泉水で魚が跳ねた。

後はひっそりと静かである。

互いに何か話そうとして、なんにも話すことが出来なかつた。話そうと思えば思うほど口が固く結ばれた。

で二人は黙っていた。二人とも若くて美しい。二人とも恋には経験がない。これが二人には初恋であった。

二人は漸次^{だんだん}恥ずかしくなった。で顔を反^{そむ}向け合った。しかし体はその反対に相手の方へ寄って行つた。胸が恐ろしく波立って来た。そうして手先^{かみ}が幽かに顫え、燃えるように身内が熱くなつた。

二

やっぱり二人は黙っていた。

もし迂^う濶^{かつ}に物でも云つて、そのため楽しいこの瞬間が永遠に飛び去ってしまったなら、どんなに飽^あ気^けないことだろうと、こう思つてもいるかのように、二人はいつまでも黙っていた。

若さと美貌と勇氣と名聲、これを一身に兼備している葉之助のような人物こそは、お露のような乙女にとつては、無二の恋の対象であつた。ましてその人は家のためまた大事な父のためには疎^{おろそ}かならぬ恩人である。——で、一眼見たその時から、お露は葉之助に捉^{とら}え

られた。時が経つにしたがつてその恋心は募つて行つた。葉之助を家へ招くように父に勧めたというのも、この恋心のさせた業であつた。

今こそ心中を打ち明けるにはまたとない絶好の機会である。場所は庭の中の亭である。すぐ側に恋人が坐つてゐる。美しい夕月の宵である。二人の他には誰もいない。……しかし、彼女は処女であつた。そうして性質は穏しかつた。無邪気に清潔に育てられて来た。どうして直接に思ふ事を思ふ男へ打ち明けられよう。

葉之助にとつてはこれまでは、このお露という美しい娘は淡い恋の対象に過ぎなかつた。ただ時々思い出し、思い出してはすぐ忘れた。しかるにこの日招かれて来て、そうして彼女に会つて見て、そうして彼女から卒直の恋の素振りを見せられて、始めて彼は身を焼くような恋の思いに捉えられた。彼は彼女に唆られたのである。恋の窓を開かれたのである。

彼のような性質の者が、一旦恋心を唆られると坂を転がる石のように止どまるところを知らないものである。……鬱勃たる覇氣、一味の野性、休火山のような抑えられた情火、これが彼の本態であつた。しかし彼は童貞であつた。どうして直接に思ふ事を思ふ女へ打ち明けられよう。

で、二人は黙っていた。しかし二人は二人とも、相手の心は解っていた。不満ながらも満足をして二人は黙っているのであった。

「これ葉之助、ちよつと参れ」

ある日父の弓之進が、こう葉之助を部屋へ呼んだ。

「は、ご用でございますか？」

「お前近頃大鳥井家へ、足繁しげく参るということであるが、何んと思つて出かけるな？」

云われて葉之助は顔を赧あからめたが、

「はい、いえ、別に、これと申して……」

「もちろん、行つて悪いとは云わぬ。また先方としてみればいわばお前は恩人であるから、招いて饗もてなし応もしたかろう。呼ばれてみれば断わりもならぬ。だから行くのは悪くはないが、どうも少し行き過ぎるようだ」

「注意することに致します」

「そうだな。少し注意した方がいい。家中の評判も高いからな」

これには葉之助も驚いた。

「家中の評判とおっしゃいますと？」

「何さ、別に心配はいらぬ。お前は今では家中の花、悪いに付け善いに付け噂をされるのは当然だよ」

「どんな噂でございましょう？」

「ちと、そいつが面白くない。……大鳥井家は財産家それに美しい娘がある。で、その二つを目的として、繁々通うところ云うのだ」

「……………」

「アツハハハハ、莫迦な話だ。不肖なれど鏡家は当藩での家老職、まずは名門と云つてよい。たとえ財産はあるにしても大鳥井家はたかが百姓、そんなものに眼が眩くれようか。それに紋兵衛は評判も悪い」

「はい、さようでございます」

「強慾者だということである」

「そんな噂でございます」

「お露とかいう娘の方はそれに反して評判がよい。だが私は見たわしことはない。美しい娘だということだな？」

「ハイ、よい娘でございます」

葉之助は顔を赧らめた。

「たとえどんなによい娘でも、家格の相違があるからは嫁としてその娘を貰うことは出来ぬ。ましてお前を婿として大鳥井家へやることは出来ぬ」

「参る意りとてございません」

「そうであろうな。そうなくてはならぬ。……さてこう事が解つて見れば痛くない腹を探られたくもない」

「ハイ、さようでございます」

「で、繁々行かぬがよい」

「氣を付けることに致します」

「お前の武勇聰明にはまこと私も頭を下げる。これについては一言もない。ただ将来注意すべきは、女の色香これ一つだ。これを誠むる色にありと既に先賢も申されておる」

「その辺充分将来とも氣を付けるでございますよう」

葉之助は手を支え、謹んで一礼したものである。

三

淡々しいように見えていてその実地獄の劫火ごうかのように身も心も焼き尽くすものは、初恋の人の心である。それを彼は抑えられた。

鏡葉之助はその時以来快々おうおうとして楽しまなかった。自然心が鬱うつせざるを得ない。

鬱うつした心を鬱うつしさせたままいつまでも放うちやち捨て置く時は、おおかたの人は狂暴となる。葉之助の心が日一日、荒々しいものに変わって行ったのは、止むを得ないことである。

彼は時に幻覚を見た。また往々「変な声」を聞いた。

「永久安穩はあるまいぞよ！」その変な声はどこからともなくこう彼に呼び掛けた。気味の悪い声であった。主のない声であった。

そうしてそれは怨恨うらみに充ちた哀切凄せい愴そうたる声でもあった。

そうして彼はその声に聞き覚えあるような気持ちがあった。

この言葉に嘘はなかった。実際彼は日一日と心に不安を覚えるようになった。心の片隅に小鬼でもいて、それが鋭い爪の先で彼の心を引つ搔くかのような、いても立ってもいられないような変な焦しょう燥そうを覚えるのであった。事実彼の心からいつか安穩は取り去られ

ていた。

「どうしたのだろうか？ 不思議な事だ」

彼にとつても、この事實は不思議と云わざるを得なかつた。

で、意志の力をもつて、得体の知れないこの不安を圧伏しようと心掛けた。しかしそれは無駄であつた。

「何物か俺を呪詛のろっているな」

ついに彼はこの点に思い到らざるを得なかつた。

「たしかに、あの声には聞き覚えがある。……おおそうだ、久田の声だ！」

正にそれに相違なかつた。水狐族の長の久田の姥おばの怨念の声に相違なかつた。

久田の姥の怨念は、ただこれだけでは済まなかつた。

間もなく恐ろしい事件が起こつた。そうしてそれが葉之助の身を破滅の淵へぶち込んだ。

ある夜、書見に耽ふけっていた。

と例の声が聞こえて来た。

にわかになが掻き乱れ坐つていることが出来なくなつた。

で、戸を開けて外へ出た。秋の終り冬の初めの、それは名月の夜であったが、彼はフラフラと歩いて行つた。

主水町を過ぎ片羽通りを通り、大津町まで来た時であつたが、一個黒衣の大入道が彼の前を歩いて行つた。

どうしたものかその入道を見ると、葉之助はゾツと悪寒を感じた。

「いよいよ現われたな黒法師めが！ こいつ悪玉に相違ない！」こう思ったからであつた。ムラムラと殺気が萌して来た。で彼は足音を盗み、そつと入道へ近寄つた。

声も掛けず抜き打ちに背後からザツクリ斬り付けたのはその次の瞬間のことであつた。と、ワツという悲鳴が起こり、静かな夜気を顫わせたが、見れば地上に一人の老人が、左の肩から右の胸まで物の見事に割り付けられ、朱に染まつて斃れていた。

「や、これは黒法師ではない。これは城下の町人だ」

葉之助はハツと仰天したが、今となつてはどうすることも出来ない。

しかるにここに奇怪な事が彼の心中に湧き起こつた。……老人を斬つた瞬間に、彼の心中にトグロを巻いていた不安と焦燥が消えたことである。……彼の頭は玲瓏と澄み、形容に絶した快感がそれと同時に油然と湧いた。

飼い慣らされた猛獣が、血の味を知ったら大変である。原始的性格の葉之助が殺人^{ひところし}人の味を知ったことは、それより一層危険な事である。

のみならずここにもう一つ奇怪な現象が行われた。

それは彼が殺人をしたその翌朝のことであつたが、床から起き出た彼を見ると、母親のお石が叫ぶように云つた。

「お前、いつもと顔が異^{ちが}うね」

「本当ですか？ どうしたのでしょうか」

で、葉之助は鏡を見た。なるほど、いささか異つている。白い顔色が益 白く、黒い瞳がいよいよ黒く、赤い唇が一層赤く、いつもの彼よりより一層美しくもあれば気高くもある、一個窈窕^{ようちよう}たる美少年が、鏡の奥に写つていた。

思わず葉之助は唖つたものである。それから呟いたものである。

「不思議だ、不思議だ、何んということだ」

……が、決して不思議ではない。何んのこれが不思議なものか。

美しい犬へ肉をくれると、より一層美しくなる。死骸から咲き出た草花は、他の草花より美しい。

人を殺して血を浴びた彼が、美しくなったのは当然である。

四

二度目に人を斬ったのは、陽の当たっている白昼まひるであった。

その日彼は山手の方あてへもなくブラブラ歩いて行つた。茂みで鳥が啼ないでいた。野の茨いばらの赤い実が珠をつづり草の間では虫が鳴ないでいた。ひどく気持ちのよい日和ひよりであった。

と行手の峠道へポツリ人影が現あらわれたが、長い芒すすきの穂をわけて次第にこつちへ近寄つて来た。見るとそれは黒法師であつた。それと知つた葉之助は思案せざるを得なかつた。

「幻覚かな？ 本物かな？」

その間もズンズン黒法師は彼の方へ近寄つて来た。やがてまさに擦れ違おうとした。その時例の声が聞こえて来た。

「永久安穩はあるまいぞよ」

ゾツと葉之助は悪寒を感じ、それと同時に心の中へ不安の念がムラムラと湧わいで、刀を引き抜いた。そうして袈裟掛けに斬り伏せた。

陽がカンカン当たっていた。その秋の陽に晒らされているのは若い女の死骸であった。

「うむ、やっぱり幻覚であったか」

惘然として葉之助は呟いたもののしかし後悔はしなかった。気が晴々しくなったからである。

三人目には飛脚を斬り四人目には老婆を斬り五人目には武士を斬った。しかも家中の武士であった。

高遠城下は沸き立った。恐怖時代が出現し、人々はすっかり胆を冷やした。

「いったい何者の所業であろう？」

誰も知ることが出来なかった。

家中の武士が隊を組み、夜な夜な城下を見廻ろうという。そういう相談が一決したのは、それから一月の後であった。

で、その夜も夜警隊は粛々と城下を見廻っていた。

円道寺の辻まで来た時であったが、隊士の一人が「あっ」と叫んだ。素破とばかりに振り返って見ると、白井誠三郎が袈裟に斬られ朱に染まって斃れていた。そうして彼のすぐ

背後に鏡葉之助が腕を拱こまぬき黙然として立っていた。

誰がどこから現われ出て、どうして誠三郎を斬ったものか、皆暮かいくれ知ることが出来なかった。

こうしてせつかくの夜警隊も解散せざるを得なかった。

心配したのは駿河守である。例によつて葉之助を召した。

「さて葉之助、また依頼たのみだ。そちも承知の辻斬り騒ぎ、とんと曲くせもの者の目星がつかぬ。ついではその方市中を見廻り、是非とも曲者を捕えるよう」

「は」と云つたが葉之助は、苦笑せざるを得なかつた。

「この事件ばかりは私の手には、ちと合あい兼ねるかと存ぜられます」

「それは何故かな？ 何故手に合わぬ」

「別に理由わけとしてはございませぬが、ちと相手が強過ぎますようで……」

「いやいやお前なら大丈夫だ」

「しかし、なにとぞ、他のお方へ……」

「ならぬならぬ、そちに限る」

そこで止むを得ず葉之助は、殿の命に従うことにした。

ご前を下がつて行く彼の姿を、じつと見送っていた武士があつたが、他ならぬ剣道指南役、客分の松崎清左衛門であつた。

「なんと清左衛門、葉之助は、若いに似合わぬ立派な男だな」

駿河守は何気なく云つた。

「御意ぎよゐの通りにございます」清左衛門は物憂ものうそうに、

「しかし、いささか、心得ぬ節が。……」

「心得ぬ節？　どんな事か？」

「最近にわかには葉之助殿は、器量を上げられてございます」

「いかにもいかにも、あれは奇態だ」

「まことに奇態でございます」

「しかし、元から美少年ではあつた」

「ハイ、美少年でございました。それに野性ひつとがございました。それも鬱々うつうつたる殺気を持つた恐ろしい野性でございました。飯田や高遠で成長ひつとつたとはどうしても思われぬ物もの。凄ごい野性！　で、気の毒とは思いましたが私の門弟に加えますことを、断わつたことが

ございました」

「そういう噂もチラリと聞いた」

「しかるに最近に至りまして、さらにその上へより悪いものが加わりましてございます」
「ふうむ、そうかな？ それは何かな？」

「ハイ、妖気でございます」自信ありげに清左衛門は云った。

「ナニ、妖気？ これは不思議！」

「まことに不思議でございます」

「しかし私わしにはそうは見えぬが。……」

「しかし、確かでございます」

「どういう点が疑わしいな？」

「これは感覚でございます。そこを指しては申されません」

駿河守は首傾かしげたが、「どうも私わしには信じられぬ」

「やがてお解りになりましょう」

殺人の本人、葉之助へその捕り方を命じたのは、笑うべき皮肉と云わざるを得ない。辻斬りが絶えないばかりでなく反対にその数の増したのは当然過ぎるほど当然である。

こうして真の恐怖時代、こうして真の無警察時代が高遠城下へ招来された。

冬の夜空の月凍つて、ビョービョーと吠える犬の声さえ陰に聞こえる深夜の町を、捕り方と称する殺人鬼が影のように通つて行く！ おお人々よ気を付けたがよい。その美しい容貌に、その優雅な姿すがたかたち態かたちに、またその静かな歩き方に！ 彼は人ではないのだから！ 彼は呪われたる血吸鬼バンブなのだから！

しんしんと雪が降つて来た。四辺あたり朦朧もうろうと霧立ちこめ、一間先さえ見え分かぬ。しかし人々よ気を付けなければならぬ！ その朦朧たる霧の中を雪の白無垢しろむくを纏まとつたところの殺人鬼が通つて行くのだから。

いやいや決して嘘ではない！ 信じられない人間は、翌朝早く家を出て、城下を通つて見るがよい。あつちの辻、こつちの往来、向こうの門前、こつちの川岸に袈裟に斬られた男女の死骸が、転がっているのを見ることが出来よう。殺人鬼の通つた証拠である。

「どうも今度の曲者ばかりは、葉之助の手にも合わないらしい」

父、弓之進は呟いた。「ひとつ助太刀をしてやるかな」

事情を知らない弓之進がこう思うのはもつともである。

しかしそれだけは止めた方がいい。毛を吹いて傷を求める悲惨な羽目に墮ちるばかりだから！

「もう捨てては置かれない」

こう呟いた人があった。「やむを得ずば俺が出よう」

それは松崎清左衛門であった。

当時天下の大剣豪、立身出世に意がないばかりに、狭い高遠の城下などにきよくせき跼蹐してはいるけれど、江戸へ出て三番とは下がらぬ、東軍流の名人である。——いかさまこの人が乗り出したなら、殺人鬼といえども身動き出来まい。

しかしはたして出るだろうか？

その夜も雪が降っていた。

からかささ傘を翳した一人の武士が静々と町を歩いていた。と、その後からふくめん覆面の武士が、慕うように追って行った。

角町から三筋通り、辻を曲がって藪小路、さらに花木町緑町、しょうでん 聖天 前を右へ抜け、しばらく行くと坂本町……二人の武士は附かず離れず半はんとき刻あまりも歩いて行つた。

その間、覆面の侍は、幾度か刀を抜きかけたが、前を行く武士の体からひかりもの光物でも射すかのように気遅れして果たさなかつた。

尚二人は歩いて行つた。

木屋町の角まで来た時であつた。もう一人武士が現われた。羅紗らしやの合羽かつぽを纏まとっている。羅紗合羽のその武士は、傘の武士と覆面の武士との、その中間に挟まつた。

それと見て取つた覆面の武士は、さりげなくそつちへ寄つて行つた。

一道の殺気ほとぼし進ると見えたが、覆面の武士の両腕には早くも刀が握られていた。

「待て！」

と云う周章あわてた声！ 合羽の武士が叫んだのであつたが、それを聞くと覆面の武士は、一歩後へ退いた。

「おお、あなたはお父上！」

「おのれ、葉之助！ さては汝なんじが！」

「ご免！」

と叫ぶと覆面の武士すなわち葉之助は踵を返し、脱兎だつとのように逃げ出した。とたんに「かつ」という気合が掛かり、傘の武士の右手から雪礫ゆきづぶてが繰り出された。

手練の投げた雪礫は砲弾ほどの威力があり、それを背に受けた葉之助はもんどりうって倒れたが、そこは必死の場合である。パツと飛び起きて走り去った。あまりに意外な事実
に、呆然とした弓之進はただ、棒のように立っていた。その時彼を呼ぶ者がある。

「鏡氏、お察し申す」

弓之進は眼を上げた。傘の武士が立っていた。

「そういう貴殿は？ ……おお松崎氏！」

「捕えて見れば我が子なり。 ……鏡氏、驚かれたであろうな？」

「葉之助めが曲くせもの者とは。 ……ああ何事も夢でござる」

弓之進は泣然げんぜんと泣いた。

「拙者断じて他言致さぬ。家に帰られ葉之助殿を、何んとかご処分なさるがよかろう」

雪は次第に烈はげしくなつた。弓之進は返辞さえしない。

返辞をしようと思つても口に出すことが出来ないのであつた。

彼は内藤家の家老であつた。その立派な家柄の子が、こんな大事を惹ひき起こし、こんな

動乱を醸すとは、当人ばかりの罪ではない。連なる父母も同罪である。すなわち監督不行届きとして罪に坐さなければならぬだろう。

葉之助へ一封の遺書を残し、弓之進が屠腹して果てたのはその夜の明方のことであつた。

六

弓之進の死は変死であつた。が、内藤家にとつては由緒ある功臣、絶家させることは出来ないといふので、病死といふことに取りつくろわせ、盛んな葬式が終えると同時に家督は葉之助に下された。

ひとしきり弓之進の死について家中ではいろいろ取り沙汰したが、生前非常な人望家でみんなの者から敬われていたので、非難の声は聞かれなかつた。そうしてついに誰一人として自殺の原因を知るものがなかつた。

わずかにそれを知っている者といへば、松崎清左衛門と葉之助だけであつた。

その葉之助は父の死後自分に宛てられた遺書を見て恥じ、泣かざるを得なかった。

「……辻斬りの本人がお前だと知っては、私は生きてはおられない。子の罪を償うため父は潔く切腹する。で、お前の罪は消えた。父の後を追うことはならぬ。決してお前は死ぬことはならぬ。さて私は死に臨んでお前の身上にかかっているある秘密の片鱗を示そう。お前の実父は飯田の家中南条右近とはなっているが、しかし誠はそうではない。お前の実の両親は全然別にある筈だ。とは云えそれが何者であるかはこの私さえ知らないのである。ただし南条右近の子として鏡家へ養子に来たについては、来ただけの理由はある。また立派な経路もある。そうしてそれを知っている者は、私の親友、殿の客分天野北山一人だけである。就いて訊ねるもよいだろう。私は今死を急ぐ、それについて語ることは出来ない。下略」

これが遺書の大意であった。

で、ある日葉之助は北山方を訪れた。

一通り遺書を黙読すると北山は静かに眼をとじた。

「弓之進殿は悪いことを書いた」やがて北山はこう云った。

「それはまた何故でございましょう？」葉之助は訝しそうに訊いた。

「何故と云つてそうではないか。しかし……」

と云つて北山はまたそこで考え込んだが、

「そこがああ仁のよいところかも知れぬ。いつまでもそなたを瞞だまして置くことが、あの仁には苦痛だったのであろう」

「私は誰の子でございましょう？」

「それはこれにも書いてある通り、私わしにも解つていないのだ。強しいて云うなら山の子だ」

「え、山の子とおっしゃいますと？」

「山の子といえば山の子だ、他に別に云いようもない。が、順を追つて話すことにしよう。

……弓之進殿にはその時代葉之助という子供があつた」

「ハハアさようでございしますか」

「ところが病気で早逝そうせいされた。その臨終の時であるが、『代りが来るのだ、代りが来るのだ、次に来る者はさらに偉い』と、こう叫んだということだ」

「不思議な言葉でございしますな」

「ある日私と弓之進殿と、鉢伏山へ山遊びに行った、おりから秋の真つ盛りで全山の紅葉は燃え立つばかり、実に立派な眺めであつたが、突然一頭の大熊が谷を渡つて駈け上つて

来た。するとその熊のすぐ後から一人の子供が走って来た。信濃の秋は寒いのに腰に毛皮を纏っているばかり他には何んにも着ていない。もつとも足には革足袋かわたびを穿はき手には山刀を握っていた。その子供と大熊とは素晴らしい勢いで格闘した。そうして子供は熊を仕止めた。仕止めると一緒に気絶した」

「死んだではありませんまいね」葉之助は不安そうに訊ねた。

「死んだのではない気絶したのだ。ところで不思議にも気絶から醒さめると、弓之進殿をじつと見て、『お父様！』と叫んだものだ。そうしてまたも気絶した。またその気絶から醒めた時には、子供は過去を忘れていた」

「不思議なことでございますな」

「不思議と云えば不思議だが、そうでないと云えばそうでないとも云える。西洋医学ではこの状態を精神転換と云っている。すなわち過去をすっかり忘れ、気絶から醒めたその時から新規に生活くらしが始まるのだ。……それと見て取った弓之進殿は、こう私わしに云われたものだ。『これこそ葉之助が予言した、代りに来る者でございましょう、その証拠には私を見ると、お父様と云いました。で私はこの子を養い養子とすることに致しましょう』そこで私はこう云った。『それは結構なお考えです。しかしこのまますぐに引き取り養い育てる

ということは、鏡家のためにもこの子のためにも将来非常に不幸です。素姓も知れない山の子とあつては殿の思惑おもわくもいかがあろうか、これはいつそ知人に預け、その知人の子供として貰い受けるのがよろしかろう』とな。……その結果として弓之進殿は南条右近殿へ事情を話し、その子供を預けることにした。とこうここまで話して来たらそなたにも見当が付くであろうが、その山の子供こそ、他ならぬ葉之助殿そなたなのだ」

七

この北山ほくざんの説明は葉之助にとつては驚異であつた。彼は疑いもし悲しみもした。しかし結局は北山の言葉を信ぜざるを得なかつた。だがそれにしても素姓の知れない彼のような山の子を、慈愛いづくしみ育てた養父の恩は誠に深いものである。しかるに彼はその養父を非業びごうに死なせてしまったのである。濟まない濟まない濟まないと彼は衷心ちゆうしんから後悔した。

「他にお詫びのしようもない。ただ、立派な人物にならう。それが何よりのご恩返しだ」

それからの彼と云うものは、武事に文事に切磋琢磨せつさたくまし、事ごとに他人ひとの眼を驚かせた。

この彼の大勇猛心には、乗すべき隙もなかつたか、黒法師も現われず、「永久安穩はあ

るまいぞよ」という奇怪な声も聞こえて来なかつた。

で、彼の生活はその後平和に流れたのであつた。しかしたった一度だけ、不思議が彼を襲つたことがあつた。

それは逝く春のある日であつたが、例の大鳥井紋兵衛から、花見の宴に招かれた。で、彼は出かけて行つた。久々で娘のお露とも逢い、心のこもった待遇を受け、鬱していた彼の心持ちも頓に開くを覚えたりして、愉快に一日を暮らしたが、客もおおかた散つたので彼もそろそろ帰ろうとして、尚夕桜に未練を残し、フラリと一人庭へ出て亭の方へ行つて見た。

すると誰やら若い女が亭の中で泣いていた。

近寄つて見ればお露であつた。

亡き父の訓めで、お露との恋は避けてはいたが、それはただ表面だけで、彼の内心は昔と変わらず彼女恋しさに充ち充ちていた。その彼の眼の前に、その恋人の泣き濡れた姿が、夢ではなく現実と、他に妨げる者もなく、たった一人で現われたのであつた。彼の心が一時に燃え立ち、前後も忘れて走り寄り、お露の肩を抱きしめたのは、当然なことと云わなければならぬ。

「何が悲しくてお泣きなさる」

こう云う声は顫ふるえていた。

お露は何んとも云わなかった。ただじつと抱かれていた。

こういう場合の沈黙ほど力強いものはない。こういう場合の沈黙はそれは実に雄弁なのである。

「お露は俺を愛している。その愛のために泣いている」

葉之助はこう思った。

そうしてそれは本当であった。

一時よく来た葉之助が、ピツタリ姿を見せなくなつて以来、お露の恋は悲しみと変つた。月日が経つに従つて、その悲しみは深くなつた。ある種類の女にとっては恋人の姿の見えないことは、その恋をして忘れしめる。少くも恋をして薄からしめる。しかしある種種の女にとつては、反対の結果を持ち来たらせる。

お露は不幸にも後者であつた。

葉之助の姿が見えなくなつてから、本当の恋が始まつたのであつた。

その恋人が久しぶりで今日姿を現わしたのである。耐え忍んでいた恋しさが——持ち堪こら

えていた悲しさが、一時に破れたのは無理もない。しかし彼女は処女であった。その恋しさ悲しさを、恋しい男にうちつけに打ち明けることは出来なかった。そこで彼女は人目を避け、亭へ泣きに来たのであった。

葉之助の手がしつかりとお露の肩を抱いていた。彼女にとってこの事は全く予期しない幸福であった。それこそ全世界の幸福が一度に来たように思われた。彼女の心から一刹いっせつ那悲しみの影が消え去った。身も心も痺しびれようとした。「死んでもよい」という感情が、人の心へ起こるのは、実にこういう瞬間である。

と、葉之助の一方の手が、やさしくお露の顎にかかった。しずかに顔を持ち上げようとする彼女の顔は手に連れて、穏おとなしく上へ持ち上げられ、情熱に燃えた四つの眼が互いに相手を貪むさぼり見た。次第次第に葉之助の顔がお露の顔へ落ちて行つた。お露は歓喜に戦慄せんりつした。彼女は唇をポツと開け、そこへ当然落ちかかるべき恋人の唇を待ち構えた。

母屋おもやの方から人声はしたが、こつちへ人の来る気配はない。二人は文字通り二人きりであつた。すぐに来るのだ恋の約束が！

とたんに噎かすれた女の声が、二人の身近から聞こえて来た。「畜生道！ 畜生道！」それはこういう声であつた。

ハツと驚いた葉之助は、無慈悲に抱いていた手を放した。

素早く四辺を見廻したがそれらしい人の影も見えない。

「はてな？」と彼は呟いたが、やにわに袖を捲り上げた。齒形のあるべきこの腕に、二十枚の齒形は影もなく、それより恐ろしい女の顔が、眼を見開き唇を歪め嘲笑うように現われていた。

「人面痘にんめんそ」

と叫ぶと一緒に、葉之助は小柄を引き抜いたが、グツとその顔へ突き通した。飛び散る血汐、焼けるような痛み、それと同時に人顔は消え二十枚の齒形が現われた。

八

それから間もなく引き続いて、怪しいことが起こつて来た。それはやはり二の腕にある二十枚の齒形に関する事で、そうして対象は紋兵衛であつた。

つまり紋兵衛と顔を合わせるごとに、二十枚の齒形が人面痘と変じ、そうしてこのように叫ぶのであつた。

「お殺しよその男を！」

すると不思議にも葉之助は、その紋兵衛が憎くなりムラムラと殺気が起こるのであった。しかしさすがに刀を抜いて討ち果たすところまでは行かなかつた。

「歯形といい人面疽といい、恐ろしいことばかりが付きまとう。俺は呪詛のろわれた人間だ」
そうして尚もこう思った。

「大鳥井一家とこの俺とは、何か関係かかりあがあるのかも知れない。いったいどんな関係なのだろう？ よくない関係に相違ない。いわゆる精神転換前の俺というものを知ることが出来たら、その関係も解るかも知れない」

しかし彼には精神転換前の、自分を知ることが出来なかつた。

「とにかく俺は大鳥井家へは絶対に足踏みをしたくないことにしよう。お露との恋も忘れよう」
そうして彼はこの決心を強い意志で実行した。

春が逝ゆき尽くして初夏が来た。そうして真夏が来ようとした。

参観さんかんこうたい交替こうたいで駿河守は江戸へ行かなければならなかつた。

甲州街道五十三里を、大名行列いとも美々びびしく、江戸を指して発足したのは五月中旬のことであつた。江戸における上屋敷は芝三田の四国町にあつたが予定の日取りに少しも違たが

わず一同首尾よく到着した。

一行の中には葉之助もいた。彼にとつては江戸は初で、見る物聞く物珍らしく、暇を見てはお長屋を出て市中の様子を見歩いた。

夏が逝つて初秋が来た。その頃紋兵衛とお露とが江戸見物にやって来た。芝は三田の寺町へ格好な家を一軒借りてこれも市中の見物に寧日ないという有様であつた。しかし二人が江戸へ来たのには実に二つの理由があつた。

ふたたび葉之助が遠退いてからのお露の煩悶というものは、紋兵衛の眼には気の毒で見ていることは出来なかつた。葉之助が殿に従つて江戸へ行つてしまつてからは、彼女は病いの床についた。そうしてこのままうちやつて置いたら死ぬより他はあるまいと、こう思われるほどとなつた。

「葉之助殿のお在でになる、江戸の土地へ連れて行つたら、あるいは気の晴れることもあろうか。そうして時々お目にかかつたなら、病いも癒るに違いない」

こう思つて紋兵衛はお露を連れてこの大江戸へは来たのであつた。

それにもう一つ紋兵衛は、五千石の旗本で、駿河守には実の舎弟、森家へ養子に行つたところから、森帯刀と呼ばれるお方から、密々に使者を戴いていたので、上京しなければ

ばならないのであった。

この二人の上京は、実のところ葉之助にとっては、痛し痒しというところであった。彼は依然としてお露に対しては強い恋を感じていた。出逢つて話すのは、もちろん非常に楽しかった。しかし同時に苦痛であった。呪詛のろいの言葉はどうしよう？ 「畜生道！ 畜生道！」 「お殺しよその男を！」 こう二の腕の人面疽にんめんそが、嘲笑あざわらい囁くのをどうしよう？

それは非番の日であつたが、葉之助は市中を歩き廻り、夜となつてはじめて帰路についた。

愛宕下三丁目、当時世間に持て囃はやされていた、蘭医大槻玄卿の屋敷の裏門口まで来た時であつたが、駕籠が一挺下ろしてあつた。と裏門がギーと開いて、中老人が現われた。見れば大鳥井紋兵衛であつた。

「これは不思議」と思いながら、葉之助は素早く木蔭に隠れじつと様子を窺うかがつた。

それとも知らず紋兵衛は、手に小長い箱を持ち、フと駕籠の中へはいつて行つた。と駕籠が宙に浮き、すぐシトシトと歩き出した。

「どんな用があつて紋兵衛は、こんな深夜に裏門から蘭医などを訪ねたのであろう」

こう思つて来て葉之助は合点の行かない思いがした。そこで彼は駕籠の後をつけて見よ
うと決心した。

駕籠は深夜の江戸市中を東へ東へと進んで行つた。これを今日の道順で云えば、愛宕町
から桜田本郷へ出て内幸町から日比谷公園、数寄屋橋から尾張町へ抜けそれをいつ
までも東南へ進み、日本橋から東北に取り、須田町から上野公園、とズンズン進んで行つ
たのであつた。さらにそれから紋兵衛の駕籠は根岸の方へ進んで行き、夜も明方と思われ
る頃、一字の立派な屋敷へ着いた。

「これはいつたいたいどうしたことだ？ 帯刀様たてわきの下屋敷ではないか」後をつけて来た葉之
助は、驚いて呟いたものである。

九

もう夜は明方ではあつたけれど、しかし秋の夜のことである。なかなか明け切りはしな
かつた。

駿河守の下屋敷は森帯刀家の下屋敷と半町あまり距つた同じ根岸の稲荷小路いなりこうじにあつたが、

そこには愛妾のお石の方と、二人のご子息とが住居すまいしていた。総領の方は金一郎様といい、奥方にお子様がないところから、ゆくゆくは内藤家を継ぐお方で、今年数え年十四歳、武芸の方はそうでもなかつたが学問好きのお方であつた。

廊下をへだてて裏庭に向かつた。善美を尽くしたお寢間には、仄ほのかに絹行灯きぬあんどんが点つていた。その光に照らされて、美々しい夜具よのものが見えていたが、その夜具の襟えりを洩れて、上品な寝顔の見えるのは金一郎様が睡つておられるのであつた。

と、その時、きわめて幽かすかな、笛の音が聞こえて来た。いや笛ではなさそうだ。笛のよ
うな物の音であつた。耳を澄ませばそれかと思われ、耳を放せば消えてしまう。そういう
たような幽かな音で、それが漸だんだん次近寄つて来た。しかしどこからやって来たのか、また
どの辺へ近寄つて来たのか、それは知ることが出来なかつた。とまれ漸次その音は寢間へ
近寄つて来るらしい。

金一郎様は睡つていた。お付きの人達も次の部屋で明方の夢をむさぼつていた。で、幽
かな笛のような音を耳にした者は一人もなかつた。

ではその笛のような不思議な音を、耳にすることの出来たものは、全然一人もなかつた
のであろうか？

下屋敷の内には一人もなかった。

しかし一人下屋敷の外で、偶然それを聞いたものがあつた。

他でもない葉之助であつた。

その葉之助は駕籠をつけてこの根岸までやって来たが紋兵衛の乗っているその駕籠が、森家の下屋敷へはいるのを見ると、しばらく茫然ぼうぜんと立っていたが、やがて気が付くと足を返し、主君駿河守の下屋敷の方へ何心なく歩いて行つた。

駿河守の下屋敷と森帯刀家の下屋敷との、ちょうど真ん中まで来た時であつたが、幽かな幽かな笛のような音が、彼の眼の前の地面を横切り、駿河守の下屋敷の方へ、走つて行くのを耳にした。

「なんであろう？」と怪しみながら、彼はじつと耳を澄ませ、その物の音に聞き入つた。音は次第に遠ざかつて行つた。そうして間もなくすっかり消えた。

なんとなく気味悪く思いながら彼は尚しばらく佇たたずんでいた。

「お、これは？」と呟くと、彼はツカツカ前へ進み、顔を低く地面へ付けた。と、地面に何物か白く光る物が落ちていた。そうしてそれは白糸のように一筋長く線を引き、帯刀家の下屋敷と、駿河守の下屋敷とを、一直線に繋つないでいた。

「石灰かな？」と眩しながら、指に付けて嗅いで見て、彼はアツと声を上げた。強い臭気が鼻を刺し、脳の奥まで滲み込んだからで、嘔吐を催させるその悪臭は、なんとも云えず不快であつた。

何か頷くと葉之助は、懐中から鼻紙を取り出し指で摘んで白い粉を、念入りにその中へ摘み入れた。それから静かに帰路についた。

その夜が明けて朝となつた。

いつも早起きの金一郎様が、その朝に限って起きて来ない。お附きの者は不審に思い、そつと襖を開けて見た。金一郎様は上半身を夜具の襟から抜け出させ、両手を虚空でしっかり握り、眼を白く剥いて死んでいた。

これは実に内藤家にとつて容易ならぬ打撃であつた。世継ぎの若君が変死したとあつては、上に対しても面伏せである。

「何者の所業！ どうして殺したのか？」

「突き傷もなければ切り傷もない」

「血一滴こぼれてもいない」

「毒殺らしい徴候もない」

「絞殺らしい証拠もない」

「奇怪な殺人、疑問の死」

上屋敷でも下屋敷でも人々は不安そうに囁き合った。

葉之助は自宅の一室で、鼻紙の中の白い粉を、睨むように見詰めていたが、

「若君弑^{しいぎやく}虐^{びみょう}の大秘密は、この粉の中になければならない」こう口の中で呟いた。

「笛のような美妙^{びみょう}な音^ね！ 不思議だな、全く不思議だ！ 何者の音であったろう？」

一〇

信州伊那郡高遠の城下、三の曲輪^{くわ}町の中ほどに、天野北山の邸があったが、ある日、北山とその弟子の、前田一学とが話し合っていた。

「先生、不思議ではございませんか」こう云ったのは一学で、「突き傷も斬り傷もないそう
うで」

「うん」と北山は腕を組んだが、「毒殺の嫌疑もないのだそうだ」

「心臓痲痺まひでもないそうで」

「絞殺の疑いもないのだそうだ」

「ではどうして逝去なくられたのでしょうか？」

「解らないよ。俺には解らぬ」

「不思議なことでございますな」

「不思議と云えば不思議だが、しかし本来世の中には不思議ということはないのだがな。科学の光で照らしさえしたら、どんなことでも解る筈だ」

「ではどうして金一郎様は、お逝去なくりなされたのでございませう？」

「さあそれは、今は解らぬ」

「でも只今先生には、科学の光で照らしさえしたら、何んでも解るとおっしゃいましたが……」

「うん、そうとも、そう云ったよ。……金一郎様のお死骸なきがらを、親しく見ることが出来たら、俺の奉ずる蘭医学をもつて、きつと死因を確かめて見せる。だが俺は見えていない。変事の起こったのは江戸のお屋敷で、俺はお噂を聞いたまでだ。千里眼なら知らぬこと、江戸の事件は高遠では解らぬ」

「これはごもつともでございませぬ」一学はテレテ苦笑をした。

「だが」とにわかには北山は、四辺を憚るはばか小声となつたが、

「だが、俺には解ることがある」

「ははあ、何事でございませぬ？」

「この事件の目的だがな」

「金一郎様殺しの目的が？」

「一学！ これはお家騒動だよ！」

「よく私には解りませんが」

「当家のお世継ぎはどなたであつたな？」

「それは逝去なくなられた金一郎様で」

「金一郎様逝去なき今は？」

「ご次男金二郎様でございませうが？」

「金二郎様が逝去なくなられたら？」

「先生先生何をおっしゃるので！ 甚だはなはもつて不祥ふしょうなお言葉で」

「まあさ、これは仮定だよ。……金二郎様なき後は誰が内藤家を継つがれるな？」

「もう継ぐお方はございません」

「と云う意味は駿河守様には、お二人しかお子様がないからであろうな？」

「そういう意味でございます」

「しかしお世継ぎがないとあつては、内藤家は断絶する」

「大変なことでございますな」

「大変なことさ。とんでもないことさ。だからどうしても他の方面から、至急お世継ぎを持つて来なければならぬ」

「ははあ、ご養子でございますかな？」

「うん、そうだ、ご近親からな。一番近いご親戚からな」

「これは、ごもつともでございますな」

「ところがあなたが内藤家にとって一番近いご親戚かな？」

「さあ」と云つて考えたが、「森帯たてわき刀様でございましょう」

「そうだよそうだよ、森帯刀様だよ」

こう云うと北山は微妙に笑つたが、

「どうだ」とやがて促すうながように云つた。「解つたかな？ お家騒動の意味が？」

「はい。しかし、どうも私には……」

「おやおや、これでも解らないのか？」

「とんと合点がてんがゆきません」

「頭が悪いな。え、一学」

「私の馬鹿は昔からで」

「それが今日は特に悪い」

「いやはやどうも、お口の悪いことで」

「お前、今日は、便秘だろう？」

「いえ、それでもございませぬ」

「なあに、そうだよ、便秘に相違ない」

「これはまたなぜでございますな」

「便秘だと頭が悪くなる」

「あッ、やっぱり、そこへ行きますので」

「ひまし油を飲めよ。ひまし油を」

「仕方がありません、飲むことにしましょう」

「アツハハハ、それがいい」

面白そうに笑ったが、にわかには真面目になり、

「これは少しく秘密だが、お前にだけ話すことにしよう。この前の参観交替の節、俺も殿のお供をして、江戸へ参ったことがある。するとある日帯刀様から、使いが来て招かれた」

「ははあ、さようでございますか」

「で早速伺候した」

「面白いお話でもございましたかな？」

「ところが一人相客がいた」

「ははあどなたでございましたな？」

「江戸の有名な蘭学医、お前も名ぐらいは知っていよう、大槻玄卿という人物だ」

一一

「はい、よく名前は承知しております」

「帯刀様のご様子を見ると、大分玄卿とはだいぶご懇意らしい。だがマアそれはよいとして、さ

てその時の話だが、物騒な方面へ及んだものさ。と云うのは他ほかでもない、毒薬の話に花が咲いたのさ。どんな毒薬で人を殺したら、後に痕跡きずあとが残らないかなどとな

「なるほど、これは物騒で」

「で俺はいい加減にして、お暇いとまをして帰ったが、いい気持ちはしなかったよ」北山はしばらく黙ったが、「俺の云うお家騒動の意味、どうだこれでも解らないかな」

「ハイ、どうやら臆おぼろげ気ながらも解ったようでございます」一学は初めて頷いた。

「で俺は案じるのだ、どうぞ次男金二郎様に、もしものことがないようにとな」

「これは心配でございますな」

「今度の江戸の事件について、誰かもっと詳しいことを知らせてくれるものはあるまいかと、心待ちに待っているのだがな」

その時、襖が静かにあき小間使いが顔を現わした。

「江戸からのお飛脚ひきやくでございます」

「江戸からの飛脚？ おおそうか。いや有難い。待っていたのだ。すぐ裏庭へ通すよう」

「かしこまりましたでございます」

小間使いが去ったその後で、天野北山は立ち上がった。さて裏縁へ来て見ると、見覚え

のある鏡家の若党山岸佐平がかしこまっていた。

「佐平ではないか。ご苦労ご苦労」

「はっ」と云うと進み寄り、懐ふところ中から書面を取り出したが、

「私主人葉之助より、密々先生に差し上げるようにと、預かり参りましたこの書面、どうぞご覧くださいますよう」

「おおそうか、拝見しよう」

「次に」と云いながら山岸佐平は、また懐中へ手をやると小さい包みを取り出したが、

「これも主人より預かりましたもの、共々ともともご披見くださいますよう」

「そうであったか、ご苦労ご苦労、疲労つかれたであろう、休息するよう」

云いすて置いて置いて北山は、自分の部屋へつとはいった。

書面をひらいて読み下すと、次のような意味のことが書いてあった。

「前略、とり急ぎしたため申し候そうろう、さて今回金一郎様、不慮のことにてご他界遊ばされ、君臣一同愁嘆しゅうたん至極、なんと申してよろしきや、適當の言葉もござなく候、しかるに当夜私事、偶然のこととは云いながら、二、三怪しき事件に逢い、疑惑容易に

解き難きについては、先生のご意見承わりたく、左に列記仕り候。

当日、私非番のため、家を出でて市中を彷徨い、深夜に至りて帰路につき、愛宕下まで参りしおりから、蘭医大槻玄卿邸の、裏門にあたつて一挺の駕籠、忍ぶが如くに下ろされおり、何気なく見れば一人の老人まさにその駕籠に乗らんとす。しかるに全く意外にも該老人こそ余人ならず、先生にもご存知の大鳥井紋兵衛、これは怪しと存ぜしまま後を慕つて参りしところ、紋兵衛の駕籠は根岸に入り我らが主君には実のご舎弟、帯刀様のお屋敷内へ、姿を隠し申し候、誠に奇怪とは存じながら、せんすべなければ立ち帰らんと、歩みを移せしそのおりから、忽ち前面の草原にあたり、あたかも笛を吹くがようなる美妙な音色湧き起こり、瞬間にして消え候さえ、合点ゆかざる怪事なるに、草原を見れば白粉おしろいようなる純白の粉長々と、帯刀様のお屋敷より、我らがご主君の下屋敷まで、一筋筋を引きおり候。

いよいよ怪しと存ぜしまま、その白粉はくふんを摘み取り、自宅へ持ち帰り候が、別封をもつてお眼にかけし物こそ、その白粉にござ候。

かくて翌日と相成るや、金一郎様の変死あり、何んとももって合点ゆかず、異様な感に打たれ候ものから、貴意を得る次第に候が、白粉おしろいようなる白粉はくふんにつき、嚴重な

るお調べ願いたくいかがのものに候や。下略」

「ふうむ、いかさま、これは怪しい」

読んでしまうと北山は、じつと思案の首を傾げた。それからやおら立ち上がると、実験室へはいつて行つた。

まず部屋の戸をしつかりと閉じ、次に火器へ火を点じた。それから葉之助から送つて来た油紙包みの紐を切り、ついで取り出した白粉を、鼻にあてて静かに嗅いだ。

「匂いがする。変な匂いだ」そこでしばらく考えたが、「なんの匂いとも解らない」

それから立ち上がると棚へ行き、試験管を引き出した。白粉を入れて水を注ぎ、さらにその中へ入れたのは紫色をした液体であつた。

で、試験管を火にあてた。

しかし何んの反応もない。

「これはいけない。ではこつちだな」

こう云うと彼は他の薬品を、改めて試験管へ注ぎ込んだ。で、またそれを火にかけた。

やはり何んの反応もない。

北山の顔には何んとも云えない、疑惑の情が現われたが、どうやら彼ほどの蘭学医でも、白粉の性質が解らないらしい。

一一

しかし天野北山としては、解らないと云つてうっちゃやることは、どうにもこの際出来難かつた。

「お家騒動の張本人を、森帯刀様と仮定すると、その連累れんるいが大鳥井紋兵衛、それから大槻玄卿なる者は、日本有数の蘭学医、信州の天野か江戸の大槻かと呼ばれ、俺と並称へいしやうされている。いずれここにある白粉はくふんも、その大槻が呈供して金一郎様殺しの怪事件に、役立てたものに相違あるまい。毒薬かそれとも他の物か、とまれ尋常なものではあるまい。しかるにそれが解らないとあつては、この北山面目が立たぬ。これはどうでも目付け出さなければならぬ」

しかしあせればあせるほど、白粉の見当が付かなかつた。

「これはこうしてはいられない。江戸へ出よう江戸へ出よう。そうして大槻と直かに逢うか、ないしは他の手段を講じて、是が非でも白粉の性質を、一日も早く目付け出さなければならぬ。……一学一学ちよつと参れ！」

「はつ」と云うと前田一学は、もつけない顔をしてはいつて来た。

「江戸行きだ、用意せい」

「江戸行き？　これは、どうしたことで？」

「お前も行くのだ。急げ急げ！」

主人の性急な性質は、よく一学には解っていた。で、理由を訊ねようともせず、旅行の用意に取りかかり、明日とも云わずその日のうちに、二人は高遠を発足した。

一方、鏡葉之助は、北山へ飛脚を出してからも、根岸にある主君の下屋敷を念頭から放すことは出来なかつた。で、非番にあたる日などは、ほとんど終日下屋敷の附近を、ブラ彷徨さまよつて警戒した。

ちようどその日も非番だったので、彼はブラリと家を出ると、根岸を差して歩いて行つた。下屋敷まで来て見たが別に変つたこともない。で、その足で浅草へ廻つた。

いつも賑やかな浅草は、その日も素晴らしい賑にぎわいで、奥山のあたりは肩摩けんま鞞こくげき撃、歩

きにくいほどであった。

小芝居、手品、見世物、かるわざ軽業、——興行物の掛け小屋からは、陽気な鳴り物の音が聞こえ、かつさい喝采をする見物人の、拍手の音なども聞こえて来た。

「悪くないな。陽気だな」

など、彼は呟きながら、人波を分けて歩いて行つた。

と、一つの掛け小屋が、彼の好奇心を刺戟しげきした。「八ヶ嶽の山男」こう看板にあつたからで、八ヶ嶽という三文字が、懐しく思われてならなかつた。

で彼は木戸を払いつと内へはいつて行つた。大して人気もないと見えて、見物の数は少かつた。ちようど折悪く幕間まくあいで、舞台には幕が下ろされていた。で彼は所在なさに見物人達の噂話に、漫然と耳を傾けた。

「……で、なんだ、山男と云つても、妖怪変化じゃないんだな」職人と見えて威勢のいいのが、こう仲間の一人へ云つた。

「そいつで俺おいらも落胆がっかりしたやつさ。あたりめえの人間じゃねえか。俺ら、山男というからにや、頭の髪が足まで垂れ、身長せいの高さが八尺もあつて、鳴く声ねえ鶴ねえに似たりという、そういう奴だと思つてたんだが、篋べらぼう棒な話さ、ただの人間だあ」

「そうは云つてもまんざらじゃねえぜ」もう一人の仲間が口を出した。「間口五間の舞台の端から向こうの端へ一足飛び、あの素晴らしい身の軽さは、どうしてどうして人間業じやねえ」

「あいつにや俺おいらも喫驚びつくりした。こう全然まるで猿猴えてこうだったからな」

「そう云えば長さ三間もある恐ろしいような鱗うわばみを、細工物のように扱った、あの腕だつて大したものさ」

「それに武術も出来ると見えて、棒を上手に使ったがあれだつて常人にや出来やしねえ」

「だがな、眼があつて耳があつて鼻があつて口があつて、どうでもあたりめえの人間だあ、化物でねえから面白くねえ」

その時チョンチョンと拍子木の音が、幕の背後うしろから聞こえて来た。やがてスーツと幕が引かれ、舞台が一杯に現われたが、見れば舞台の真ん中に大きな鉄の檻おりがあり、その中に巨大な熊がいた。

「ウワーツ、荒熊だ荒熊だ！」「熊と相撲を取るんだな」「見遁みがせねえぞ見遁みがせねえぞ！」見物は一度に喝采した。

と異様な風采をした一人の老人が現われた。

「あれいけねえ、お爺とつつあんだぜ」「いえ、あんな年寄りか、熊と相撲を取るのかね」
 「やめなよ爺つあんあぶねえあぶねえ！」
 などとまたもや見物は、大声をあげて喚き出した。

一三

しかし老人はビクともせず、悠ゆう然ぜんと正面へ突つ立ったが、猪ししの皮の袖無しに、葛くず織りの山袴、一尺ばかりの脇差しを帯び、革足袋かわたびを穿はいた有様は、粗野ではあるが威厳あり、侮あなどり難く思われた。

で見物は次第に静まり、小屋の中は森然しんとなった。

「ええ、ご見物の皆様方へ、熊相撲の始まる前に、お話ししたいことがございます」
 不意の、錆さびのある大きな声で、こうその老人が云い出した時には、見物はちよつとびつくりした。

「他のことではございません」老人はすぐに後をつづけた。

「我々山男の身分について申し上げたいのでございます。私の名は杉右衛門、一座の頭で

ございます。一口に山男とは申しませんが、これを正しく申しますと、窩人かじんなのでございませう。そうして住居は信州諏訪、八ヶ嶽山中でございませう。そうして祖先は宗介むねすけと申して平安朝時代の城主であり、今でも魔界の天狗てんぐとして、どこかにいる筈でございませう。本来我々窩人なるものは、あなた方一般の下界人達と、交際まじわりをしないということが掟おきてとなっておりますので、何故というに下界人は、悪者で嘘吐きでペテン師で、不親切者で薄っぺらで、馬鹿で詐欺師さぎしで泥棒で、下等だからでございませう……」

「黙れ！」

と突然さしき棧敷さしきから、怒鳴り付ける声が湧き起こった。

「何を吐ぬかす、こん畜生！ ふざけた事を吐かさねえものだ！ あんまり酷ひどい悪口を云うと、この掛け小屋をぶち壊すぞ！」

「そうだそうだ！」と四方から、それに和する声がした。

「そんな下界が嫌いなら何故下界へ下りて来た！」

「それには訳がございませう。それというのも下界人の、憎むべき恐ろしいペテンから、湧き起こった事でございませう。一口に云うと私の娘が、多四郎という下界の人間にかどわかされたのでございませう。そのみならず、その人間は私どもが尊敬する宗介天狗のご神

体から黄金の甲冑を奪い取り、私どもをして神の怒りに触れしめたのでございます。そのため私達は山を下り、厭な下界を流浪し歩き、こんな香具師のような真似までして、厭な下界人の機嫌を取り、生活して行かなければならないという、憐れはかない身の上になり下ってしまったのでございます」

「態あ見ろ！ いい気味だ！」

また群集は湧き立った。

「しかし」と杉右衛門は手で抑え、「しかし、憎むべき多四郎の、盛んであった運命も、いよいよ尽きる時が参りました。しかも彼は我が子によって命を断たれるのでございます。因果応報天罰覲面、恐ろしいかな！ 恐ろしいかな！ で、復讐をとげると同時に、私どもは下界を棄て、再び魔人の住む所、八ヶ嶽山上へ取って返し、平和と自由の生活を、送るつもりでございます。自然下界の皆様方とも、お別れしなければなりません。そのお別れも数日の間に逼っているのでございます。アラ嬉しやアラ嬉しや！ ついては今日は特別をもつて、我ら窩人がいかに勇猛で、そうしていかに野生的であるかを、お眼にかけること致しましょう。我らにとって熊や猪は、仲のよい友達でございます。その仲のよい友達同士が、相搏ち相戯れる光景は必ず馬鹿者の下界人にも、興味あることでございま

しよう。実に下界人の馬鹿たるや、真に度しがたいものであつて……」

「引つ込め、爺」

と見物は、今や総立ちになろうとした。

と突然杉右衛門は、楽屋に向かつて声をかけた。

「さあ出て来い、岩太郎！」

「応！」

と返辞いよえる声があったが、忽ちたちま一個の壮漢が、颯さっと舞台へ躍り出た。年の頃は四十五、六、腰に毛皮を巻きつけたばかり、後は隆々たる筋肉を、惜し気もなく露出むきだしていたが、胸幅広く肩うずたかく、身長せいの高さは五尺八寸もあるうか、肌の色は桃色をなし、むしろ少年を想わせる。

「やー！」

と叫ぶと檻おりの戸をムズと両手でひっ掴つかんだ。

江戸市中狂乱の巻

浅草奥山の見世物小屋から、葉之助は邸へ帰つて来た。

意外の人が待つていた。

蘭医天野北山と弟子の前田一学とが客間に控えていたのであった。

「おお、これは北山先生」

葉之助は喜んで一礼した。

「前田氏にもよう見えられた」

「葉之助殿、出て来ましたよ」北山はいつになく性急に、「さて早速申し上げる、先日はお手紙と不思議の白粉はくふん、よくお送りくださった。まずもってお礼申し上げます。しかるにお送りの該白粉がい、とんと性質が解らなくてな」

「ははあ、さようでございますか」葉之助は案外だというように、「先生ほどの大医にも、お解りにならないとは不思議千万」

「いや私わしもガツカリした。そうしてひどく悲観した。と云つてどうもうっちゃつては置けない。で、私は一学を連れ、倉皇そうこうとして出て来たのだ。……そこで私は一学を玄卿げんきょう

の邸へ住み込ませようと思う」

「ははあ、それでは先生には、大槻玄卿が怪しいと、こう覚し召し遊ばすので？」

「さよう、怪しく思われてな」北山はしばらく打ち案じたが、「卒直に云うとまずこうだ。

……金一郎様のご世界は、内藤家におけるお家騒動の、犠牲というに他ならぬ。そうして騒動の元兇は、これは少しく畏れ多いが殿のご舎弟帯刀様だ。……いやいやこれには理

由がある。しかしそれはゆつくりと云おう。ところで二人の相棒がある。玄卿と大鳥井紋

兵衛だ。紋兵衛が相棒だということは、実はお前さんの手紙によって想像をしたに過ぎな

いが、いやあいつの性質から云えばそんなこともやり兼ねない。どだいあいつの素姓なる

ものが甚だもって怪しいのだからな。どうしてあれほど金を作ったかも、疑えば疑われる

節がある。それに第一そんな深夜に、ひとりこつそり駕籠に乗って、大槻の屋敷を訪ねた

帰路、帯刀様のお屋敷に寄り、その晩若君金一郎様が、ご変死なされたとあって見れば、

相棒と見てよろしかろう、相棒というのが不穩当なら、関係があると云ってもよい。と

ころで肝腎の白粉だが、これはどうやら毒薬らしい。もつとも森家と内藤家とは相当距

離がへだたっているのに、その二軒の屋敷を繋いでこの白粉が一直線に、地面に撒かれて

あったということから、ちと毒薬にしては変なところもある。うん、どうもこれは少し変

だ。毒薬を地面へふり撒いたところで人の命は取られるものでない。が、どっちみちこの白粉が怪しいものには相違ない。そうしてお前さんの手紙によると、この白粉の筋道に添って、ちようど美^{びみょう}妙な笛のような音が聞こえて来たということであるが、それは今のところ解らない。だがしかしそれらのことも白粉の性質さえ解ったなら、自ら^{おのずか}明瞭になるだろう。とまれこういう不思議な白粉を、造り出すことの出来る者は、大槻玄卿以外には、少くも江戸にはない筈だ。と云うことであつて見れば、何をおいても玄卿の家へ、人を入れて様子を探らせ、薬局を調べる必要がある。ところで私と玄卿とは同業であり顔見知りだ。だから到底住み込むことは出来ない。幸い一学は玄卿とはこれまで一面の識もない。そこで一学を住み込ませ、至急様子を探らせようと思う。グズグズしてはいられない、うっかりノホホンでいようものなら、ご次男様がまたやられる」

「えっ?」

と葉之助は眼を見張った。

「ご次男と申せば金二郎様、それがやられるとおっしゃるのは?」

「やられるともやられるとも。油断をすると今夜にもやられる」北山はキツと眼を据えたが、「あいつらの目的とするところは、内藤家乗っ取りの陰謀だからな、ご長男様ご次男

様、お二人がなくなられるとお世継ぎがない。そこで帯刀様が乗り込んで来られる。どうだ、これで胸に落ちたろう」

云われて葉之助は「ムー」と呻いた。

「いやそれほどの陰謀とは、私夢にも存じませなんだ。これは一刻の油断も出来ない。恐ろしいことでございますな。……」

「人の世は全く恐ろしいよ。さて今度は私の番だが、殿にはお目通りをしないつもりだ。と云うのは他でもない。私が出府をしたと聞いたら真つ先に玄卿めが用心をしよう。連れて紋兵衛も帯刀様も、手控えるに違いない。そうなったらお終いだ。陰謀の手証てしやうを掴むことができない」

「これはごもつともでございますな。それでは手狭でも私の家に、こつそりお在いで遊ばしては」

「いやいやそれも妙策でない。人の出入りもあろうから、どうで知れずには済まされぬ。それより私は町方わしに住んで、自由に活動するつもりだ。ところでお前さんに頼みがある。ご迷惑でも今夜から、下屋敷の方へ出張つてください。そうして例の白粉がもしも地面に撒いてあつたら、用捨なく足で蹴散らしてください。これは非常に大切なことだ」

「かしこまりました。ござりませう。毎晩出張することに致しましょう」
 葉之助は意気込んで引受けた。

二

北山と一学とは人目を憚り、駕籠でこつそり帰った。そうしてどこへ行ったものか、しばらく消息が解らなかつた。

さてここで物語は少しく別の方へ移らなければならない。

ここは寂しい宇田川町、夜がしんと更けていた。

源介という駕籠かご昇かきが、いずれ濁酒どぶろくでも飲んだのであろう、秋だというのに下帯一つ、いいご機嫌で歩いていた。

「金は天下の廻りもの、今日はなくても明日はある。アコリヤコリヤ。アコリヤコリヤ。こんなことを云いながら歩いていた。

と、手近の行手から女の悲鳴が聞こえて来た。

「へへへ、どいつかやってやがるな。アレーと来りやこつちのものだ。こいつ見遁がしてたまるものか。どれどれ」と云うとよろめく足で、声のした方へ走って行った。

はたして小広い空地の中で、二人の男が一人の女を、中へ取りこめて揉み合っていた。

「やい、こん畜生！ 悪い奴だ！」

源介は濁声で一喝した。「ところもあるうに江戸の真ん中で、女悪戯とは何事だ、鯨の源介が承知ならねえ！ 俺の縄張りを荒らしやがって、いいかげんにしろ、いいかげんにしろ！」

この氣勢に驚いたものか、ワーツという二人の男は、空地を突っ切って逃げ出した。

「態ア見やがれ意気地なしめ！ 驚いたと見えて逃げやがった」

云い云い女に近付いて行った。

と、倒れていた若い女は、周章でてムツクリ起き上ったが、源介の胸にすがり付いた。

髪の毛が頬に乱れている。帯が緩んで衣裳が崩れ、夜目にも燃え立つ緋の蹴出しが、白い脛にまつわっている。年の頃は十八、九、恐怖で顔は蒼褪めていたが、それがまた素晴らしく美しい、お屋敷風の娘であった。

しばらくは口も利けないと見えて、ワナワナ体を顫わせるばかり、源介の胸へしがみ付

いている。

源介の魂は宙へ飛んだ。で、むやみと口嘗くちなめずりをした。「こ、こ、こいつア悪かあねえなあ。ううん偉いものが飛び込んで来たぞ。まず俺の物にして置いて、品川へでも嵌はめりやあ五十両だ」

こう思ったそのとたん、女はヒョイと胸から離れ、まず衣裳の乱れを調ととのえ、それから丁寧いねいに辞儀をした。

「あぶないところをお助けください、何んとお礼を申してよいやら、ほんとに有難う存じました」

切り口上で礼を云った。

「へえ、ナーニ、どう致しやして。でもマア怪我けがもなかったようで、いったいどうしたと云うんですえ？」

相手に真面目に出られたので、つい源介も真面目に云った。

「はい、ちよつと主人の用事で、新銭座の方まで参りましたところ後から従つけて来た患者に、……」

「ナール、空地でとつ捉まえられたんだね。で、お家はどこですえ？」

「はいツイその愛宕下で。……あのまことに申し兼ねますが、お助けくだされたおついでに、お送りなされてはくださいますまいか」

「またさっきの悪い奴が追つかけて来ねえものでもねえ、ようござ、送ってあげやしよう」
こうは云つたが源介は、腹の中では舌打ちをした。「どうもこいつア駄目らしいぞ。これが下町の娘つ子なら、たらして宿へも連れ込めるが、山の手のお屋敷風、さようしからばの切り口上じや、ちよつとどうも手が出ねえ。物にするな諦めて、お礼でもしこたま貰うとしよう」

「じゃ姐ねえさん行こうかね」こう云つて源介は歩き出した。

「それではお送りくださいますので、それはマア有難う存じます」云い云い女は並んで歩いた。

柴井町から露月町、日蔭町まで来た時であつたが、

「まあいいお体格でございますこと」不意に女がこう云つた。

「え？」と源介は女を見たが、早速には意味が解らなかつた。「なんですえ、体格とは？」
「あなたのお体でございますわ」

「ナーンだ籠べらぼう棒、体のことか」源介は変に苦笑したが、

「体が資本もとでの駕籠屋商売、そりやあ少しはよくなくてはね」

「ずいぶんお目方もございませうね？」

「へえ」と云つたが源介は、裏切られたような気持ちをした。

「ほんとに何んだいこの女は！ あぶなく酷い目に逢いかかったのに、もう酒しやあしやあ々々してこの通りだ。人の目方まで量はかりやあがる。——十七貫はございませうよ」

「ずいぶん骨太でいらつしやいますことね」

「あれ、あんな事云やあがる。厭になつちまうなこの女は。——ハイハイ骨太でございませうとも」

「ホ、ホ、ホ、ホ、結構ですわ」

「ワーツ、今度は笑いやがった。変に気に入らねえ女だなあ」源介はすっかりウンザリした。

すると、女がまた云つた。

「妾わたくし、さつき、あなたの胸へ、一生懸命すが継り付きましたわね。その時よつく計りましたのよ。ええあなたのお体をね」

源介はピタリと足を止めた。そうして女をじつと見た。ズーンと何物かで脳天を、ぶち

抜かれたような気持ちでした。

と、女は手を上げて、そこに立っていた巨大な屋敷の、黒板塀をトントンと打った。それが何かの合図と見えて、その切り戸がスーと開いた。

「主人の屋敷でございますの、お礼を致したいと存じます。どうぞおはいりくださいませ」
云いすてて女ははいって行った。

何んとも云われない芳香が、切り戸口から匂ってきた。源介にとっては誘惑であった。彼はその匂いに引き入れられるように、ブラブラと内へはいって行った。

間もなく彼の叫び声でした。

「やあ綺麗な花園だなあ」

それから後は寂然しんとなった。

そうして源介はその夜限り、この地上から消えてしまった。彼の姿は未来永劫えいごう、ふたたび人の眼に触れなかった。

「やあ綺麗な花園だなあ」

この彼の叫び声はいったいどういう意味なのであろう？

ここで再び物語は、鏡葉之助の身の上に返る。

ある日葉之助はいつものように、四国町の邸を出て、殿の下屋敷を警護するため、根岸の方へ歩いて行つた。増上寺附近まで来た時であつたが、「ヒーツ」という女の悲鳴がした。同時に山門の暗い蔭から、裾を乱した若い女が、彼の方へ走つて来た。そうしてその後から二人の男が何か喚わめきながら走つて来たが、葉之助の姿を見て取ると元来た方へ引つ返した。

「ははあ、さては狼藉ろうぜきもの者だな」

呟ひしいたとたんに若い女は犇ひしと葉之助へ縋り付いた。衣裳も髪も乱れてはいたが、薄月の光に際すかして見ると、並々ならぬ美しさをその女は持っていた。

「お助けくださりませ、お助けくださりませ！」喘あえきながらこう云うと、女は葉之助を撫で廻した。

「しつかりなされ、大丈夫でござる」葉之助は女を慰めた。「狼藉をされはしませぬかな？」

「あぶないところでございました。ちょうどお姿が見えましたので、やっとモギ放して逃げましたものの、そうでなかったら今頃は、……おお恐ろしい恐ろしい！」女はブルブル身を顫わせたが、「お送りなされてくださりませ！ お送りなされてくださりませ！ いまの悪者が取つて返し、襲つて参ろうも知れませぬ。つい近くでございます。お送りなされてくださりませ！」取り付いた手を放そうともしない。

「よろしゅうござる、お送りしましょう」葉之助は女を搔いやった。「で、家はどの辺かな？」

「愛宕下でございます」女は髪をつくろつた。

「愛宕下ならツイ眼の先、さあ、おいでなさるがよい」云い云い葉之助は先に立ち、その方角へ足を向けた。

「それはマアマア有難いことで、もう大丈夫でございます」

「若い女子がこんな深夜に、一人で歩くということは、無考えの上にちと大胆、今後は注意なさるがよい」

若い女を助けながら、家まで送るということが、葉之助にはちよつと得意であつた。まして女は美人である。そうしてひたすら縋り付いてくる。彼は多少快感さえ感じた。

しかし女が立ち止まり、「ここが邸でございます。主人からもお礼を申させます。どうぞお立ち寄りくださいませ」と、一軒の屋敷を指さした時には、喫驚びっくりせざるを得なかった。と云うのはその屋敷が、敵と目差している蘭学医の玄卿の屋敷であつたからである。

「おおこれは玄卿殿の住居、それではそなたはこの屋敷の……」

「ハイ小間使いでございます。どうぞどうぞお立ち寄りを」女は袖を放さなかつた。

そこで葉之助は考えた。

「この屋敷へ入り込むのは、虎穴こけつへ入ると同じだが、そういう冒険をしなかつた日には、虎児を獲えることはむずかしい。それにこつちでは玄卿めを、敵と目差してはいるもの、先方ではまだまだ知らない筈だ。こういう機会に敵地へ入り込み、様子を探っておいたならまたよいこともあるだろう。それに俺わしは玄卿をこれまで一度も見ることがない。これをしおに行き会つて、人物を見抜くのも一興である」

そこで葉之助は云われるままに、木戸を潜ることにした。

四

女がコツコツと戸を叩くと、内側へスーと切り戸があいた。ブーツと匂って来る快い匂い、まず葉之助の心をさらった。

はてなと思いながらはいったとたん、思わずあつと声を上げた。

黒い高塀に囲まれているので、往来からは見えなかったが、庭一面に草花が爛漫らんまんと咲き乱れているのであった。

「これは綺麗な花園でござるな」感嘆して立ち止まった。

するとその時園えんてい丁と見えて、鋤すきを担いだ大男が花を分けて現われたが、二人の姿をチラリと見ると逃げるように隠れ去った。

「咽むせ返るようなよい匂いだ」葉之助は幾度も深呼吸をしたが、「これは何んという花でござるな?」

「大おお苗ういぎ香きょうでございます」

「おおこれが苗ういぎ香きょうか。ふうむ、実に見事なものだ。苗香といえは高価な薬草、さすが大槻玄卿殿は、当代名譽の大医だけあって、立派な薬草園を持っておられる」

さすかの葉之助も感心して、園に添って歩いて行った。すると一箇所一間四方ぐらい、その苗香の花園が枯れ凋しぼんでいる箇所へ来た。

「これはどうも勿^{もつ}体^{たい}ない。茴香が枯れておりますな」葉之助は立ち止まった。

「はい主人も心配して、恢復策を講じますものの、一旦枯れかかった茴香は、容易なことでは生き返らず、こまつておるのでございます」女はこう云いながら耳を澄ました。どこかで地面を掘っている。鋤にあたる小石の音が、コチンコチンと聞こえて来る。

薬草園を通り過ぎると、館の裏座敷の前へ出た。明るい灯火^{ともしび}が障子に映え、人の話し声も聞こえている。

「さあどうぞお上がり遊ばしませ」

云いながら女が先にながり、スラリと障子を引きあげた。何んとなく身の締まる思いがして、葉之助は一瞬間躊躇^{ちゆうちよ}したが、覚悟をして来たことではあり、性来無双の大胆者ではあり云われるままに座敷へ上がった。

「しばらくご免を」と挨拶をし女は奥へ引き込んだ。

敷物の上へ端然と坐り、葉之助は部屋の中を見廻した。床に一軸が懸かっていた。それは神農の図であった。丸行灯^{まるあんどん}が灯ついていた。火光が鋭く青いのは在来の油灯とは異^{ちが}うらしい。待つ間ほどなく現われたのは、剃り立ての坊主頭の被布^{ひふ}を纏^{まと}った肥大漢で、年は五十を過ぎてゐるらしく、銅色をした大きな顔は膏^{あぶらぎ}切つてテカテカ光っている。

「愚老、大槻玄卿でござる」こう云つて坐つて一礼したが、傲岸不遜の人間と見え、床の間を背にして坐つたものである。

「家人をお助けくださった由、あれは小間使いとはいうものの、愚妻の縁辺でござつてな、血筋の通つた親類端、ようお助けくださった。玄卿お礼を申しますじや」それでも一通りの礼は云つた。

「拙者は鏡葉之助、内藤駿河守の家臣でござるが。ナニ助けたと申し条、ただちよつと通りかかつたまで、そのご挨拶では痛み入る」葉之助も傲然と云つた。「こんな坊主に負けるものか！」こういう腹があつたからである。

「ほほう、内藤家の鏡氏、いやそれはご名門だ。お噂は兼々存じております。実は愚老は内藤様ご舎弟、森帯刀様へはお出入り致し、ご恩顧を蒙つておりますもの、これはこれはさようでござつたか」

玄卿も相手が葉之助と聞いて、にわかには慇懃な態度となつた。

その時小間使いが現われたが、それは別の小間使いであつた。片手に錫製の湯差しを持ちもう一つの手に盆を持つていたが、その盆の上には二つの茶碗と、小さな茶漉しが置いてあつた。そうして砂糖壺とが置いてあつた。

「うん、よろしい、そこへ置け」こう云つて玄卿は頤あごをしゃくつた。

「いやナニ鏡葉之助殿、これは南蛮茶と申しましてな、日本ではめつたに得られないもの、たいして美味でもござらぬが、珍らしいのが取柄とりえでござる」

こう云いながら玄卿は、湯差しを手ずから取り上げると、茶漉しの上から茶碗の中へ深紅の液を注ぎ込んだ。それから匙さしで砂糖を入れた。

「まず拙者お毒味を致す」

こう云うと一つの茶碗を取り上げ、半分ばかりグツと呑んだ。

「温ぬる加減もまず上等、いざお験ためしくださいますよう」

「さようでござるかな、これは珍味」

葉之助は茶碗を取り上げたが、そこでちよつとためらつた。

五

茶碗を取り上げた葉之助が、急に飲むのを躊躇ちゆうちよしたものは、当然なことと云わなければならぬ。

「評判のよくない大槻玄卿、どんなものをくれるか解るものか」つまり彼はこう思ったのであった。

玄卿はするとニヤリと笑った。

「いや鏡葉之助殿、愚老毒などは差し上げません。どうぞ安心してお試しためください」
凶星を差されたものである。

「とんでもないこと、どう致しまして」

葉之助は苦笑したが、今はのつ引きならなかった。で、一息にグーと飲んだ。日本の緑茶とは趣きの異った、強い香りの甘渋い味の、なかなか結構な飲み物であった。

「珍味珍味」と葉之助は、お世辞でなくて本当に褒ほめた。

「産まれて初めての南蛮紅茶舌の正月を致してござる」

「お気に叶かなって本望でござる。いかがかな、もう一杯？」

「いや、もはや充分でござる」

葉之助は辞退した。

「さようでござるかな。お強しいは致さぬ」

で玄卿は茶器を片付けた。

それから二つ三つ話があった。

と、葉之助は次第次第に引き入れられるように眠くなった。

「これはおかしい」とこう思った時には、全身へ麻痺まひが行き渡っていた。

「ううむ、やつぱり毒であったか！」

葉之助は切齒した。それから刀を抜こうとした。ただ心があせるばかりで手が云うことを聞かなかつた。

「残念！」と彼は喚くように云つた。しかし言葉は出なかつた。ただそう云つたと思つたばかりで、その実言葉は舌の先からちよつとも外へは出なかつた。

彼は前ノメリに倒れてしまった。

しかしそれでも意識はあつた。

それから起こつた出来事を、彼はぼんやり覚えていた。

……まず二、三人の男の手が、彼を宙かへ昇あき上げた。……縁から庭へ下ろされたらしい。

……穴を掘るような音がした。……と、提ちようちん灯の灯が見えた。……茴ういきよう香烟が見えて

来た。……花が空を向いていた。……一人の男が穴を掘っていた。……大きな穴の口が見

えた。……彼はその中へ入れられた。……バラバラと土が落ちて来た。……おお彼は埋め

られるのであった。……もう何んにも見えなかった。サーツと土が落ちて来た。……顔の上へも胸の上へも、手へも足へも土が溜った。……次第に重さを感じて来た。……そうして次第に呼吸苦しくなった。……「俺は死ぬのだ！俺は死ぬのだ！」葉之助は穴の中で、観念しながら呟いた。そうしてそのまま気を失った。

……
……

新鮮な空気がはいって来た。

葉之助は正気附いた。

そうして自由に息が出来た。

だが身動きは出来なかった。

彼はやはり穴の中にいた。

土が一杯に冠さっていた。

しかし痲痺からは覚めていた。毒薬の利き目が消えたのであろう。

どうして息が出来るのだらう？ どこかに穴でも開いたのであらうか？

そうだ、穴があいたのであった。

ちようど彼の口の上に、穴があいているのであった。

しかし普通の穴ではなかった。

竹の筒が差し込まれているのであった。

誰がそんなことをしたのだろうか？ もちろん誰だか解らなかった。

とまれそのため葉之助は、一時死から免まぬがれることが出来た。

彼は充分に息をした。どうかして穴から出ようとした。しかしそれは絶望であった。

で、じつとして待つことにした。

するとその時竹筒を伝つて、人の声が聞こえて来た。

彼に呼びかけていたのであった。

「鏡殿、葉之助殿」

それは男の声であった。

そうして確かに聞き覚えがあった。

そこで葉之助は返辞をした。

「どなたでござるな。え、どなたで？」

「一学でござる。前田一学で」

「おつ」と葉之助はそれを聞くと、助かったような気持ちをした。「さようでござるか、前田氏でござるか。……それにしてもこれはどうしたことか」

「生き埋めにされたのでございますよ」

「生き埋め？ 生き埋め？ なんのために？」

「枯れかけたういきょう茴香を助けるために」

「ナニ、茴香を？ 枯れかけた茴香を？」

「さよう」と一学の声が云った。「肥料にされたのでございます。……あなたばかりではございません。十数人の人間が。……人が来るようでございます。……しばらくお待ちくださいませう」

六

そこでしばらく話が絶え、後はしばらく寂然しんとなった。

と、また話し声が聞こえて来た。

「葉之助殿、お苦しいかな？」

「苦しゅうござる。早く出してくだされ」

「それが、そうは出来ませんので」

「ナニ出来ない？　なぜでござるな？」

「まだ人達が目覚めております」

「ではいつここから出られるので？」葉之助はジリジリした。

「間もなく寝静まるでございましょう、もう少々お待ちください」

「それにしても前田氏には、どうしてこんな処におられるな」

「玄卿の秘密をあば発くため、飯めした焚きとなつて住み込んだのでござる」

「で、秘密はわかりましたかな？」

「さよう、おおかたはわかりました」

「それでは白粉の性質も？」

「さよう、おおかたは突き止めてござる」

「さようでござるかそれはお手柄。で、いったい何んでござるな？」

「ういしき茴香から製した薬品でござる」

「ううむ、なるほど、茴香のな。やはり毒薬でござろうな？」

「さよう、さよう、毒薬でござる」

「おおそれでは金一郎様には、毒殺されたのでございますな」

「ところが、そうではございません」

「そうではないとな？　これは不思議？」

「茴香剤は毒薬とは云え、後に痕跡を残します。……しかるに若殿なきがらの死骸なきがらには、なんの痕跡もなかったそうで」

「さようさよう、痕跡がなかった。……だが、毒殺でないとすると……」

「全く不思議でございます」

「白粉の性質が解つても、それでは一向仕方がないな」

「だが前後の事情から見て、茴香剤の白粉が、金一郎様殺害に、関係のあることはたしかにございます」

「で、白粉の特性は？」

「刺戟剤でございます。まず、しばらくお待ちください。客があるようでございます。……誰か裏門を叩いております。……男おとこめ奴こめが潜くぐり戸をあけました。……や、紋兵衛でございます、大鳥井紋兵衛が参りました。……これはうっちゃっては置けません。……ちよっ

と様子をうかがって来ます。……」

前田一学は立ち去つたらしい。

後はふたたび静かになつた。

葉之助はだんだん苦しくなつた。

湿気が体へ滲み通つた。

呼吸もだんだん苦しくなつた。ひどく衰弱を感じて来た。

次第に眠気を催して来た。

一学は帰つて来なかつた。

「眠つてはいけない、眠つてはいけない」

こう思いながらウツラウツラした。

これは恐ろしい眠りであつた。ふたたび覚めない眠りであつた。眠つたが最後葉之助は、生き返ることは出来ないだろう。

はたして彼の運命は？

ちようど同じ夜のことであつた。

神田の諸人宿の奥まった部屋に、天野北山は坐っていた。

薬箱が置いてあった。

アルコールランプが置いてあった。

試験管が置いてあった。

そうして彼は蘭語の医書を、むずかしい顔をして読んでいた。

そこには次のように書いてあった。

「……茴香には三種の区別あり、野茴香、大茴香、小茴香、しかして茴香の薬用部は、枝葉に非ずして果实なり。大ききおよそ二分ばかり、緑褐色長円形をなす。一種強烈なる芳香を有し、くちゆう驅虫、きよたん祛痰、健胃剤となる。また芳香を有するがため、きようしゆう嬌臭及び嬌味薬となる、あるいは種子を酒に浸し、飲用すればせんき疝氣に効あり。茴香精、茴香油、茴香水を採録す」

北山はここで舌打ちをした。

「どうもこれでは仕方がない。だがしかし例の白粉が、茴香剤に相違ないと、前田一学から知らせて来たからには、それに相違はあるまいが、しかしどうも疑わしいな」

腕を組んで考え込んだ。

気がムシヤクシヤしてならなかった。

で、宿を出て歩くことにした。

他に行くところもなかったもので、浅草の方へ足を向けた。

観音堂へ参詣さんけいした。

相当夜が深かったので、他に参詣の人もなかった。

七

観音堂の裏手の丘に、十数人の男女がいた。寝そべっているもの、坐っているもの、立っているもの、横になっているもの、雑然として蒐あつまっていたが、暗い星月夜のことではあり、顔や姿は解らなかつた。

「星が流れた」

と誰かが云つた。

「ふん、明日も天気だろう」

すぐに誰かがこう答えた。

で、ちよつとの間しずかであつた。

微風が木立を^{すべ}こつて行つた。

赤児のむずかる声がした。と、子守唄が聞こえて来た。その子の母が唄うのであろう。

美しい細々とした声であつた。

虫が^{くさむら}草叢で鳴いていた。

微風がまたもこつて行つた。

「ああいいな。どんなにいいか知れねえ。……土の匂いがおつて来る。……枯草の蒸^むれるような匂いもする」

老人の声がこう云つた。

「八ヶ嶽！ 八ヶ嶽！ おお懐^{なつか}しい八ヶ嶽！ 八ヶ嶽を思い出す」

一人の声がそれに応じた。やはり老人の声であつたが。

「見捨ててから久しくなる。そろそろ八ヶ嶽を忘れそうだ」

「俺は夢にさえ思い出す」以前の老人が云いつづけた。「笹の平！ 宗介神社！ 天狗の岩！ 岩屋の住居！ 秋になると木の実が熟し、冬になると猪が捕れた。そうして春になると山桜が咲き、夏になると労働した。……平和と自由だったあの時代！ 俺は夢にさえ

思い出す」

「漂泊さすらいの旅の二十年！ 早く故郷へ帰りたいものだ」

「星が飛んだ！」

とまた誰かが云った。

虫の声が鳴きつづけた。

夜よ鳥がらすがひとしきり梢で騒いだ。おおかた夢でも見たのだろう。

窩人達は眠ろうとした。

しかし彼らは眠られないらしい。

そこで彼らは話し出した。

彼らは浅草奥山の、見世物小屋の太夫達であつた。

「八ヶ嶽の山男」

——こういう看板を上げている、その掛け小屋の太夫達であつた。

しかし彼らは窩人であつた。

彼らは小屋内に眠るより、戸外そとで寝る方を愛していた。それは彼らが自然児だからで、

人工の屋根で雨露をしのぎ、あたたかい蒲団ふとんにくるまるより、天工自然の空もとの下で、湿気

と草の香に包まれながら地上で眠る方が健康にもよかった。で、暴風雨でない限り、いつも彼らは土の上で眠った。

二十年近い過去となった。その頃彼らは八ヶ嶽を出て、下界の塵寰じんかんへ下りて来た。それは盗まれた彼らの宝——宗介天狗のご神体に着せた、黄金細工の甲冑かっちゆうを、奪い返そうためであった。

漂泊さすらいの旅は長かった。

到る所で迫害された。

山男！　こういう悪罵あくばを投げつけられた。

長い漂泊の間には、死ぬ者もあれば逃げるものもあった。しかし、子を産む女もあった。で、絶えず変化した。

しかし目的は一つであった。

復讐をするということであった。

丘の近くに池があった。パタパタと水鳥の羽音がした。

「水鳥だな」

と誰かが云った。それは若々しい声であった。

「鳥はいいな。羽根がある」

もう一つの若々しい声が云った。

「飛んで行きたいよ。高い山へ！」 「飛んで行きたいよ深い森へ！」 「信州の山へ！ 八ヶ嶽へ！」 「そうだ俺らの古巣へな」

三、四人の声がこう云った。

愉快そうな笑い声が聞こえて来た。

枯草の匂いが立ち迷った。

で、またひとしきり静かになった。

都会まちの方から笛の音がした。按摩あんまの流す笛であった。

観音堂は闇を抜いて、星空にまで届いている。と、鰐わにぐち口の音がした。参詣する人があ
るのだろう。

「また白蛇を盗まれたそうで」

突然こういう声がした。

「では二匹盗まれたんだな」

もう一人の声がこう云った。 「毒蛇だのに、誰が盗んだかな」

「八ヶ嶽だけに住んでる蛇だ」

「毒蛇なのに、誰が盗んだかな」

「いずれ馬鹿者が盗んだんだろう」

ここで再び笑い声がした。

それが消えると静かになった。カラカラと駒下駄の音がした。横に曲がってやがて消えた。

また微風が訪れて来た。

興行物の小屋掛けが、闇の中に立っていた。ギヤーツと夜よ鳥からすが啼き過ぎた。

「冬になるまでには帰りたいものだ」

老人の声がこう云った。

「帰れるともきつと帰れる」もう一人の老人の声が云った。

「そう長く悪運が続くわけがない」

「多四郎め！ 思い知るがいい！」

「だが葉之助は可哀そうだ」突然誰かがこう云った。

「仕方がない、贖しよくざい罪だ！」もう一人の声がこう云った。

「母の罪を償うのだ」

「あれの母の山吹は、部落きつての美人だった。お頭杉右衛門の娘だった。若大将岩太郎の許婚^{いいなすけ}だった。……ほんとに気前のいい娘だった」

「ところが多四郎めに瞞^{だま}された。そうして怨み死^{うらみ}にに死んでしまった。可哀そうな可哀そ
うな女だった。……山吹とそうして多四郎との子！ 可哀そうな可哀そうな葉之助！」

八

観音堂への参詣を済まし、偶然^{ふと}来^きかかった北山は、窩人^{わにん}達の話を耳にして「オヤ」と思
わざるを得なかった。

「葉之助葉之助と云っているが、鏡葉之助のことではあるまいかな？」

これは疑うのが当然であった。

と、木蔭に身を隠し、次の話を待っていた。

「だが葉之助は偉い奴だ」老人の声がこう云った。「俺らの敵の水狐族部落を、見事に亡
ぼしてくれたんだからな」

「そうだ、あの功は没せられない」合槌を打つ声が聞こえて来た。「あの一事で母親の罪は、綺麗きれいに償われたというものだ」

「噂によると水狐族めも、さすらいの旅へ上ったそうだ」

「江戸へ来ているということだ」

「どこかでぶつからないものでもない」

「ぶつかったが最後、戦いだ」

「そうだ戦いだ、腕が鳴るなあ」

「種族と種族との戦いだからな」

「種族の怨みというものは、未来永劫えいごうと解けるものではない」

「だが、水狐族の部落の長おさ、久田の姥うばめが殺された今は、戦ったが最後こっちの勝ちだ」

「姥を殺したのは葉之助だ」

「葉之助は俺らの恩人だ」

「だが気の毒にも呪われている」

「永久安穩はないだろう」

「眠い」

と女の声があった。

するとみんな黙ってしまった。

彼らは睡眠ねむりにとりかかった。

やがて鼾いびきの声があった。

木蔭を立ち出で北山は、町の方へ足を向けた。

「ふうむそれでは葉之助は、山男の血統を引いてるのか」

彼は心で呟いた。

「久田の姥を殺したのは、鏡葉之助の他にはない。……彼らの噂した葉之助は、鏡葉之助に違いない……これを聞いたら葉之助はどんな気持ちになるだろう……明かした方がいいだろうか？ 明かさない方がいいだろうか？ ……だが多四郎とは何者だろう？」

上野の方へ足を向けた。

「大胆不敵な葉之助のことだ、素姓の卑しい山男達の、たとえ血統を引いていると聞いても、よもやひどい失望はしまい。……やはりこれは明かした方がいい……そうだ、今夜も葉之助は、根岸の殿の下屋敷附近を、警戒しているに違いない。行き逢って様子を見ることにしよう」

根岸の方へ足を向けた。

根岸は閑静な土地であった。夜など人一人通ろうともしない。

間もなく下屋敷の側まで来た。

葉之助の姿は見えなかった。

で、裏の方へ廻って行った。

すると、広い空地へ出た。空地の闇を貫いて、一筋白い長い線が、一文字に地面へ引かれていた。

それと知った時北山は、思わず「アツ」と声を上げた。「白粉！ 白粉！ 例の白粉だ！」

とたんに笛の音が聞こえて来た。

銀笛のような音であった。白粉の上を伝わって来た。その白粉は白々と、森帯刀家の下屋敷まで、一直線につづいた。

笛の音は間近に逼^{せま}って来た。もう数間の先まで来た。

北山は再び「アツ」と云った。

それからあたかも狂^{きちがい}人のように、白粉を足で蹴散らした。

そうして笛の音を聞き澄ました。

笛の音は足もとまで逼つて来た。しかしそこから引つ返して行つた。

だんだん音が遠ざかり、やがて全く消えてしまった。

北山は全身ビツシヨリと冷たい汗を掻いていた。と、地面へ手を延ばし、一摘^{つま}みの白粉を摘み上げた。

「解つた！」と呻くように叫んだものである。

九

地下に埋められた葉之助は、さてそれからどうなつたらう？

奇々怪々たる出来事が引き続き起こつたのであつた。

ちよつと待てと云つて立ち去つたまま、一学は歸つて来なかつた。で葉之助は待つていた。待つているのはよいとしても、呼吸^{いき}の苦しいのは閉口であつた。名に負う地下にいるのであつた。気味の悪さは形容も出来ない。湿気は体を融かそうとした。身内を蛆^{うじむし}虫が這うようであつた。一寸も動くことが出来なかつた。もし体を動かしたら、竹筒の位置が

狂うだろう。そうしたら呼吸が出来なくなろう。そうなったらお陀仏であつた。死んでしまわなければならなかつた。

「死ぬかも知れない！ 死ぬかも知れない！ だがいったいそれにしても、一学氏はどうしたのだろうか？ どうして助けに来ないのだろうか？ 逃げてしまったのではあるまいか？

いやいやそんな人物ではない。では何か危険なことでも、あの人の身の上に起こつたのであろうか？ ……とにかくこうしてはおられない。生きている人間が生きながら、地下に埋められているなんて、どう考えたつて恐ろしいことだ！ 出なければならぬ！ 出なければならぬ！ おお俺の体の上には、土がいつぱいに冠さっているのだ。 茴香ういきよう

の花が咲いているのだ。そうしてもしも俺が死んだら、その茴香こやしの肥料になるのだ。 ……

死！ 肥料！ 恐ろしいことだ！ これはどうしても逃げなければならぬ。だがどうしたら逃げられるのか？ そうだ土を刎はね退ければいい。だがどうして刎はね退けたものか？ 重い厚い石のように、一面に冠かぶさっているではないか？ 駄目だ駄目だ！ 助かりっこ

はない。 ……前田氏！ 一学氏！ 助けてください、助けてください！」

しかし、四辺あたりは森閑として、ただ暗く寒かつた。

「せめて手だけでも動かさないかしら？」

彼は右手を動かそうとした。土が重く冠さっていた。容易に動かすことは出来なかった。しかし非常な努力の後、それでも少しずつ動かせるようになった。

「よし。有難い。大丈夫だ」

で、土を掻き退けようとした。すると指先に何かさわった。石ではない固いものであった。そこでそれを引つ掴んだ。その感触が鉄らしかった。しかもそれは環わのようであった。「鉄の環があるとは、これはいったいどうしたことだ？」葉之助には不思議であった。溺れる者は藁わらをも掴む。で、葉之助は環を掴み、力まかせに引いてみた。

その瞬間に起こったことは、彼にとつては奇蹟よりも、もっと驚くべきことであった。

忽然こっぜん彼の体の下へ、四角の穴が開いたのであった。ザーツと落ちる土とともに、彼の体は下へ落ちた。

狼おとしあな 窸おとしあなかそれとも他の何か？ とにかくそこには人工の穴が、以前まえから掘られていたのであった。

そこへ落ち込んだ葉之助は、あまりの意外に茫然とした。が、幸い怪我けがはしなかった。穴も深くはないらしかった。で、手探りに探ってみた。

「やや、ここに横穴がある」彼は思わず声を上げた。そうだ、そこには横穴があった。考

えざるを得なかつた。

「この縦穴を這い出したなら、玄卿の屋敷へ出る事が出来る。幸い両刀は持っている。憎い玄卿めを討ち取ることも出来る。しかし俺は衰弱よわつている。これほどの姦策かんさくをたくらむ奴だ、どんな用意がしてあろうも知れぬ。あべこべに討たれたら悲惨みじめなものだ。……さてここにある横穴だが、何んとなく深いように思われる。いつそこれを辿たどつて行って、一時体を隠すことにしよう。もつともあるいはこの横穴も、あいつの拵こしらえたものかもしれない。では何んのために拵えたのか、そいつを探るのも無駄ではない。もしこれがそうでなくて、誰か他の人が拵えたものなら、——もしくは天然に出来たものなら、地上へ通じているかもしれない。では助かろうというものだ。どっちみち縦穴を上るより、横穴を辿つた方が安全らしい」

そこで彼は手探りで、横穴を奥の方へ辿つて行った。

思った通りその横穴は、深く奥へ続いていた。一間行つても、二間行つても突きあたろうとはしなかつた。天井は低く横も狭く、非常に窮屈な穴ではあつたが、空気もそれほど濁つてはいず、水なども落ちては来なかつた。

やがて五間行き十間行き、半町あまりも辿つて行ったが、依然横穴は続いていた。

少しずつ、葉之助は不安になった。

「いったいどこまで続くのだろうか？」彼は立ち止まって考え込んだ。しかし後へ戻ることは、かえって危険のように思われた。やはり進むより仕方なかった。

一〇

で、彼は進んで行つた。一町あまりも行つた頃であつたが、彼は何かつまずに躓いた。そこで手探りに探つてみた。どうやら石の階段らしい。

「いよいよ戸外そとへ出られるかな」こう思うと彼は嬉しかった。一つ一つ石段を上つて行つた。二十段近くも上つた頃、木の扉へぶつかった。

「人家へ続いているのだな」意外に思わざるを得なかった。

彼は扉を押してみた。すると案外にもすぐ開いた。はたしてそこは人の家であつた。人の家の一室であつた。

そうだそれは部屋であつた。しかも普通の部屋ではなかつた。

それは非常に広い部屋で、畳を敷いたら百畳も敷けよう、行灯あんどんが細々と灯つていた。

そうして縛られた女や男が、あちにもこつちにも転がっていた。

呻く者、泣く者、喚く者、縛られたまま転げ廻る者、呪詛のろいの声を上げる者、……部屋の内はそれらの声で、阿鼻地獄あびを呈していた。

人の類も様々であった。まず女から云う時は、町家の娘、ご殿女中、丸鬘まるまげに結つた若女房、乞食女こじき、いたいけな少女、老いさらばつた年寄りの女、女郎らしい女、芸妓らしい女、見世物小屋の太夫らしい女、あらゆる風俗の女達が、もだえ苦しんでいるのであった。男の方も同じであった。商家の手代、商家の丁稚てつち、役者、武士、職人、香具師やし、百姓、手品師、神官、僧侶……あらゆる階級の男達が、狂いあばれているのであった。

そうしてそれらの人々の上を、行灯の微光が照らしていた。

低い天てん井じょう、嚴重な壁、出入り口の戸はとぎされていた。

これを見た葉之助は驚くよりも、恐怖せざるを得なかった。彼は棒のように突つ立った。「いったいここはどこだろう？ いったいどういう家だろう？ この人達は何者だろう？ いったい何をしているのだろうか？」

しかし彼の驚きは——いや彼の恐怖心は、しばらく経つと倍加された。彼は一層驚いたのであった。

さらにさらに恐怖したのであった。

と云うのはそれらの人々が、決して苦しんでいるのではなく、そうして何者かに幽囚されて、呪詛のろい悲しんでいるのではなく、否々いないなそれとは正反対に、喜び歌い、褒め讃え——すなわち何者かに帰依信仰し、欣舞きんぶしているのだということが、間もなく知れたからであつた。

呪詛のろいの声と思つたのは、実に讚美の声なのであつた。

「光明遍照！ 光明遍照！ 喜びの神！ 幸いの神！ 男女の神！ 子宝こだからの神！ おおお神様よ子宝の神様よ！ どうぞ子宝をお授けください！」こう讚美する声なのであつた。

ここは邪教の道場なのであつた。ここは淫祠いんしの祭壇なのであつた。

おお大江戸の真ん中に、こんな邪教があろうとは！

と、その時、忽然こっぜんと、音楽の音が響いて来た。

まずひちりき箏しやうの音がした。つづいて笙しやうの音がした。揃かみ合つて笛の音がした。やがて小太鼓が打ち込まれた。

……それは微妙な音楽であつた。邪教に不似合いの音楽であつた。神聖高尚な音色であ

った。

俄然道場は一変した。男は女から飛び離れ、女は男から身を退けた。いずれも一斉にひざまずいた。そうして彼らは合掌した。

「ご来降！　ご来降！」と同音に叫んだ。

「教主様のお出まし！　教主様のお出まし！」

異口同音にこう云った。

次第に音楽は高まつて来た。それがだんだん近寄つて来た。やがて戸口の外まで来た。

しずかにしずかに戸が開いた。

深紅しんくの松明たいまつの火の光が、その戸口から射し込んだ。

つと二人の童子が現われ、続いて行列がはいつて来た。童子が松明を捧げていた。光明が一杯部屋に充ちた。

教主は男女二人であつた。いずれも若く美しかった。普通に美しいと云つただけでは、物足りないような美しさであつた。女は年の頃十八、九であろうか、緋ひの袴はかまを穿はいていた。そうして上着は十二単衣ひとえであつた。しかも胸には珠をかけ、手に檜扇ひおうぎを持っていた。

男の年頃は二十一、二で、どうやら女の兄らしかった。その面が似通っていた。胸には

同じく珠をかけ、足には大口を穿いていた。だがその手に持っているものは、みむろやま三諸山の
 神体であつた。

一一

教主の後から老女が続き、そのまた後ろから幾人かの、美しい男女が続いた。
 部屋の中は皎々こうこうと輝いた。今まで見えなかつた様々の物が——壁画や聖像や龕がんや厨子ずし
 が、松明の光で見渡された。それはいずれも言うも憚りはばか多い怪しき物のみであつた。

行列は部屋を迂廻した。

信者の群は先を争い、二人の教主へ触れようとしたりした。

男の信者は女の教主へ、女の信者は男の教主へ、とりわけ触れようとひしめいた。

男の教主の怪しき得物えものと、女の教主の檜扇とは、そういう信者の一人一人へ、一々軽く
 触れて行つた。

こうして行列は静々と、広い部屋を迂廻した。

そうして葉之助へ近付いて来た。

葉之助は茫然と立っていた。

どうしてよいか解らなかつた。もちろん彼は邪教徒ではなかつた。で、教主を拝することとは、良心に咎めて出来なかつた。と云つて茫然立っていたら、咎められるに相違なかつた。そうなつたら事件が起こるだろう。信者でもない赤の他人が、道場へ入り込んでいたとすれば、教団にとっては打撃でなければならぬ。きっと憤慨するだろう。恐らく乱暴をするかもしれない。道場にいる全部の信徒が、刃向かつて来ないとも限らない。

「いったいどうしたらいいだろう？」

焦心せざるを得なかつた、狼狽せざるを得なかつた。

その間も行列は進んで来た。

しかしやがて葉之助の前へ二人の教主は立ち止まつた。

葉之助は絶体絶命となつた。で、昂然と顔を上げ、教主の顔を睨み付けた。

二人の教主の胸の辺に、不思議な刺繍が施されてあつた。それを見て取つた葉之助は

「あつ」と叫ばざるを得なかつた。

それは恐ろしい刺繍であつた。彼に縁のある刺繍であつた。彼はそれによつてこの教団のいかなるものかを知ることが出来た。そうしてそれを知つたがために、彼は現在の自分

の位置が、予想以上に危険であることを、はっきり明瞭に知ることが出来た。
俄然^{がぜん}形勢は一変した。そうしてそれは悪化であった。

「あつ」という声に驚いて二人の教主は眼を睜^{みは}つた。

そうしてその眼は必然的に、声の主へ注がれた。

教主二人の四つの眼と、葉之助の眼とはぶつかった。

それは火のような睨み合いであった。

が、それは短かった。

男の教主がまず叫んだ。

「教法の敵！ 教法の敵！」

女の教主が続いて叫んだ。

「鏡葉之助だ！ 鏡葉之助だ！」

「この男を搦^{から}め取れ！」

——つづいて起こったのが混乱であった。

こんな順序で行われた。

一斉に信徒達が立ち上がった。

グルリと葉之助を取り囲んだ。

行列は颯と後へ引いた。信徒の中の武士達は、揃って一度に刀を抜いた。女信徒達は逃げ迷った。

喚き声！ 怒鳴り声！ 泣き叫ぶ声！

「教法の敵！」 「搦め取れ！」 「切って棄てろ！ 切って棄てろ！」

松明の火が数を増した。キラキラと抜き身が輝いた。出入り口が固められた。

群集がヒタヒタと逼って来た。

殺気が場中に充ち充ちた。

予期したことではあつたけれど、葉之助の心は動揺した。突嗟に思案が浮かばなかつた。と云つて落ち着いてはいられなかつた。防がなければならなかつた。そうしなければ、捕えられらるだろう。捕えられたら殺されるだろう。

世の中で何が恐ろしいと云つて、狂信者ほど恐ろしいものはない。彼らには一切反省がない。あるものは迷信ばかりだ。おおそうして迷信たるや、一切の罪惡の根本ではないか！ 「迷信」は笑いながら人を殺す！ 笑つて人を殺す者は宇宙において迷信者ばかりだ！

その迷信者が充ち充ちているのだ。それが挙こつて刃向かつて来るのだ。

「もうこうなればヤブレカブレだ！ 切つて切つて切り捲くるばかりだ！ 遁のがれられるだけは遁がれてやろう！」そこで葉之助は刀を抜いた。

小野派一刀流真の構え！ 中段に付けて睨み付けた。

一一

背後うしろへ廻られてはたまらない。彼は羽目板を背しよに背負つた。

眼に余る大勢の相手であつた。八方へ眼を配るべきを彼は逆に応用した。正一眼一心前方ただ正面をひたすらに睨んだ。飛び込んで来る敵を切ろうとするのだ。

「横豎上下遠近の事」一刀流兵法十二カ条のうち、六番目にある極意であつた。

正面をさえ睨んでいれば、横豎上下遠近の敵が、自ら心眼に映るのであつた。と云つてももちろん初学者には——いやいや相当の使い手になつても、容易にそこまでは達しられない。ただ奥義の把持者はじしやのみが、その境地に達することが出来る。そうして鏡葉之助は、その奥義の把持者であつた。剣にかけては天才であつた。だが彼は疲つか勞かれていた。毒薬を

飲まされた後であり、地下に埋められた後であった。しかし非常な場合には、超人間的勇氣の出るものであった。

構えた太刀には隙がなかった。

と、一人飛び込んで来た。

大兵肥満だいひょうひまんの武士であった。もちろん信者の一人であった。

鏡葉之助は美少年、女のような優姿やさすがた。しかも一人だといふところから、侮りきつて構えもつけず、颯さつと横撲りにかかつて来た。そこを自得の袈裟掛けさがけ一刀、伊那高遠の八幡社頭で、夜な夜な鍛えた生木割り！ 右の肩から胸へ掛け、水も堪たまらず切り放した。

武士は「わっ」と悲鳴を上げた。そうして畳へころがった。プーツと吹き出す血の泡沫しぶきが、松明の光で虹にじのように見えた。と、もうその時には葉之助は、ピタリ中段に付けていた。

「えい」とも「やつ」とも、声を掛けない。水のように静かであった。返り血一滴浴びていない。

一瞬間ブルツと武者顫いをした。全身に勇氣の籠もった証拠だ。

ワーツと叫んで信者どもはバラバラと後へ退いた。しかしすぐに盛り返した。迷信者は

何物をも恐れない。

左右から二人かかつて来た。

「やつ！ やつ！ やつ！」

「やつ！ やつ！ やつ！」

心掛けある武士であった。二人は気合を掛け合った。左右へ心を散らせようとした。が、それはムダであった。葉之助は動かなかつた。凝然と正面を見詰めていた。

敵をただ打つと思うな身を守れ

おのずから洩る賤家の月

仮字書之口伝第三章「残心」を詠った極意の和歌、——意味は読んで字の如く、じつと一身を守り詰め、敵に自ずと破れの出た時、討つて取れという意味であった。

葉之助の心組みがそれであった。

金剛不動！ 身じろぎもしない。

「やつ！ やつ！ やつ！」

「やつ！ やつ！ やつ！」

二人の武士はセリ詰めて来た。尚、葉之助は動かなかつた。

場内は寂然と静かであった。松明の火が数を増した。火事場のように赤かった。後から後からと無数の信者が、出入り口からはいつて来た。みんな得物を持って来た。

出番の来るのを待っていた。まさに稲麻竹葦であった。葉之助よ！ どうするつもりだ!!
その時鏘然と太刀音がした。

一人の武士が頭上を狙い、もう一人の武士が胴を眼がけ、同時に葉之助へ切り込んだのを、一髪の間にも身を翻し、一人を例の袈裟掛けて斃し、一人の太刀を受け止めたのであった。

受けた時には切っていた。

他流でいうところの「燕返し」、一刀流で云う時は、「金翅鳥王劍座」———
いつで切つて棄てたのであった。

金翅鳥片羽九万八千里、海上に出でて竜を食う、———その大気魄に則つて、命名したところの「五点之次第」で、さらに詳しく述べる時は、敵の刀を宙へ刎ね、自刀セメルの位置をもって、敵の真胴を輪切るのであった。敵を斃すこと三人であった。ワーツと叫ぶと信者の群は、ムラムラと後へ退いた。しかしすぐに盛り返した。迷信者は何物をも恐れない。得物得物を打ち振り打ち振り、十数人がかかって来た。

鏡葉之助は三人を切った。大概の者ならこれだけで、精気消耗する筈であつた。葉之助の精気も無論疲労つかれた。しかし彼は恐ろしい物を見た。いやいやそれは恐ろしいというより、むしろ憎むべきものであつた。彼を不断に苦しめている「悪運命」を見たのであつた。讐しゅうてき敵の象徴を見たのであつた。二人の教主の着物の胸に刺繍ししゅうされてあつた奇怪な模様！ それを彼は見たのであつた。憎むべき、憎むべき憎むべき模様！

彼の勇氣は百倍した。そうして彼は決心した。「殺されるか殺すかだ！ これは生優なまやさしい敵ではない！ 助かろうとて助かりっこはない！ 生け捕られたら鬻なぶり殺しだ。……相手を屠ほふるといふことは、俺の体に纏まつわつてゐる、呪詛のろいを取去のぞくといふことになる。相手に屠られるといふことは、呪詛のろいに食くわれるといふことになる。……生きる意つもで働いては駄目だ！ 死ぬ決心でやつつけてやろう！ こうなれば肉弾だ！ 生命を棄すてて相手を切ろう！ ……おおお集あまつて来きおつたな。……とてもまともでは叶あわない。こうなれば手段しゅだんを選えばない。あらゆる詭計きけいを施せしてやれ」

十人の武士が逼つて来た。

やにわに飛び込んだ葉之助は、切りよい左手の一人の武士を、ザツクリ袈裟に切り倒した。とたんに自分もツルリと迂り、バツタリ俯向けに床へ倒れた。

ワツと叫んだ残りの九人、乱刃を葉之助へ浴びせかけた。一髪の間葉之助は寝ながら刀で足を払った。一刀流の陣所払い！ 負けたと見せて盛り返し、一挙に多勢を屠る極意、しかし普通の場合には、卑怯と目して使わない。死生一如と解した時、止むなく使う寝業であつた。

果然九人は一時に、足を薙がれてぶつ倒れた。

飛び上がった葉之助、なだれる信徒の後を追い戸口の方へ突撃した。そうして「面部斬り」——で斬り立てた。

胆を冷やさせる「面部斬り」——相手の生命を取るのではなく、獅子が群羊を驅るように、大勢の中へ飛び込んで、柄短かの片手斬り、敵の顔ばかりを中るに任せ、颯々と切る兵法であつた。伊藤一刀齋景久が、晩年に工夫した一手であつて、場合によつては刀を返し、柄頭で敵の鼻梁を突き、空いている方の左手で、敵の人中を拳当て身！

ただしこの術には制限があつて、誰にも出来るというものではなかつた。すなわち片手

で自由自在に、大刀を揮うだけの膂力あるもの、そうして軽捷拔群の者と自ら定められているのであった。

で、もちろん封じ手で、印以上に尊ばれ、人を見て許すことになっていた。

また一名「木の葉返し」とも云った。風に吹き立つ枯葉のように、八方分身十方隠れ、一人の体を八方に分かち、十方に隠れて出沒し！ 敵をして奔命に疲労れしめ、同士討ちをさせるがためであった。

はたして信徒達は騒ぎ立った。風に木の葉が翻るように、百畳敷の大広間を、右往左往に逃げ惑った。

「裏切り者がいる！ 裏切り者がいる！」

「一人ではない！ 敵は多勢だ！」

「謀反人がいる！ 謀反人がいる！」

信徒同士組打ちをした。互いに斬り合う者もあつた。松明の火が吹き消された。ヒーツと女達は悲鳴を上げた。バタバタと倒れる音がした。器類がころがった。画像がべりべりと引き裂かれた。

「助けてくれーエツ」

と叫ぶ者があつた。倒れた信徒の体の上を、無数の人が踏んで走つた。ムクムクと戸口から逃げはじめた。

葉之助の策略は成功した。

混乱に次いで混乱が起こり、収拾することが出来なかつた。

「静まれ静まれ敵は一人だ！」

心掛けある信徒でもあろう。一人の者が大音に叫んだ。ツと葉之助は走り寄り、その叫び主を斬り落とした。

「灯火あかりを点ける！ 灯火を点ける！」

一人の信徒が叫び声を上げた。が、すぐにその信徒は、虚空を掴んでぶつ倒れた。肩から大袈裟に斬られたのであつた。

尚二、三本松明は、大広間を茫ぼうと照らしていた。

その一本がバサリと落ちた、松明の持ち主が「ムー」と呻き、床へ倒れてのたうつた。見れば片手を斬り落とされていた。

と、もう一本の松明が消えた。つづいてもう一本の松明が消えた。

部屋の中は闇となつた。その暗々たる闇の中で、信徒達は揉み合った。

互いに相手を疑ぐつた。手にさわる者と掴み合つた。

そうしてドツと先を争い、戸口から外へ逃げ出した。

その中に葉之助も交じつていた。部屋の外は広い廊下で、左右にズラリと部屋があつた。その部屋の中へ信徒達は、蝗いなごのように飛び込んだ。

一四

葉之助は廊下を真つ直ぐに走つた。

廊下が尽きて階段となり、階段の下に中庭があつた。

そこへ下り立つた葉之助は、ベツタリ地の上に坐つてしまった。そうして丹田たんてんへ力をこめ、しばらくの間呼吸いきを止めた。それから徐々に呼吸をした。と、シーンと神気が澄み、体に精力よみがえが甦よみがえつて来た。一刀流の養ようじよう生法、陣中に用いる「阿珂術あかじゆつ」であつた。

もしもこの時葉之助が、バツタリ地の上に倒れるか、ないしは胡座こざして大息を吐いたら、そのまま氣絶したに相違ない。彼は十分働き過ぎていた。氣息も筋肉も疲労つかれ切つていた。一点の弛ゆるみは全身の弛みで、一時に疲労つかれが迸り出て、そのまま斃れてしまつたらう。

今日流行はやっている静座法なども、その濫らん觴しょうは「阿珂術」なので、伊藤一刀齋景久は、そういう意味からも偉大だと云える。

氣力全身に満ちた時、彼は刀を持ちかえようとした。さすがに腕にはシコリが来て、指を開くことが出来なかつた。で、左手ゆんでで右手めでの指を、一本一本解といて行つた。と、切つ先から柄つか頭がしらまで、ベツタリ血汐で濡れていた。

「息の音を止めたは八人でもあろうか。傷てを負おわせたは二十人はあろう」

彼は刃こぼれを見ようとした。グイと切つ先を眼めのまえ前へ引き寄せ、一寸一寸送り込み、じいいと刃並みを覗いて見た。空には星も月もなく、中庭を圍いに繞ようした建物からは、灯と火もしび一筋洩れていない。で、四方あたりは真の闇であつた。それにも関らず白々と、刀氣が心眼しんげんに窺のぞわれた。

「うむ、有難い、刃こぼれはない」

これは刃こぼれはない筈であつた。それほど人は切つていたが、チャリンと刀を合わせたのは、二、三合しかないからであつた。

「よし」と云うと左の袖を、柄へキリキリと巻きつけた。それからキューツと血を拭つた。耳を澄ましたが物音がしない。そこでユラリと立ち上がった。

「どのみち地理を調べなければならぬ」

で、そろそろと歩いて行つた。

一つの建物の壁に添い、東の方へ進んで行つた。

行手にポツツリ人影が射した。で、足早に寄つて行つた。

その人影は家の角を廻つた。

「ははあ角口に隠れていて、居待ち討ちにしようというのだな」

葉之助は用心した。足音を忍んで角まで行つた。じつと物音を聞き澄ました。

コトンと窓の開く音がした。ハツと彼は飛び退つた。同時に何物か頭上から、恐ろしい

勢いで落ちて来た。それは巨大な鉄槌であつた。上の窓から投げた物であつた。一步退

き方が遅かつたなら、彼は粉碎されたかもしれない。

彼はキツと窓を見上げた。しかしもう窓は閉ざされていた。そこで彼は角を曲がつた。

どこにも人影は見られなかつた。そうして行手は石垣であつた。

そこで彼は引き返した。

で、以前の場所へ帰つて来た。いつか戸口は閉ざされていた。石段を上つて戸に触れて

みた。門が下ろされているらしい。引いても押しても動かない。で、彼はあきらめた。

同じ建物の壁に添い、西の方へ歩いて行った。やがて建物の角へ来た。サツと刀を突き出してみた。向こう側に誰もいないらしい。で、遠廻りに弛く廻った。

すぐ眼の前に亭ちんがあつた。亭の縁先に腰をかけ、葉之助の方へ背中を向け、二人の男女が寄り添つていた。一基の雪洞ほんぼりが灯されていた。二人の姿はよく見えた。恋がたりでもしているらしい、淫みだ邪教徒の本性をあらわし、淫みだららのこをしているらしい。

「斬りいい形だ。叩つ斬つてやろう」

葉之助は忍び寄つた。掛け声なしの横撲り、男の肩へ斬り付けた。と思つた一刹那、女がクルリとこつちを向き、ヒューツと何か投げつけた。危うく避けたその間に、二人の姿は掻き消えた。投げられた物は紐であつた。紐が彼へ飛び掛かつて来た。それは一匹の毒蛇であつた。

で、三つに斬り払つた。

行手は嚴重の石垣であつた。越して逃げることは出来なかつた。

でまた彼は引き返した、こうして以前の場所へ来た。

反対の側にも建物があつた。地面から五、六階の石段があり、それを上ると戸口であつた。もちろんその戸は閉ざされていた。そこで彼は石段を上がり、その戸をグイと引つ張

つて見た。と、意外にも戸があいた。とたんに彼は転がり落ちた。転がったのが天佑であつた。戸が開くと同時に恐ろしい物が、彼を目掛けて襲いかかつて来た。それを正面に受けたが最後、彼は微塵みじんにされただろう。

一五

円錐形の巨大な石が——今日で云えば地均轆轤しならしろうくろが、素晴らしい勢いで落下したのであつた。

ドーンと戸口は締められた。後は寂然しんと音もしない。しかし無数の邪教徒が、四方八方から彼を取りこめ、討ち取ろう討ち取ろうとしていることは、ほとんど疑う余地はなかつた。

人声のないということは、その凄さを二倍にした。立ち騒がないということは、その恐ろしさを二倍にした。

今は葉之助は途方に暮れた。

「どうしたものだ。どうしてくれよう。どこから、逃げよう。どうしたらいいのだ」

混乱せざるを得なかった。

とまれじつとしてはいられなかった。その建物を東の方へ廻った。と、建物の角へ来た。曲がつた眼前に大入道が、雲突くばかりに立っていた。

「えい！」一声斬りつけた。カーンという金の音がした。そうして刀が鑢つばもとから折れた。大入道は邪神像であった。

「しまった！」と彼は思わず叫び、怨めしうらそうに刀を見た。折れた刀は用に立たない。で彼は投げ棄てた。そうして脇差しを引き抜いた。

こうしてまたも葉之助は、後へ歸らざるを得なかった。さて元の場所へ歸っては来たが、新たにとるべき手段はない。茫然ほんやれたず佇むばかりであった。勇氣も次第に衰えて来た。だがこのまま佇んでいたのでは、遁がれる道は一層なかった。

そこで無駄とは知りながら、西の方へ廻って行った。例によって角へ来た。用心しながらゆるゆる曲がつた。と行手に石垣があり、立派な門が建っていた。

「ははあ門があるからには、門の向こう側は往来だろう。よしよしあの門を乗り越してやれ」

門の柱へ手を掛けた。ひらりと屋根へ飛び上がった。そうして向こう側を隙すかして見た。

思わず彼は「あつ」と云った。そこに大勢の人影が夜目にも解る弓姿勢で、タラタラと並んでいたからであつた。弓を引き絞り狙つてゐるのだ。

彼は背後を振り返つて見た。そこでまた彼は「あつ」と叫んだ。十数人の人影が、鉄砲の筒口を向けていた。

彼はすっかり計られたのであつた。腹背敵を受けてしまった。もう助かる術はない。飛び道具には敵すべくもない。

が、しかし彼の頭を、その時一筋の光明が、ピカリと光って通り過ぎた。

「ここは江戸だ。しかも深夜だ、よもや鉄砲を撃つことは出来まい。撃つたが最後世間へ知れ、有司の疑いを招くだろう。邪教徒の教会はすぐに露見だ。一網打尽に捕縛されよう……断じて鉄砲を撃つ筈はない……弓手の方さえ注意したら、まず大丈夫というものだ」
で、彼は屋根棟へ寝た。

一筋の矢が飛んで来た。パツと刀で切り払った。つづいて二本飛んで来た。幸いにそれは的外れた。

寝たまま葉之助は考えた。

「高所に上つて矢を受ける。まるで殺されるのを待つようなものだ。身を棄ててこそ浮か

ぶ瀬もあれ。一刀流の極意の歌だ。弓手の真ん中へ飛び下りてやろう」

四本目の矢が飛んで来た。それを二つに切り折ると共に、ヤツとばかりに飛び下りた。計略たしか凶にあたり、弓手は八方へ逃げ散った。しかし葉之助の思惑は他の方面で破られた。そこは決して往来ではなかった。いつそう広い中庭であった。

隙かして見れば所々に、幾個か檻いくつが立っていた。「はてな？」と葉之助は不思議に思った。

一つの檻へ近寄って見た。三匹の熊が闇の中で爛々とその眼を怒らせていた。

これには葉之助もゾツとした。もう一つの檻へ行つて見た。十数頭の狼が、グルグルグの檻に添ってさもいらいらと走っていた。ここでも葉之助はゾツとした。さてもう一つの檻の前へ行つた。一匹の猪が牙きばを剥き、何かの骨を噛み砕いていた。と、その時一点の火光が、門の屋根棟へ現われた。それは松たいまつ明の火であった。つづいて一点また一点、松明の火が現われた。

大勢の人が屋根の上に、一列に並んで立っていた。

そうしてその中には教主もいた。男女二人の教主がいた。

何かが始まるうとしているらしい。何かを始めようとしているらしい。

何をしようとするのだろうか？ と、ガチンと音がした。「ウォーツ」と唸る熊の声がした。檻を誰かが開けたらしい。三頭の熊がしずしずと檻から外へ現われ出た。それが松明の火で見えた。続いてガチンと音がした。

無数の狼が先を争い、檻の中から走り出た。

一六

教徒達の意図は証明された。彼らは葉之助を惨酷ざんこくにも、猛獸に食わせようとするのであった。

邪教徒らしいやり方であった。敢て葉之助ばかりでなく、これまで幾人かの人間が、猛獸の餌食えしきにされたのであった。裏切り者と目星を付けるや、彼らは用捨なくその者を捕えて、人知れず檻の中へ入れたものであった。猪の食っていた何かの骨！ それは人間の骨なのであった。ただし葉之助は手強てしわかった。捕えることが出来なかつた。そこで猛獸の檻をひらき、四方を囲んだ広い空地で、食い殺させようとしたのであった。

そうして教主をはじめとし、大勢の教徒達が屋根の上から、それを見ようとしているの

であつた。

羅馬ローマにあつたという演武場！

西班牙スペインに今もある闘牛場！

それが大江戸にあらうとは

！

信じられない事であつた。信じられない事であつた。

が、敵たる事実であつた。現に猛獸がいるではないか。ジリジリせま逼つて来るではないか。そうだ猛獸は逼つて来た。

狼群は円い輪を作り、葉之助の周圍まわりを廻り出した。しかし決して吠えなかつた。訓練されてゐるからであつた。吠えたら世間に知られるだろう。世間に知られたら露見の基であつた……で、かすかに唸るばかりであつた。

もちろん熊も吠えなかつた。ただ「ウオーツ」と唸るだけであつた。

さすがの鏡葉之助も、頭髮逆立つ思いがした。

「もう駄目だ、もういけない」

彼は悲惨にも観念した。人間同士の闘いなら、まだまだ遁がれる道はあつた。相手は群狼と熊とであつた。遁がれることは出来なかつた。葉之助は脇差しを投げ出した。それから大地へ端座した。眼を瞑つむり腕を組んだ。猛獸の襲うに任せたのであつた。

グルグルグルグル狼の群は、彼の周囲を駈け廻った。その輪をだんだん縮めて来た。熊は三頭鼻面を揃えジリジリと前へ押し出して来た。

が、熊も狼も、容易に飛び付こうとはしなかった。

その時突然奇蹟が起こった。

まず一匹の大熊が、葉之助の前へゴロリと寝た。そうして葉之助の足を嘗めた。さも親しそうに嘗めるのであった。つづいて二匹の熊が寝た。そうしてこれも親しそうに、葉之助の手をベロベロ嘗めた。と、狼が走るのを止めて、葉之助の周囲へ集まって来た。そうして揃って後脚あとあしで坐り、前脚の間へ鼻面を突っ込み、上眼を使って葉之助を見た。それは親し気な様子であった。これはいったいどうしたのだろうか？ どういう魔術を使ったのだろうか？ 魔術ではない。奇蹟でもない。これには理由があるのであった。

葉之助自身は知らないのではあったが、彼は窩人の血を受けていた。彼の母は山吹であった。山吹は杉右衛門の娘であった。杉右衛門は窩人の長であった。里の商人多四郎と、窩人の娘の山吹とが八ヶ嶽山上鼓ヶ洞つづみほらで、恋の生活を営んでいるうちに、孕り産んだのが葉之助であった。すなわち幼名猪太郎というのが、彼葉之助に他ならないのであった。

ところで窩人と山の獣とは、ほとんど友人ともだちの仲であった。決して両個は敵同士ではな

かった。

そこでこういう奇蹟めいたことが、切羽詰まったこんな場合に、両個の間に行われたのであった。

足を嘗められた葉之助は、ブルツと顫ふるえて眼を開いた。そうして奇怪な光景を見た。もちろん彼には何んのために、獣達が親したしみをさせるのか、解かすることが出来なかつた。しかしそれらの獣達に、害心のないことは見て取られた。彼は憤然と飛び上がった。瞬間に彼は自分自身に、神力のあることを直感した。奇蹟を行い得る偉大な威力！ それがあることを直感した。で、彼は叫び出した。

「熊よ狼よ俺の味方だ！ さああいつらをやっつけてくれ！ 俺が命ずる。やっつけてしまえ！」

「ウオーツ」と熊は初めて吠えた。そうして門の方へ突進した。

「ウオーツ」と狼群も吠え声を上げた。そうして門の方へ突進した。

葉之助は猪の檻おりを開いた。猪は牙を嚙んで突進した。

尚、いくつかの檻があつた。土佐犬の檻、猛牛の檻、そうして、どうして手に入れたものか、一つの檻には豹ひょうがいた。しかも雌雄の二頭であつた。葉之助はその檻を引きあげた。

悲鳴が門の屋根から起こった。

熊が門を揺すぶった。狼が屋根へ飛び上がった。喚き声、叫び声、泣き声、怒声！ 人獣争闘の大修羅場おわしゆらばがこうして、邸内に展開された。形勢は一変したのであつた。

読者諸君よ、この争闘を、単に邪教の教会ばかりで演ぜられると思つては間違うであらう。江戸市中一円に向かつて、恐ろしい騒動を引き起こしたのである。

いかに次回が血ちなまぐさ腥しんく、いかに素晴らしい大修羅場が次々に行われ演ぜられるか？

いよいよ物語は佳境に入った。

一七

奇蹟を行う力があると、葉之助は自分を信ずることが出来た。

彼は猛獣をけしかけた。

「さあ勇敢にあばれ廻れ！ 永い間檻へ入れられて、苦しめられたお前達だ、苦しめた奴を苦しめてやれ！ 復讐ふくしゅうだ！ 念晴らしだ！」

猛獣は咆吼ほうこうした。

豹は門の屋根へ飛び上がった。

屋根の上から悲鳴が起こった。

人のなだれ落ちる音がした。恐らく男女二人の教主も、なだれ落ちたに相違ない。

松明の火が瞬間に消えた。

どこにも人影が見られなかった。

もう一頭の豹が屋根を越した。

門の向こう側で悲鳴がした。喚声、罵声、叫声、ヒーツと泣き叫ぶ声がした。

逃げ迷う人々の足音がした。

ウオーツという豹の吠え声がした。

三頭の熊が門の柱を、その強い力で揺すぶった。グラグラと門が揺れ出した。と、屋根

の瓦が落ち、扉が碎けて左右に開いた。

そこから熊が飛び出して行った。

十数頭の狼が、つづいて門から飛び出した。その後から駈け出したのが、巨大な五頭の猛牛であった。と、三十頭の土佐犬が、葉之助の周囲を囲みながら、後陣しんがりとして駈け出した。

入り込んだ所は中庭であつた、すなわち第一の中庭であつた。

そこで格闘が行われていた。

それは人獣の格闘であつた。

人間の死骸が転がっていた。

食い殺された人間であつた。

半死半生の人間もいた、ある者は掌てを合わせ、ある者は跪ひざまずき、助けてくれと喚わめいていた。

葉之助は用捨しなかつた。

猛獣が用捨する筈がない。

ムラムラと土佐犬は走り掛けた。たちま忽ち格闘が行われた。人間は見る見る引き裂かれた。

一匹の犬は腕をくわえ、一匹の犬は首をくわえ、一匹の犬は足をくわえ、嬉しそうに尻尾を振った。

向こうに一団、こつちに一団、取り組み合っている人影があつた。熊と、豹と、狼と、取っ組み合っている人間であつた。

みるみる死骸が増えて行つた。

投げ捨てられた松明が、メラメラと焰ほのおを上げていた。

百人余りの一団が、建物の方へ走っていた。教主を守護した信者達が、そこに開いている戸口から、屋内へ逃げ込もうとしているのであった。

二頭の豹が飛び掛かって行つた。数人の者が引きたお仆された。が、団体は崩れなかつた。遮しやにむに二無二戸口の方へ走つて行つた。三頭の熊が飛び掛かつた。二頭の豹と力を合わせ、信者達を背中から引き仆した。

殺された者は動かなかつた。負傷ておいの者は匆はね起きた。そうして団体と一緒になつた。

宗教的信仰の力強さが、そういうところでも窺うかがわれた。教主を守れ！ 教主を守れ！ 食い付かれても仆されても、団体から離れようとはしなかつた。

猛獣の群は襲い掛かつた。

十頭の狼が飛びかかつた。

瞬間に十人が食い仆された。しかしみんな飛び起きた。

教主を守れ！ 教主を守れ！ 教主を守つた一団は、だんだん戸口へ近寄つて行つた。

猛獣の群れの襲撃は、益 惨酷の度を加えた。十二、三人が死骸となつた。

だがとうとう石段まで来た。

その時牛が走りかかつた。

一団の只中へ角を入れた。

バラバラと信徒は崩れ立った。

しかし次の瞬間には、またムラムラと集まった。とまた牛が突き崩した。バラバラと信徒達は崩れ立った。しかし次の瞬間には、またムラムラと集まった。

教主を守れ！ 教主を守れ！

狼はヒュー、ヒューと宙を飛んだ。豹は人間の頭を齧かじった。猛犬は足へ喰い付いた。

教主を守れ！ 教主を守れ！

一団は石段を上って行つた。

とうとう彼らは戸口まで来た。

彼らは家の中へ崩れなだ込んだ。

熊も豹も狼も、つづいて家の中へ飛び込んだ。土佐犬が続いて飛び込んだ。

つづいて葉之助も踊り込んだ。

こうして格闘は中庭から、家の中へ移された。

蜘蛛くも手に造られてある廊下の諸所で、人獣争闘が行われた。

猛獣は部屋の中へ混み入った。

そこでも格闘が行われた。

鏡葉之助は切つて廻つた。

落ちていた刀を拾い取つた。右手に刀めて左手に脇差し、彼は二刀で切り捲くつた。彼の周囲には狼や犬が、いつも十数頭従つていた。

一八

「教主はどこだ、教主をやつつけろ」

葉之助は探し廻つた。

急に廊下が左へ曲がつた。

と、教主の一団が見えた。真つ黒に塊かたまつて走つていた。

葉之助は追い詰めた。

手近の一人を切り仆した。ワーツという悲鳴が起こり、パツと血汐が左右に飛んだ。

彼らの中の数人が、にわかに健気けなげにも取つて返した。

葉之助は右剣を斜めに振つた。バツタリ一人が床の上へ仆れた。そこへ一人が飛び込ん

で来た。と、葉之助は左剣で払った。一つの首が床の上へ落ち、ドンという気味の悪い音を立てた。

後の二人は逃げ出した。すぐに狼が飛びついた。そうして喉のど笛ぶえを噛み切った。虚空こくうを掴つかむ指が見えた。

教主の一団は遠ざかった。

葉之助は後を追った。

狼と犬とが従った。

ふたたび彼らへ追いつこうとした。

にわかに彼らが立ち止まった。

彼らの顔は笑っていた。走って来る葉之助を凝視した。悪意を持った嘲笑であった。

つと一人が前へ進み、廊下の壁へ手を触れた。とたんに廊下の板敷が外れ、葉之助は床下へ落ち込んだ。

彼らはドツと笑声を上げ、そのままドンドン走って行った。

と、数匹の狼が、ヒユウヒユウと床下へ飛び込んだ。間もなく次々に飛び出して来た。巨大な一匹の狼の背に、葉之助はしがみついていた。彼は左の手を挫くじいていた。動かすこ

とが出来なかつた。劇はげしい痛みには堪えられなかつた。で、彼は転げ廻まわつた。土佐犬が悲しそうに吠え立てた。

しかし狼は吠えなかつた。葉之助の周囲へ集まつて来た。挫いた左の腕の附け根を暖かい舌で嘗め廻まわした。

獣には獣の治療法があつた。彼ら特色の治療法であつた。彼らの唾液だえきは薬であつた。暖かい舌で嘗め廻まわすことは、温湿布に当たつていた。鏡葉之助の体には、窩人の血汐が混つていた。

窩人と獣とは友達であつた。

獣特色の治療法は、一面窩人の治療法でもあつた。

葉之助の痛みは瞬間に止んだ。腕の運動も自由になつた。

彼の勇氣は恢かいふく復ふくした。

彼は猛然と立ち上がった。

それから彼は追つかけた。

教主達の姿は見えなかつた。どうやら廊下を曲がつたらしい。葉之助と狼と土佐犬とは、廊下を真つ直ぐに走つて行つた。と、廊下は右へ曲がつた。葉之助も右へ曲がつた。彼ら

の姿は見えなかった。廊下をズンズン走って行った。すると廊下は突き当たった。頑固な石壁が立っていた。

「はてな？」

と葉之助は途方に暮れた。

「行き止まりだ。途がない。あいつらはどこへ行ったのだろうか？」

突然一匹の土佐犬が、一声高く咆吼した。壁に向かって飛び掛かった。

果然壁に穴が開いた。

そこに開き戸があつたのであつた。

犬はヒラリと飛び込んだ。

同時にギャツという悲鳴が聞こえた。

首を切られた犬の死骸が、ピヨンと廊下へ匆ね返って来た。

向こう側に誰かいるらしい。待ち伏せをしているらしい。

犬達は喧騒した。つづけて二、三匹飛び込もうとした。

「叱っ！」

と葉之助は手で止めた。

犬の死骸を抱き上げた。それを戸口から投げ込んだ。つづいて自分も飛び込んだ。

二人の武士が立っていた。

颯と二人切り込んで来た。チャリンと葉之助は両刀で受けた。一人の刀をポンと刎ね、もう一人の刀を巻き落とした。寄り身になって横へ払った。ワツと一人が悲鳴を上げた。刀を落とされた武士であった。額から鼻まで切り下げられていた。

ドンと武士はぶつ仆れた。狼と犬とが群がりたかった。見る間に寸々に引き裂いた。

「えい」と葉之助は声を掛けた。すぐワツという声が出た。もう一人の武士が切り仆された。

犬と狼とが引き裂いた。

一九

葉之助は部屋を見廻した。

それはまさしく閨房であった。垂れ布で幾部屋かに仕切っていた。どの部屋にも裸体像があった。いずれも男女の像であった。

多くの男女の信者達は、この部屋でお恵みを受けたのだろう。

あちこちに脱ぎ捨てた衣裳があった。

信者達は裸体で逃げ出したと見える。

部屋部屋には一個ずつ香炉こうろがあった。香炉から煙りが立っていた。催淫薬さいいんやくの匂いがした。

反対の側に戸口があった。

葉之助はそこから出た。

長い一筋の廊下があった。

彼はそれを向こうへ渡った。狼と犬とが従った。

と、独立した塔へ出た。

教主達はその内へ逃げ込んだらしい。ガヤガヤ騒ぐ声があった。

葉之助は入り込んだ。

階段が上へ通じていた。上の方から人声があった。

で、葉之助は駈け上がった。犬と狼とが従った。

上り切った所に部屋があった。が、誰もいなかった。階段が上へ通じていた。そっちか

ら人声が聞こえて来た。で、葉之助は上がって行つた。

上り切つた所に部屋があつた。しかし誰もいなかった。階段が上へ通じていた。そつちから人声が聞こえて来た。で、葉之助は上がって行つた。

その結果は同じであつた。上り切つた所に部屋があつた。しかし誰もいなかった。階段が上へ通じていた。そつちから人声が聞こえて来た。そこで葉之助は勇を鼓し、それを上へのぼることにした。

だがその結果は同じであつた。上り切つた所に部屋があり、部屋には誰もいなかった。階段が上に通じていた。そつちから人声が聞こえて来た。で、葉之助は上ることにした。上り切つた所に部屋があつた。やはり誰もいなかった。階段が上に通じていた。そつちから人声が聞こえて来た。

で、またも葉之助は上へ上らなければならなかつた。

上り切つた所に部屋があつた。そこが頂上の部屋らしかつた。上へ通じる階段がなく、頭の上には天井裏があつた。

しかし彼らはいなかつた。

ではどこから逃げたのだろうか？

裏口へ下りる階段口があった。表と裏とに階段が、ふたすじ二一条設けられていたものらしい。表の階段から逃げ上がり、裏の階段から逃げ下りたらしい。

「莫迦ぼかな話だ。何んということだ。無駄に体を疲労つかれさせたばかりだ」

眩きながら葉之助は、裏の階段口へ行つて見た。

彼は思わず「あつ」と云つた。肝心の階段が取り外はずされていた。

表の階段口へ行つてみた。またも彼は「あつ」と叫んだ。たつた今上つて来た階段が、いつの間にか取り外されていた。

「ううむ、さては計られたか！」

切齒せしせざるを得なかつた。

飛び下りることは出来なかつた。階段口は一直線に土台下から最上層まで、真つ直ぐに垂直うがに穿たれてあつた。で、もし彼が飛び下りたなら、最上層から土台下まで、一気に落ちなければならぬだろう。どんなに体が頑丈でも、ひとたまりもなく粉碎されよう。

彼はゾツと悪寒を感じた。

急いで窓を開けて見た。

地は闇にとぎされていた。下へ下りるべき手がかりはなかつた。

「計られた！ 計られた！ 計られた！」

彼は思わず地団駄を踏んだ。

まさしく彼は計られたのであった。上へ上へと誘き上げられ、最上層まで上ったところで、彼は一切の階段を、ひつ外されてしまったのであった。

これは恐るべき運命であった。

いったいどうしたらよいだろう？

犬と狼とは騒ぎ出した。彼らは葉之助の後を追い、一緒にここまで上って来た。彼らも恐ろしい運命を、動物特有の直感で、早くも察したものらしい。

階段口を覗いたり、葉之助の顔を見上げたりした。

やがて憐れみを乞うように、悲しそうな声で唸り出した。

葉之助は狼狽した。

その時一層恐ろしいことが、彼と獣達とを脅かした。

と云うのは階段口から、黒い煙りが濛々^{もうもう}と、渦巻き上って来たのであった。

焼き打ち！　焼き打ち！　焼き打ちなのであった！

邪教徒が塔へ火を掛けたのだ。

遁がれることは出来なかつた。

「残念！」と葉之助は呻くうめように云つた。

窓から外を覗いて見た。カツと外は赤かつた。火は四辺あたりを照らしていた。今まで夜闇よやみに閉ざされていた真つ黒の大地が明るんで見えた。

無数の人間の姿が見えた。

塔の上を振り仰ぎ、指を差して喚わめいていた。踊り廻っている人姿もあつた。

「残念！」と葉之助はまた呻いた。

煙りがドンドン上つて来た。物の仆れる音がした。メリメリという音がした。火の粉がパラパラと降つて来た。

塔は土台から焼けているのであつた。

間もなく塔は仆れるだろう。

そうなつたら万事休おしまいであつた。

と、その時、狼達が、不思議な所作しよさをやり出した。

次々に窓際へ飛んで行き、窓から外へ鼻面を出し、「ウオー、ウオー、ウオー、ウオー」と長く引つ張つて吠え出した。

これぞ狼の友呼び声で、深山幽谷で聞く時は、身の毛のよだつ声であつた。

「これは不思議」と葉之助は、窓から下を見下ろした。

奇怪な事が行われた。いや、それが当然なのかもしれない。

友呼びの声に誘われたように、あちからもこつちからも狼が——いや、熊も土佐犬も、そうして豹までも走り出して来た。

パツと人の群は八方へ散つた。

猛獣の群は塔を見上げ、ウオーツ、ウオーツと咆吼ほうこうした。

そうして体を寄せ合つた。

突然一匹の狼が、葉之助の横顔を斜めに掠かすめ、窓からヒラリと飛び下りた。

葉之助はハツとした。

「可哀こなみじんそうに粉微塵こなみじんだ」

いや、粉微塵にはならなかつた。体を寄せ合つた獣の上へ、狼の体が落下した。蒲団の

上へでも落ちたように、狼の体は安全であった。

すぐに狼は飛び起きた。そうして仲間の狼へ、自分の体をピツタリと付けた。そうして塔上の侶ともを呼んだ。ウオーツ、ウオーツと侶を呼んだ。

と、葉之助の横顔を掠め、次々に狼が窓から飛んだ。

みんな彼らは安全であった。

飛び下りるとすぐに起き直り、仲間の体へくっ付いた。そうして誘うようにウオーツと吠えた。

塔内の狼は一匹残らず、窓から地上へ飛び下りた。

葉之助とそうして土佐犬ばかりが、塔の中へ残された。

「よし」

と葉之助は頷いた。

一匹の土佐犬を抱き抱かかえ、窓から下へ投げ下ろした。途中で一つもんどり打ち、キャンと一声叫んだが、犬は微傷さえしなかった。群がり集まっている仲間の上へ安全に落ちて起き上がった。

次々に犬を投げ下ろした。

彼らはみんな安全であった。

とうとう葉之助一人となった。

煙りは塔を立ちこめた。

ユサユサ塔が揺れ出した。

すぐにも塔は崩れるだろう。

獣達は彼を呼んだ。飛び下りろ飛び下りろと彼を呼んだ。

葉之助は決心した。窓縁へ足をかけ、両刀を高く頭上へ上げ、キツと下を見下ろした。

「ヤツ」と彼は一声叫び、窓から外へ身を躍らせた。

熊の背中が彼を受けた。彼はピョンと飛び上がった。綿の上へでも落ちたようであった。

とたんに塔が傾いた。火の粉がパラパラと八方へ散った。幾軒かの建物へ飛び火した。

あちこちから火の手が上がった。

大門の開く音がした。

人の走り出る音がした。

町の火の見で半鐘はんしやうが鳴った。

四方は昼のように明るかった。男女の信者が火の中で、右往左往に逃げ廻った。

猛獸がそれを追っかけた。

ふたたび人獸争闘が、焰の中で行われた。

葉之助は両刀を縦横に揮い、当たるを幸い切り捲くつた。

猛獸が彼を警護した。

彼は大門の前まで来た。門の外は往来であつた。それは大江戸の町であつた。

一団の人影が走つて行つた。教主の一団と想像された。

「それ！」

と葉之助は声をかけた。猛獸の群が追っかけた。葉之助は直走つた。

火消しの群が走つて来た。町々の人達が駆け付けて来た。

ワーツ、ワーツと鬨の声を上げた。

猛獸の群が走るからであつた。

返り血を浴びた葉之助が、血刀を提げて走るからであつた。

獸の群は狂奔した。

おりから空は嵐であつた。火が隣家へ燃え移つた。

教主の一団が走って行つた。その後を猛獣が追つかけた。そうしてその後から葉之助が走つた。

深夜の江戸は湧き立つた。邪教の道場は燃え落ちた。火が八方へ燃え移つた。町火消し、弥次馬、役人達が、四方八方から駈けつけて来た。

悲鳴、叫喚、怒号、呪詛。……ここ芝しばの一带は、修羅ちまたの巷と一変した。

その同じ夜のことであつた。

遠く離れた浅草は、立ち騒ぐ人も少かつた。しかしもちろん人々は、二階や屋根へ駈け上がり、遥かに見える芝の火事を、不安そうに噂した。

「芝と浅草では離れ過ぎていらあ。対岸の火事つていう奴さ。江戸中丸焼けにならねえ限りは、まず安泰というものさ。風邪でも引いちやあ詰まらねえ、戸締りでもして寝るがい」

こんなことを云つて引つ込む者もあつた。神経質の連中ばかりが、いつまでも芝の方を

眺めていた。

観音堂の裏手の丘から、囁く声が聞こえて来た。

「おい、芝が火事だそうだ」

「江戸中みんな焼けるがいい」

「そうして浮世の人間どもが、一人残らず焼け死ぬがいい」

「そうして俺ら窩人ばかりが、この浮世に生き残るといい」

夜の闇が四辺あたりを領していた。窩人達の姿は朦朧もうろうとしていた。立っている者、坐っている者、歩いてる者、木へ上っている者、ただ黒々と影のように見えた。

遙か彼方あなたの境内けいだいの外れに、菰張りの掛け小屋が立っていた。興行物こうぎょうものの掛け小屋であった。窩人達の出演でている掛け小屋であった。その掛け小屋の入り口の辺に、豆のような灯火ともしびがポツツリと浮かんだ。それが走るように近寄って来た。火の玉が闇を縫うようであった。窩人達の側まで来た。それは龕灯がんとうの火であった。龕灯の持ち主は老人であった。窩人の長おさの杉右衛門で、杉右衛門の背後に岩太郎がいた。

「時は来た！」と杉右衛門が云った。「水狐族めと戦う時が！」

窩人達は一齐に立ち上がり、杉右衛門の周囲を取り巻いた。「おい岩太郎話してやれ」

杉右衛門が岩太郎にこう云った。

つと岩太郎は前へ出た。

「みんな聞きな、こういう訳だ。火事だと聞いて見に行つた。烏からすもり森の辻まで行つた時だ、真ん丸に塊まつた一団の人数が、むこうからこつちへ走つて来た。誰かに追われていくようだった。武士さむらいもいれば町人もいた。男もいれば女もいた。その時俺は変な物を見た。若い女と若い男だ。人の背中に背負われていた。衣裳の胸に刺繡ぬいどりがあつた。それを見て俺は仰ぎよつてん天てんした。青糸で渦巻きが刺繡ぬいとられていたんだ。白糸で白狐が刺繡ぬいとられていたんだ。水狐族めの紋章ではないか。そいつら二人は孫だつたのだ。水狐族の長久田おきの姥うばのな！ さあ立ち上がれ！ やつつけてしまえ！ 間もなくこつちへやつて来るだろう。敵の人数は二百人はあろう。だが、味方も五十人はいる。負けるものか！ やつつけてしまえ！ ……俺は急いで取つて返した。一人で切り込むのはわけがなかったが、だがそいつはよくないことだ！ あいつらは種族の共同の敵だ！ だから皆んなしてやつつけなけりやあならねえ。掛け小屋へ歸つて武器を取れ！ そうして一緒に押し出そう」

窩人達はバラバラと小屋の方へ走つた。

現われた時には武器を持っていた。

長の杉右衛門を真ん中に包み、副将岩太郎を先頭に立て、一団となって走り出した。彼らは声を立てなかつた。足音をさえ立てまいとした。妨害されるのを恐れたからであつた。

境内を出ると馬道であつた。それを突つ切つて仲町へ出た。田原町の方へ突進した。清島町、稲荷町、車坂を抜けて山下へ出、黒門町から広小路、こうして神田の大通りへ出た。神田辺りはやや騒がしく、町人達は門へ出て、芝の大火を眺めていた。

その前を遅たぐましい男ばかりの、五十人の大勢が、丸く塊かたまりまって通り抜けた。刀や槍を持つていた。

町の人達は仰天した。だが遮よそえぎろうとはしなかつた。その威勢に恐れたからであつた。芝の火事は大きくなつたと見え、火の手が町の屋根越しに、天を焼いて真つ赤に見えた。窩人の一団は走つて行つた。室町を経て日本橋を通つて京橋へ出た。

こうして一団は銀座へ出た。

と、行手から真つ黒に塊かたまりまり、大勢の人影が走つて来た。

それは水狐族と信者とであつた。

こうして二種族は衝突した。

初めて鬨とぎの声が上げられた。

二二

鏡葉之助はどうしたろう？

この時鏡葉之助は、裏町伝いに根岸に向かい、皆川町の辺を走っていた。

彼はたった一人であった。獣達の姿は見えなかった。豹も狼も土佐犬も、道々火消しや役人や、町の人達に退治された。たまたま死からまぬかれた獣は、山を慕って逃げた。逃げた。

だがどうして葉之助は、水狐族の群に追い縋り、討って取ろうとはしないのだろうか？

彼は途中で思い出したのであった。

「殿の根岸の下屋敷を警戒するのが役目だった筈はずだ」

で彼は道を変え、根岸を指して走っていた。雉子町きじを通り、淡路町あわじを通り、駿河台へ出て御茶ノ水本郷を抜けて上野へ出、鶯谷うぐいすだにへ差しかかった。

左右から木立が蔽おほいかかり、この時代の鶯谷は、深山みやまの態さまを呈していた。

と行手から来る者があつた。ひどく急いでいるようであつた。空には月も星もなく、その空さえも見えないほどに、木立が頭上を蔽うていた。で四辺は闇であつた。

闇の中で二人は擦れ違つた。

「はてな、何んとなく知つた人のようだ」

葉之助は背後うしろを振り返つて見た。

すると擦れ違つたその人も、どうやらこつちを見たようであつた。

が、その人も急いでいれば、葉之助も心が急せいでいた。そのまま二人は別れてしまつた。

葉之助は根岸へ来た。

殿の下屋敷の裏手へ行つた。

「あつ」と彼は仰天した。地面に一筋白々と、筋が引かれているではないか。

「しまつた！」と彼はまた云つた。

しかし間もなくその筋が、一ひとつ所ところ足で蹴散らされ、白粉はくふんが四散しているのを見ると、

初めて胸を撫で下ろした。

それと同時に不思議にも思つた。

「いつたい誰の所業しわざだろう？」

首を傾げざるを得なかつた。

「この白粉の重大な意味は、俺と北山先生ほくざんとだけしか知っている者はない筈だ。俺は蹴散らした覚えはない。では北山先生が、今夜ここへやって来て、蹴散らしたのではあるまいか。……おつ、そう云えば鶯谷で、知つたような人と擦れ違つたが、そうだそうだ北山先生だ」

ようやく葉之助は思い中あたつた。

「危険が去つたとは云われない。今夜はここで夜明かしをしよう」

葉之助は決心した。

体が綿のように疲労つかれていた。彼は草の上へ横になつた。引き込まれるように眠くなつた。

「眠つてはいけない、眠つてはいけない」

こう思いながらもウトウトと、眠りに入つてしまひそうであつた。

夜風が空を渡つていた。木立に中つて習しゅう々と鳴つた。それが彼には子守唄に聞こえた。

彼はとうとう眠つてしまつた。

鶯谷の暗闇で、葉之助と擦れ違つた人物は、谷中の方へ走つて行つた。

芝の方にあたつて火の手が見えた。

「や、これは大きな火事だ」吃驚びっくりしたように眩つぶやいた。

それは天野北山であつた。

「殿のお屋敷は大丈夫かな？」

走り走りこんなことを思つた。

「葉之助殿はどうしたろう？ 殿の下屋敷を警戒するよう、あれほどしっかり頼んでおいたのに、今夜のような危険な時に、その姿を見せないとは、甚はなはだもつてけしからぬ次第だ。だがあるいは病気かもしれない。……」

だんだん火事は大きくなるな。行つて様子を見たいものだ。だが俺の出府した事は、殿にも家中にも知らせない。顔を出すのも変な物だ」

谷中から下谷へ出た。

「さてこれからどうしたものだ。葉之助殿には至急会いたい。窩人の血統だということを教えてやる必要があるようだ」

火事は漸次^{だんだん}大きくなつた。下谷辺は騒がしかつた。人々は門に立つて眺めていた。「とにかくこつそり駕籠^{かご}へでも乗り、葉之助殿の屋敷を訪ねてみよう。頼みたいこともあるのだからな」

駕籠屋が一軒起きていた。

「おい、芝までやってくれ」

「へい、よろしゅうございます」

威勢のいい若者が駕籠を出した。で北山はポンと乗った。

駕籠は宙を飛んで走り出した。

銀座手前まで来た時であつた。前方にあたつて鬨の声が聞こえた。大きな喧嘩^{けんか}でも起こつたようであつた。

「旦那旦那大喧嘩です」

駕籠^か昇きはこう云つて駕籠を止めた。

「裏通りからやるがいい」

駕籠の中から北山が云つた。

そこで駕籠は木挽町^{こびきちょう}へ逸^それた。

火元はどうやら愛宕下らしい。木挽町あたりも騒がしかった。かてて大喧嘩というところから、人心はまさに兢々としていた。

「火消し同士の喧嘩だそうだ」「いや浅草の芸人と、武士との喧嘩だということだ」「いや賭場が割れたんだそうだ」「いや謀反人だと云うことだ」「いや、一方は芸人で、一方は神様だということだ」「神様が喧嘩をするものか」

往来に集まった人々は、口々にこんなことを云っていた。

駕籠はズンズン走って行った。芝口へ出、ろげつちよう露月町を通り、宇田川町、金杉橋、やがて

駿河守の屋敷前へ来た。

この辺もかなり騒がしかった。

「ここで下ろせ」

と北山は云った。

駕籠から下りた北山は、葉之助の屋敷の玄関へ立った。

案内を乞うと声に応じ、取り次ぎの小侍が現われた。

「これはこれは北山先生で」

「葉之助殿ご在宅かな」

「いえ、お留守でございます」 気の毒そうに小侍は云った。

「ふうむ、お留守か、どこへ行かれたな」

「はいこの頃は毎晩のように、どこかへお出かけでございます」

「ははあさようか、毎晩のようにな」

——それではやはり葉之助は、下屋敷へ警戒に行くものと見える。今夜も行ったに相違ない。きつと駈け違つて逢わなかつたのだろう。

天野北山はこう思った。

「葉之助殿お帰りになつたら、俺わしが来たとお伝えくたされ。改めて明朝お訪ね致す」

「大火の様子、ご注意なされ」

で北山は往来へ出た。

そうして新しく駕籠を雇い、神田の旅籠屋はたごやへ引つ返した。

葉之助は草の上に眠りこけていた。決して不覚とせめることは出来ない、彼は実際一晩

のうちに、余りに体を使い過ぎた。これが尋常の人間なら、とうに死んでいただろう。だが眠ったということは、彼にとつては不幸であった。

黒々と空に聳えている森帯刀家の裏門が、この時音もなくスーと開いた。

忍び出た二つの人影があつた。一人は立派な侍で、一人はどうやら町人らしかった。地上に引かれた筋に添い、葉之助の方へ近寄つて来た。

間もなく葉之助の側まで来た。

二人は暗あんちゆう中で顔を見合わせた。

「紋兵衛、これで秘密が解つた」こう云つたのは武士であつた。「ここに眠っているこの侍が、俺達わしの計画の邪魔をしたのだ」

「はい、どうやらそんなようで」

「ここで白粉が蹴散らされている」

「以前にも一度ありました」

「こいつの所業に相違ない」

「莫迦ばかな奴だ、眠っております」

「いったいこいつ何者であろう？」

そこで町人は覗き込んだ。

「おつ、これは葉之助殿だ！」

「何、葉之助？ 鏡葉之助か？」

「はい、帯刀様、さようでございます」

「そうか」

と武士は腕を組んだ。

「鏡葉之助とあつてみれば斬つてすてることも出来ないな」

「とんでもないことで。それは出来ません」

「と云つて捨てては置かれない」

「私に妙案がございます」

町人は武士の耳の辺で、何かヒソヒソと囁いた。

「うむ、こいつは妙案だ」

「では」と云うと町人は、懐中へスツと手を入れた。取り出したのは白布であつた。それを葉之助の顔へ掛けた。

しばらく二人は見詰めていた。

「もうよろしゅうございましょう」

町人はこう云うと白布を取った。それから葉之助を抱き上げた。葉之助は死んだように他愛がなかった。

武士が葉之助の頭を抱え、町人が葉之助の足を持った。

森帯刀の屋敷の方へ、二人はソロソロと歩いて行つた。上野の山に遮られて、火事の光も見えなかつた。根岸一帯は寝静まつていた。

葉之助を抱えた二人の姿は、文字通り誰にも見られずに、森帯刀家の裏門から、屋敷の中へ消えてしまつた。

闇ばかりが拡がつていた。習々しゅうしゅうと夜風が吹いていた。

二四

この頃江戸の真ん中では、窩人と水狐族との鬪争たたかいが、凄じすさまい勢いで行われていた。種族と種族との争いであつた。宗教と宗教との争いであつた。先祖から遺伝された憎悪と憎悪とがぶつかり合つた争いであつた。

火事の光はここまでも届き、空が猩々緋を呈していた。家々の屋根が輝いて見えた。

幾群いくむれかに別れて切り合った。槍、竹槍、刀、棒、いろいろの討ち物が閃めいた。悲鳴や怒号が反響した。

一群がパタパタと逃げ出した。他の群がそれを追っかけた。逃げた群は路地へ隠れた。他の群はそれを追い詰めた。逃げた群が盛り返して来た。路地で格闘が行われた。

数人が人家へ逃げ込もうとした。その家では戸を立てた。家人は内からその戸を抑えた。数人がそこへ追っかけて来た。そこでも切り合いが始まった。

人家の屋根へ上がる者があった。その屋根の上に敵がいた。取っ組んだまま転がり落ちた。

一人の武士さむらいが竹槍で突かれた。それは迷信者の一人であった。他の武士が突進した。竹槍を持った窩人の一人が、武士のために手を落とされた。

石が雨のように降って来た。額を割られて呻く者があった。

二、三人。パタパタと地へ斃れた。窩人だか水狐族だか解らなかつた。死骸を乗り越えて進む者があった。

岩太郎の武者振りは壯観みものであつた。

藤巻柄の五尺もある刀を、棒でも振るように振り廻した。またたく間に数人を切り斃した。一人の敵が飛びかかって来た。横撲りに叩き伏せた。ムラムラと四、五人が掛かって来た。大廻しに刀を振り廻した。四、五人が後へ逃げ出した。彼は突然振り返った。一人の敵が狙っていた。

「畜生！」と叫ぶと肩を切った。プーツと霧のように血が吹いた。

杉右衛門は窩人に守られていた。往來の真ん中へ突っ立っていた。声を噎からして彼は叫んだ。

「大将を討ち取れ！ 大将を討ち取れ！」

彼の顔は光っていた。火事の光が照らしたからであつた。彼は槍を提ひっさげていた。その穂先から血が落ちていた。

水狐族の男女の教主達も、信者に守られて立っていた。二人ながら大声で叫んだ。

「教法の敵！ 教法の敵！」

「一人も遁のがすな！ 一人も遁がすな」

窩人の群は教主を目掛け、大波のように寄せて行つた。しかし途中で遮さえぎられた。

水狐族の群が杉右衛門を目掛け、あべこべにドツと押し寄せて行つた。これも途中で遮

られた。

火事は容易に消えなかつた。空は益々赤くなつた。

火事を眺める群集と、格闘を眺める群集とで、往来は人で一杯になつた。

死骸がゴロゴロ転がつた。流された血で道が^{すべ}に^つつた。その血へ火の光が反射した。

ワーツ、ワーツ、という^{とき}関の声！

その時見物が叫び出した。

「それお役人のご出張だ！」

御^ご用^{よう}提^{てい}灯^{とう}が幾十となく、京橋の方から飛んで来た。八丁堀の同心衆が、岡っ引や下

っ引を連れて、この時走つて来たのであつた。

瞬間に格闘は終りを告げた。

窩人も水狐族も死骸を担ぎ、八方に姿を隠してしまつた。

しかし二種族の憎悪と復讐心は、決して終りを告げたものではなかつた。明治大正の今日に至つても尚二種族は田舎に都会に、あらゆる複雑の組織の下に、復讐し合っているのであつた。

旅籠へ帰つて来た北山は、むさくるしい部屋にムズと坐り、何かじつと考え込んだ。

やおら立ち上がつて襖ふすまを開けた。押し入れに薬くすり棚だなが作られてあつた。非常な大きな

薬棚で、無数の薬壺が置かれてあつた。彼は薬壺を取り出した。

「いや、ともかくも明日にしよう」

思い返して寝ることにした。

で、薬壺を棚へ載せ、襖を立てて寝る用意をした。

翌朝早く眼を覚ました。

旅籠を出ると駕籠へ乗り、葉之助の屋敷へ急がせた。

玄関へ立つて案内を乞うた。すぐに小侍が現われた。

「葉之助殿ご在宅かな」

「は、昨晚出かけましたきり、いまだにお帰りございません」

「ふうん」と云つたが北山は、小首を傾げざるを得なかつた。

旅籠へ帰つて来た北山は考え込まざるを得なかつた。

「葉之助殿はどうしたろう？」

何んとなく不安な気持ちをした。手を膝ひざへ置いて考え込んだ。

「鶯谷で擦れ違つた、昨夜の若い侍は、葉之助殿に相違ない。あれからきつと葉之助殿は、下屋敷警護に行かれたのだらう。さてそれから？　さてそれから？」

——それからのことは解らなかつた。

だが何んとなく下屋敷附近で、変事があつたのではあるまいかと、気づかわれるような節ふしがあつた。

「まさかそんなこともあるまいが、帯刀様のお屋敷へでも誘かどわか拐されたのではあるまいか」
ふとこんなことも案じられた。

「絶対にないとは云われない。彼らの陰謀を偶然のことから、俺が目付けて邪魔をした。白粉を足で蹴散らした。と、その後へ葉之助殿が行つた。陰謀組の連中が、どうして陰謀を破られたか。それを調べにやって来る。双方が広場で衝突する。ううむ、こいつはありそうなことだ」

北山はじっくりと考え込んだ。

「だが鏡葉之助殿は、武道にかけては一種の天才、大概たいがいの者には負けない筈だ。しかし多勢に無勢では……無勢も無勢一人では、ひどい目に合われないものでもない」

彼は益 不安になった。

「だがまさかに殺されはしまい」

とは云えそれとて絶対には、安心することは出来なかった。

「そうだ、これから出かけて行き、広場の様子を見てやろう！ 格闘したものなら痕跡あとがあるろう。殺されたものなら血痕があるろう」

で、彼は行くことにした。

しかしその前に仕事があった。

薬を調合しなければならぬ。

襖を開けると葉棚があった。いろいろの薬を取り出した。薬研やげんに入れて粉に砕いた。幾度も幾度も調合した。黄色い沢山の粉薬が出来た。棚から黄袋を取り出した。それへ薬を一杯に詰めた。五合余りも詰めたらう。それをさらに風呂敷に包んだ。それからそれを懐中した。

編笠を冠はたかつて旅籠はたかを出た。辻待ちの駕籠へポンと乗った。

「根岸まで急いでやってくれ」

「へい」と駕籠は駈け出した。

「よろしい」と云って駕籠を出た。

それからブラブラ歩いて行った。

内藤家のお下屋敷、それを廻って広場の方へ行った。広場の彼方に屋敷があった。帯刀様の屋敷であった。北山は地上へ眼を付けた。一筋引かれた白粉の痕は、もうどこにも見られなかった。その辺は綺麗に平ならされていた。格闘したらしい跡もなかった。血の零こぼれたような跡もなかった。

「後あと片付かたづけをしたそうな。これではたとえ格闘をしてもまた斬り合っても証拠は残らぬ……これはいよいよ心配だ」

北山は佇たずたずずで考えた。

「思い切つて森家へ乗り込もうか、乗り込んで乗り込めないこともない。とにかく一度ではあつたけれど、帯刀様にお呼ばれして、おうかがいしたこともあるものだからな」

だが表向き乗り込んだのでは、葉之助の消息を訊ねることが、不可能のように思われた。「では乗り込んでも仕方がない」

彼は思案に余ってしまった。

「この方はもう少し考えることにしよう……もう一つの方を探って見よう」

浅草の方へ足を向けた。

奥山は例によつて賑わっていた。

「八ヶ嶽の山男」それを掛けている小屋掛けの前で、北山はピタリと足を止めた。

見れば看板が外されてあつた。木戸にも人がいなかった。小屋の口は閉ざされていた、
 どうやら興行してないらしい。

と、一人の若者が、戸口を開けて現われた。元氣のないような顔をして、ぼんやり外を
 眺めていた。小屋者であるということは、衣裳の様子ですぐ解つた。

北山はそつちへ寄つて行つた。

「今日は興行はお休みかね？」何気ないように声を掛けた。

すると若者は北山を見たが、

「へえ、まあそんなかつこう恰好で」云うことが変にに煮え切らなかつた。

「天気もよければ人も出ている。こんないい日にどうして休んだね？」北山は尚も何気な
 さそうに訊いた。

若者はちよつと眉をひそめた。いらざるお世話だと云いたげであつた。でも、渋々とこんなことを云つた。

「何もね、休みたかあなかつたんで……太夫が一人もいないんでね……で、仕方なく休んだんでさあ」

二六

「ほほう、山男達はいないのかい」失望もし驚きもし、こう北山は大声で云つた。「じゃあ山へ帰つたんだね」

「山へ帰つたか里へ行つたか、何んで私が知りますものか」

「で、いつからいなのかな？」

「昨夜ゆうべからでさあ、火事のあつた頃から」

「では無断で逃げたんだな」

「逃げたには相違ありませんがね。道具をみんな置いて行つたので、いずれ帰つては来ましようよ」

「道具？」と北山は眼を光らせた。「で、動物はどうなっている」

「つまりそいつが道具なんで……熊や猿や狼などを、ほったらかしたまま行っちゃったんで」

「たしか蛇もいたようだが？」こう探るように北山は訊いた。

「ええおりますよ、幾通りもね」

北山は懐中へ手を入れた。紙入れを取り出し小粒を摘み、クルクルとそれを紙へ包んだ。

「少いけれど取ってお置き」

「これは旦那、済みませんねえ」

小屋者はヒョロヒョロ辞儀をした。

「ところでちよいと頼みがある。動物を見せてはくれまいか」

「へえへえお易いご用です」

若者は小屋の中へはいつて行つた。北山は後から従いて行つた。

小屋の中は薄暗く、妙にジメジメと湿っていた。小屋を抜けて庭へ出た。そこに幾個かの檻があった。いろいろの動物が蠢いていた。

一つの小さな檻があった。

その中に五、六匹の小蛇がいた。卵の花のように白い肌へ、陽の光がチラチラとこぼれていた。一尺ほどの小蛇であった。みんな穏おとなしく眠っていた。

北山はその前で足を止めた。

それから蛇を観察した。

「ねえ、若衆、綺麗な蛇だね」

北山は若者へ話しかけた。

「綺麗な蛇でございますな。だが、大変な毒蛇だそうで」若者は恐こわそうに檻を覗いた。

「何んという蛇だか知っているかね」

「山男達が云っていました。信州の国は八ヶ嶽、そこだけに住んでいる宗介蛇むねすけへびだつてね」

「宗介蛇とは面白いな」北山はちよつと微笑した。

「蘭語でいうとエロキロスというのだ」

「へえ、エロキロス、変な名ですなあ」

「蛇は六匹いるようだね」

「昔は十匹おりましたが、今じゃあ六匹しかおりません。山男達の話によると、三匹がところ、盗まれたそうで」

「十匹で三匹盗まれりやあ、後七匹いる筈だが、ここには六匹しかないじゃあないか。後の一匹はどうしたね」

「ああ後の一匹ですか、さつき人が来て買つて行きました」

「え？」

と北山は眼を見張つた、「ふうむ、この蛇をな、買つて行つたんだな」「へえさようでございますよ」「どんな様子の人間だったな?」「五十恰好の商人風、江戸の人じゃありませんな。贅ぜいたく沢な様子をしていましたよ。田舎の物持ちと云つた風で」

北山は黙つて考え込んだ。腹の中で呟つぶやいた。

「今夜が危険だ。うつちやつては置けない」で彼は卒然と云つた。「私わしにも蛇を売つてくれ」

「おやおやあなたもご入用なので」

「で、一匹幾らかな」

「さつきのお方は一匹一両で……」

「よし、私わしも一両で買おう」

北山は紙入れを取り出した。小判六枚てのひらを掌へ載せた。

「さあ六両、受け取ってくれ」

「へえ、六両？ どうしたの？」

「六匹みんな買い取るのさ」

「そいつあどうも困りましたねえ」

若者は小判と北山の顔とをしばらくの間見比べていた。

「どうして困るな？ 困る筈はあるまい」

しかし若者は頭をかいた。

「どうもね、旦那困りますので。だってそうじゃありませんか、この白蛇は山男の物で、

私の物じゃありません」

「では何故一匹売ったんだ？」北山は叱るように声を強めた。「一匹も六匹も同じじゃないか」

「ないか」

「いいえ、そんな事はありません。一匹や二匹なら逃げたと云っても、云い訳が立つじや

ありませんか」

「六枚の小判が欲しくないそうな」北山は小判を掌の上で鳴らした。「……死んだと云え

ばいいじゃないか」

「でも死骸がなかったひには」尚若者は躊躇ちゆうちよした。しかしその眼は貪慾どんよくらしく、小判の上に注がれた。

「いや死骸ならくれてやるよ」

北山は小判を突き付けた。「それなら文句はないだろう」

二七

若者は小判を手を受けた。

「どうしてご持参なさいます？」

「持つて帰るには及ばないよ」

北山は懐中から黄袋を出した。「食い合いっ振りが見たいのさ」

黄袋の口を檻の上へ傾かしげた。粉薬をサラサラと檻の中へこぼした。だが全部みんなはこぼさなかつた。半分がところで止めてしまった。

粉薬が六匹の蛇へかかつた。蛇は一斉に鎌首を上げた。プーツと頬ほを膨ふくらせた。全身をウネウネと蠕うねらせた。真つ直ぐに体を押し立てた。長い蝋燭ろうそくが立ったようであつた。俄

然六匹は食い合いを始めた。

ゾツとするような光景であった。

まず一匹が咽喉のどを咬まれた。白い体が血にまみれた。と、グンニヤリと倒れてしまった。長く延びて動かなくなつた。死骸の上をのたくりながら、五匹の蛇は格闘をつづけた。また二匹目が食い殺された。つづいて三匹目が食い殺された。尚三匹は戦つていた。だが次々に死んで行つた。最後の一匹も死んでしまった。

若者は拳を握りしめていた。

北山は気味悪く微笑した。

「まずこれで安心した……悪人の媒ばい介かいも根絶やしになつた……そうして薬の利き目も解つた……それじゃあご免よ。私は帰る」

黄袋ふとこぶろを懐中へ押し入れて、北山は小屋から外へ出た。

やがてこの日の夜が来た。

鏡葉之助は眼を覚ました。

そこは真つ暗の部屋らしかつた。

葉之助の全身は弛たるかった。ひどく頭が茫ぼんやり然りしていた。手足の節々が痛かった。

「いったいここはどこだろう？ 確かに自分の家ではない。……いつから俺は眠ったんだろう？ ……一年も眠ったような気持ちがある」

彼は四辺あたりを見廻した。灯火ともしびのない部屋の中には、人のいるらしい氣勢けはいもなかった。彼はじつと考え込んだ。

「……それでも漸だんだん次だん思い出す……俺は最初に女を助けた。女を送って屋敷へ行った。大槻おつきげんきょう玄げん卿きょうの屋敷だった。それから毒を飲まされた。それから地下へ埋められた。それから地下の横穴を通った。それから水狐族の怪殿へ行った。それからウント奮闘した。それから町へ飛び出した。それから根岸へ警護に行った。地上に例の白粉があつた。それから俺は広場で眠った。ではここは広場なのか？」

彼は掌てのひらで探つて見た。地面の代りに畳たたみが触れた。

「いややはり家の中だ……それにしてもいったい何者が、いつ俺をこんな家の中へ、俺に知らせずに担かかぎ込んだのだろう？ ……人に担かかがれても知らないほど、眠っていたとは呆おろれ返るな……とにかく屋敷の様子を見よう」

葉之助は立ち上がった。

まず正面へ歩いて行つた。そこには正しく床の間があつた。ズツと右手へ歩いて行つた。と、手先に襖がさわつた。それをソロソロと引き開けた。出た所に廊下があつた。その廊下を左手へ進んだ。幾個かの部屋が並んでいた。と、丁字形の廊下となつた。網を掛けた雪洞ぼんぼりがあつた。

「大名か旗本の下屋敷だな」

葉之助は直覚した。

廊下の行き詰まりに庭があつた。で、庭へ下りて行つた。植え込みが隙間なく植えてあつた。それを潜つて忍びやかに歩いた。

深夜と見えて人氣がなかつた。時々いびき鼾うづくの音がした。

黒板塀がかかつていた。その根もとに蹲うづくまり、二人の人間が囁き合つていた。

葉之助は素早く身を隠した。二人の話を聞こうとした。

間が遠くて聞こえなかつた。で、植え込みの間を潜り、ソロソロと二人へ近寄つた。月が二人の真上にあつた。二人の姿は朦朧もうろうと見えた。二人ながら覆ふく面めんをし、目立たない衣裳まじを纏まとつていた。一人は大小を差していた。しかし一人は丸腰であつた。

断片的に話し声が聞こえた。

「……恐らく今夜は邪魔はあるまい」

武士の方がこう云った。

「……今夜は大丈夫でございましょう」

町人の方がこう答えた。

「……ではソロソロ放そうか」

「それがよろしゅうございましょう」

「……薬は確かに撒いたろうな」

「その辺如才はありません」

ここでしばらく話が絶えた。

町人が棒を取り上げた。側に置いてあつた棒であつた。どうやら太い竹筒らしい。

武士は二、三步後へ退がつた。町人は注意深く及び腰をした。

町人はソロソロと手を延ばし、竹筒の先の臍ほそを取つた。素早く竹筒を地上へ置いた。そうしてサツと後へ退がつた。

二人の前から白粉が、一筋堀裾へ引かれていた。堀の一所に穴があつた。穴を通つて白粉が、戸外そとの方まで引かれていた。

と、微妙な音がした。口笛でも吹くような音であつた。竹筒の中からスルスルと、一筋の白い紐が出た。白粉の上を一散に、塀の外へ走り出した。

「あつ」

と葉之助は声を上げた。植え込みから飛び出した。そうして町人へ組み付いた。

二八

「あつ」

と今度は町人が叫んだ。

「誰だ？」

と武士が叱咤しつたした。

町人は葉之助を突き飛ばそうとした。が、葉之助は頸えりくび首を捉え、ギューツと地面へ押し付けた。

突然武士が刀を抜いた。ヒョイと葉之助は後へ退いた。刀は町人の首を切った。ヒーツと町人が悲鳴を上げた。

「しまった！」と武士は刀を引いた。

その時笛の音が帰つて来た。塀の口から白い蛇が、荒れ狂つて飛び込んで来た。手近の武士へ飛びかかった。

「ワツ」

と武士は悲鳴を上げた。ヨロヨロと塀へもたれかかった。白蛇も精力が尽きたと見え、体を延ばして動かなくなつた。

ガツクリ武士は首を垂れた。前のめりに地に斃れた。

町人と武士、そうして白蛇、三つの死骸を月が照らした。

不意に女の笑い声がした。

「多四郎！ 多四郎！ 思い知つたか！ 妾わたしの怨みだ！ 妾の怨みだ！」

葉之助は四辺を見廻した。女の姿は見えなかつた。だが声は繰り返した。

「猪太郎！ 猪太郎！ よくおやりだ！ お礼を云うよ、お母さんからね」

声はそのまま止んでしまった。

気が附いて葉之助は腕を捲くつた。二の腕に出来ていた二十枚の齒形——人面にんめんそ痘が消えていた。

屋敷の中が騒がしくなった。人の走って来る氣勢けはいがした。

葉之助は塀へ手を掛けた。身をひるがえ翻すと塀を越した。

広場を横切つて町の方へ走つた。

と、誰かと衝突した。

「これは失礼」「これは失礼」

云い合い顔をす隙かして見た。

「や、これは北山先生！」

「おお、これは葉之助殿！」

「先生には今時分こんな所に？」

「万事は後で……ともかく一緒に……」

二人は町の方へ走つて行つた。

その翌日のことであつた。神田の旅籠屋はたしや北山の部屋で、北山と葉之助とが話していた。

「……窩人かしんに云わせると宗介蛇、蘭語で云うとエロキロス、これは珍らしい毒蛇で、これに噛まれると、一瞬間に死んでしまう。しかも少しも痕跡あとを残さない。この毒蛇の特徴と

して、ういきようざい 茴香剤をひどく好む。そいつを嗅ぐと興奮する。で、例の白粉だが、云うまでもなく茴香剤ういきようざいなのさ、大槻玄卿が製したものだ。

ところが一昨日おとつひの晩のことだ。浅草観音の境内へ行き、偶然窩人達の話を聞いた。毒蛇を盗まれたと云っていた。はてなと俺は考えた。考えながら根岸へ行った。と、白粉が引かれてあった。口笛のような音がして、紐ひものようなものが走って来た。そこで初めて感附いたものさ……エロキロスエロキロスは、茴香剤を嗅がされると、喜びの余り音を立てる、一種歓喜の声なのだ……つまり三人の悪党どもは、森家から内藤家の寝所まで、茴香剤の線を引き、その上をエロキロスエロキロスを走らせて、若殿を咬ませたのさ……ところで毒蛇エロキロスエロキロスは、一度丹砂剤たんしゃざいを嗅がされると、発狂をして死んでしまう。それを私わしは利用した。で昨夜根岸へ行った。すると白粉が引いてあった。そこで俺はその一ひとつ所へ、丹砂剤をうんと振り撒いたものさ。案の定エロキロスエロキロスは走って来たが、そこまで来ると発狂し、元来た方へ引き返して行った」

「いかにもさようでございました。馳せ返って来た毒蛇は、帯刀様へ食い付きました」葉之助は頷いた。

「帯刀様の刃やいばで、紋兵衛も殺されたということだな」

「まずさようでございます。だが本来帯刀様は、私を切ろうとなすつたので。それを私が素早く紋兵衛を盾に取つたので、いわば私が殺したようなもので」

「それはそうと葉之助殿、貴殿の幼名は猪太郎という、どうやら窩人の血統を受け継いでいるように思われる。母は、窩人の長の杉右衛門の娘、山吹であつたということだ。父は里の者で、多四郎という若者だそうだ……そのうち窩人と逢うこともあるう、よく聞き訊してご覧なされ。これも一昨夜浅草で、山男、すなわち窩人どもから、偶然聞いた話でござるよ」

「母は山吹、父は多四郎、そうして私の幼名が、猪太郎というのでございますな？　そうして八ヶ嶽の窩人の血統？　ううむ」と葉之助は腕を組んだ。

二九

翌日鏡葉之助は、蘭医大槻玄卿の、悪逆非道の振る舞いにつき、ひそかに有司へ具陳した。

その結果町奉行の手入れとなり、玄卿邸の茴香烟は、人足の手によって掘り返された。

はたして幾人かの男女の死骸が、土の下から現われた。で玄卿は召し捕られ、間もなく磔はりつけに処せられた。

だが邪教水狐族の、秘密の道場へつづいていた、地下の長い横穴については、事実大槻玄卿も、知っていなかったということである。では恐らくその穴は、ずっと昔の穴居時代などに、作られたところの穴かも知れない。

だがマアそれはどうでもよからう。

さて鏡葉之助は、それからどんな生活をしたか？

「いつまでも年を取らないだろう。……永久安穩はあるまいぞよ」

水狐族の長久田おやの姥うばが、末期に臨んで呪った言葉——この通りの生活が、葉之助の身には繰り返された。

彼はいつまでも若かった。心がいつも不安であった。

今日の言葉で説明すれば、強迫観念とでも云うのであろう。絶えず何者かに駈り立てられていた。

そうしてかつて高遠城下で、夜な夜な辻斬りをしたように、またもや彼は江戸の市中を、血刀を掲げて毎夜毎夜、彷徨さまよわなければならぬようになった。

八山下やつやましたの夜が更ふけて、品川の海の浪も静まり、高輪たかなわ一帯の大名屋敷に、灯火一つまばたいてもいず、遠くで吠える犬の声や、手近で鳴らす拍子木の音が、夜の深さを思わせる頃、急ぎの用の旅人でもあろう、小田原提灯おだわらちようちんで道を照らし、二人連れでスタスタと、東海道の方へ歩いて行つた。

と、木陰から人影が出た。

無紋の黒の着流しに、お誂あつちい通りの覆面頭巾、何か物でも考えているのか、俯うつむ向きかげんに肩を落とし、シトシトとこつちへ歩いて来た。

と、双方行き違おうとした。

不意に武士は顔を上げた。

つづいて右手めでが刀の柄へ、……ピカリと光つたのは抜いたのであろう。「キヤツ」という悲鳴。「ワーツ」と叫ぶ声。つづいて再び「キヤツ」という悲鳴。……地に転がった提灯が、ボツと燃え上がって明るい中に、斃れているのは二つの死骸。……斬り手の武士は数間の彼方あなたを、影のようにシヨンボリと歩いていった。

他ならぬ鏡葉之助であつた。

浅草の観世音、その境内の早朝あさまだき、茶店の表戸は鎖とぎざされていたが、人の歩く足音は

した。朝詣りをする信者でもあろう。

一本の公孫樹の太い幹に、背をもたせかけて立っているのは、編笠姿の武士であつた。

一人の女がその前を、御堂の方へ小走つて行つた。

武士がヒヨロヒヨロと前へ出た。居合い腰になつた一瞬間、日の出ない灰色の空を切り、紫立つて光る物があつた。とたんに「キャツ」という女の悲鳴。首のない女の死骸が一つ、前のめりに転がった。ドクドクと流れる切り口からの血！ 深紅の水溜りが地面へ出来た。だが斬り手の武士は、公孫樹の幹をゆるやかに廻り、雷門の方へ歩いて行つた。鳩の啼き声、賽銭の音、何んの変つたこともない。

両国橋の真ん中で、斬り仆された武士があつた。

笠森の茶店の牀几の上で、脇腹を突かれた女房があつた。

千住の遊廓では、嫖客が、日本橋の往来では商家の手代が、下谷池之端では老人の易者が、深川木場では荷揚げ人足が、本所回向院では僧が殺された。

江戸は——大袈裟な形容をすれば、恐怖時代を現じ出した。

南北町奉行が大いに周章てて、与力同心罔つ引が、クルクル江戸中を廻り出した。

どうやら物盗りでもなさそうであり、どうやら意趣斬りでもなさそうであり、云い得べくんば狂^{きちがい}人の刃傷、……こんなように思われるこの事件は、有司にとっては苦手であった。

で容易に目付からなかった。

まさか内藤家の家老の家柄、鏡家の当主葉之助が、辻斬りの元兇であろうとは、想像もつかないことである。

だがやがてパツタリと、辻斬り沙汰がなくなった。

内藤駿河守が江戸を立って、伊那高遠へ帰ったからであった。

だが内藤家の行列が、塩尻の宿へかかった時、一つの事件が突発した。と云っても表面から見れば別に大したこともなく、鏡葉之助が供^{ともぞろ}揃いの中から、にわか姿を眩^{くら}ましただけであった。

鏡家は内藤家では由緒ある家柄、その当主が逃亡したとあっては、うっちゃって置くことは出来なかった。

八方へ手を分けて搜索した。しかし行方は知れなかった。

彼はいつたいたいどうしたのだろうか？　いつたいたいどこへ行ったのだろうか？

彼は八ヶ嶽へ行ったのであった。

彼は母山吹の故郷さと！　彼の血統窩人の部落！　信州八ヶ嶽笹の平へ、夢遊病者のそれの
ように、フラフラと歩いて行ったのであった。

塩尻から岡谷へ抜け、高島の城下を故意わざと避け、山伝いに湖東村を通り、北山村から玉
川村、本郷村から阿弥陀ヶ嶽、もうこの辺は八ヶ嶽で、裾野すそのがずっと開けていた。

三日を費やして辿り着いた所は、笹の平の盆地であった。

以前まえ訪ねて来た時と、何んの変わったこともない。窩人達の住居すまいには人気なく、宗介

天狗の社殿やしろには裸体の木像が立っていた。

まじまじと照る陽の光、こうこうと鳴く狐の声、小鳥のさえざり、風の音、深山の呼吸いき
が身に迫った。

しかし一人の窩人達も、そこには住んでいなかった。

葉之助は拝殿へ腰をかけ、四辺の風物へ眼をやった。

と、その時間き覚えのある、男の声が聞こえて来た。

「猪太郎、猪太郎、よく参った」

拝殿の奥の木像の蔭から、一人の人物が現われた。白衣長髪の白法師であつた。

「おおあなたは白法師様」葉之助は立つて一揖いちゆうした。

「大概たいがい来るだろうと思つていたよ」

葉之助と並んで白法師は、拝殿の縁へ腰をかけた。

「どうだ葉之助、昔の素姓が、ようやくお前にも解つたろう」

「はい、ようやくわかりました。……母は窩人で山吹と云い、父は里の商人で、多四郎と

云うことでございます」

「だが多四郎の後身が、大鳥井紋兵衛だとは知るまいな」

「えっ」と葉之助は眼を瞠みはつた。「あの紋兵衛が私の父で？」

「そうだ」と白法師は頷いた。「詳しく事情を話してやろう」

そこで白法師は話し出した。

多四郎が山吹を瞞だましたこと、山吹が猪太郎を産んだこと、多四郎に怨みを返そうと、山吹が猪太郎の二の腕へ、二十枚の齒形を付けたこと、多四郎の真の目的は、宗介天狗の木

像の、黄金の甲冑を盗むことで、それを盗んだ多四郎は、それを鑄潰いつぶして売ったため、にわかには富豪になったこと、その甲冑を取り返すため、窩人達が人の世へ出て行ったこと、こうして多四郎の紋兵衛は、間接でもあり偶然でもあるが、とにかく葉之助に殺されたこと。さて窩人は葉之助の手で、多四郎の命は絶ったけれど、宗介天狗の甲冑を、取り返すことは出来なかつたので、故郷八ヶ嶽へは帰ることが出来ず、今も諸国を流浪していること。――

これが白法師の話であつた。

「久田の姥うばの執念は、私の力でもどうすることも出来ない。で、お前はいつまでも若く、いつまでも不安でいなければならぬ。……だがこれだけは教えることが出来る。お前はお前の力をもつて久田の姥の執念を、あべこべに利用することが出来る」

「あべこべに利用すると申しますと？」葉之助は反問した。

「それは自分で考えるがいい」

白法師と別れ、八ヶ嶽を下り、人里へ出た葉之助は、高遠城下へは帰らずに、何処いずことも知れず立ち去つた。

爾来彼の消息は、杳として知ることが出来なかつた。

時勢はズンズン移つて行つた。

天保が過ぎて弘化となり、やがて嘉永となり安政となり、万延、文久、元治、慶応、そうして明治となり大正となつた。

この物語に現われた、あらゆる人達は一人残らず、地球の表から消えてなくなり、その人達の後胤ばかりが、残つていてという事になつた。

しかし本当に久田の姥の、あの恐ろしい呪詛の言葉が、言葉通り行われているとしたら、主人公の鏡葉之助ばかりは、依然若々しい容貌をして、今日も生きていなければならぬ。だがそんな事があり得るだろうか？

あらゆる不合理の迷信を排斥している科学文明！それが現代の社会である。スタイナツハの若返り法さえ、怪しくなつた今日である。天保時代の人間が、生きていようとは思われない。

大正十三年の夏であった。

私、——すなわち国枝史郎は、数人の友人と連れ立って、日本アルプスを踏破した。

三千六百〇三尺、奥穂高の登山小屋で、愉快に一夜を明かすことになった。

案内の強^{ごうりき}力は佐平と云って、相当老年ではあつたけれど、ひどく元氣のよい男であつた。

「こんな話がありますよ」

こう云つて佐平の話した話が、これまで書きつづけた「八ヶ嶽の魔神」の話である。

「ところで鏡葉之助ですがね、今でも生きていますのですよ。この山の背後蒲田川の谿谷^{たにあい}、

二里四方もある大盆地に、立派な窩人町を建てましてね、そこに君臨しているのです。決して嘘じゃありません。もし何んならご案内しましょう。もっとも町までは行けません。四方が非常な断崖で、下って行くことが出来ないのです。せいぜいその町を眼の下に見る、十ヶ嶽の中腹ぐらいしか、ご案内することは出来ません。……とても立派な町ですね、洋館もあれば電灯もあり、人口にして一万以上、ただし外界とは交通遮断、で、自然詳しいことは、知れていないという訳です」

「だが」と私は訊いて見た。「いっどうして葉之助が、そんな所へ行つたんだね」

「明治初年だということですよ。漂浪している窩人の群と、甲州のどこかで逢ったんだそうです。もちろんその時は窩人達は、幾度か代が変わっていて、杉右衛門も岩太郎も死んでしまい、別の杉右衛門と岩太郎とが、引率していたということですがね。そこで葉之助は云ったそうです。ありもしない宗介の甲冑など、いつまでも探すには及ぶまい。窩人——もつともその頃は、山窩さんかと云われていたそうですが、——山窩、山窩と馬鹿にされ、世間の人から迫害され、浮世の裏ばかり歩くより、いつそ一つに塊まって、山窩の国を建てた方がいいとね。……そこで皆んなも賛成し、鏡葉之助の指揮に従い、奥穂高へ行ったのだからです」

私の好奇心は燃え上がった。で、翌日案内され、十石ヶ嶽まで行くことにした。

道は随分険けわしかったが、それでもその日の夕方に、十石ヶ嶽の中腹まで行った。

眼の下に広々とした谿谷たにがあり、夕べの靄もやが立ちこめていた。しかしまさしくその靄を破つて、無数の立派な家々や、掘割に浮かんでいる船が見えた。そうして太陽が没した時、電灯の輝くのが見て取れた。

夢でもなければ幻でもなかった。

彼らの国があったのである。

噂によれば、金木戸川きんきどがわの上流、双六谷すいろくだににも人に知られない、相当大きな湖水があり、その周囲には、水狐族の、これも立派な町があり、そうして依然二種族は、憎み合っているということである。

いつまでも生きている鏡葉之助、人間の意志の権化ごんげでもあり、宇宙の真理の象徴でもある。

永遠に生きるということは、何んと愉快なことではないか。

しかし永遠に生きるものは、同時に永遠の受難者でもある。

そうしてそれこそ本当の、偉大な人間そのものではないか。

それはとにかく私としては、自分自身へこんなように云いたい。

「ひどく浮世が暮らしにくくなったら、構うものか浮世を振りすて、日本アルプスへ分け上り、山窩国の中へはいつて行こう。そうして葉之助と協力し、その国を大いに発展させよう。そうして小うるさい社会と人間から、すっかり逃避することによって、楽々と呼吸いきを吐つこうではないか」と。

私の故郷は信州諏訪、八ヶ嶽が東南に見える。

去年の秋にたった一人で、笹の平へ行つて見た。天保時代の建物たる宗介天狗の拝殿も、

窩人達の住居もなかったが、その礎いしずえとも思われる、幾多の花崗石みかげいしは残っていた。

その一つへ腰を下ろし、瞑想めいそうに耽ふけつたものである。

秋の日射しの美しい、小鳥の声の遠く響く、稀まれに見るような晴れた日で、枯草の香などが匂つて来た。

「静かだなあ」と私は云つた。

不幸な恋をした山吹のことが、しきりに想われてならなかった。

多四郎の不純な恋に対する、憤りのようなものが湧いて来た。

「浮世の俗流というものは全てもつて始末が悪い。天狗の甲冑を盗むばかりか、乙女の心臓をさえ盗むんだからなあ」などと感慨に耽ふけつたりした。

(完)

青空文庫情報

底本：「八ヶ嶽の魔神」大衆文学館、講談社

1996（平成8）年4月20日第1刷発行

底本の親本：「八ヶ嶽の魔神」国枝史郎伝奇文庫、講談社

1976（昭和51）年4月12日第1刷発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5186）を、大振りにつくっています。

入力：門田裕志、小林繁雄

校正：六郷梧三郎

2008年8月14日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

八ヶ嶽の魔神

国枝史郎

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>